

若者施策の評価検証と体系化について
～ 区民の参加と協働を目指して

報 告 書

平成31年3月

世田谷区子ども・青少年協議会

目次

はじめに	4
第1章 検討の経緯と趣旨	7
1. これまでの経緯	9
2. 審議のテーマ	12
3. 検討体制	12
4. 検討の概要	12
第2章 若者施策の評価・検証	13
1. 評価・検証の手法	14
2. 評価軸ごとの評価・検証	17
若者の交流と活動の推進	17
若者自らの主体的な活動	17
自立と成長を促す	20
世代を超えた出会いや交流の機会の積極的な創出	23
若者の社会への参加・参画意識の醸成	26
安心して中高生世代が地域で過ごせる場や機会の拡充	28
同世代だけでなく、多様な地域住民と若者が主体的に関わる連携	33
コラム	37
生きづらさを抱えた若者の支援	39
生きづらさを抱えた若者及び、その家族を対象とした相談支援	39
安心して利用でき、対人関係や社会生活に対する自信を取り戻せるような「居場所」の構築	43
生きづらさ・困難を抱えた若者支援に向けた関係機関との連携による重層的な支援	47
社会的自立に向けた支援	49
早期支援の重要性	51
コラム	55
若者の社会に向けた文化・情報の発信への支援	57
若者の主体的な取り組みを支援する仕組みの構築	57
コラム	60
第3章 提言～若者施策において目指すべき姿～	63
1. 提言	
提言1 世田谷区の若者にはみな「第三の居場所」がある	
提言2 地域に「大人・若者のたまり場（情報や活動、交流の拠点）」（＝地域コンソーシアム）がある	
提言3 リアルモネットも若者がつながる場に	

- 提言4 生きづらさを抱えた若者が、「居場所」を中核とした専門機関と地域との連携により総合的に支えられている
- 提言5 教育機関との連携により、生きづらさを抱えた若者が早期につながり切れ目がなく支えられている
- 提言6 地域の大人、行政職員が若者施策の情報を共有しながら若者を支えている
- 提言7 若者と地域の大人、行政職員が協働しながら若者の文化・情報の発信を支えている

第4章 若者施策の体系化・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69

- 1. 対象年代別施策
- 2. 若者施策が目指す全体像

資料編・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77

- 1. 依頼文・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 78
- 2. 資料1 世田谷区子ども・青少年協議会委員名簿・・・・・・・・・・ 79
- 3. 資料2 世田谷区子ども・青少年協議会審議の経過・・・・・・・・・・ 80
- 4. 資料3 情熱せたがや、始めました。事業報告・・・・・・・・・・ 81
- 5. 資料4 事業・用語解説・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83
- 6. 資料5 世田谷区若者施策に関する調査報告書・・・・・・・・・・ 87
- 7. 資料6 世田谷区若者施策に関するヒアリング調査報告書・・・・・・・・ 171

はじめに

はじめに

平成 29 - 30 年度期(以下、今期)の世田谷区子ども・青少年協議会(以下、協議会)においては、平成 25 - 26 年度期の協議会報告「若者の参加・参画を推進するための地域拠点づくりについて」、及び平成 27-28 年度期「若者参加による『若者支援施策の効果的な提供』について」それぞれのモデル事業の取り組みを踏まえ、区長から調査・審議の依頼を受けた「若者施策の評価検証と体系化について～区民の参加と協働を目指して」について、議論を重ねてきた。

今期 1 年目は、これまで取り組まれてきた、各種の子ども・若者施策や事業を評価するための<評価軸>について議論を重ねた。2 年目は、1 年目でまとめた評価軸を踏まえた若者施策調査の設計・実施およびヒアリングを行い、分析に取り組んだ。

実際の事業に携らず検証作業のみを行うことは非常に難しく、抽象的な議論に陥ることが多々あったが、小委員会のメンバーそれぞれが分担して現場でヒアリングを行うことにより、具体的な議論に展開することができた。そしてまた、ヒアリングにおいては、当事者である子ども・若者、職員、利用者など、様々なステイクホルダーの声に耳を傾けることで、アンケート調査だけでは見えてこない実態を把握することができ、評価検証につなげることができた。

本報告書では、2 年間にわたる議論を踏まえ、「提言～若者施策において目指すべき姿～」として、以下の 7 つの提言にまとめ、具体的な取り組み案を提示している。

【提言 1】 「世田谷区の若者にはみな「第三の居場所」がある」

【提言 2】 「地域に「大人・若者のたまり場(情報や活動、交流の拠点)」(=地域コンソーシアム)がある」

【提言 3】 「リアルもネットも若者がつながる場に」

【提言 4】 「生きづらさを抱えた若者が、「居場所」を中核とした専門機関と地域との連携により総合的に支えられている」

【提言 5】 「教育機関との連携により、生きづらさを抱えた若者が早期につながり切れ目がなく支えられている」

【提言 6】 「地域の大人、行政職員が若者施策の情報を共有しながら若者を支えている」

【提言 7】 「若者と地域の大人、行政職員が協働しながら若者の文化・情報の発信を支えている」

この 7 つの提言は、世田谷区として取り組むべきこととしてまとめているが、若者施策を推進するにあたっては、行政機関だけが取り組むものではないのは言うまでもない。町内会、地域団体、NPO、ボランティア団体、子育て支援団体など多様な組織・団体・個人が関わっている。こうした地域での取り組みと、行政機関の取り組みが組み合わさることが、若者支援を促進するためには不可欠である。

今回の報告書作成に関わった小委員会のメンバーも若者支援に取り組んでいるからこそ、日頃から抱えている課題意識を踏まえ、本報告書では、若者支援をより促進するために行政機関として取り組むべきことを提言としてまとめている。その上で、当事者である若者を含めた区民による地域の取り組みを充実させるとともに、行政機関と協働することで、若者施策をより充実させていくことが必要である。

ところで、「若者施策」の対象は<若者>だけなのだろうか。

とかく「若者施策」と言うと、若者だけを対象にした施策と思われがちだが、実はそうではない。当事者

である子ども・若者を対象にするだけでなく、就学前から保護者が地域と関わり、地域の中で子どもが育つことを実感する機会があることにより、子どもが若者に成長しても地域社会と関わるのがあたり前のこととして感じられるようになる。そして、子育て中の保護者や大人にとっても、若者の存在を意識する身近な環境があることで若者との距離感が縮まり、子ども・若者・おとなそれぞれの関係性においても安心感が高まる。

特に世田谷区は、大学進学や就職を機に世田谷区民となる若者も多い。子ども時代を世田谷区外で過ごした若者にとっては、地域との関係をおとなになってから築く必要があるが、そこへのハードルが高い。そのため、若者だけを対象にするのではなく、地域社会全体が、若者施策に関わる環境を整えることがあれば、若者も地域の一員として実感することができるようになる。だからこそ、本報告書の7つの提言により一層取り組むことが世田谷区における若者施策の充実化につながる。

抽象的な議論を、ここまで具体的な内容にまとめることができたのは、小委員会のメンバーの意欲的な議論のみならず、関係する職員、ヒアリング先の方々、アンケート等にご協力いただいた皆様のおかげである。この場を借りて御礼申し上げたい。

本提言を画餅とせず、実行性ある取り組みにつなげていくために、世田谷区としての更なる取り組みの推進を期待している。



第 1 章

検討の経緯と趣旨



1. これまでの経緯

子ども・青少年協議会の位置づけ

世田谷区子ども・青少年協議会 1は、「地方青少年問題協議会法」に基づく区長の附属機関として、青少年に関する施策に関する調査審議を行い、関係機関と連絡調整を図ってきた。（「これまでの審議テーマ(平成13年度以降)」は以下のとおり）

「子ども条例」や「子ども計画」など妊娠期から若者に至る施策について広く審議を行ってきた経緯があるが、平成24年度の「子ども・子育て支援法」施行後は、子ども・子育てに関わる調査審議、意見聴取については主に「子ども・子育て会議」が担い、子ども・青少年協議会では主に中高生世代から39歳までの若者に関わる課題・施策について審議を行うこととなった。

子ども・青少年協議会 過去の審議内容

年度	審議内容	任期
13-14年度	世田谷区子ども条例に盛り込むべき要点について	平成12年12月5日から
	子ども青少年の社会参加・参画の仕組みづくりについて	平成14年12月4日
15-16年度	「子ども成育支援」施策の創造に向けて -「(仮)子ども・推進計画」に関する報告-	平成14年12月5日から 平成16年12月4日
17-18年度	「地域地区全体で子育てを支える仕組みづくり」に向けて	平成16年12月5日から 平成18年12月4日
19-20年度	「元気子どもを育てる施策と社会的基盤づくり」について	平成19年6月1日から 平成21年5月31日
21-22年度	「総合的な青少年施策」について	平成21年6月1日から 平成23年5月31日
23-24年度	「世田谷区子ども計画後期計画」の評価・検証及び課題整理について	平成23年6月1日から 平成25年5月31日
25-26年度	若者の参加・参画を推進するための地域拠点づくりについて	平成25年6月1日から 平成27年5月31日
27-28年度	若者の参加による「若者支援施策の効果的な提供」について	平成27年6月1日から 平成29年5月31日

若者施策への区の取り組み

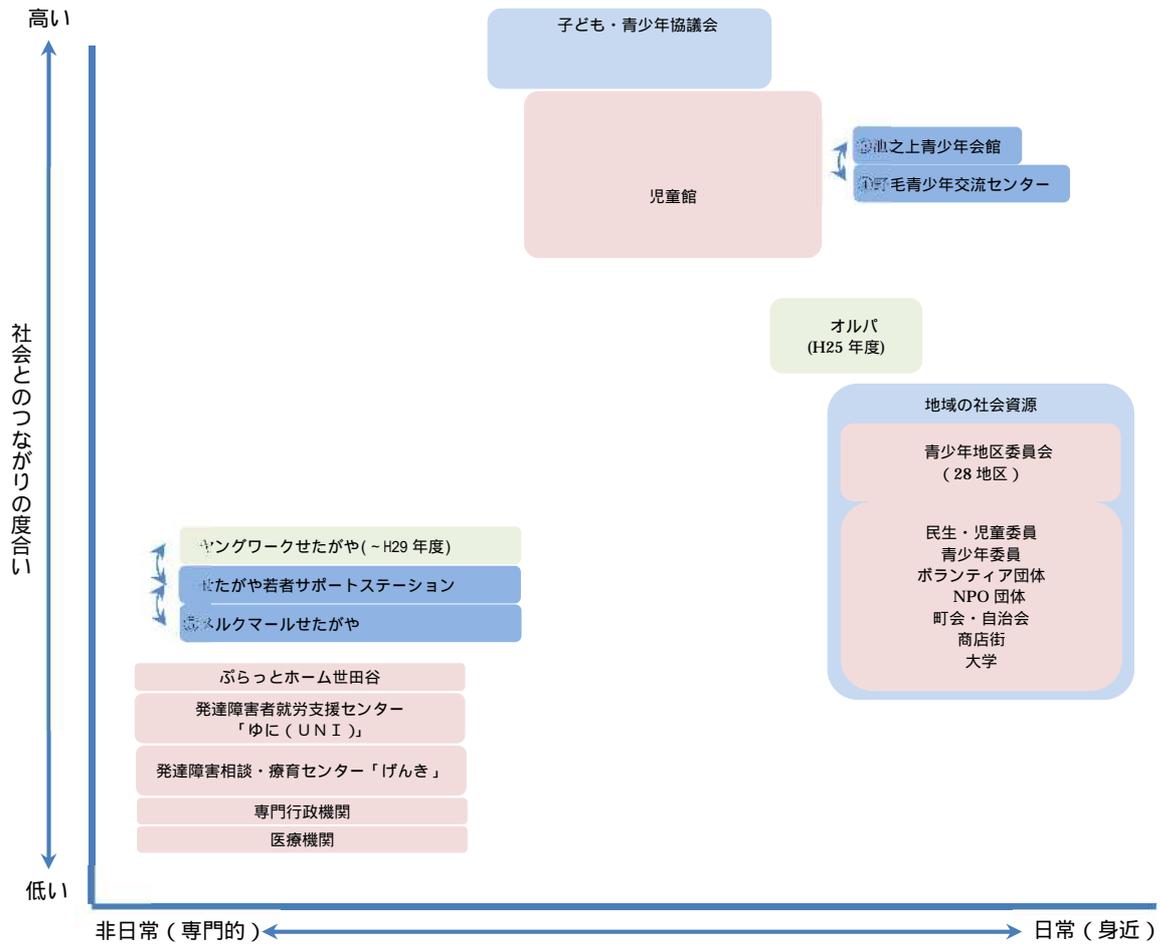
ひきこもり、不登校等、若者の抱える問題の複雑・多様化に対し、従来の縦割りの対応での限界も背景に、平成25年度に若者支援の専管組織として若者支援担当課が設置された。

若者を取りまく課題は、その後も、所得格差の拡大、SNS普及によるコミュニケーションの変化、生涯未婚率の上昇、等刻々と変化している。

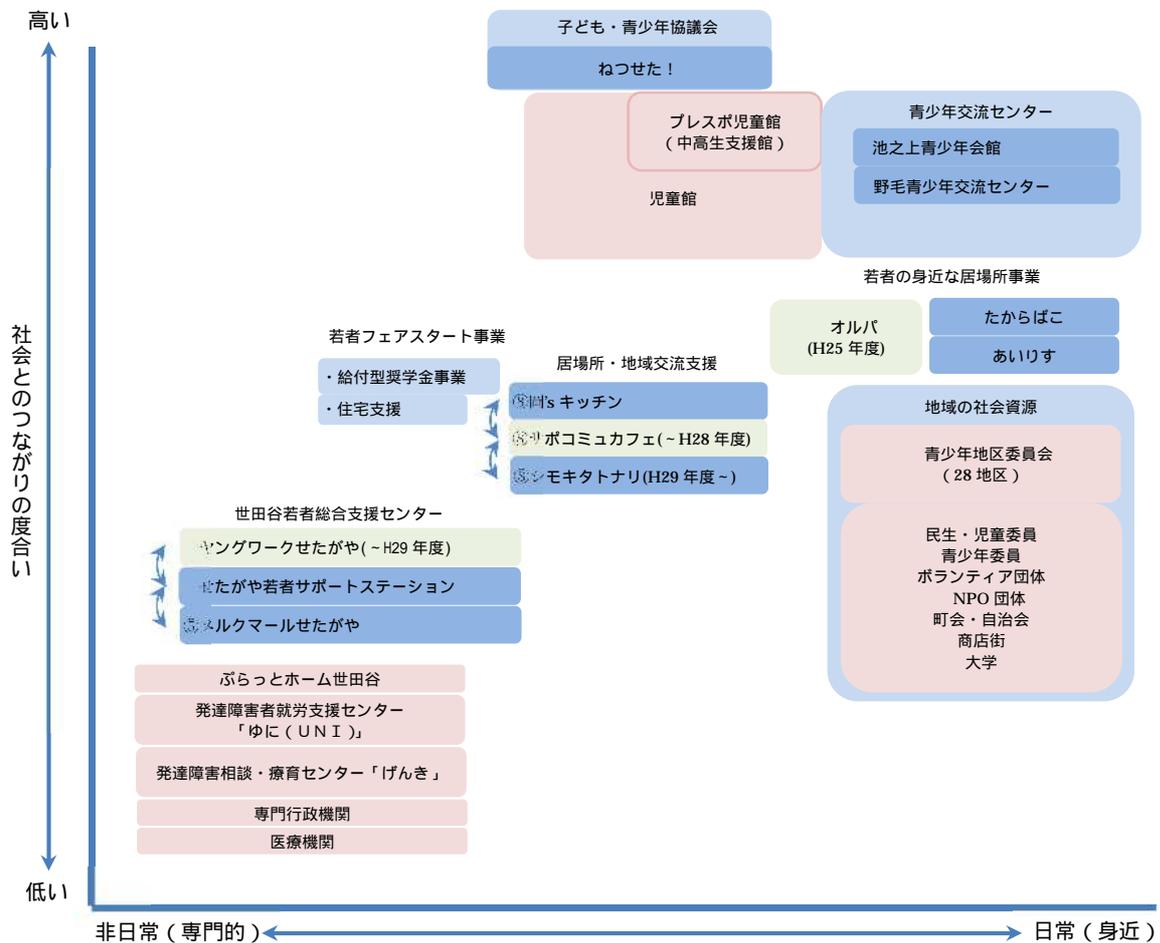
区は、若者期を見据えた施策をその手前から切れ目なく展開してため、子ども期からひとつながりの計画 2を策定し取り組みを進めるとともに、変化していく課題に対しても、子ども・青少年協議会からの提言や意見を参考に、施策の拡充・充実を図ってきた。

1 平成25年度までは子ども・青少年問題協議会、 2 「子ども計画(第2期)」平成27~36年度

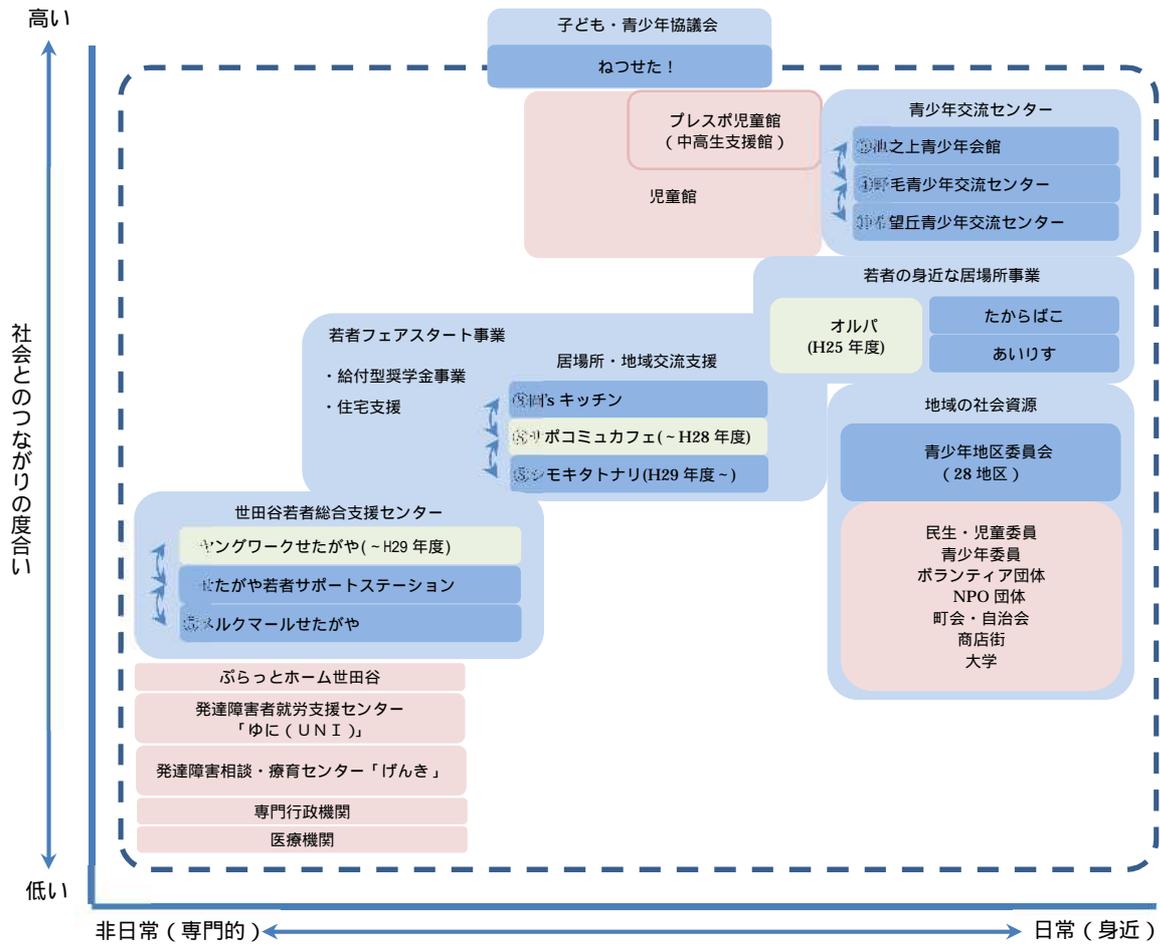
平成 25 年度・平成 26 年度



平成 27 年度・平成 28 年度



平成 29 年度・平成 30 年度



【事業名称】 丸番号は展開図の番号に対応する。

- 世田谷区子ども・青少年協議会
- 中学生世代活動支援モデル事業「烏山中学生世代応援スペース オルパ」
- 青少年交流センター池之上青少年会館
- 野毛青少年交流センター
- メルクマールせたがや
- 世田谷区子ども・若者支援協議会
- 若者の身近な居場所事業「あいりす」「たからばこ」
- 児童養護施設退所者等支援事業（せたがや若者フェアスタート事業）
- 若者の意見表明や参加・参画モデル事業「情熱せたがや、始めました」（ねつせた！）
- 青少年地区委員会
- 希望丘青少年交流センター

2. 審議のテーマ

平成29年7月25日、子ども・青少年協議会は区長より「若者施策の評価検証と体系化について～区民の参加と協働を目指して」について調査・審議の依頼を受けた。

3. 検討体制

子ども・青少年協議会条例に定める協議会委員19名のほか、専門委員7名を加えた26名で検討を行った。専門委員のうち3名は大学生であり、若者の立場から発言いただいた。

また、評価検証の手法の検討や、評価指標に基づく現状の把握・分析、施策の体系化について集中的に審議を行うため、平成29年7月25日に小委員会（入澤充委員長ほか委員11名、オブザーバー2名、）を立ち上げた。

4. 検討の概要

若者支援担当課が設置され5年目となった今期、これまでの若者施策全体を振り返り、課題解決につながっているのか、改めて評価検証し今後の方向性を問い直すテーマであるが、若者施策においてはこれまで定まった指標をもたないことから、何をもって課題が解決しているといえるのか、施策が効果をあげているといえるのか、評価の基軸や指標の設定についても時間をかけた審議を行った。

若者施策の評価検証を行うにあたっては、15～29歳の区民6,000人と若者関連施設の利用者を対象としたアンケート調査を実施するとともに、定量調査だけでは捉えきれない若者の考えや実態を掘り下げるため、ヒアリング調査も行うこととした。

更に、若者と接する現場で、事業者やスタッフが施策（事業）目的をどのように実現しようとしているか、若者はそれをどう受け止めどう変わっていったのか、事業者ヒアリングで自己評価いただき、若者の評価とあわせて検討することとした。これにより、若者自身や若者を取りまく現状を、より多面的に捉えることができた。（調査の詳細はP87参照）

調査結果をもとに、今回定めた指標ごとに施策の評価・検証を行い、その結果をもとに今後区が取り組むべきことを提起するとともに、若者施策全体のあり方の概念の体系化を行い、提言としてまとめた。



第2章

若者施策の評価・検証



1. 評価・検証の手法

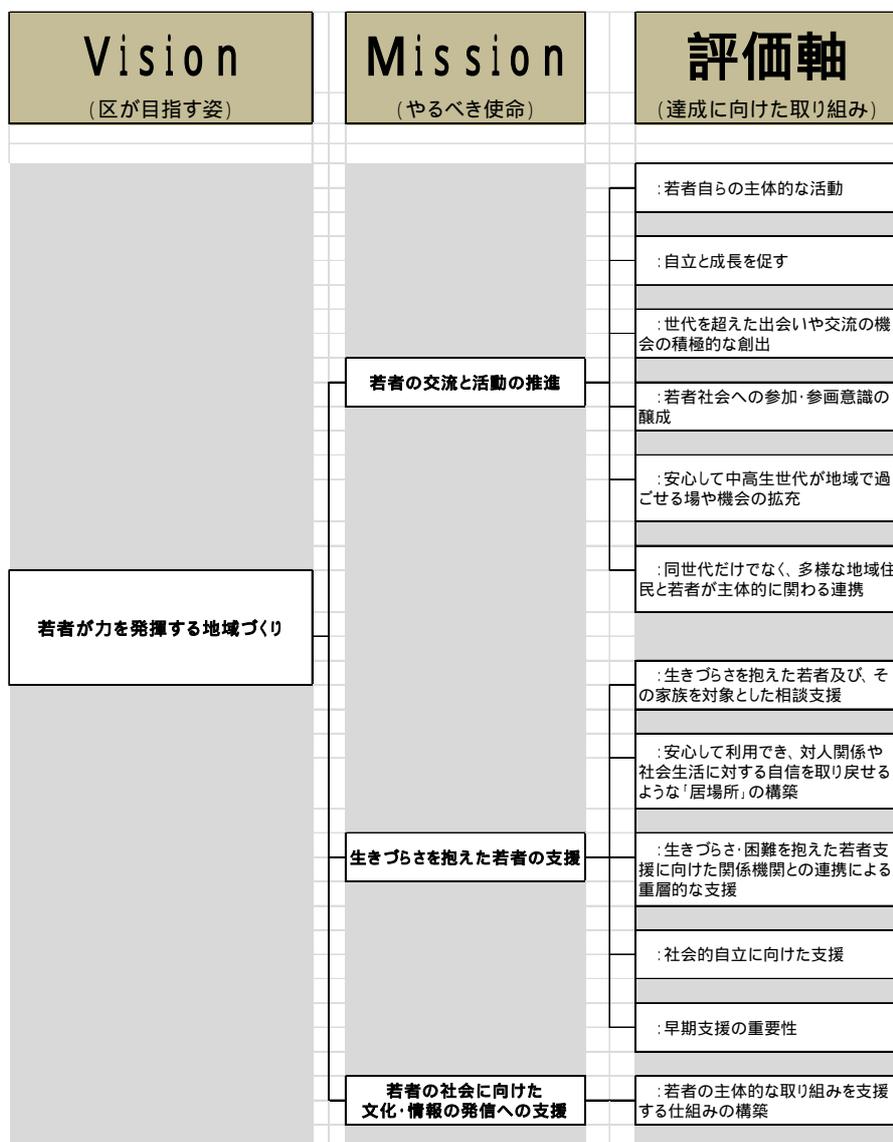
評価・検証を行うには、目標が何であり、どういう状態になると目標を達成したと言えるのかを明らかにする必要がある。

若者施策において区が目指す姿（Vision）、やるべき使命（Mission）は、区の基本計画や子ども計画（第2期）等に示されているが、抽象度が高い言葉であり、受け取る人の立場や考え方により、言葉の捉え方にズレが生じることが危惧された。また、人も環境も変化していく中で、ある一点における若者の状態を取り出して測ることの難しさについても議論があった。

そこで、次のとおり評価・検証を行うこととした。

(1) 評価軸の設定

Mission を果たすため、区がどのような取り組みを行ってきたかを12の柱としてあげた。これらより具体となった12の柱を評価軸とし、取り組みごとの成果を測ることとした。



(2) 評価指標の設定

成果を測るための指標は、取り組みを行い実現していきたいこと(=どうなっていきたいか)の達成度を、定量的に測れるよう設定した。

また、調査時の回答者の負担を抑えるため、評価軸ごとの指標は2つに絞ることとした。

評価指標は、主となる評価軸だけでなく、複数の評価軸に副次的に関わっており、評価・検証は、関連する複数の指標を絡めて行うこととした。

若者施策の評価指標

評価指標
若者の交流と活動の推進
①: 若者自らの主体的な活動
・若者自身が、イベントやプログラムを企画する機会がある/あった割合 例: 学校で、児童館で、地域の中で
・自分(たち)の意見を反映した、イベントやプログラムに取り組んだことがある割合 例: 児童館でのイベント、子ども会でのプログラムなど
②: 自立と成長を促す
・成長を感じる機会がある割合
・自分の可能性を感じたり、可能性に挑戦する機会がある割合
③: 世代を超えた出会いや交流の機会の積極的な創出
・自分の通う学校以外に、同世代の友達がいる割合
・地域に、家族(保護者、兄弟姉妹、祖父母)以外に、身近なことを話せる大人がいる割合
④: 若者の社会への参加・参画意識の醸成
・世田谷区民としての実感を持っている/実感を持つ機会がある割合
・地域や社会の課題に対して、何か取り組んでいる/取り組みたいと思っている割合
⑤: 安心して中高生世代が地域で過ごせる場や機会の拡充
・家や学校以外に、自分にとって居心地が良いと感じる場所(サードプレイス)がある割合 例: 児童館、図書館、区民センター、民間団体の活動場所、体育館など
・自分が考えたり、感じていることを伝えることができる場所(ネットは含まない)がある割合
⑥: 同世代だけでなく、多様な地域住民と若者が主体的に関わる連携
・若者のことを理解している大人がいると感じる割合
・地域が若者の参加や、若者の意見・声を必要としていてと感じる割合
生きづらさを抱えた若者の支援
⑦: 生きづらさを抱えた若者及び、その家族を対象とした相談支援
・何かあった時に、誰/どこに相談したらよいか知っている(相談の有無は問わない)割合
・相談機関に相談したことで、状況が改善したことがある割合
⑧: 安心して利用でき、対人関係や社会生活に対する自信を取り戻せるような「居場所」の構築
・自分をサポートしてくれる人がある割合
・自分にとって、目標となる身近な先輩・大人がいる割合
⑨: 生きづらさ・困難を抱えた若者支援に向けた関係機関との連携による重層的な支援
・支援機関を利用した際、親身になってくれる専門家・相談員がいた割合
・支援機関を利用しようと思った際、適切な機関につないでくれた割合
⑩: 社会的自立に向けた支援
・将来に対するイメージを描けている割合
・働くことや将来において、多様な進路選択があることを知っている割合
⑪: 早期支援の重要性
・学校以外の相談機関を知っている割合
・相談機関を利用したことがある割合
若者の社会に向けた文化・情報の発信への支援
⑫: 若者の主体的な取り組みを支援する仕組みの構築
・若者が、地域社会に参加することへの機会があることを実感している割合
・世田谷区が、若者支援事業に取り組んでいることを知っている割合 例: 児童館、青少年交流センター、SNS「ねつせた!」、あいりす、たからばこ、相談機関(いくつか、実例を入れる)

(3) 調査対象及び調査方法

区内に居住する15歳から29歳の若者から無作為抽出した6,000名を対象に郵便にてアンケート調査票を発送。回答は郵送またはWEBで受け付けることとした。

また、施策や事業を利用している若者と、無作為に選んだ若者を比較するため、施設等を利用している若者にも直接配布等によりアンケート調査を行った。

施設は「交流・活動系」として児童館、青少年交流センターなど活発な活動を促す施設、「相談・支援系」として生きづらさや困難を抱えた人の相談や居場所を提供する施設で分け、両施設あわせて、103件の回答を得た。なお、「相談・支援系」は対象者が限定される取り組みであることから、利用による自身の状態の変化や満足度等、利用者のみ回答いただく設問を設定した。

アンケート調査については資料編 P87～P170 参照

また、施策をとおして若者がどう変わっていったのか、そのプロセスを把握するとともに、定量調査だけでは捉えきれない若者の考えや実態を掘り下げるため、ヒアリング調査を行うこととした。

ヒアリングは若者だけでなく、事業者やスタッフに対しても行うことで、施策（事業）の目的を事業者がどのように実現しようと努めているか、若者はそれをどう受け止めているか、比較を行うこととした。

ヒアリングは、基本項目を定めた上で、小委員会委員が実施した。

ヒアリング調査については資料編 P171～P248 参照

(4) 評価・検証にあたっての課題

アンケート調査の有効回答率は18.9%と2割を切ったが、若者をとりまく状況について一定の傾向を把握できるものとして、結果を元に評価・検証を行った。

一方で、本協議会の審議の中でも指摘されていた、外国籍の若者やLGBTの若者等社会的少数者の課題やニーズを把握することはできず、今回行った調査の限界も明らかになった。

(5) その他

本文中、“図2—01”等出典を記載せず使用しているデータは、資料編の該当図表を参照のこと。

2. 評価軸ごとの評価・検証

若者の交流と活動の推進

：若者自らの主体的な活動

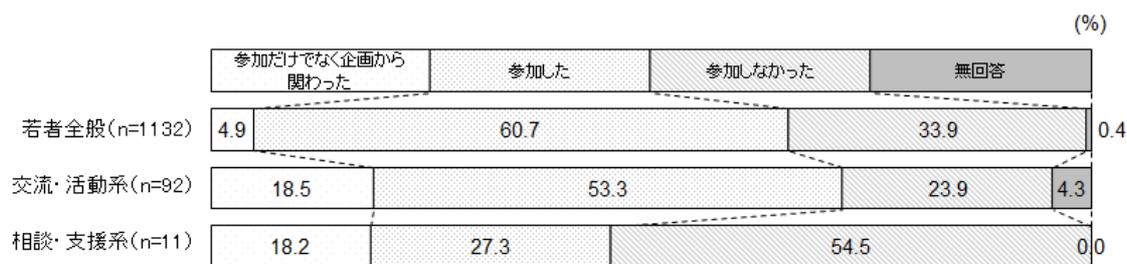
現状

世田谷区在住の15歳から29歳の若者は、学校あるいは職場以外でどのような活動に参加しているか、またどのくらい主体的に参加しているのだろうか。

参加率が多かったのは、映画、展示会、音楽鑑賞（78.4%）、観光（73.9%）、スポーツやスポーツ観戦（59.1%）、次いでお祭りなどの地域行事（51.9%）という結果であった。お祭りなど地域行事の参加率は過半数に達しており、その他の地域のイベントやプログラムへの参加率は約2割であった。（問25）

また、このうち「地域行事（祭りなど）」「ボランティア」等地域と関わるイベントやプログラムに「企画から関わった」と回答したのは若者全般で4.9%。それに対し、施設を利用したことのある若者については18.5%という結果であった。全区の若者に比べ施設利用経験のある若者に「企画から関わる」という主体的な活動が多く見られることがわかった。

図 2-12 活動への参加状況 ～ （単一回答） / 対象



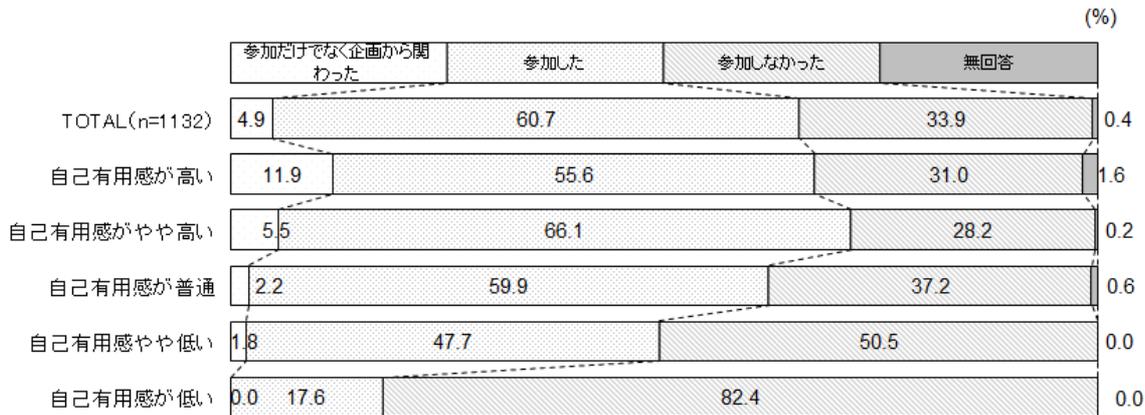
*いずれかの活動に「参加だけでなく企画から関わった」と回答している場合は、「参加だけでなく企画から関わった」とみなして割合を算出した。

ヒアリングからも、施設の利用者は自発的であれ周囲に巻き込まれる形であれ、何かしらの活動に関わることがうかがわれた。『若者が役割を求めている部分がある。若者が企画する会議を毎月持ち、日常的に会議で出てきたアイデアが形になっていくことが多い』（野毛青少年交流センター）という話にもあるように、若者の意見を取り入れていくオブザーバー的なスタッフの存在を確認することができる。実際に施設を利用している人からは、交流の拡大や新たな活動への期待を実感している声も聞かれた。

こうした主体的な関わりは、自己有用感にも現れていると思われる。

図 2-14 にあるように、イベントやプログラムに「企画から関わった」若者の自己有用感はその以外の若者より明らかに高く、主体的な活動が自己有用感にプラスに働いていることがうかがわれた。

図 2-14 活動への参加状況 ～ (単一回答) / 自己有用感別



* 自己有用感に関する設問（「他の人から必要とされていると思う」「困っている人がいたら助けたいと思う」「自分の力を地域に役立てたいと思う」「自分の力を発揮したり、試したりする機会があると思う」「いつか自分にふさわしい仕事に出会えると思う、あるいは、すでに自分にふさわしい仕事に就いていると思う」）について、「すごくそう思う」を 2 点、「まあそう思う」を 1 点、「あまりそう思わない」を - 1 点、「ほとんどそう思わない」を - 2 点として回答者ごとに平均値を四捨五入し、2 点を「高い」、1 点「やや高い」、0 点「ふつう」、- 1 点「やや低い」、- 2 点「低い」として集計した。問 14 ～

現状に対する評価

児童館や青少年交流センターをはじめとした区の施設を利用している若者は、あらゆるイベントやプログラムに対して「企画から参加する」率が高いことから、主体的な活動を行うことについて施設が果たしている役割を確認することができた。

加えて、若者の様々な意見を吸い上げるための仕組みづくりを各施設のスタッフが行うことにより、もともと主体的に何かにとりくむことが少なかった若者であっても、関係性をベースに挑戦することができるようになってきていると考えられる。

また、このようにスタッフの存在が非常に重要であると考えられる一方で、スタッフの異動等で良好な関係が維持できないことへの懸念の声もあり、運営方法に関しては慎重に見ていく必要がある。

若者によっては、施設を利用する中で、自身が社会の一員である実感を持つことができ、社会に対して影響を与えることができることを学び、実感することができる。こうした期待感を持つことができる環境や人間関係が、学校や職場以外にあることの意味は大きい。引き続き

き、若者が過ごすことのできる拠点の整備を進めながら、利用者とスタッフがどのように関係をつくっていくのかという質的な部分への注力をしていっていただきたい。

追記として、企画はせずとも参加している人の割合は全区的に高い数値を示していた。このような事業を展開することにより、区民の参加がより増加し、他指標に対しても良い効果を示すことを期待したい。

区が取り組むべきこと

・利用する若者とスタッフ（身近な大人の存在）が持続的に関係を構築することのできる人員配置

自らのやりたいことを形にしようとしても、どのように踏み出せばよいのかわからないという若者に対し、時間をかけて付き合い、必要とされればアドバイスを提供できるような「身近な大人」の存在は必要。施設の役割を十分に発揮するためにも、適切な人員配置とローテーションについてより重視していく。

・スタッフ側のケア

若者の成長を実現するために不可欠なスタッフへの支援も必要。労働環境への要望や施設の運用方法や若者とのコミュニケーションの取り方への課題に耳を傾けるような、スタッフ・職員・世話人間の意見交換の場が求められているかもしれない。

・商店街をはじめとした地域の組織でも若者が活動できる区へ

現在、児童館や青少年交流センターを中心に、若者の主体的な活動をサポートしているが、商店街をはじめとした地域の組織においても同様の役割が果たせるようになると、若者の活動が世田谷を創り上げていくというビジョンの実現につながると思われる。用賀商店街のように若者の自主性に期待し、積極的に採用していく事例はヒントになる。あくまで若者の自主性を損なうことなく、商店街の企画を実現するための参画を呼びかけていてもらいたい。

：自立と成長を促す

現状

実行してきた施策が「自立と成長」に寄与できているかを測るために、自己肯定感、自己有用感の指標を複数用いて調査を実施した。言葉にすると、「自分のやりたいことを持つことができた」、「以前に比べて自分は成長していると感じられる」というようなイメージだろうか。これらの実感を得るためにはどのような環境が必要だろうか。

図 2-31、32 に示すように、「コミュニケーションの頻度」と「自己肯定感・自己有用感」の間に相関があることが明らかとなった。他者との関わり合いの中で認められることは、自立と成長を実感する機会になっていると考えられる。

図 2-31 コミュニケーションの頻度（単一回答） / 自己肯定感別

(%)

	頻度が高い	頻度がやや高い	頻度がやや低い	頻度が低い	無回答	
TOTAL (n=1132)	19.3	30.0	28.9	21.5		0.4
自己肯定感が高い (n=185)	30.8	33.0	24.3	10.8		1.1
自己肯定感がやや高い (n=498)	18.9	32.9	30.7	17.5		0.0
自己肯定感ふつう (n=279)	14.3	25.4	30.5	29.4		0.4
自己肯定感がやや低い (n=145)	17.2	29.7	22.8	30.3		0.0
自己肯定感が低い (n=22)	9.1	0.0	50.0	40.9		0.0

*コミュニケーションの頻度について、「毎日」を5点、「週に数回」を4点、「月に数回」を3点、「年に数回」を2点、「ほとんどしない」を1点、「まったくしない」を0点として回答者ごとに平均値を算出し、2.5点以上を「頻度が高い」、2.0～2.5点未満を「頻度がやや高い」、1.5～2.0点未満を「頻度がやや低い」、1.5点未満を「頻度が低い」として集計した。

図 2-32 コミュニケーションの頻度（単一回答） / 自己有用感別

(%)

	頻度が高い	頻度がやや高い	頻度がやや低い	頻度が低い	無回答	
TOTAL (n=1132)	19.3	30.0	28.9	21.5		0.4
自己有用感が高い (n=126)	34.9	38.1	19.8	6.3		0.8
自己有用感がやや高い (n=560)	19.6	31.6	31.4	17.1		0.2
自己有用感ふつう (n=317)	17.0	28.7	29.0	24.9		0.3
自己有用感がやや低い (n=109)	9.2	19.3	29.4	42.2		0.0
自己有用感が低い (n=17)	0.0	11.8	11.8	76.5		0.0

施設のヒアリングから、若者間、若者とスタッフとの間で有機的なコミュニケーションをとる努力がなされていることがわかった。また、若者の「やりたいこと」に耳を傾け、困った時には手助けするスタッフとの間に信頼関係が構築されていることで、自分のやりたいことに自信を持って挑戦することが可能になっているようだ。若者にとってそうした機会は成長実感や将来の夢を持つことに繋がっていると思われる。進学を境に、かつてお世話になった施設に再び関わりたいと考え、スタッフとして働く道を選択する若者もいる（玉川台児童館）という話もあった。

また、最初に利用しようと思う動機についても触れておきたい。施設を利用し始めた理由として、『音楽室があったから』『お金がかからないから』といった声が上がっており、施設を利用する動機が多様であることも踏まえて認知を広め利用者を増やしていく必要がある。

現状に対する評価

若者の自立と成長をサポートする環境として、自発的に行動できる環境、自発的に行動したいと思える環境、そしてそれを認めてくれる環境があることが望ましいが、施設はその役割を担っていることがわかった。

若者から発信された「やりたいこと」を引き出し、受けとめ、実行するまでサポートするという一連の施設の役割は、利用動機があって来訪する若者だけでなく「なんとなく来訪した」若者にとって大きな意味があると思われる。

「やりたいことがなかなか見つからない」、「積極的に何かに参加したいわけではない」という状態にある若者は少なくないと思われるが、利用者とスタッフの間のコミュニケーションが、強制力ではなく自発性を引き出すものになるよう心掛け、無理のない関係づくりを進めている点は非常に評価できる。

何かを強要したりコントロールすることなく、自ら選択できることを尊重する環境は、ありそうでないのではないか。時間をかけて関係性を構築していく施設のこうした環境は、いずれ自立と成長に寄与していくと思われた。

また、利用者は施設のメリットを最大限活かし、自分なりの施設の使い方を見つけていたが、自分がやりたいことをできる場所がそもそも少ないという実感もあるようだ。また、未利用者も多く存在しており、気軽に施設を利用できるようにするための周囲の理解を得る必要も感じる。家族や地域、学校の先生など若者を取り巻く人々に、施設を利用するメリットや安全性をしっかりと理解してもらえそうな働きかけも必要である。

区が取り組むべきこと

・「なんとなく過ごせる」居場所を引き続き提供

若者のペースで自らしたいことが選択できる場所は、自立や成長の機会をサポートする環境として有益である。若者とスタッフの距離感にも注意を払いながら、居場所を継続して提供していく。

・利用する若者とスタッフ（身近な大人の存在）が持続的に関係を構築することのできる人員配置（「指標：若者自らの主体的な活動」と同様）

自らのやりたいことを形にしようとしても、どのように踏み出せばよいのかわからないという若者に対し、時間をかけて付き合い、必要とされればアドバイスを提供できるような「身近な大人」の存在は必要。施設の役割を十分に発揮するためにも、適切な人員配置とローテーションについてより重視していく。

・保護者に対し施設利用のメリットや安全性を広報する

児童館やプレーパークなどの施設が、より多くの若者にとって自立と成長を促す居場所となるために、広報活動は欠かせない。特に親の影響が強い高校生までの若者が施設を利用しやすいよう、学校関係者の協力も得ながら、若者を取り巻く大人たちへ施設の存在や施設でできることを伝えていく必要がある。

：世代を超えた出会いや交流の機会の積極的な創出

現状

若者がよくコミュニケーションをとる「身近な人」は、同居する親（毎日が69.0%）、ついで現在所属している学校（毎日が30.0%）、職場の友人（毎日が28.1%）となっており、相談相手も同様に親や今所属する学校や職場の仲間がメインであることが確認できる。一方で「他の人に言えない本音を話す相手がいない」と回答した若者は12.4%存在していた。（問16,17）

問17 話したり、相談したりする相手(回答は3つまで)

	n=	地域の友人	高校(高校時代)、大学(大学時代の友人)	その他の友人(学校、職場以外)	恋人	学校の先生	塾や習い事の先生	アルバイト仲間	職場の人	近所・地域の人	インターネット上の知り合い	家族(同居している人)	親族や同居していない家族	その他	該当する人はいない	無回答	上段: 度数 下段: %
楽しいこと、うれしいことを話す場合	1132	253	658	175	270	17	13	43	185	4	85	651	257	7	12	42	
	100	22.3	58.1	15.5	23.9	1.5	1.1	3.8	16.3	0.4	7.5	57.5	22.7	0.6	1.1	3.7	
悲しいこと、嫌だったことを話す場合	1132	207	559	135	237	21	6	31	153	7	67	563	221	8	55	53	
	100	18.3	49.4	11.9	20.9	1.9	0.5	2.7	13.5	0.6	5.9	49.7	19.5	0.7	4.9	4.7	
身の回りのことで、自分の考えや主張を伝える場合	1132	181	522	136	205	50	14	39	224	9	74	606	215	6	35	57	
	100	16.0	46.1	12.0	18.1	4.4	1.2	3.4	19.8	0.8	6.5	53.5	19.0	0.5	3.1	5.0	
ニュース等で見聞したことに対する自分の考えや主張を伝える場合	1132	108	368	112	153	39	12	28	230	12	73	588	164	12	93	70	
	100	9.5	32.5	9.9	13.5	3.4	1.1	2.5	20.3	1.1	6.4	51.9	14.5	1.1	8.2	6.2	
他の人に言えない本音を話す場合	1132	194	439	109	186	17	3	18	67	5	57	414	174	20	140	58	
	100	17.1	38.8	9.6	16.4	1.5	0.3	1.6	5.9	0.4	5.0	36.6	15.4	1.8	12.4	5.1	

質問文原文: 次のことについて、話したり、相談したりする場合、主に誰と話をしますか。あてはまる人を3つまでお答えください。(回答はそれぞれ3つまで)

コミュニケーションの頻度は15歳～19歳の若年層の方が高い(図2-30)。年齢が上がるにつれてコミュニケーションの頻度は落ちてゆく傾向にあるが、恋人や配偶者、アルバイト先やサークルの仲間など親や学校(あるいは職場)以外で交流する身近な人は増えていく。若年層の若者は、親や学校(あるいは職場)の関係性の影響を大きくうけてしまうため、それ以外で「身近な人」と接する機会を地域社会の中で創出するという施策は重要である。

図2-34にあるように、世田谷区の「交流・活動系」の施設を利用したことがある若者のコミュニケーション頻度は、若者全般と比べても明らかに高く、親や学校・職場以外での「身近な人」との交流がコミュニケーション頻度を高めていることがうかがえる。

図2-34 コミュニケーションの頻度(単一回答)/対象者別



前章にもあるとおり、コミュニケーション頻度が高い若者ほど「自己肯定感」「自己有用感」のスコアが高いことも今回の調査でわかってきた。(図2-31,32)

もともと「自己肯定感」「自己有用感」の高い若者が児童館その他の施設を利用したり地域のイベントに参加したりしているのではないかという見方もできるが、現場のヒアリングや視察から受けた印象は必ずしもそうではない。

目的をもって音楽やスポーツや勉強をしにくる若者もいるが、大半は目的なく立ち寄ったことがきっかけで利用につながっているケースであった。大人しく引っ込み思案な印象の中高生が、ゲームやアクティビティを通して自分の居場所を見つけ、しだいにキャンプのリーダーのような役割を少しずつ経験し、さらには自分より小さい子のお世話をする側に回っていく様子が見てとれた。

また中高生の利用者が日常的に児童館や青少年交流センターを利用する理由として、『少し上のお兄さんやお姉さんに認められることが嬉しい』という発言も聞かれた（代田児童館、野毛青少年交流センター）。兄弟・姉妹のいない子も多い昨今、家庭や学校では得られない、年齢の近い上下の交流ができる貴重な場となっていることも確認できた。

現状に対する評価

今回の調査で、世田谷区の取り組みの利用経験率は児童館で45.5%と最も高く、次いでプレーパークの14.6%、児童館（中高生支援館 1）は7.2%という結果であった。その他の取り組みの利用経験率は3%未満となっており、必要な人への施策の認知・浸透の課題は残されてはいるが、児童館、青少年交流センター、プレーパークに関しては定量・定性の調査からも「世代を超えた出会い・交流の場」としての有用性が確認できた。（問27）

1 平成27年度から地域の児童館のうち一か所を、地域の中心となって中高生世代の活動を応援する中高生支援館として位置づけている。開館時間を延長し、中高生優先の時間を設けたり、中高生向けの設備が充実している。

子ども計画にあるように、「児童館」を中心として地域とのつながりを創出していくという施策は、大変理に適っていると思われる。

悩める思春期の若者の心に入っていくことは難しいが、児童館や青少年交流センター、プレーパークを小学校から、もしくは小学校以前から利用することによって構築された信頼関係が、思春期における若者のサポートに繋がっているということがヒアリングからわかってきた。小学校以前からの顔見知りの関係性をつくることの必要性をあらためて保護者に伝えたい。ことに児童館は乳幼児親子にも利用できるようにしているが、早期からのアプローチは思春期の居場所を作る上でも大切であると感じた。

児童館、青少年交流センター、プレーパークは学校と少し似ているが、何かを教える場所でも、何かをしてあげる場所でもなく、子どものペースで時間が流れている場所。職員やスタッフは指導者ではなく見守り受けとめる立場として近くに存在していた。子どもの自由と自主性を尊重したこうした見守りの姿勢はヒアリングを実施したどの施設でも一貫しており、若者からは『学校とは違う自分になれる』（野毛青少年交流センター）という発言も聞かれた。いろいろな子どもたちが伸びやかに過ごせる生態系のようなこうした環境づくりは今後もぜひ進めていきたいと感じた。

地域との繋がりが世代を超えた出会いや繋がりを創出できているかという点はまだまだ伸びしろがありそうだ。

地域行事（祭りなど）に参加した人は 53.6%、地域活動（サークル、NPO 活動、清掃、防災活動）に参加した人は 16.4%（問 25）。また地域の人が「身近なコミュニケーション相手」になっている人（月に数回以上コミュニケーションをとる地域の人がいると回答）は、24.8%存在（問 16）。

地域との継続的なつながりをつくり、若者が主体的に地域に参加できるようにするため、地域の大人の知恵を借りることも有効だ。

区が取り組むべきこと

・ 小学校時代、またはそれ以前からの児童館利用の促進

親や学校での関係性につまずいた時、「第三の居場所」があることは子どもの救いになるだけでなく、新しい自己発見の機会になり得る。思春期になる前に児童館や若者支援施設が馴染みある場所になるよう利用促進する。

・ 児童館、青少年交流センター、プレーパークを中心にした地域との連携強化（日常的な取り組みを大事にする）

地域のお祭りやイベントが単発で終わらず、より「継続的な」交流を生む施策になるようプランを工夫する。継続的に触れ合わないと「身近な人」にはなりづらく、また主体的に関わる経験になりづらい。

地域、とくに商店街の新しい役割、魅力づけとなるプランが望ましい。（毎週 曜日は「商店街×子ども若者シゴト体験」の日など）

・ 子どもの活動をサポートする地域のファシリテーターなどのプロボノ 2 起用で活動の質アップも検討

子どもたちの育成を考えながら運営をサポートできる人材が必要。地域の人材を登録するなどし、少しずつ地域の人材と協働する事例を増やししながら、若者の活動そのものの質向上を実現する。

2 各分野の専門家が、職業上持っている知識・スキルや経験を活かして社会に貢献するボランティア活動全般のこと。

・ 施設スタッフのチーム編成の重要性認識

施設では少人数で多様な若者のサポートを行なっている。信頼関係が重要であるため、人事異動などが子どもたちのリスクにならないよう、現場の意見を踏まえたより良い対応をお願いしたい。

・ 児童館、青少年交流センター、プレーパークの適切な配置

世田谷区全域に児童館の数が充足しているかの確認。

：若者の社会への参加・参画意識の醸成

現状

若者の地域社会への参加・参画意識の醸成について現状分析をすると、地域への愛着を感じている人ほど、目標を持ち、日々主体的に生きており、自己肯定感・自己有用感が高い人生を歩んでいることが分かった。

図 2-38 住んでいる地域への愛着（単一回答） / 自己肯定感 目標を持って頑張っていると思う割合別

	愛着を感じている	まあ感じている	あまり感じていない	感じていない	無回答	
TOTAL (n=1132)	37.9	43.5		14.5	3.7	0.4
目標を持って頑張っている	48.4	36.2		12.2	2.4	0.8
目標を持ってまあ頑張っている	36.7	47.3		12.4	3.7	0.0
目標を持って頑張っているとはあまり思わない	34.4	41.2		19.7	4.4	0.3
目標を持って頑張っているとはほとんど思わない	26.6	51.9		15.2	5.1	1.3

一方、様々な場面で話したり相談したりする人がいない人の「地域への愛着を感じていない割合」は 7.2%。愛着をなんらか感じている割合に比べ高くなっている。(図サ)そこで愛着を感じる理由について見てみると、「お祭りや地域のイベントが好き」では 15.9%と学生が最も高く、学校種別ごとで見ると高等学校・高専在学中が 25.3%と最も高く、専門学校・各種学校/短期大学/大学/大学院在学中で見ると、9.2%となった。(図 2-42,43)

また、「地域で役に立っていると感じたことがある」人は、「住んでいる人がやさしくて親切」、「住んでいる人同士に温かいつながりがある」、「お祭りや地域のイベントが好き」という項目が高い割合になっている。(図 2-44)

さらに自己肯定感・自己有用感で見ると、それらが低い人ほど「地域社会へ参加・参画したいと思わない」割合が高くなっており(図 2-45) 若者の地域社会への参加・参画意識の醸成は、若者の自己肯定感・自己有用感と密接な関係があることがわかった。

図 2-45 地域住民による主体的な活動（単一回答） / 自己肯定感別度別

	参加している	参加したいと思うが、できていない	参加したいと思わない	無回答	(%)
TOTAL (n=1132)	21.3	60.4		17.8	0.5
自己肯定感が高い	23.2	57.3		18.4	1.1
自己肯定感がやや高い	20.7	62.9		16.1	0.4
自己肯定感が普通	22.9	62.4		14.0	0.7
自己肯定感がやや低い	15.9	56.6		27.6	0.0
自己肯定感が低い	27.3	40.9		31.8	0.0

例えば、地域の児童館に通うことで、目標を持ち、夢を見つけた中学生もいた。地域内において普段から密にコミュニケーションを取っている人ほど、自分の力を役立てたいと感じており、そのような人は居住年数が10年以上である割合が高いことがわかった。(図2-47)

現状に対する評価

若者の地域社会への参加・参画における重要性について、事業者、スタッフサイドはしっかりと理解している印象を受けた。一方、若者のヒアリングによると、居場所としての機能や、成長材料としての機能など幅広く支援されているという実感はあるようだ(玉川台児童館)。地域との繋がりも、お祭りやイベント、若者たち自らで考え行動するコミュニティなど幅広く提供されていることも確認できた。

しかしながら、若者の主体性を育むための具体的手法について悩んでいる部分もあった。事実、地域への参加・参画機会はお祭りやイベントなどの既存の仕組みで大方用意されているものの、参加するに留まり、企画側に立って、主体的に活動する人は限りなく少ないとのことだった。地域活動を通して夢や目標を持ち、主体性を獲得し、自己肯定感・自己有用感が上がったという事例などを鑑みると、若者の主体性が自ずと育まれるような若者支援施策が不足していると言える。若者の地域社会への参加・参画において、「若者における自己肯定感・自己有用感の再生と地域社会のあり方」をいかに結びつけるかが今後の課題である。

区が取り組むべきこと

・既存の若者支援施策における最適な情報発信

まず何より世田谷区の、若者に対するスタンスを明確化・言語化するために、若者の自己肯定感・自己有用感の回復を主なコンセプトとした情報媒体の提供やコンテンツを発信する。

・若者コミュニティ形成の促進

IT活用により、同じ志向性を持つ若者同士のマッチングサイトの開発。若者主体のテーマコミュニティの活性を図り、そのテーマに合わせた場の提供や、コンテンツ開発に努める。

・最前線で活動する若者との交流支援

中高生を主なターゲットとした定期交流イベント。少し先を生きる、先輩や、会社員などが、中高生に向けて、目標設定の方法などを指南。「憧れの先輩」を世田谷区にたくさんつくるプロジェクトを実施する。

・自己肯定感をKPI(重要業績評価指標)として設定する

数ある若者支援施策の中、特に重要な「若者の自己肯定感・自己有用感の再生」を重要な評価指標として設定し、施策化・検証をしていく。

：安心して中高生世代が地域で過ごせる場や機会の拡充

現状

若者の居場所 3とはどのようなものだろうか。

居場所がある割合をみると、「安心して過ごせる場所がある」(87.4%)、「自分を受け入れてくれる場所がある」(76.5%)、「一人になれる、他人に干渉されない場所がある」(73.1%)、「心をゆるせる仲間と会える場所がある」(72.3%)、「好きなことが自由にできる場所がある」(71.0%)となっており、「あてはまるような居場所がない」*と回答した若者は5%であった。(うち学生で「あてはまるような居場所がない」と回答した割合は3.6%)

図 2-53 居場所がある割合(単一回答)/現在の状況別

	n=	安心して過ごせる場所	一人になれる、他人に干渉されない場所	好きなことが自由にできる場所	心をゆるせる仲間と会える場所	自分を受け入れてくれる場所	普段の生活を忘れられる場所	あてはまるような居場所はない	無回答
TOTAL	1132	87.4	73.1	71.0	72.3	76.5	49.0	5.0	0.5
学生	476	91.4	74.6	74.2	77.7	81.1	52.3	3.6	0.6
正規職員(自営業を含む)	465	84.7	73.8	69.7	70.5	75.3	49.0	6.0	0.0
非正規職員/パート、アルバイト	117	82.1	66.7	68.4	64.1	65.8	39.3	7.7	0.0
専業主婦(夫)	27	92.6	59.3	59.3	66.7	77.8	44.4	7.4	0.0
無業者/その他	43	88.4	79.1	69.8	62.8	72.1	44.2	2.3	0.0

(%)

*全ての項目において、居場所がない場合の選択肢「そうした居場所がほしい」あるいは「そうした居場所が欲しいと思わない」と回答されたもの。

3 家や学校、職場(アルバイト先)を含めた、安心できる自己存在感や充実感を感じられる場所のこと。

世田谷区の95%の若者が、何らかの居場所があるという結果は肯定的に捉えたい。また、自己肯定感が高い若者ほど、居場所が「ある」割合が高かった。

図 2-56 居場所がある割合（単一回答） / 自己肯定感別

	n=	安心して過ごせる場所	一人になれる、他人に干渉されない場所	好きなことが自由にできる場所	心をゆるせる仲間と会える場所	自分を受け入れてくれる場所	普段の生活を忘れられる場所	あてはまるような居場所はない	無回答
TOTAL	1132	87.4	73.1	71.0	72.3	76.5	49.0	5.0	0.5
自己肯定感が高い	185	92.4	87.0	84.9	84.9	88.1	68.6	2.2	1.1
自己肯定感がやや高い	498	91.0	75.1	74.3	77.7	82.3	53.4	3.4	0.2
自己肯定感ふつう	279	87.8	69.9	68.1	67.0	74.2	40.9	4.3	0.4
自己肯定感がやや低い	145	75.9	59.3	53.1	55.9	54.5	30.3	11.0	0.7
自己肯定感が低い	22	40.9	40.9	36.4	27.3	27.3	13.6	36.4	0.0

家や学校、職場（アルバイト先を含む）以外の「第三の居場所」はどうだろうか。「安心して過ごせる場所がある」（45.6%）、「心を許せる仲間と会える場所がある」（42.7%）、「好きなことが自由にできる場所がある」（36.3%）、「自分を受け入れてくれる場所がある」（33.5%）、「一人になれる、他人に干渉されない場所がある」（33.1%）となっており、第三の居場所として「あてはまるような居場所がない」と回答した若者は14.9%であった。

図 2-58 第三の居場所がある割合（複数回答） / 対象者別

	n=	安心して過ごせる場所	一人になれる、他人に干渉されない場所	好きなことが自由にできる場所	心をゆるせる仲間と会える場所	自分を受け入れてくれる場所	普段の生活を忘れられる場所	あてはまるような“居場所”はない	無回答
若者全般	1132	45.6	33.1	36.3	42.7	33.5	28.5	14.9	2.5
交流・活動系	92	64.1	38.0	54.3	47.8	32.6	19.6	7.6	1.1
相談・支援系	11	18.2	9.1	9.1	18.2	54.5	9.1	36.4	0.0

*問 12 では、家や学校、職場（アルバイト含む）以外で上記のような居場所があるか尋ねており、これを「第三の居場所」と表現している。

世田谷区の施策で「交流・活動系」施設利用者では、若者全般に比べ家や学校・職場以外で「安心して過ごせる場所がある」と回答した若者は 64.1%（若者全体は 45.6%）、「好きなことが自由にできる場所がある」と回答した若者は 54.3%（若者全体は 36.3%）と明らかな有意差が見られた。このことから、区の施策は居場所提供につながっていることが確認できる。（図 2-58）

暮らし向き別にみると、生活に余裕がある人ほど、居場所が「ある」割合が高くなっている（図 2-55）。世田谷区は経済的に豊かな区のように見られるが、格差が存在していることはヒアリング調査（代田児童館）でも報告されている。音楽をやりたくても楽器が購入できないなど、経済的な困窮による機会損失を埋める区の取り組み事例も見られている。

また、「話したり相談したりする人が少ない、またはいない」人ほど、第三の居場所が「ない」と回答する割合が高くなっている（図 2-60）ことから、第三の居場所は親や学校・職場の人間関係に難しさを感じる若者にとっての受け皿になっていくことが期待できる。

現状に対する評価

児童館、青少年交流センター、プレーパークなど施設が「第三の居場所」になり得ていることが数字上確認できた。

これは単に居場所という箱（ハード）があればよいということだけではない。運営面（ソフト）にも「居場所」を成立させている要素が多分にあることを現場の視察およびヒアリングから一貫して感じとることができた。

多様な若者がふらっと立ち寄れる各施設において、職員やスタッフの若者たちを見守る姿勢は一貫していた。若者の自主性を尊重し、若者のペースで自由な時間をすごせるように配慮されていた。また、困ったときに相談に来てもらえるよう、日頃の挨拶やさりげない声がけを重視し、顔見知りの大人となれるよう努力がなされている。こうした「見守る姿勢」「若者たちが自由に過ごせる環境づくり」が家庭や学校にはない「居場所」として重要な要素だと感じられた。

目的をもって立ち寄る若者も一定層存在していた。バンドの練習、仲間と一緒に勉強するグループなどがそれである。バンドの練習場所は実際に少ないようで本格的に好きな音楽に親しめ、その延長で世田谷区のイベントで発表するなど、利用できた若者にとっては自己表現の機会をうまく創出できていた。勉強だけに立ち寄る学生の多くは自宅にも勉強部屋がある若者が多かったが、『施設のほうがアットホームだから』『干渉されないから』という声も聞かれた（池之上青少年会館）。過干渉な社会ゆえ「第三の居場所」となるケースも増えていきそうである。

いずれのケースも、現地で出会った若者たちの表情は穏やかでマイペースに過ごしている様子が印象的だった。

しかしながら、課題はこうした居場所の存在を知らずに過ごす家庭の方が多いということ。一番利用されている児童館でも利用経験率は45.5%。ということは若者世代の大半は利用していないことになる。（問27）

玉川台児童館でのヒアリングでは、中高生・大学生による話し合いの中で、自分たちの欲しいものは「居場所」「仲間」「何でも言えるネットワーク」だという結論にまとまったという話も聞かれたが、現在できつつある「第三の居場所」の質については確認できたものとして評価し、次は利用者を増やすことにも目を向けたい。難しい思春期になる前の小学校以前の時代から、地域で安全に過ごせる「第三の居場所」を作っていくことの重要性を伝えたい。

区が取り組むべきこと

・「第三の居場所」の重要性と居場所の存在の周知・浸透

小学生の保護者に対し、児童館を始めとする「居場所」の意味と重要性（中高生支援の内容）を丁寧に伝える。それが子育ての孤独感や不安感を軽減する選択肢、セーフティーネットの1つになることへの理解を深める。

・小学校以前からの児童館利用の促進（「第三の居場所」をつくろう！と呼びかけ）

親や学校での関係性につまずいた時のために、ふらっと立ち寄れる「第三の居場所」を作っておこう！と呼びかける。（対象は乳幼児・小学生の親向け。）例えば家と学校を線でつなぎ、そのルートにある一番近い施設をみつけ、小学校時代に気軽に利用できるよう呼びかける。

・施設スタッフのチーム編成の重要性認識（「指標：世代を超えた出会いや交流の機会の積極的な創出」と同様）

施設では少人数で多様な若者のサポートを行なっている。信頼関係が重要であるため、人事異動などが子どもたちのリスクにならないよう、現場の意見を踏まえたより良い対応をお願いしたい。

：同世代だけでなく、多様な地域住民と若者が主体的に関わる連携

現状

今回の調査対象の若者の属性は、社会人として就労(51.4%)、学生(42.0%)となっており、区の在住歴では家族と世田谷区に10年以上在住している人(30%)が多いことを前提としながら、彼らがどのように地域や近隣住民について感じているかを検証してみたい。(問3・5)

若者の内面をみる設問として数値が高かったのは、「困っている人がいたら助けたいと思う」(すごくそう思う37.6%、まあそう思う54.6%)、「自分の今の状況について考えることがある」(はい47.4%、どちらかといえばはい35.3%)であった。(問14・15)

関連して「家や自室に閉じこもっていて、外に出ない人たちの気持ちがわかる」(はい22.3%、どちらかといえばはい30.6%)、「嫌なことがあると、自分も家や自室に閉じこもりたくなる」(はい18.9%、どちらかといえばはい26.9%、以上五段階評価)となっており、誰かのために役立ちたいという気持ちが多い一方で、社会の中で生きづらい気持ちに共感する若者が区内に多く存在していることが見てとれた。(問15)

こうした若者たちにとって、地域が力になれることが望ましいが、若者のコミュニケーションの相手、相談先、尊敬する人などに「近所・地域の人」をあげる若者は残念ながら多くはなかった(問16・17・18・20)。

「地域で役に立っていると感じたことがある」と回答した人も12.4%と低水準であった(問21)。

逆に「自分の力を地域に役立てたい」と回答した人は、最低でも週数回程度、地域の人とコミュニケーションを図っている傾向(図2-47)があり、イベントなどの一過性の関係だけではそれは醸成されないことも見てとれる。

ちなみに、地域へのイベントに愛着を感じる年齢は、男女共15歳～19歳がピークになっている。(図2-62)。

図2-62 住んでいる地域に愛着を感じる理由(複数回答)/性年齢別

	n=	住んでいる人がやさしくて親切	住んでいる人のモラルが高い	住んでいる人同士に温かいつながりがある	治安がよく、安全	街がきれい	緑や公園が多い	気に入ったお店や商店街がある	好き 利用している電車や沿線の街が	お祭りや地域のイベントが好き	有名人が多く住んでいる	なる テレビやニュースでよく話題に	このまちにステータスを感じている	物価が安い	その他	無回答
TOTAL	921	21.4	22.0	9.6	61.7	35.4	42.0	40.0	51.9	11.8	6.3	6.6	16.6	1.2	5.9	0.1
男性15-19歳	119	22.7	16.8	12.6	58.0	29.4	42.0	34.5	44.5	21.0	10.9	7.6	12.6	1.7	7.6	0.0
男性20-24歳	104	20.2	31.7	6.7	61.5	43.3	37.5	43.3	61.5	9.6	7.7	5.8	21.2	2.9	6.7	0.0
男性25-29歳	147	19.7	23.8	8.8	59.2	35.4	49.0	43.5	51.0	9.5	5.4	7.5	17.0	2.7	3.4	0.0
女性15-19歳	151	27.2	12.6	14.6	58.9	32.5	39.7	36.4	47.7	17.9	11.3	6.0	13.2	0.0	5.3	0.0
女性20-24歳	166	19.3	23.5	7.8	64.5	37.3	38.0	40.4	53.6	8.4	4.8	7.2	19.9	0.6	5.4	0.0
女性25-29歳	227	19.4	24.7	7.9	65.2	35.7	43.6	41.4	53.7	8.4	1.8	6.2	16.7	0.4	7.0	0.4

ヒアリング調査では、町会の維持に限界を感じる声が少なくなかった。

『町会会員の平均年齢は 67.8 歳と比較的若い、その上の団塊世代が不在でコミュニケーションに課題を感じている』（桜新町親和会）『60、70 代が主軸で、40、50 代の参加が少なく世代をつなぐことが難しい。この働き盛り世代も地域に目を向けてくれる方も大勢いるが活かしていない。子どもも私立に行く子が増えて地域性がなくなり、お祭りは小学生時代の仲間と会える場に縮減している』（親和会）といった声があり、調査結果と符合するものと思われる。

どのような条件が整えば、地域の活動などに参加するのかというと、「活動内容に興味・関心がもてる」（74.5%）が 1 番であるが、興味があっても参加しない人にとっては「時間」「場所」の利便性が高いと参加しやすいことがうかがわれた（問 26）。

ヒアリング調査では、『地域内には塾が非常に多くこの地域の子どもは部活、塾、習い事で忙しい。地域行事への参加者は一部に留まる。』（成城青少年地区委員会）『イベントの低学年化が進んでいる。ボランティアに参加してくれた中学生はアンケートにまた参加したいと答えてくれるが高校に進学すると 2、3 年は忙しく来なくなる。』『子どもは地域の宝だったが最近では母親の宝だけになっている』（経堂青少年地区委員会）などの声が聞かれた。

他方で、住んでいる地域への愛着と自己肯定感や自己有用感に相関性が見られた（図 2-38,39）。また「地域で役立っていると感じたことがある」若者ほど、地域に愛着を感じる理由への賛同率が高かった（図 2-44）。ちなみに、地域に愛着を感じる理由の中で「住んでいる人同士に温かいつながりがある」という項目に賛同する割合は、在住 10 年を超えて高くなっている（図 2-63）ことから、自然に地域の人との接点ができるには長い時間を要することがみてとれるが、交流・活動系の施設利用者においては、「地域で役に立っていると感じた」という若者が 30.4%存在し、若者全般 12.4%と比べて多くみられた（図 2-65）。在住歴の長さに頼らず、施策によって地域とのよい関わりを創ることも可能だと言える。

図 2-44 住んでいる地域に愛着を感じる理由（複数回答） / 地域で役に立っていると感じたことの有無別

	n=	住んでいる人がやさしくて親切	住んでいる人のモラルが高い	住んでいる人同士に温かいつながりがある	治安がよく、安全	街がきれい	緑や公園が多い	気に入ったお店や商店街がある	利用している電車や沿線の街が好き	お祭りや地域のイベントが好き	有名人が多く住んでいる	テレビやニュースでよく話題になる	このまちにステータスを感じている	物価が安い	その他	無回答
TOTAL	921	21.4	22.0	9.6	61.7	35.4	42.0	40.0	51.9	11.8	6.3	6.6	16.6	1.2	5.9	0.1
地域で役立っていると感じたことがある	129	37.2	31.0	20.2	62.8	41.9	51.2	48.8	58.1	27.1	12.4	11.6	22.5	3.9	4.7	0.0
地域で役立っていると感じたことがない	790	18.7	20.5	7.7	61.4	34.4	40.4	38.5	50.9	9.2	5.3	5.8	15.7	0.8	6.1	0.1

商店街のヒアリングでは、近隣の学校との連携を進めていることがわかった。『商店街近隣に小中高大があり協力関係がある。とにかく商店街側の受け入れ体制の構築が重要で、この10年で学校側から地域貢献・地域交流など依頼されて非常にオープンになった。商店街の情報拠点を整備したことも寄与している』(下高井戸商店街)、『近隣の大学の支援もあり、事務所を若者のたまり場にするなどしながら、タキシードを着てゴミ拾いなど、若者のアイデアを積極的に採用している。その成果として商店街会員数の減少はない。若者など次世代の人に合わせしていく取組みのスタンス、また何よりコミュニケーションが大事と考えている』(用賀商店街)。

現状に対する評価

育児や子育ての個別化や世帯化は加速し、地域との関係は希薄化している。別の言い方をすれば、地域からの孤立化ともいえる。結果として家族以外に自分を理解する大人がいない、という状況の若者が増えていく。地域としても若者という存在をどのように受けとめていけばいいかそのモデルケースに乏しく、この認識にまつわる地域間格差は広がる一方となるものと思われる。

この背景にあるのは、子育て中の親世代が、地域活動よりも仕事や家事や育児といった世帯単位の事情を優先せざるをえず、結果として子育てが一段落ついた後も、町会など地域関係に登場してこない状況が広がっていることにあると思われる。そして、このことに町会は地域が廃れていってしまうのではないかという危機意識をもっている。

とはいえ、子どもが地域から消えてしまっているわけではない。その接点は小中学生の時点でお祭りなど地域イベントとして残っている。

ただその後の高校大学年齢となると、地域にもよるが、多くは部活やサークル、塾やバイトなど多忙な中で地域との関係が途切れてしまっていることが少なくない。親子ともに地域の役割よりも世帯単位の事情を優先する傾向が高く、結果として地域に40～50代の働き盛りの親世代と高校大学生世代の若者が不在というアンバランスな状況が生まれ、地域における世代継承がうまく機能してゆかないという課題が出現していることになる。

この課題に対して、うまくいっているモデルケースを、ヒアリング調査などを参考に取り上げていくと、近隣の高校や大学などの学校との連携が挙げられる。学校側が地域にオープンな姿勢を示していること、地域も学校や若者たちにオープンな姿勢を示していることは重要な条件となりそうだ。

特にその際に有効性のある取り組みとしては、情報拠点やたまり場など地域内にアクセスしやすい拠点を設置することが挙げられている。そういった場所を通じて若者とのコミュニケーションを地域の側から試みていく姿勢が有効ということになる。10年後、20年後の地域の担い手となる若者の意見や声を、今の時点から積極的に収集・評価していくことが、活気ある地域づくりに寄与していくように思われる。

区が取り組むべきこと

・地域ごとに若者の生活習慣に即したニーズを把握

地域の世代間継承や地域住民と若者の相互理解は、思う以上に多様な地理的な要素が影響しているものと思われる。特に高校・大学の学生たちは、学区に縛られず活動範囲は広域であるため、単に近隣の学校の有無だけではなく、塾や公園、レジャー・商業施設、児童館や青少年交流センターなどの誘引資源の有無も重要であろうし、おそらくそこには電車やバスといった公共交通機関や道路などの交通インフラも無関係ではないだろう。どのような若者がどこにいるのかという、より生態学的な視点で若者のニーズを捉えていくことが重要と思われる。この点において、ニーズと合致する取り組みが実施できた地域は結果的にうまくいっているということなのではないか。まず行うべきは各地域における取り組みの中から好事例を洗い出し、若者の特性と有効性の高かった取り組みの関係性を洗い出すことにあるように思われる。

・若者の創意工夫の余地を残すことと地域の斜めの関係性を体験させること

地域ニーズを優先するのではなく、若者ニーズにどれだけ寄せた取り組みを実施できるかという点にポイントを置く。地域イベントにしても継承されるべき文化の中にどれだけ若者の主体的参加と創意工夫の余地を残すことができるかが重要である。また現代の若者は親や教師や上司などとの上下関係や、同世代の友人や同僚との横の関係に対する経験値が高く、逆に直接的な利害関係を有しない斜めの関係に対する経験値に乏しい傾向があるように思われる。

地域とは、そういった直接的な利害関係を有しないもの同士も含めた多様な濃度・密度の関係を含む多様な関係性の世界であり、斜めの関係性を若者に体験させていく絶好の機会になる。こういった斜めの関係性の中で若者自身にとって有効性の高いロールモデルとの出会いも想定できる。存在感がある多様な大人に出会える自然な接点を若者のために用意していきたい。

・若者の社会的役割をどう作っていくか継続的な議論の場が必要

恵まれた環境の中で暮らしているように見える若者であっても、自分の今の状況や将来について憂う状況がある。どんな若者も自身の社会的役割を見出し、自信を持って日々暮らしていけるよう、現代の若者の立場になって考えていくことは必要。年齢を問わず地域社会の中を生きる一人ひとりが考えていくべきテーマとして、継続的に議論できる場が求められているように思われる。

コラム

市民と行政 2人3脚のまちづくり

協定大学学生(日本大学文理学部) 児玉 大樹

私がこの協議会に参加させて頂き、多くの方とのかかわり合いの中で感じたのは、「行政と市民の支え合いの必要性」でした。

参加した当初は、(自分自身が児童館などの施設をあまり積極的に利用してこなかった過去も要因の一つではありますが)果たして自分に意見ができるのか、自分がいる意味があるのかと考えることも多々ありました。そうした不安は、回を重ねるごとに少しずつではありますが解消され、自分の立場から発言をすることができるようにはなったと思います。

しかし、それでも世田谷区の児童館などの諸施設を利用する当事者が何を感じ、考えているのかはわかりません。実際に現場に赴いて行ったヒアリング調査からは、具体的な活動や人間関係など、当事者のリアリティが非常に強く伝わってきました。そこから得たものが今回の報告書の作成にも大きく寄与していると思います。つまり、「若者である」という部分に期待していただき、本協議会に参加することとなった私ですが、同じ若者である施設・サービス利用者やその運営者が発した「言葉」が何よりも力を持ち、今回このような形で仕上がったということです。

今回経験した子ども・青少年にかかわる取り組みをはじめとして、私たちのまちや生活が維持できているその根底には行政の存在があります。それは想像以上に身近な存在です。行政は多種多様な施策を展開しますが、そうした施策はどこから生まれてくるのでしょうか。それは、住民がまちに対して感じる問題点や困難ではないでしょうか。つまり私たちが声を発し、行政がそれに応えるという支え合いの関係でまちが作られてゆくという関係性が見えてきます。こうして文字にしてみると、「それは当たり前じゃないか」と思わないこともないですが、この2年間で経験したことを踏まえると、自分たちのまちをどうしてゆくべきかを自分たちで考えて意見を伝えることは、行政にとってもよりよい施策をつくる為に必要不可欠な要素であると改めて実感します。

私は今回縁があり、協議会の一員としてまちづくりに参画させて頂きました。自分の声がダイレクトな形で施策に反映される立場に立つことができる世田谷区の仕組みは、まちづくりへの区民(市民)参加のバリエーションの一つとして機能していると思います。しかし、住民全員がそうした立場に立てるわけではありません。だからこそ、行政は住民に耳を傾け、住民は声を発するといった支え合いの関係をつくり、維持することが必要なのではないのでしょうか。

私事ですが、春からはそうした支え合いの両方の立場に立つ身になります。この協議会で経験したことを活かし、「人々とともに」まちをつくる一人のアクターとして活動していきたいと思います。

コラム

自分らしく生きられる、地域を、世の中を。

区民委員 新井 佑

若者を活性化することで、地域の活性化に寄与できないか。

そんな思いで、活動を続けてきました。

なぜなら自分自身が学生時代、自らの存在価値を見出せなかった時に、チャレンジする機会を地域で与えてもらい、小さな成功体験を得られたことが今の自分の原点になっているからです。

日本の若者たちは、世界各国に比べ自己肯定感が低いというデータがあります。実際に、今一緒に活動している若者たちにアンケートを取ってみると「世の中に対する閉塞感を感じている」「社会に出ても希望は無い」「これから就活なのにやりたいことが見つからない」等とたくさんコメントが書かれていました。

当然これは一部のコミュニティ内の事であり、全体として当てはまることでは無いのですが、少なくとも一現場として、そういう漠然とした悩みを抱えている若者たちはとても多いと感じています。これからの少子高齢化の日本において、若者たちの役割も今まで以上に重要なポジションを占め、それだけに未来を担う彼ら・彼女らのパフォーマンスが今後の日本を左右するといっても過言ではありません。そのためにできる我々の仕事とは何か。それは若者たちが自分らしく生きられる環境を地域でセットすること、つまり若者たちの個性を積極的かつ戦略的に発見し、彼らの成長のチャンスをサポートするということ。そのプロセスにおいて最適な単位が「地域」だと考えます。学校のようにクローズドな場所ではなく、社会に出てからの無制限に解放された場所でもない、自己を社会に登録できる丁度良い単位が地域かもしれません。社会という大海原に出る前に、失敗を恐れずチャレンジ出来ること、老若男女との関わりから生まれる多様性のあるアイディアとその受容、恣意的なグルーピングやラベル付けが無いフラットなコミュニティ。そんな地域を目指して、時には温かく時には厳しい“応援”を基盤に一人一人の個性が顕在化され、その個性と対峙することで自ら成長し、自分らしさを獲得していくプロセスを共有しながら、私自身も一緒に成長していこうと思っています。

生きづらさを抱えた若者の支援

：生きづらさを抱えた若者及び、その家族を対象とした相談支援

現状

世田谷区において、生きづらさを抱えた若者（例えば、ひきこもり状態）の総数は明らかではないが、調査の結果によると、生きづらさを抱えているであろう若者が一定数いることが推測できる。

例えば、「自分自身のことが好きだと思う」に「(あまり)ほとんどそう思わない」と回答した割合は、約3人に1人(35.4%)で、「自分の精神状態は健康ではないと思う」に「(どちらかといえば)はい」と答えた割合は、5人に1人(20%)だった(問14, 15)。

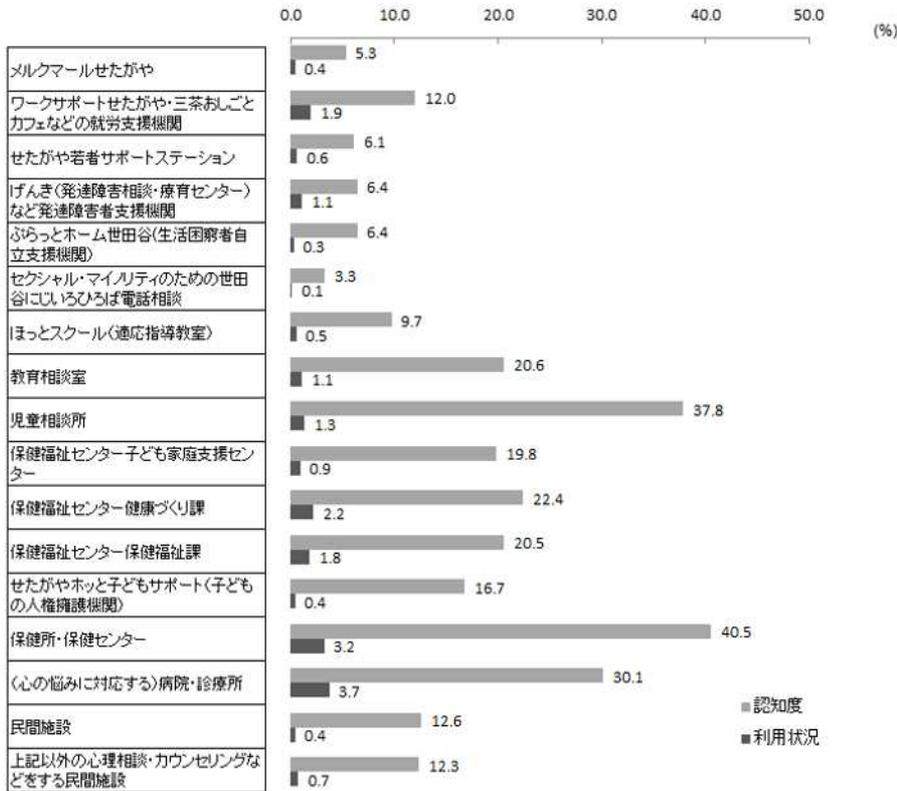
問14 自己肯定感・自己有用感	n=	すごく 思う	まあそ う思う	あまりそ う思わな い	ほとん どそう思 わない	無回答	上段: 度数 下段: %	
自分には自分らしさというものがあると思う	1132 100	350 30.9	590 52.1	165 14.6	23 2.0	4 0.4		
目標を持って頑張っていると思う	1132 100	246 21.7	510 45.1	294 26.0	79 7.0	3 0.3		
自分自身のことが好きだと思う	1132 100	207 18.3	519 45.8	299 26.4	102 9.0	5 0.4		
私には得意なことがあると思う	1132 100	267 23.6	501 44.3	287 25.4	73 6.4	4 0.4		
自分の意見が言えていると思う	1132 100	261 23.1	514 45.4	285 25.2	69 6.1	3 0.3		
他の人から必要とされていると思う	1132 100	154 13.6	565 49.9	325 28.7	85 7.5	3 0.3		
困っている人がいたら助けたいと思う	1132 100	426 37.6	618 54.6	63 5.6	20 1.8	5 0.4		
自分の力を地域に役立てたいと思う	1132 100	150 13.3	468 41.3	399 35.2	108 9.5	7 0.6		
自分の力を発揮したり、試したりする機会があると思う	1132 100	246 21.7	481 42.5	322 28.4	79 7.0	4 0.4		
いつか自分にふさわしい仕事に出会えると思う、あるいは、すでに自分にふさわしい仕事に就いていると思う	1132 100	283 25.0	557 49.2	234 20.7	55 4.9	3 0.3		

質問文原文 あなたは自分のことをどのように思っていますか、あてはまるものをそれぞれ1つお答えください。(回答はそれぞれ1つ)

また、38.1%の回答者が、20年後の自分の将来に、明るいイメージを持っておらず(問22) 52.9%が「家や自室に閉じこもって、外に出たくない人の気持ちがわかる」と回答している(問15)。これらの結果は、世田谷区で生活する若者の中で、自己肯定感が低かったり、健康状態に不安を抱えていたり、現状および将来に対してあまり希望を感じていない人が一定の割合でいることを示唆している。

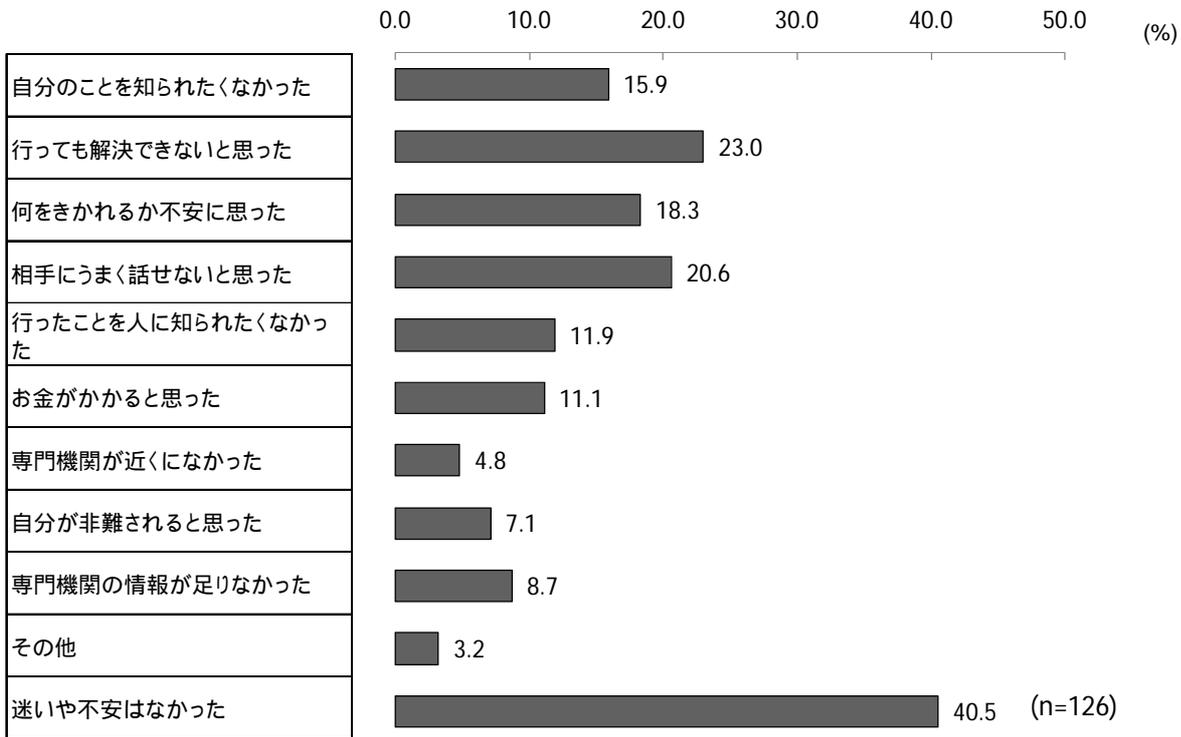
これに対し、生きづらさを抱える若者への支援を行う専門機関の利用率および認知度は極めて低い。本調査の回答者で各種専門機関を利用したことがある若者の割合は、病院・診療所を除くと最高で3.2%(保健所・保健センター)である。またこれらの専門機関を知らなかったと答えた割合は58%~95%で、世田谷区の若者の6~9割は、これらの専門機関があるにもかかわらず、その存在を知らないことが明らかになった(問28)。

問 28 6 専門機関の認知度・利用状況（複数回答）



さらに、専門機関を利用したことがある人の中で、約4人に1人は、相談する際に、「行っても（自分が抱えている問題が）解決できない」と思っていたと回答している。相談する際の不安として他にも「自分のことを知られなくなかった（15.9%）」、「何を聞かれるか不安に思った（18.3%）」などが挙げられており、生きづらさを抱える若者が専門機関を利用する際の心理的なハードルの高さも示唆された（問29）。

図 2-9 2 専門機関に相談するときの迷いや不安の理由（複数回答）



各種専門機関における支援者からのヒアリングによると、多くのケースにおいて若者の生きづらさ(引きこもり)の原因ははっきりとはしておらず、就労支援における生きづらさの原因・傾向は色々であることが報告されている。生きづらさの一因として、家族関係が有ると思われるケースも報告されている。

現状に対する評価

今回は、生きづらさを抱える若者にターゲットを絞った直接の量的および質的な調査ではないため、彼ら・彼女らの思いや状況は、若者全般を対象にした本調査と支援する施設などへのヒアリング調査を通してからしか推測することが出来ない。しかし、【現状】で述べたように支援する施設の利用率や認知度が低いことから、広報の充実などを通して生きづらさを抱える若者が相談できる専門機関があることをまず区民に周知することが必要だと思われる。

それと同時に、専門機関を利用した人の中でも何らかの不安を感じている人が大半であり、相談に来やすい雰囲気作りが重要である。

ヒアリング調査では、支援するスタッフの待遇の悪さや、支援者が頻繁に変わることで利用者との関係性が損なわれていることへの懸念の声も上がっていた(プレーパーク)。一方で支援者と利用者が、時間をかけて信頼関係を構築することで、支援を受ける利用者の状態が徐々に改善していく傾向があることも報告されている(メルクマールせたがや、せたがや若者サポートステーション)。以上より支援する側の意見を踏まえた組織づくりという視点も重要だと思われた。

また、支援者と利用者の信頼関係という点では、早期からの介入を実施できると利用者の状況の改善が早い傾向も報告されている（メルクマールせたがや、せたがや若者サポートステーション）。

区が取り組むべきこと

・生きづらさを抱える若者がアクセスしやすい「サテライトオフィス」を増設

若者の生きづらさの原因はしばしば明確でなく、また不安を抱えている状況であることを鑑みると、支援者が時間をかけて利用者との信頼関係を構築し、利用者が自ら生きづらさの原因を言語化し、向きあえるような環境づくりが必要である。

しかし、世田谷区は広いにもかかわらず、メルクマールせたがや、せたがや若者サポートステーションが一箇所しかなく、アクセスが十分ではない。今回の調査およびヒアリング調査でも、生きづらさを抱える若者は一定数いることが明らかになったので、5地域にそれぞれ各種専門機関のサテライトを設置し、身近な存在として相談に来やすい、相談しやすい環境づくりを整えることが有効だと思われる。

また、サテライトオフィスを設置することは、区民および学校などの関連機関や団体に各種専門機関の存在を広く知ってもらう機会になる。連携を深めることで利用率や認知度も高まることが予想される。

：安心して利用でき、対人関係や社会生活に対する自信を取り戻せるような「居場所」の構築

現状

本調査では、ひきこもりがち 4 人な人たちは 1132 人中 20 人にあたり約 1.77% という結果であった（問 23）。

4 ここでいう「ひきこもりがち」な人とは、外出の頻度を尋ねた設問（問 23）において「自室からほとんど出ない」「自室からは出るが、家からは出ない」「ふだんは家にいるが、近所のコンビニなどには出かける」「ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事するときだけ外出する」のいずれかに回答された方から、その状態となった期間が 6 ヶ月未満の方や、専業主婦や妊婦、在宅勤務等「ひきこもり」と明らかに異なる回答を除いた人をいう。

平成 19 年度の東京都の調査 5 では、無作為抽出された都内の若者（15 歳～34 歳）3,000 人を対象とし、有効回答の 0.72% がひきこもりと判断され、東京都のひきこもりの状態にある若者を 2.5 万人と推計している。

5 平成 19 年度若年者自立支援調査研究報告書（東京都青少年・治安対策本部）

本調査は、すでに専門機関を利用している人も対象としているため、数値が高くなった可能性もあるが、そもそもひきこもりの人は、このようなアンケートには答えづらいことを加味すると、現実には、東京都の数値よりも深刻であるかもしれない。

背景として考えられるのは、図 2-72 にあるように、困っていることや悩んでいることが「ある」と答えた人が、「自分の精神状態は健康ではないと思う」の 82.3% に当たることである。「ある」と答えた人は、悩むこと自体をふつうのことではなく、悪いことととらえている可能性がある。若者が内側にこもって、悩んでいる自分を閉じ、ひきこもりがちになっている。

図 2-72 困っていることや悩んでいることの有無（単一回答） / 自身の精神状態別

	困っていることや悩んでいることがある	以前はあった	困っていることや悩んでいることがない	無回答	(%)
TOTAL (n=1132)	54.0		11.7	32.0	2.4
自分の精神状態は健康だと思う (n=903)	46.8		13.7	37.1	2.3
自分の精神状態は健康ではないと思う (n=226)	82.3			3.5 11.9	2.2

一方で、「自分には自分らしさというものがあると思う」という設問については、「すごくそう思う」「まあそう思う」を合わせると、内閣府の調査よりも世田谷区の方が 11.2% 高い。「自分には自分らしさがあると思う」という記述は、自分が自分としてきちんと「悩める」ことであり、そのことが若者の成長を促すものであるが、若者が「悩む」ことを悪いことととらえているとすると、支援機関に行ったり、誰かに相談することを躊躇する可能性がある。あえて「相談」という形をとらない「居場所」が必要であることが示唆される（図 2-73）。

メルクマールせたがやのヒアリングによれば、多くのひきこもりの人は、何が原因でそうな

ったのかも本人はわからず、いわば悩みを言語化したり表明できずにひきこもりがちになる場合が多い。したがって、専門的に彼らの悩みを引き出し、自ら良い意味で悩めるようにすることができる「相談」と相補的に支援する「居場所」が必要となる。

心の健康は、病の治療のみでは回復、自立へと向かうのは難しい。世田谷区にはさまざまな支援機関があるが、まだまだ認知されていない。専門機関の利用状況によれば、心の悩みに対応する病院・診療所が20.0%と多いほか、せたがや若者サポートステーションや、発達障害者支援機関、保健所・保健センター、民間施設について利用したことがあるとの回答があったが、当てはまるものがないとしたひきこもりがちな人は70.0%に上っている。地域の連携、各機関の連携とつながりが課題である。(図2-71)

図2-71

専門機関の利用状況(複数回答) / 外出の頻度別

	nc	メルクマールせたがや	ごとかフェなどの就労支援機関	ワイクサポートせたがや・三茶おし	せたがや若者サポートステーション	げんき(発達障害者支援機関)	たー)など発達障害者支援機関	自立支援機関)	ぶらっとホーム世田谷(生活困窮者)	世田谷にじいろひろば電話相談	セクシャル・マイノリティのための	ほっとスクール(適応指導教室)	教育相談室	児童相談所	保健福祉センター子ども家庭支援センター	保健福祉センター健康づくり課	保健福祉センター保健福祉課	保健福祉センター保健福祉課	せたがやホッと子どもサポート(子どもの人権擁護機関)	保健所・保健センター	所(心の悩みに対応する)病院・診療	民間施設	上記以外の心理相談・カウンセリン	グなどをずる民間施設	あてはまるものはない	無回答
TOTAL	1132	0.4	1.9	0.6	1.1	0.3	0.1	0.5	1.1	1.3	0.9	2.2	1.8	0.4	3.2	3.7	0.4	0.7	87.7	1.1						
ひきこもりがち	20	0.0	0.0	5.0	5.0	0.0	0.0	5.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.0	20.0	5.0	5.0	70.0	0.0						
それ以外	1112	0.4	1.9	0.5	1.0	0.3	0.1	0.4	1.2	1.3	0.9	2.2	1.8	0.4	3.1	3.4	0.3	0.6	88.0	1.2						

居場所に関して、クロス集計をとったところ、「自分の精神状態が健康ではない」と思う人たちの、自己肯定感や自己有用感が低かった。「自分自身が好き」とか「ほかの人から必要とされていると思う」ことが少ない状態の人であり、自分を受け入れてくれる場所や、心を許せる仲間と会える場所がないと感じている。

また、困っていることや悩んでいることがある人は、居場所が「ない」とする割合が高く、居場所を欲しいと思っている(図2-74)。しかし、欲しい居場所の項目についてはほとんど差がないことから、欲しい居場所の具体的なイメージは見えてこなかった。

玉川台児童館のヒアリングからも、若者が自分たちの居場所を欲しがっていることは明らかだ。最終的には「居場所」と「仲間」と「意見が言えるネットワーク」の3つが欲しいという話にまとまったとの報告がある。こうした背景に『学校では集団から外れないように気を使って頑張っている。そこから外れるといじめやインターネットでたたかれるのではないかという恐怖心を持っている子どもたちが多い』(粕谷児童館)ということもありそうだ。

求めている「居場所」について言葉にしてくれたのが、プレーパークのヒアリングだ。『仮面をかぶらずにいられるし、演じなくてよい場所だからよい』というもの。若者の感覚がよく伝わってくる。

また、就労を支援する、せたがや若者サポートステーションのヒアリングでは、『その人の自立にとって最も効果があったのは仕事についての話ではなく、型にはまらない自由な他愛のない雑談会であった』という話もあった。

以下のコメントにあるような最近の子どもたちの変化にも着目する必要がある。

『勝手に遊ぶより丁寧に許可をとってくる子が増えてきた』『子どもたちが自ら何かを考えてやることが少ないかもしれない』（プレーパーク）『学校の友だちとは話題を合わさなければいけない、ついて行かないとクラスでハブられる』（粕谷児童館）『子どもの内側から出る声を、子ども自身がつぶしてしまう』『いざ自分のことを人に言うのは拒む。何を言われるのかわからないから』（喜多見児童館）『評価を気にする、失敗を怖がる。何かに縛られている感じがある』（池尻児童館）

子どもたちの変化に柔軟に対応し、子どもたちが主体的に活動できる場、意見を言える場を大人がサポートも含めて作っていく必要があるだろう。

ヒアリングから各居場所を利用している年代を比較すると、児童館、青少年交流センターなどの居場所は、小中学生が多く、高校生以上は少なく、幼少期からのつながりがある。プレーパーク羽根木は、幼児と保護者が多く、小中学生が減っている。プレーワーカーの入れ替わりが問題になっている。野毛青少年交流センターは、中高生、大学生が多い。メルクマールせたがやは20代が5割、10代と30代が25%ずつ。たからばこは中学生が主。せたがや若者サポートステーションは、20代、30代が主。各施設により主となっている年代が違い、世田谷区全体で見れば、多くのさまざまな背景を持つ若者たちの居場所ができていることは評価できる。

ヒアリングから見えてきているのは、生きづらさを抱えた高校生世代～20代の若者たちが少なからずそうした場所に来ているということ。またそれぞれの居場所では職員が親身になって対応していた。ただ、中学生一人での来所が難しいこと、つながることの難しい高校生をメルクマール等につなぎたいが伝え方が難しいことなど、実際上、難しいケースもある。

現状に対する評価

生きづらさを抱えた若者たちは居場所が「ない」と感じ「ほしい」と思っている。ひきこもりがちな若者の、専門機関の認知度は、「あてはまるものがない」と答えた35.0%を差し引くと65.0%がなんらかの機関を認知していることになる。この数字は評価できるのではないか（図2-67）

しかし、実際に利用しているかということ、どこにも行っていないとしたひきこもりがちな人は70.0%に上っている（図2-71）。地域の多様な居場所づくり、各機関の連携とつながりが

課題である。

ひきこもりがちな人が利用できる専門機関は、若者にほとんど知られていない。若者に届く広報や、地域の方々へのひきこもりや現在の若者に対する理解を促すことも必要である。

また、経堂青少年地区委員会のヒアリングから『子どもは地域の宝だったのが、最近は母親だけの宝になっている、それにより子どもが生きづらくなっている』という意見が聞かれた。生きづらい若者が行きやすい居場所とはどういうものかという視点も重要だ。

ヒアリングより見えてきたキーワードは、以下の6つ。

- ア) 幼少期からつながっていること
- イ) 連携協働の重要性を現場の職員が分かっていること
- ウ) 子どもたちのクールダウンと地域の人との交流の場であること
- エ) 自分にとって大切だと思えるような人との継続した出会いがあること
- オ) 必要な人には個別対応ができること
- カ) 学年で区切られない多世代の交流

ヒアリングによれば、メルクマールせたがやには安心・安全な若者のための「居場所」があり、関係機関から生きづらさを抱えた若者が多く紹介されてきている。「相談」と「居場所」の両側面を相補的に組み合わせた支援は、生きづらい若者が立ち寄りやすい場所になっていく可能性が大いにあると思われる。

区が取り組むべきこと

・「相談」と「居場所」の側面を組み合わせた支援の実現

多くのひきこもりの人は、何が原因でそうなったのか本人がわかっていない。

したがって、専門的に彼らの悩みを引き出し、自ら良い意味で悩めるようにすることができる「相談」と相補的に支援する「居場所」が必要。

・医療・福祉との連携の強化と制度づくり

比較的良好に利用されている病院や診療所、保健所・保健センター、健康づくり課との連携。実務者会議や、日常的に行ったり来たりできる顔も見える連携。

距離的・物理的にも連携を深めやすいサテライトオフィスの設置。

・相談者にとって大切な、重要な人との出会いを切らない、継続した職員の配置。

・現場（学校を含む）への連携・協働の周知

比較的良好に利用さ 居場所に来ている気になる若者や、居場所からこぼれてしまいそうな若者に対して、適切な支援や連携・つなぎをするための顔の見える関係づくりの推進。

・地域住民の意識改革

：生きづらさ・困難を抱えた若者支援に向けた関係機関との連携による重層的な支援

現状

世田谷若者総合支援センター(メルクマールせたがや、せたがや若者サポートステーション)を中心に、区内関係機関、就労支援機関、教育機関等と分野を超える横断的な支援を展開している。ヒアリング調査によるとメルクマールせたがやの利用者の44%は関係機関からの紹介であることから、重層的な連携が進んでいることがわかる(メルクマールせたがや平成29年度事業報告書)。

また、子ども・若者育成支援推進法に基づく子ども・若者支援協議会を設置し、3つの専門部会(不登校・ひきこもり部会、ひきこもり・就労支援部会、思春期青年期精神保健部会)による実務者会議を定期的開催している。

メルクマールせたがや、せたがや若者サポートステーション両機関の間をつなぐ共催プログラム「メルサポ」の実施により、狭間で停滞しない、地続きとなる支援も行っている。

しかしながら、専門機関の認知度は前述のとおり決して高いとはいえない。

ひきこもりがちな若者への認知度は、比較的高いところで、心の悩みに対応する病院・診療所(35.0%)、心理相談・カウンセリングなどをする民間施設(35.0%)、ワークサポートせたがや・三茶おしごとカフェなどの就労支援機関(30.0%)となっているが、生きづらさを抱えた若者に向けた専門機関の認知度は1割というのが現状である。メルクマールせたがや(10.0%)、せたがや若者サポートステーション(10.0%)(図2-67)。

広報に関して興味深い反省コメントも現場のヒアリングから得られた。

『「どんな方でも働くことに悩んでいたら来てください」という告知をしたところ新規登録者は減ってしまい、対象者層も定まらなくなった』というのは、せたがやサポートステーション。『「自分はサポートステーションに行くほど落ちぶれていない」という感じに捉えた方は多かったのではないか』とのこと。

重層的な支援をして行く際、ひきこもりの状況にある若者の自尊心を傷つけない配慮も必要だ。

図2-67 専門機関の認知度(複数回答)/外出の頻度別

	n=	メルクマールせたがや	ごとかフェなどの就労支援機関	ワークサポートせたがや・三茶おし	せたがや若者サポートステーション	げんき(発達障害相談・療育センター)など発達障害者支援機関	ふらっとホーム世田谷(生活困窮者自立支援機関)	セクシャル・マイノリティのための世田谷にじろひろは電話相談	ほっとスクール(通居指導教室)	教育相談室	児童相談所	保健福祉センター子ども家庭支援センター	保健福祉センター健康づくり課	保健福祉センター保健福祉課	せたがやホッと子どもサポート(子ども人権擁護機関)	保健所・保健センター	所(心の悩みに対応する)病院・診療	民間施設	上記以外の心理相談・カウンセリングなどをとする民間施設	あてはまるものはない	無回答
TOTAL	1132	5.3	12.0	6.1	6.4	6.4	3.3	9.7	20.6	37.8	19.8	22.4	20.5	16.7	40.5	30.1	12.6	12.3	40.4	1.1	
ひきこもりがち	20	10.0	30.0	10.0	15.0	0.0	0.0	5.0	5.0	20.0	5.0	15.0	15.0	10.0	35.0	35.0	15.0	15.0	35.0	0.0	
それ以外	1112	5.2	11.7	6.0	6.2	6.6	3.3	9.8	20.9	38.1	20.1	22.6	20.6	16.8	40.6	30.0	12.6	12.2	40.5	1.2	

専門機関を利用したことがある若者の満足度は約8割(図2-86)

利用者の変化として『引きこもる理由を自分で言葉にできるようになると、気持ちに整理ができてくる』『居場所で表情がよくなる、他人に興味を持って話せるようになる』(メルクマールせたがや)などが挙げられている。

図2-86 支援への満足度<問32>

(%)

	満足している	満足していない	無回答
TOTAL(n=11)	81.8	9.1	9.1

現状に対する評価

関係機関との連携による重層的な支援体制は整備されてきており、現状は約400家庭(平成30年12月現在)とつながっているが、まだ支援につながない潜在的な支援対象者が10倍程度想定されることから、掘り起こしに向けて拠点の増加や、各機関・制度との狭間で滞留する若者を適切に支援機関につなぐ流れを強化していく必要がある。

区が取り組むべきこと

- ・ 各総合支所における訪問相談を含む拠点の増加
- ・ 各機関とのつながりを円滑に促進する共催プログラムの増加

社会的自立に向けた支援

現状

せたがや若者サポートステーションでは、本人の状況に応じた段階的な支援を丁寧に行っている。簡易な体験や共同作業から入り、少しずつ慣らして自信を回復していく。次に向けての意欲が高まってから、地域の祭りや行事でのボランティア、職場でのジョブトレーニングへと移行している。

本調査では、自分の将来のイメージについて聞いている。

「自分の精神状態は健康ではないと思う」人ほど、「将来のイメージを持っていない」割合が高いことがわかった（図 2-90）。

また、「自分の将来のイメージを持っていない」人ほど、「自分の生きがい、やりがいが見つからない」と回答する傾向が顕著であった（図 2-89）。

専門機関では、こうした働くことへの不安が強い若者のために、受け入れ先の企業に来てもらい、若手社員との雑談会からジョブトレーニングへつながるような工夫を行っている。

図 2-90 自分の将来について明るいイメージをもつ割合（単一回答） / 自身の精神状態別

	持っている	どちらかという 持っている	どちらかという 持っていない	持っていない	無回答	(%)
TOTAL(n=1132)	21.6	39.0		24.6	13.5	1.1
自分の精神状態は健康 だと思う(n=903)	23.9	43.4		23.3	8.4	1.0
自分の精神状態は健康 ではないと思う(n=226)	12.8	22.1	30.5	33.6		0.9

図 2-89 自分の将来についてのイメージ /

自分の将来についてのイメージ 生きがい、やりがいを見つけている

< 問 22、問 22-1 >

	持っている	どちらかという 持っている	どちらかという 持っていない	持っていない	無回答	(%)	
TOTAL(n=1132)	21.6	39.0		24.6	13.5	1.1	
あてはまる(n=399)	47.6		41.1		6.3	3.8	1.3
どちらかというあてはまる (n=480)	10.2	51.5		27.9	9.8	0.6	
どちらかというあてはま らない(n=183)	11.6	13.7	55.7		29.0	0.0	
あてはまらない(n=59)	17.6	17.6	27.1	64.4		0.0	
無回答(n=11)	18.2	18.2	18.2	0.0	45.5		

現状に対する評価

関係機関や地域の様々な機関と連携して若者の体験の場を創出し、社会的自立に向けた支援を展開していくことは今後も必要だと思われる。社会や働くことへの不安感の強い若者が、社会とのつながりを持ち、職場体験できるプログラムの工夫が求められており、若者への理解のある企業（職場）の開拓や関係づくりが課題と言える。

区が取り組むべきこと

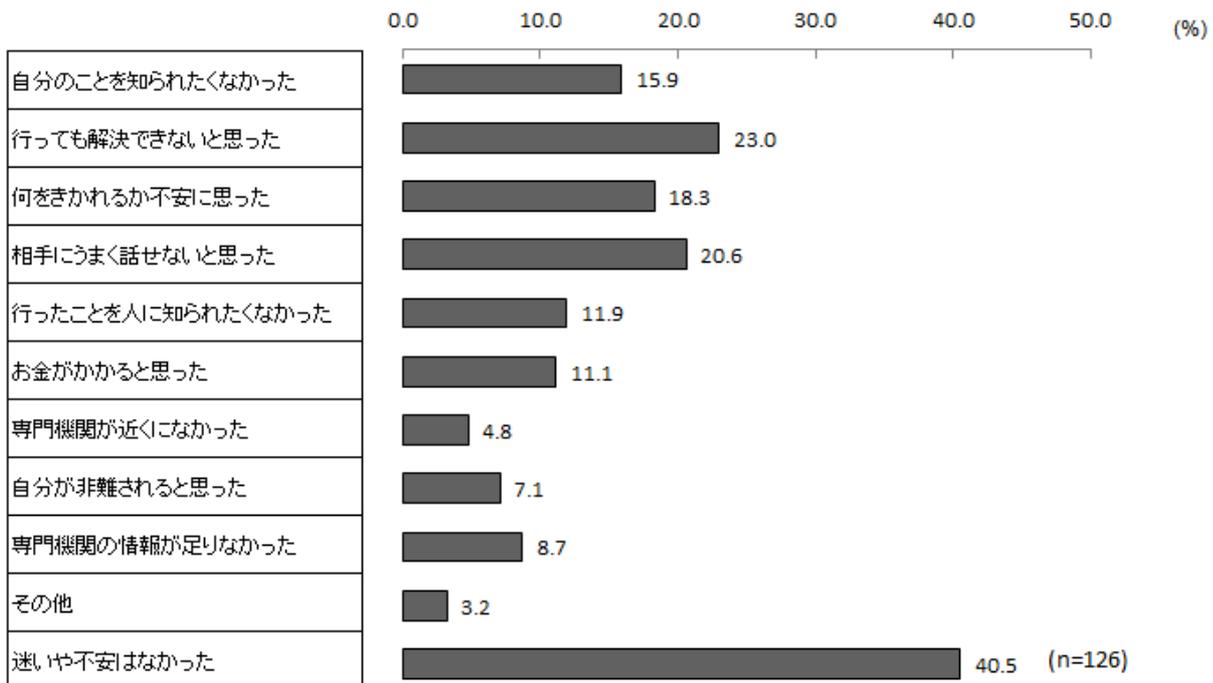
- ・ 若者への理解のある職場体験先の新規開拓・関係づくりの強化

：早期支援の重要性

現状

相談機関に相談しようと思っても、迷いや不安があると躊躇してしまう場合がある。迷いや不安の中身として高かったのが、「行っても解決できないと思った」(23.0%)、「相手にうまく話せないと思った」(20.6%)、「何を聞かれるのか不安に思った」(18.3%)が挙げられた。(図 2-92)

図 2-92 専門機関に相談するときの迷いや不安の理由(複数回答)



メルクマールせたがやのヒアリングによれば、ひきこもりになった理由、原因は明確ではなく、「なぜかわからないが、動けなくなった」というケースが多い。

なぜ動けなくなったか自覚できない人も多く存在している。問題は複合的であり、とくに家族関係が生きづらさに関係しているケースは多い。そのことは、より自覚的であることを難しくさせているようだ。誰でも、自分の家族を悪く言いたくないし、悪いと思いたくない。他を知らないのだから、それが当たり前でふつうのことだと思ってしまう。したがって、何を相談すればよいのかわからないし、こうなったのは自分の責任であり、人を頼ることはよくないことだと考えている若者が多いようだ。「何を聞かれるのか不安に思った」という気持ちの中には、相手に責められることや、なぜ働かないのか、なぜ学校に行けなくなったのか、など、本人が一番聞いてほしくないことを聞かれる可能性が高いと感じているのではないか。その人の思いを、丁寧に時間をかけて聴いていくことが必要だ。

相談員との信頼関係を作る継続した営みの中で、やっといじめられた経験や虐待について話ることができるようになる。このことは初回面接の重要性と、職員の質の向上の必要性を示唆している。

機関連携の場合も、ただ単に相談機関を紹介するだけでは、実利用に結びつかないことが多い。電話をすることが難しかったり、勧めてくれた人への遠慮があるからだ。職員による丁寧な対応が必要となる。

また、メルクマールセタがやのヒアリングによると、利用者の変化は、表情がよくなる、話さなかった人が話すようになる、自ら目を背けたいような苦しい体験や葛藤を言葉にできるようになる、などがあるが、対外的な変化までには時間を要するということがあった。

早期支援について、メルクマールセタがやでは重点事業と位置付けている。本人の年齢が若いほど支援の効果が現れやすく、ひきこもり期間が3年未満だと1年の間に居場所につながる、他の関係機関の利用が始まる、就学・アルバイトにつく、という動きもあるからだ。それに比べ3年以上のひきこもり長期者は動き出すのに時間がかかる傾向にある。

メルクマールセタがや調べによると、ひきこもり期間「7年以上」と「1年～3年」が最も多く24%。ひきこもり期間3年以上は、合わせると50%を占める。ここに支援の難しさがある。また、平成29年度相談登録ケースのうち、71%に不登校経験が認められた（メルクマールセタがや平成29年度事業報告書）。

メルクマールセタがやのヒアリングによれば、『15歳と18歳それぞれの卒業時の切れ目をつなぐこと、学校在学中から、担任の先生やスクールソーシャルワーカー、ユースソーシャルワーカー、スクールカウンセラーなどと協働して、顔が見える支援をすることを進めていく』としている。もし学校に行けなくなってもつなぎ場所がある、行き場所があることを知らせていくことにより、高校中退などを防ぐこともできるのではないかと。

また、早期支援においては最初の壁が厚い。メルクマールセタがやは世田谷区全域が支援対象なので、初期対応に必要な訪問の負担感や長時間の移動を要することが課題となっている。もっと中心拠点が増えたらよい。

同時に、代田児童館のヒアリングでは、『社会福祉の部分と児童館はこれまでそれほど近しくなくてもよかったが、これからはそうも言っていない』という声も聞かれ、早期支援の中に児童館のような日常的な施設と福祉関係との連携が必要であることが示唆された。

また、親のどちらかに精神疾患があったり、鬱を抱えているケースも多いことが報告されている（メルクマールセタがや）。不登校の原因が、家族関係がおかしくなっているという子どもからのSOSで判明したり、そのほかの身体症状、自傷行為の根っこに「家族関係の課題」があるという報告がある。早期支援においては、保護者との関係づくり、信頼関係の構築、心理学の知見によるアプローチ等が欠かせない。

せたがや若者サポートステーションでは、高校を訪問して早期支援を行っている。高校と連携しながら、高校中退後、あるいは進路未決定のまま卒業し、ひきこもりや無業状態に陥ることを未然に防止するようにしている。ただ世田谷区は地理的に広く、多くの高校を定期的に訪問することが難しい。また、世田谷若者総合支援センターのある世田谷ものづくり学校は目黒区や渋谷区の境目に位置し、区内西側並びに京王線、小田急線沿いに住む若者にとってはアクセスしづらく、利用につながらないことがある。地理的に遠い地域で出張相談会を実施していたが、最近では月 1 回の見学会を開催し、心理的な気軽さから参加しやすく、利用につながっているという。

現状に対する評価

早期支援をするためには、支援機関の広報・周知が必要であるが、まだまだ周知されていない。加えて『新しい中高生の取り込みは難しい』（粕谷児童館）『どこの中高生支援館も中高生自身が児童館を近しく思っていない中では難しい。児童館という名称から行ってはいけないと思っている中高生も多いはず』（玉川台児童館）という意見にあるように早期支援のボトルネックも見えてきた。

可能性を感じる意見、事例もある。

『中学生が延長時間を目当てにたくさん来てくれている』（玉川台児童館）『学校にあまり行かず児童館は毎日のように来ていた子のケースで、職員が児童館での様子を中学校に伝え、入試合格後は、高校と児童館と中学校で情報共有してネットワークづくりをしながら見てきた』（喜多見児童館）『小 6 の時いじめられていて、児童館がなかったら学校も休んでいたかもしれない』（喜多見児童館）など。児童館が早期支援に役立っていると評価できる。

一方で、メルクマールせたがやの報告書にあるように、多く存在するひきこもり 7 年以上の人でもメルクマールせたがやに相談に来ていることは評価できるが、もっと早くにアプローチできていたらと思わずにはいられない。まだ手が届いていないと見るべきであろう。

在学中に信頼関係を築き、高校卒業後にせたがや若者サポートステーションを利用する流れもあるが、多くの利用を促進するために、世田谷若者総合支援センターから遠い地域での拠点が必要である。生きづらさを抱えるきっかけが幼少期にあることもあり、小学校から切れ目のない支援体制を構築する必要がある。

区が取り組むべきこと

・中学校、高校を卒業するタイミングでの早期のつなぎ支援の充実

顕在化しないひきこもりの長期化を防ぐために中学・高校在学中から支援ができる体制を作る。

・傾聴力の技術など早期支援に必要な職員の育成・研修実施

早期支援に必要なのは、まずその人の話を丁寧に聴いていくこと。職員の研修と聴く技術の向上を目指す。

・福祉、医療との連携強化と職員のアセスメント力の向上

・地域住民の意識改革

・不安定なひきこもり予備軍の保護者に対する心理教育

・各総合支所に世田谷若者総合支援センターのサテライトを設置

コラム

若者の心の支え

協定大学学生(昭和女子大学) 加藤 綾希子

最初は世田谷区との関わりは大学があるというだけで、世田谷区の政策の一つも知らない状態でした。そこから二年の歳月をかけて、この協議会にかかわらせて頂きましたが、ここまで若者に対して熱心に考えてくれる大人がいたのかと驚いたというのが本音です。私自身、若者という立場なので良く分かるのですが、多くの若者は、自分にどこまで周りの人間が興味を持っているのか知りません。子どもや若者に対して大人たちが色々な取り組みを行っているのは知っているけれど、テレビやネットの中に流れてくる情報としてであって、家と学校の周りが自分の世界の全てである若者からしたら遠い世界の話です。なので、いくらSNSが発達していても、実際に行動に移すきっかけをつくるのは自分の身近にいる大人であることは変わらないと思います。

同行させて頂いた児童館のヒアリングでは、小さな頃に親に勧められて来た子どもが成長してからも利用しているケースが多く見られました。実際、自分から地域の情報を得たいと思っている人はSNSを利用して情報を得ますが、そうではない人は自分の周りの人からの口コミが多いのかもしれない。そうすると、自分の最も近くにいる大人、親に対してのアプローチが非常に重要になってくるのではないかと思います。ねつせた！という若者向けの情報発信ツールのように、親世代に対して子どもを支援する施設や団体の存在をどのように発信していくのか。そして、子どもにとって家や学校でもない居場所があるということが、心にどのような影響をもたらすのかというのを知ってもらう必要があるのではと思いました。

コラム

若者の生きづらさの背景にあるもの？

区民委員 加藤 承彦

区民委員として平成29年7月から平均月一回のペースで子ども・青少年協議会に参加して、あっという間に1年半が過ぎました。毎回、濃い議論をするなかで私が学んだことを要約してみたいと思います。

1. 若者の生きづらさの背景

区民委員に応募するにあたって2年前に書いた「いま求められる若者支援施策とは？」に対する私の当時の考えを振り返ってみて、若者が「職業人」としてだけでなく「地域人」としても活躍できる支援が重要であるという考えは変わらないのですが、聞き取り調査などを通じて彼ら・彼女らが想像以上に生きづらさをかかえていることに気がつかされました。例えば、ある若者は、「学校では求められている（必ずしも本当の自分ではない）役割を演じてる」と呟いていました。もう一人の若者は、「同じ年齢の子でも、全く話が合わなくてズレを感じる」と言っていました。また、引きこもり支援に携わっている方たちからは、なぜ引きこもりに陥ってしまったのか若者自身もわからないケースが多いと伺いました。アンケート調査でも、「自分自身のことが好きだと思ふ」に、3人に1人が「そう思わない」と回答しています。なぜ、一定数の若者たちが生きづらさを抱えているのか更に調査が必要ですが、私は、一つの要因として、社会全体として規範意識（こうあるべき）が強すぎるのが根源にあるのではと感じています。言い換えると、社会（家族・学校・会社・友人など周りの人たち）の期待や基準と本当の自分が乖離している場合に、自分の気持ちを抑圧したり、人知れず傷ついていることの積み重ねが、現代に生きる若者たちの生きづらさにつながるのではないかなと推測しています。残念ながら、今、私の中で即効性が期待できる具体的な解決策はありませんが、他の自治体に先駆けて手探りで若者支援を実施している世田谷区の取り組みをこれからも応援していきたいと思っています。

2. 区民としての「参加と協働」

これまで、正直、行政を身近に感じたことはありませんでしたが、この協議会に参加させてもらって、行政|私ではなくて、行政⇄私ということに気がきました。この協議会では、様々な知識や経験、情熱を持った方たちが、それぞれの本音を言いながら真剣に議論をしており、そのなかで徐々に方向性を見出していくというプロセスを経験しました。もちろん、全て自分の思っている方向性に話が進むということはありませんでしたが、それも含めて協働なのかなと私は思っています。若者支援において、子ども・若者部の方たちやメルクマールや青少年交流センター、プレーパークやねつせた！など世田谷区と連携している機関や団体の方たちの日々の努力が世田谷区の若者を支え、また支えられた若者が地域社会に関与・貢献することが行政を支えることになり、長期的に見れば、若者支援は、元気な子育て世代、中年世代、高齢者世代を育成することで世田谷区の人々の日々の生活の質の底上げにつながると信じています。

若者の社会に向けた文化・情報の発信への支援

：若者の主体的な取り組みを支援する仕組みの構築

現状

若者自身による情報発信の取り組みとして、平成 29 年度に新たに始動した『情熱せたがや、始めました。』（略して、ねつせた！）は、Twitter など SNS を活用し、若者らしい視点で集めた世田谷の情報を発信している。

Twitter の月間閲覧数は、95,292 人（平成 30 年 1 2 月時点） フォロワー数は 1072 人（H31 年 1 月時点）と増加中。若者メンバーによる記事の投稿数は年間 569 本（平成 29 年度）にものぼり、精力的に活動している。

若者により運営されている「ねつせた！」のメンバーは現在 20 人程度。当初は大学生が中心であったが、高校生も加わるようになってきている。

ヒアリングからは、参加するメンバーの「納得感」が重視されていることがわかった。前例の少ない試みであるため、進め方については関わるメンバーによる話し合いが丁寧に行われており、「他者の意見を否定しない」という独自の決まりも採用されていた。

情報発信メディアとしては発展途上であるが、参加している若者メンバーにとって「ねつせた！」が居場所の一つとなっていることは確認できた。

また若者にとって SNS とは何か？という質問をメンバーに投げかけたところ、『SNS は情報源であり、コミュニティ。多数の人とつながることもできるけれど、誰でもない自分にもなれる場所。逃げ場所にもなる。』という回答が返ってきた。

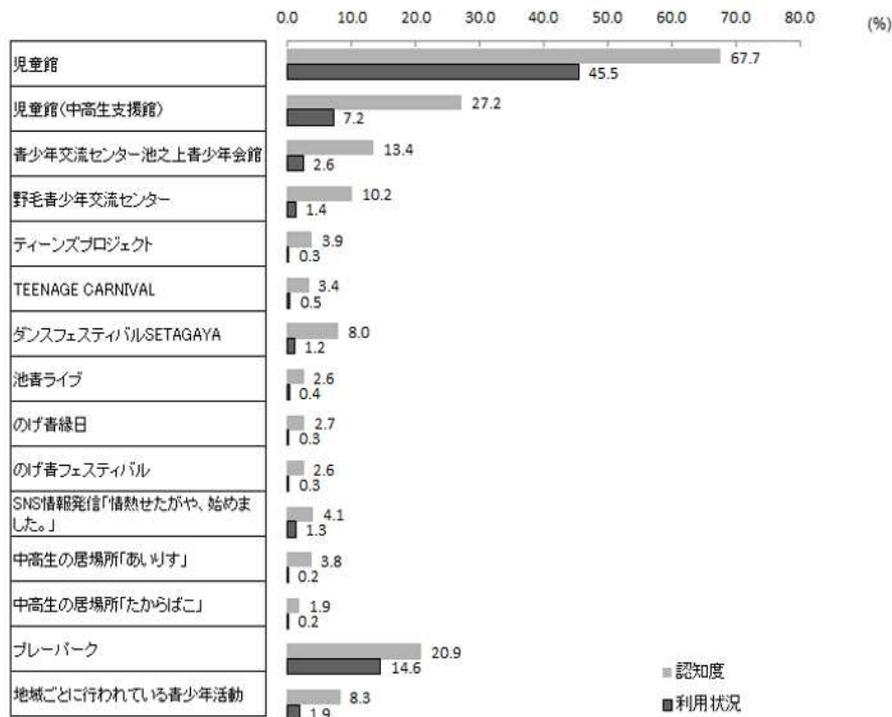
SNS もバーチャルな「居場所」。「ねつせた！」を発信する若者、そこにつながる若者両方のためにこの先もこのメディアを育てていきたいと感じる。

また、あらためて若者に向けた世田谷区の施策がどれだけ「認知されているか」をみると、世田谷区が行う取り組みへの認知度は「児童館」が 67.7%と最も高く、次いで「児童館（中高生支援館）」27.2%、「プレーパーク」20.9%となっている。

利用状況については、「児童館」が 45.5%と最も高く、次いで「プレーパーク」が 14.6%となっている。また、「池之上青少年会館」「野毛青少年交流センター」「地域ごとに行なわれている青少年活動」の認知度は 8.3%～13.4%であった。

しかし、他の事業の認知度は 10%未満、利用状況は 3%未満である。「あてはまるものはない」という回答は認知度の間で 28.7%、利用状況の問で 51.6%という結果となった（図 2-93）。

図 2-93 世田谷区が行う取組みへの認知度・利用状況（複数回答）



認知度・利用状況で高かった児童館(中学生支援館)の来場者は、中学生が多く、職員や大学生、地域の方々との関係等が一番動機付けになっている子どもは非常に少ないとヒアリング調査の報告があった。小学生からの積み重ねの上で中高生につながり、大人になってからボランティアとして帰ってくる人もいるようだ。

学生が運営する団体（あいりす、たからばこ、ねつせた！）は、若者が運営するという斜めの関係性がある。専門家にはないアプローチができるというメリットがある一方で、学生への負担が大きいようだ。

商店街はお祭りなどを通じ若者との交流が比較的盛んである。今回ヒアリング調査を実施した商店街は若者との交流がとても盛んであり、それが商店街の活性化につながっていて、若者の力も発揮されている。用賀商店街は『これからは物を売るのが商店街ではなく、夢と時間を売る場所にしていきたい』という位置づけとしている。また下高井戸商店街は、日大文理学部のボランティアが積極的で、更にイベントには松原高校等、近隣高校も参加している。

青少年地区委員会のヒアリング調査からは、中学生との交流に積極的に取り組んでいるが、近年は子どもたちや若者の時間的なゆとりがなくなっているようで、以前のように長期的に企画から運営に携わる中学生は減少してきているようだ。その中で、子どもたちを信じる気持ちを大事にして活動している様子が見えてくる。

現状に対する評価

世田谷区では「若者が力を発揮する地域づくり」を政策の一つとして、若者支援施策を推進してきた。子ども・若者部に若者支援担当課を設置して5年以上が経過してきたが、全体を通して認知度が低いという実態がみえた。

児童館には、職員の異動により繋がりが切れてしまったり、親からの働きかけがないと繋がりにくいという課題もある。また、児童館の若者への情報発信も不足しているようだ。

ヒアリング調査から、たからばこやあいりすは、閉鎖的な空間で活動しているため、『中高生を集めてなにをやっているのか』と怪しまれることもあるようだ。

その一方、支援してくれる大人の理解があるという野毛青少年交流センターでは、対象の幅が広く、多世代のニーズに合わせることができているが、一人ひとりに深掘できないという課題がある。

児童館や野毛青少年交流センターは乳幼児の親も利用しており、親自身も若者世代であり、若い親と若者との繋がりが出来はじめていることには注目したい。

児童館をはじめ、地域での多くの事業では、地域の大人やボランティア等、多様な人がいて、子どもと若者、大人との間に斜めの関係ができている。そのような居場所や事業での『若者の社会に向けた文化・情報の発信』の重要性を認識したい。

区が取り組むべきこと

・若者支援施策の周知

若者世代になってから支援事業を周知するのでは遅い。子どもや若者が利用する施設（児童館や青少年交流センター等）や若者と関わる組織（商店街や町会・自治会、青少年地区委員会等）は連携しながら、保護者や地域の大人への若者支援施策の周知を広げる。

・若者と地域の大人、行政職員が協働しながら若者の文化・情報の発信を支援

若者の社会に向けた文化・情報の発信の支援のためには、若者と関わる部署だけではなく区の職員全体の認知度を上げ、まちづくりセンターや教育委員会、福祉部局などと横断的に繋がることも重要。「ねつせた!」「あいりす」「たからばこ」など、「学生による運営」や「斜めの関係」というコンセプトがどうであったのか事業の総括を丁寧に行う必要がある。引き続き支援を行うことを前提に、学生スタッフの意見を取り入れ事業の軌道修正を実施する。

・「情熱せたがや、始めました。」(略)「ねつせた!」の更なる充実

関係機関が横断的に繋がることにより理解ある連携先が拡がり、学生が発信する情報ソースに多様性が生まれるだけでなく、学生スタッフの活動への後方支援につながると思われる。

コラム

応援してくれる大人の存在

『情熱せたがや、始めました。』運営メンバー 毛利 光咲

私がこの協議会に関わったのは、ねつせた！がきっかけです。前期のテーマであった若者の参加による「若者支援施策の効果的な提供について」においてモデル事業として若者による SNS での情報発信としてねつせた！が生まれました。私は、ねつせた！2期（2017年度3月）から現在まで関わってます。ねつせた！と真正面に向き合ってるからこそ、悩みも尽きません。前期の報告書を読んだ際、こんなにも温かい大人がいるんだ、見守られているんだと感じました。多くの大人たちが応援してくれて、私たちが活動しやすいねつせた！が成り立っていることを感じました。2016年度モデル事業で始めたねつせた！は紆余曲折しながらも前進し、Twitterのフォロワー1000人という大台の達成や、日々の取材、FM せたがやへの出演、youtubeの生中継、区内の他の所管とのコラボなど様々に活動しています。

ねつせた！に関わる前の私は、いつからか「大人」という存在から離れていました。それよりも同世代でいる方が楽しく、若者の世界観の中で生きていました。そうやって距離を置いてきたからこそ、「大人」に対するイメージが悪く、同様に関わりが薄いので「大人」からみる「若者」に対するイメージも悪くなっているような気がします。しかし一歩近づいてみれば、素敵な人たちに出会えました。こんなにも応援してくれる大人がいるんだ、住んでいる世田谷に素敵な人達がいるんだ、そのような人との出会いは私の幅を広げてくれました。本協議会の委員の皆さまだけでなく、ねつせた！の活動や取材を通して、優しく熱い想いのある大人たちが沢山いることに気付き、私の「大人」のイメージを変えました。そのような「大人」の存在が私自身を豊かにしてくれました。だからこそ、私は、若者が素敵だと思う大人になります。支えてもらった分を次の世代に渡せるようにしていきます。

また本協議会で、若者支援施策をはじめ、ねつせた！の知名度が低いことも分かりました。ねつせた！の活動を通して、地域と繋がることが自分自身の居場所にもなることや、はたまた誰かを救うこともできることを学びました。私はねつせた！の活動が、価値のあるものだと思っています。今後も、更に多くの人へ認知して頂けるように精進します。

この協議会で若者支援に携わる大人たちと関わり「生きづらさを抱える瞬間は誰にでも訪れる、一見元気な若者たちへの支援も必要である」これを共通認識として幅広い支援を手掛ける世田谷区の若者支援に対する想いを知れ、一区民として嬉しく感じました。また社会で活躍される大人たちに囲まれて、このような場所に私がいていいのか、メリットになってるのか、不安も尽きませんでした。それでも受け入れてくれる事務局はじめ本協議会の委員の皆さまの温かさに救われました。この環境を社会に出る前に経験できたことを誇りに思います。そして、若者枠として本協議会があることに感謝申し上げます。次年度の若者委員の皆さんもプレッシャーを感じることもあるかと思いますが、ありのままの意見を述べて頂きたいです。それが、若者のリアルな意見となります。陰ながら、応援しています。

コラム

子ども・若者が「地域で育まれる」ということ

世田谷区民生児童委員協議会主任児童委員部会部会長 明石 眞弓

今期の子ども・青少年協議会では、ヒアリングやアンケート調査を行いました。実際に若者と関わる人たちへのヒアリング調査を行う中で、子どもや若者が学校での閉塞感を感じたり、評価を気にしたり、失敗を怖がるなどの傾向が以前より増えていることがわかりました。また、大人社会でもPTA活動や町会活動等のつながりが大切にされなくなり、地域のコミュニティと社会とのつながりや関係性も薄れているという話も伺いました。

このような現状の中、若者たちに向けて、従来型の支援ではない、個別で多様な支援や「つながり」のための新たな仕組み作りが必要とされてきていると感じました。

近年は「子どもを育てにくい社会」と言われています。母親が子育ての大半に責任を取るべきという考え方は、母親にもプレッシャーを与え、母親はいつも周囲の人の目を気にしながら社会の規範の中で迷いながら子育てをしています。人類はそもそも共同養育で子育てをするように進化論上できていると言われてきています。子どもは、多様な人とのかかわりの中で、様々な価値観に触れながら自分でも選択をして失敗を繰り返しながら経験を積んでいくことが成長につながります。

しかし、核家族化が進み、閉鎖された家庭の中では母親の価値観が子どもの価値観として無意識に刷り込まれている場合があります。若者が思春期に「自分にとっての大切なもの」が何かを考えたときに、家庭以外の多様な価値観や規範に戸惑い、生きづらさを感じることもあるようです。

世田谷区には、児童館や青少年交流センターをはじめ若者を対象にした施設や組織等の第三の居場所があります。そこで若者は試行錯誤しながら、人の役に立つ体験や人に助けられる体験を通して、人とのかかわりの心地よさを感じながら「今まさに社会を生きる主体であり、おとなとともに社会を作るパートナー」として成長していくことができるでしょう。

しかし、まずは乳幼児期から子育て家庭が子どもと一緒に、地域の人とかかわることが大切だと思います。そして、地域の多様な人々の中で育まれた子ども・若者が大人になったときに、次の世代を応援する地域の一員となっている循環の仕組みづくりが喫緊の課題だと考えます。

第3章

提言

～若者施策において目指すべき姿～

1.提言

第2章において、若者が置かれている現状や若者の生の声、地域や事業者が行っている取組み等を分析し行った評価・検証を踏まえ、若者施策が目指す姿を「区民の参加と協働」により具体化していくためには、何が必要でありどんな仕掛けが考えられるかを7つの提言としてまとめた。

【提言1】 「世田谷区の若者にはみな「第三の居場所」がある」

若い時代、家や学校（あるいは職場）での人間関係が難しくなることは誰にも起こりうること。そんなとき、しがらみのない第三の居場所は退避場所でもあり、気持ちをリセットできる場所である。児童館、青少年交流センター、プレーパークはその役割を担っている。異年齢の若者を見守り自主性を重視する生態系のような「第三の居場所」は、若者が自分の有用性に気づく機会にもなっている。

この「第三の居場所」をすべての若者がもてるよう、小学校時代、あるいはそれ以前から「第三の居場所を作ろう！」の呼びかけをする。

具体案1

「小学校までに第三の居場所チェックイン！運動」

第三の居場所の重要性を学校の協力をいただきながら保護者に説明する。

その ①：家と学校との位置関係とそれに伴う近隣の児童館、青少年交流センター、プレーパークなど世田谷区内の若者支援施設の場所と機能をチェック。

その ②：小学校までに第三の場所を親子で利用し、顔見知りの人を1人は作っておく。

【提言2】「地域に「大人・若者のたまり場（情報や活動、交流の拠点）」

（＝地域コンソーシアム）がある」

小中学生時代には地域のお祭りなどには参加するが、それ以上の年齢になると地域との関係性の輪から離れてしまう。若者と地域の大人とが日常的に互いに行き来して意見交換と相互理解を深めることができる交流拠点（地域コンソーシアム）を創出すること。そのために以下のような取り組みがよいのではないかと考える。

具体案1

「情報が集まり交流を活性化させる機能を工夫。地域の大人・若者のたまり場に。」

地域コンソーシアムは、地域の大人と若者たちの情報拠点や活動拠点、あるいはたまり場。（具体的には商店街組合等の事務所・あるいは大学のサークルボックスのようなイメージ）

- ・地域の様々なイベントにその企画から参加する情報窓口機能
- ・打ち合わせや企画会議などを実施する活動実施機能
- ・地域内のインターンシップやアルバイトやボランティア情報の積極的な掲示
- ・地域のミニコミ誌や使えるクーポン券などの紹介
- ・若者たちの部活やサークル活動などの情報交換掲示板
（できれば地域の大人も参加できるものがあるとよい）
- ・地域内で若者たちが活動する際の実施場所についての相談窓口
- ・地域コンソーシアム(大人・若者のたまり場)について近隣の高校や大学に積極的に売り込み配架を依頼

（高校の場合は進路指導担当やインターンシップ担当の先生、大学の場合はキャリア支援センターやボランティア相談窓口、アルバイト情報なども取り扱っている学生生活課などが具体的な対象ではないか）

具体案2

「地域コンソーシアム（大人・若者のたまり場）は有効性の高い場に設置」

「地域内の多世代へのヒアリング調査などを通じてどういった場所に地域コンソーシアムを設置すると有効性が高いのかを検討する。

（普段高校生や大学生が行き来する場所であり、地域の大人たちが顔を出しに来やすい場所がベスト）

具体案3

「積極的な情報発信」

現代の若者への理解と地域の中での役割やあり方について積極的に情報発信していく。

【提言3】 「リアルもネットも若者がつながる場に」

青少年交流センターや児童館が、若者が自分らしくいられる居場所としての機能をしっかりと果たしてきたことがヒアリング調査などを通して明らかになった。

今後、さらに若者を中心とした交流や活動が生まれるためには、実空間の整備のみならず、インターネットやSNS上に気楽に集える居場所整備が必要ではないだろうか。若者の「一番近く」に交流の場所を設け、この若者支援施策が若者にダイレクトに届く形をつくることで、実空間での交流への第1歩ともなり得る。

具体案1

「ねつせた！を若者交流プラットフォームに」

「若者の社会に向けた文化・情報の発信への支援」において展開している「ねつせた！」を発展させ、情報発信という役割に加えて交流プラットフォームにする。

現在は情報の流動性が高いTwitterを中心とした活動だが、ある程度固定された「居場所」もしくは「居場所への入り口（ポータル）」として機能する媒体を用意し、若者が活動し交流するファーストステップの場になれば、「若者の交流と活動の推進」がより実現可能性の高いものになるだろう。

【提言4】 「生きづらさを抱えた若者が、「居場所」を中核とした専門機関と地域との連携により総合的に支えられている」

深刻な生きづらさを抱えた若者は、本音の「悩み」を言語化して、家族や友人に打ち明けたりできずに自分で抱えてしまい、結果、ひきこもりがちになる場合が多い。したがって、時間をかけて彼ら・彼女らの悩みを引き出し、自分と直面化できるよう支援する専門的「相談」と、安心でき、主体性を損なうことなく「いる」ことができ、地域の人など、さまざまな人が集うゆるやかな「居場所」が有機的かつ相補的に支援をしていくことが必要である。

具体案1

「世田谷5地域の各所に専門機関のサテライトを創設」

世田谷区は面積が広く、場所によっては専門機関への距離が非常に遠いため、支援を必要とする若者が相談に行くことへの物理的・心理的なハードルが高い。支援者が生きづらさを抱えた若者と時間をかけて信頼関係を構築していくためにも、まず気軽に来てもらえる場が必要である。世田谷5地域に身近に相談できる場を設けることで、地域連携、キーパーソンとなる人との同行面談や訪問が行いやすくなる。

【提言5】 「教育機関との連携により、生きづらさを抱えた若者が早期につな

がり切れ目がなく支えられている」

早期支援の重要性は、各支援機関から多く聞かれた。問題は幼少期から始まっていることも多く、切れ目のない支援が必要となる。中学校世代における不登校や高校中退の問題はその後のひきこもりと関連しており、ひきこもりを長引かせていくことになりがちである。教育機関、小学校、中学校、高等学校との連携とつなぎの体制を構築することで予防および早期介入の体制を整える。

具体案1

「学校在籍中からのタスキをつなぐ支援」

区内中学校を訪問し、不登校等の聴き取りと連携を行う。10代の支援は本人に対するアクセスが難しく、保護者への対応となる場合が多い。したがって、在学中から保護者への「ひきこもり・不登校への理解と対応」を啓蒙・啓発していく仕組みを作る。具体的には、保護者への研修を行なう機会を教育委員会、学校と協議し確保する。また、個人情報保護を踏まえつつも、不安定な生徒に対する情報共有と今後の対応を関係者がチームを組んで行う仕組みを教育委員会と作る。

具体案2

「地域住民の意識改革を行うための地域人材の活用」

現代の若者への理解を促し、若者は地域にとっての宝であり、社会が育てていくことが必要である。個人の能力は個人の責任であるとする能力主義や、自己責任論を払拭し、さまざまな若者が生き生きと社会参画できる仕組みを作る。地域人材による広報、身近な人への口コミなど、地域住民がひきこもり者へのキーパーソンになることも考えられ、若者の悩みを受け止められる地域住民を増やし、入口からつなぎへの研修を充実させていく。

【提言 6】 「地域の大人、行政職員が若者施策の情報を共有しながら若者を支えている」

若者世代となってから若者支援施策を周知するのでは遅い。学校と連携ができている児童館は認知度、利用状況が比較的高いことから、児童館を利用する子どもたちの保護者向けに若者支援施策を知ってもらうなど、若者世代になる以前から施策を知ってもらうことが必要である。また、若者と関わりのある組織（商店街、町会・自治会、青少年地区委員会等）も同様である。

具体案 1

若者支援施策の周知

子どもや若者が利用する施設（児童館や青少年交流センター等）や若者と関わる組織（商店街や町会・自治会、青少年地区委員会等）は連携しながら、保護者や地域の大人への若者支援施策の周知・啓発を行い、若者世代になる以前から施策の情報を知ることができる環境を整える。

縦割りではない実務者会議の開催や、地域イベントへ行政職員、若者支援施策関係者が積極的に参加できる体制を整える。

【提言 7】 「若者と地域の大人、行政職員が協働しながら若者の文化・情報の発信を支えている」

具体案 1

若者と地域の大人、行政職員が協働しながら若者の文化・情報の発信を支援

若者の社会に向けた文化・情報の発信の支援のためには、若者と関わる部署だけではなく区の職員全体の認知度を上げ、まちづくりセンターや教育委員会、福祉部局などと横断的に繋がり、若者と協働する取り組みを積極的に行う。

「ねつせた！」「あいりす」「たからばこ」など若者自身が運営に携わっている活動については、引き続き地域の大人や行政が支援を行うことを前提に、学生スタッフの意見を取り入れ事業の軌道修正を実施する。

具体案 2

「情熱せたがや、始めました。」(略)「ねつせた！」の更なる充実

「ねつせた！」を通じて、関係機関が横断的に繋がり、理解ある連携先が拡がることにより、若者が発信する情報ソースに多様性が生まれるだけでなく「ねつせた！」の活動への後方支援につながる。また、「ねつせた！」の更なる充実のためには、地域の大人や行政職員が「ねつせた！」に関わる若者のインタビューなどを積極的に受け入れ地域の情報を若者に提供する。



第4章

若者施策の体系化



1.対象年代別施策

1．対象年代別施策一覧について

対象年代別施策一覧とは、若者施策において世田谷区が目指すべき姿「若者が力を発揮する地域づくり」を実現するために、区が実施している事業及び施策の対象者を未就学児から大学生以降の若者といった年齢別に一覧化した図である。

2．軸の設定について

若者施策において区が目指すべき姿である「若者が力を発揮する地域づくり」を大項目とし、これらを実現するために区が果たすべき使命を「若者の交流と活動の推進」「生きづらさを抱えた若者の支援」「若者の社会に向けた文化・情報の発信への支援」の3つとしたうえで、これらを中項目とした。

小項目については、区の取り組みの効果を評価するための指標として、設定したものである。

3．対象年代について

未就学児から39歳までの若者。

4．既存事業の位置づけ

まず「若者の交流と活動の推進」に関する支援として、対象となるのは主に、サークル活動や活発な交流を自主的に行う「交流・活動系」の若者である。これらの若者に対する支援として、未就学児から利用することができる『プレーパーク事業』、18歳までの全ての児童が利用することができる『児童館』、高校卒業後も利用することができる『青少年交流センター』などがある。

次に、「生きづらさを抱えた若者の支援」の対象となる若者は、主にひきこもりなどの困難を抱えた「相談・支援系」の若者であり、これら「相談・支援系」の若者に対する支援についても、中高生世代から39歳までの若者が利用することができる『メルクマールせたがや』、小・中学生が利用することができる『ほっとスクール』などがある。

また、「若者の社会に向けた文化・情報の発信への支援」として、区は高校・大学生等の若者を対象とした情報発信事業「情熱せたがや、はじめました。」に取り組んでいる。この事業は、全国的にみてもかなり先駆的な事業であり、その効果として、若者の社会への参加・参画意識の醸成、若者の自己決定・自己選択に基づく主体性の向上、若者の社会性や自主性を育むことに大いに寄与していると思われる。

以上のことから、大項目の実現に向けて、世田谷区は未就学児から大人まで、様々な年代に渡って切れ目のない支援を実施していることが分かった。

対象年代別施策一覧

大項目 (区が目指す姿)	中項目	6歳 → 9 → 12歳 → 15歳 → 18歳 → 22歳 →					小項目			
		未就学児	小学生	中学生	高校生	大学生～若者				
若者が力を発揮する地域づくり	若者の交流と活動の推進			Teensプロジェクト			実施効果 : 若者自らの主体的な活動 : 自立と成長を促す : 世代を超えた出会いや交流の機会の積極的な創出 : 若者の社会への参加・参画意識の醸成 : 安心して中高生世代が地域で過ごせる場や機会の拡充 : 同世代だけでなく、多様な地域住民と若者が主体的に関わる連携			
				世田谷リーダースクール						
				プレーパーク事業						
				碓・多摩川あそび村						
			小学校遊び場開放							
				青少年地区委員会での活動						
			新BOP		中学生の放課後活動支援事業(STEP)					
			学童クラブ							
				新・才能の目を育てる体験学習						
				新年子どもまつり						
				動物フェスティバル						
				教育センター(郷土学習室、プラネタリウムなど)						
				世田谷9年教育、学び舎など						
				せたがや学校エコライフ活動						
				子ども夢プロジェクト						
			子育て支援館	児童館での活動		中学生支援館				
						青少年交流センター池之上青少年会館				
						野毛青少年交流センター				
						希望丘青少年交流センター「アップス」				
						三軒茶屋の若者の居場所「あいりす」				
						上北沢の若者の居場所「たからばこ」				
			生きづらさを抱えた若者の支援			子ども・子育てでテレフォン、子ども家庭総合相談			実施効果 : 生きづらさを抱えた若者及び、その家族を対象とした相談支援 : 安心して利用でき、対人関係や社会生活に対する自信を取り戻せるような「居場所」の構築 : 生きづらさ・困難を抱えた若者支援に向けた関係機関との連携による重層的な支援 : 社会的自立に向けた支援 : 早期支援の重要性	
					教育相談室					
					子どもの人権擁護機関「せたがやホッと子どもサポート」					
					児童館での相談、こころの健康相談(子ども・思春期)					
				スクールカウンセラー						
				学生ボランティア派遣事業						
						発達相談室運営事業				
				児童相談所						
				ぶらっとホーム世田谷						
				世田谷にじいるひるば電話相談						
						メルクマールせたがや				
				あてかけひろば						
				児童短期保護(子どものショートステイ)事業						
				要支援家庭を対象としたショートステイ事業						
				トワイライトステイ事業						
		若者の社会に向けた文化・情報の発信への支援			世田谷版ネウボラ		実施効果 : 若者の主体的な取り組みを支援する仕組みの構築			
				不登校・保護者のつらい、メンタルフレンド派遣事業		せたがや若者サポートステーション				
				ほっとスクール(適応指導教室)		ワークサポートせたがや、三茶おしごとカフェ				
				発達障害相談・療育センター「げんき」						
				ひとり親家庭支援(学習支援・就労支援etc)						
				障害者就労支援センター「すきっぷ」						
				児童手当等						
				発達支援親子グループ事業						
						SNS等を活用した若者による若者のための情報発信事業「情熱せたがや、始めました。」				

■2.若者施策が目指す全体像

本提言で提示した、若者施策が目指すべき姿の全体像を示すものである。第3章で提言した具体的取組み案のうち特徴的なものを体系図に配置し、働きかけの方向性を矢印で落とし込むことにより、目指すべき姿をどのように実現していくかを示すものとした。

1 軸の設定について

横軸

- 若者の施策として、イベントのように打ち出していき施策に目がいきがちであるが、調査を元に施策の評価・検証を行っていく中で、日常の施策の重要性が共有されたことから、非日常⇔日常を横軸とした。

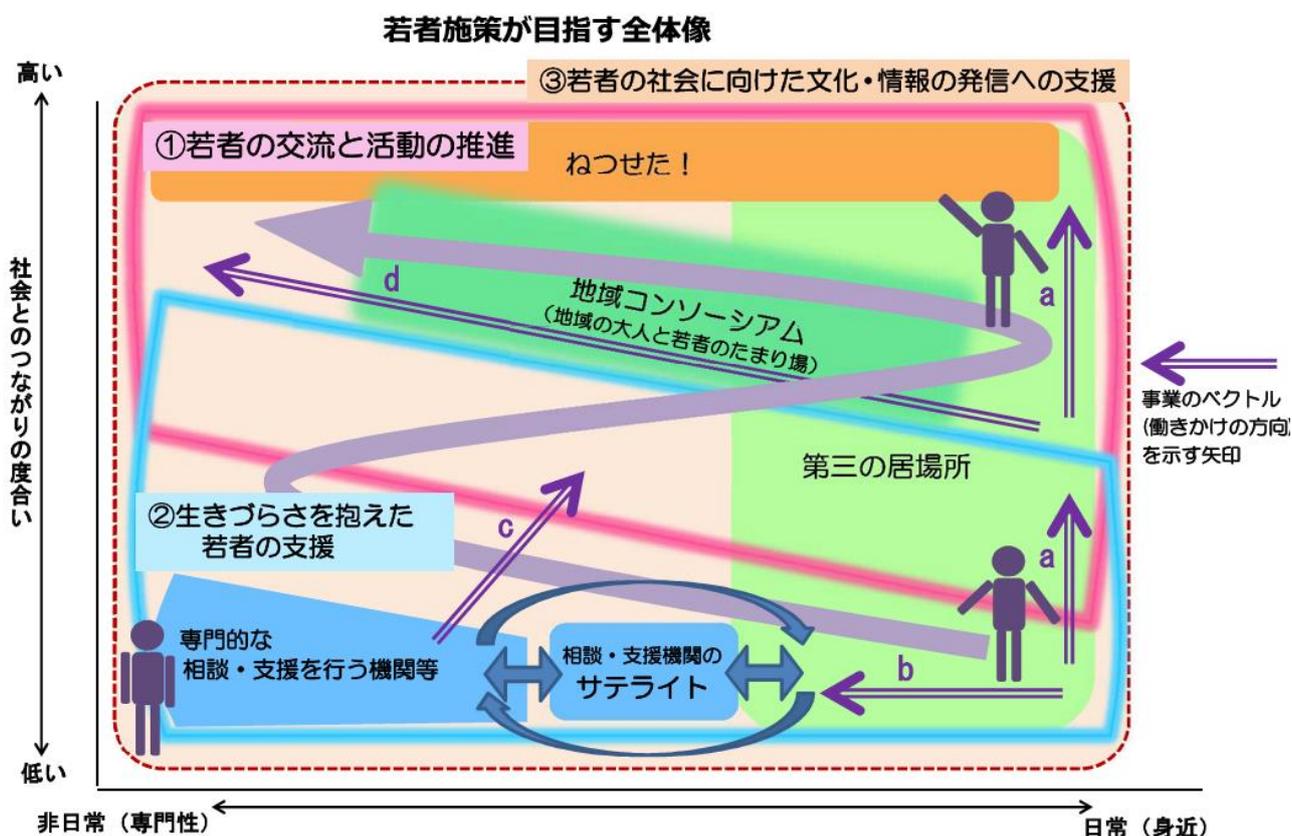
身近で参加のハードルが低い事業は「日常」、専門性をもった相談・支援などは「非日常」に位置づけ、それぞれの重なりや連携も落とし込んでいくこととした。

縦軸

- 縦軸は、社会とのつながりの度合いを置くこととした。

2 既存事業の位置づけ

これまで区が取り組んできた若者施策や事業を、上記の体系化マップ上に位置づけるとP11の施策体系図のとおりとなる。(参考：第1章では施策の経年比較を行っている。)



3 若者施策が目指すべき姿の位置づけ

(1) 柱となる施策の位置づけ

- ①若者の交流と活動の推進、②生きづらさを抱えた若者への支援は、対象者も事業も重なり合う部分があることを図上に示し、それぞれマッピングした。
- ③若者の社会に向けた文化・情報の発信への支援は、若者施策全体が情報源であり、また発信先でもあることから、全体を囲む破線の範囲を対象とした。

(2) 提案する具体的施策（事業）の位置づけ

①第三の居場所

家や学校、職場（アルバイト含む）以外で、「安心して過ごせる」「自分を受け入れてくれる」「一人になれる、他人に干渉されない」といった第三の居場所を、「すべての若者がもてる」という理想像を描いた（P73）。すべての若者に、身近で日常的に利用できる第三の居場所がある状態を図の中に位置づけた。

第三の居場所の利用者への働きかけは、「社会とのつながりを深める（度合いが高まる）」あるいは「非日常（専門性）」に向かって働く。例えば、生きづらさを抱えた若者など社会とのつながりが薄い若者が第三の居場所を利用したとして、そこから専門機関につながることもあれば（矢印 b）、居場所での交流や体験を通して「社会とのつながりを深めて」いく（矢印 a）こともある。

②地域コンソーシアム

大人・若者のたまり場（情報や活動、交流の拠点）

日常的な多世代交流の場であるとともに、専門性や様々な経験を持つ地域の大人との接点や交流が開かれることにより、「地域のイベントに企画から参加する」「知識や趣味を活かした活動で仲間を増やす」「新たな事業を立ち上げる」といった、目的に特化した非日常の活動でのつながりを社会で築いていく力が働くと考える（矢印 d）。

③生きづらさを抱えた若者を地域の人材や場とともに支える

相談・支援機関は体系図の左下に位置し、認知度の低さとともに利用への心理的ハードルの高さが課題である。

専門機関のサテライトは、非日常（専門性）と日常（身近）の間に位置づけられ、第三の居場所など身近な場から専門的な相談・支援の場の利用につながっていく（あるいはつなげる）際の物理的、心理的ハードルを下げる。また、専門機関が地域人材に働きかけ、生きづらさを抱えた若者の理解を促進することにより、地域から早期に専門機関につながる動きとともに、地域の居場所と連携した相補的支援も進むと考える。

専門機関の利用者への働きかけは、より身近で日常的に過ごせる場で社会との関係を深めるような方向に働く（矢印 c）。

イメージしやすいよう、「生きづらさを抱え日常の場に出たり、人と交流したりすることが難しい若者」「生きづらさを抱えているが日常の場で過ごすこともある若者」「積極的に交流しながら活動している若者」をそれぞれ図示し、体系図の中に落とし込んでいる。



生きづらさを抱え日常の場に出たり、人と交流したりすることが難しい若者

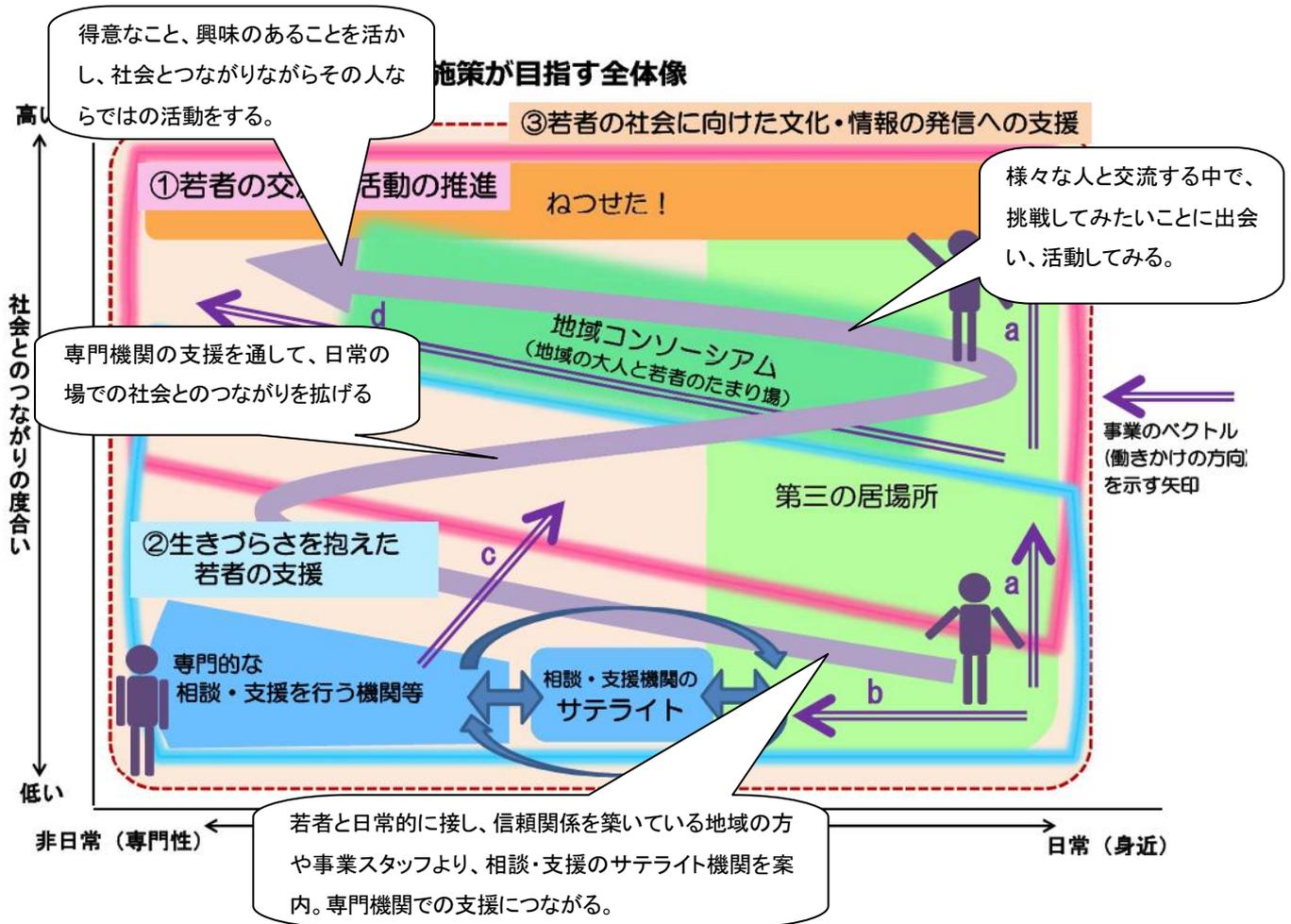


生きづらさを抱えているが日常の場で過ごすこともある若者



積極的に交流しながら活動している若者

若者施策や事業が連携し、若者の成長を見守り支える一つのパターンを例示する。



一資料編一

- 1 . 依頼文
- 2 . 資料 1 世田谷区子ども・青少年協議会委員名簿
- 3 . 資料 2 世田谷区子ども・青少年協議会審議の経過
- 4 . 資料 3 情熱せたがや、始めました。事業報告
- 5 . 資料 4 事業・用語解説
- 6 . 資料 5 世田谷区若者施策に関する調査報告書
- 7 . 資料 6 世田谷区若者施策に関するヒアリング調査報告書

29世若者第96号

平成29年7月25日

世田谷区子ども・青少年協議会 様

世田谷区長 保坂 展人

地方青少年問題協議会法第二条 第1項 第一号の規定に基づき、
下記について調査、審議願います。

記

若者施策の評価検証と体系化について～区民の参加と協働を目指して

世田谷区子ども・青少年協議会委員名簿（平成31年3月現在）

役職	委員構成	氏名	所 属	小委員会	
会長	学識経験者	森田 明美	東洋大学社会学部社会福祉学科教授		
副会長	学識経験者	入澤 充	国士舘大学大学院法学研究科教授	委員長	
委員	区議会議員	河野 俊弘	自由民主党世田谷区議団		
		山内 彰	自由民主党世田谷区議団		
		佐藤 弘人	公明党世田谷区議団		
		羽田 圭二	世田谷立憲民主党・社民党区議団		
	学識経験者	林 大介	首都大学東京	副委員長	
	区民	宇佐美 武志	世田谷区青少年委員会元会長		委員
		麻生 小百合	青少年烏山地区委員会会長		
		原 貴江	世田谷区立小学校PTA連合協議会会長		
		松浦 夏乃	世田谷区立中学校PTA連合協議会会長		
		明石 眞弓	世田谷区民生委員児童委員協議会主任児童委員部会部会長		委員
		新井 佑	公募区民		委員
		加藤 承彦	公募区民		委員
		藤原 由佳	公募区民		委員
	行政庁職員	岡野 安成	東京都世田谷児童相談所長		
		青木 和夫	渋谷公共職業安定所長		
		平田 和英	東京保護観察所保護観察官		
		土田 聖一	世田谷少年センター所長		
	専門委員	今村 弥生	杏林大学医学部付属病院精神神経科医師		
		井利 由利	メルクマールせたがや施設長		委員
		織田 鉄也	野毛青少年交流センター センター長		委員
		篠原 健太郎	NPO 法人ワーカーズコープ東京中央事業本部事務局次長		委員
		加藤 綾希子	協定大学 学生（昭和女子大学）		委員
		児玉 大樹	協定大学 学生（日本大学文理学部）		委員
毛利 光咲		『情熱せたがや、始めました。』運営メンバー（大学生）		委員	

29-30 年度期世田谷区子ども・青少年協議会審議の経過

開催年月日	協議会	小委員会	主な審議内容
平成 29 年 7 月 25 日 (火) 9 時 30 分 ~ 11 時 30 分 ブライトホール	第 1 回		・会長、副会長選任 ・委員紹介 ・協議会の進行説明 ・審議議案 ・今後の検討方法等について
平成 29 年 8 月 30 日 (水) 14 時 30 分 ~ 16 時 30 分 メルクマルせたがや		第 1 回	・今後のスケジュールについて ・検討の進め方について ・検討課題について
平成 29 年 9 月 25 日 (月) 10 ~ 12 時 庁議室		第 2 回	・子ども計画策定にあたっての検討経過 ・現状の施策に対する意見交換 ・次回の検討の進め方について
平成 29 年 10 月 19 日 (木) 10 ~ 12 時 野毛青少年交流センター		第 3 回	・今後の進め方 ・次回のスケジュール
平成 29 年 12 月 12 日 (火) 9 時 30 分 ~ 11 時 30 分 ブライトホール	第 2 回		・小委員会検討状況の報告 ・上記報告を受けた議論など
平成 30 年 1 月 24 日 (水) 15 時 ~ 17 時 庁議室		第 4 回	・事務局より議論の進め方と方向性の確認 ・チェック項目に対する意見交換 ・今後の進め方について
平成 30 年 2 月 26 日 (月) 10 時 ~ 12 時 庁議室		第 5 回	・若者支援施策の評価軸作成に向けた検討 ・若者支援アンケート調査項目について
平成 30 年 3 月 28 日 (水) 9 時 30 分 ~ 11 時 30 分 ブライトホール	第 3 回		・小委員会検討状況の報告 ・上記報告を受けた議論など
平成 30 年 5 月 21 日 (月) 10 ~ 12 時 第 5 委員会室		第 6 回	・若者施策アンケート調査設問案について ・若者施策ヒアリング調査について
平成 30 年 6 月 22 日 (金) 14 時 ~ 16 時 庁議室		第 7 回	・若者施策アンケート調査票について ・若者施策ヒアリング調査について
平成 30 年 7 月 30 日 (水) 14 時 ~ 16 時 庁議室		第 8 回	・「若者施策の評価・検証、体系化」検討状況について ・若者施策アンケート調査 集計・分析について ・平成 29 - 30 年度期 提言書 全体構成について ・若者施策の体系化について
平成 30 年 8 月 7 日 (火) 9 時 30 分 ~ 11 時 30 分 ブライトホール	第 4 回		・小委員会検討状況の報告 ・若者施策調査 実施状況報告 ・若者施策への提言に向けた協議
平成 30 年 10 月 15 日 (月) 14 時 ~ 16 時 1 - B - 1 会議室		第 9 回	・今後のスケジュール確認 ・若者施策調査結果概要 ・提言書 (たたき台) 作成に向けた検討
平成 30 年 11 月 15 日 (木) 13 時 ~ 15 時 区議会第 5 委員会室		第 10 回	・たたき台案について ・第 5 回協議会 議論のポイントについて
平成 30 年 12 月 7 日 (金) 14 時 30 分 ~ 16 時 30 分 区議会大会議室	第 5 回		・若者施策調査 結果報告 ・小委員会検討状況の報告 ・報告書(案)たたき台について
平成 31 年 1 月 16 日 (水) 14 時 ~ 16 時 都市整備領域第一会議室		第 11 回	・報告書全体の構成と今後の進め方について ・各章についてのご意見
平成 31 年 2 月 15 日 (金) 14 時 ~ 16 時 都市整備領域第一会議室		第 12 回	・報告書(案)に関する意見交換
平成 31 年 3 月 25 日 (月) 14 ~ 16 時 希望丘青少年交流センター	第 6 回		・報告書の提出

—情熱せたがや、始めました。事業報告—



1. 事業の目的

SNS情報発信『情熱せたがや、始めました。』事業は、「若者に情報が届いていない」状況を踏まえ、若者が主体となって、若者に身近なツール(SNS)を活用し情報発信を行うものであり、その取り組み自体が若者の参加・参画の仕組みを構築する機会となっている。

【本事業の経緯・背景】

- ・ 世田谷区では、区の基本計画で「若者が力を発揮する地域づくり」を政策のひとつとして位置づけ、若者が多様な交流のなかで成長し、活躍する場を地域のなかでつくり、若者を核とした地域の活性化を目指している。また、「第2期子ども計画」(平成27年3月)のなかで、「世田谷の持つ魅力ある文化・伝承を継承・発展させていくためには、若者たちの感性、協力が不可欠」とし、若者の社会に向けた文化・情報の発信への支援として若者の主体的な活動を区民が見守り、支援する取り組みを推進している。
- ・ 平成27-28年度期世田谷区子ども・青少年協議会(以下、「青少協」という。)において、『若者の参加による「若者支援施策の効果的な提供について」』をテーマに検討を進め、若者の参加・参画の機会を拡充するためモデル事業として『情熱せたがや、始めました。』を立ち上げ、若者を主体とする取り組みを進めてきた。平成28年度に実行した情報発信の仕組みや体制を土台とし、若者ならではのチームビルディングを構築しながら、企画・取材・編集・発信を分担し活動を行ってきた。
- ・ 平成29年度以降も事業を継続するとともに、若者の主体的な参加・参画の仕組みを発展させ、世代交代をふまえた参画の循環の仕組みづくりを進める。

【キャッチコピー】

立ち上げの第1期では、団体として進んで行く際に悩んだり困ったりする時が必ず来る、そんなときには、立ち戻れるようなものを作りたいといった思いから「常に熱く、いつもそばに」というキャッチコピーが誕生した。しかしながら、このキャッチコピーはメンバー自身が立ち返るものではあったが、みんなで一緒に頑張る進んでいく要素に欠けていたので、「ねつせた!」に参加するメンバーはもちろんのこと、情報の受け手が自分も参加してみたい、行ってみようかな、自分の地域でもやってみようかな等メディアを見た全ての方に新たな出会いや活動を通じて生活がより一層豊かになるよう、「このまちで主役になろう」という新キャッチコピーに作り直しを行った。

2. ねつせた! 活動内容・実績

- ・ 毎日投稿...より多くの情報を届けたい。地域へ興味をもってもらいたい。といった思いから、ねつせた! Twitterにおいてほぼ毎日投稿を2年間に渡り継続中。先日 Twitter フォロワー1000人突破、ねつせた! のSNSアカウントの総フォロワー数は1500人を突破、月間閲覧数は平均5万人を超えている。
- ・ 投稿内容...情報発信は、今を生きる同世代の若者が発信することで、届けたい同世代に伝わりやすい。ねつせた! の活動で世田谷のことを少しだけ多く知ったメンバーの生の声の発信は、口コミの役割を果たし、記事自体がフランクに伝わりやすい。
- ・ 企画会議...SNSのみで活動していると思われがちだが、月2回の全メンバー会議、週1回の運営チーム会議に加え、プロジェクトチームごとに打合せや会議を行っている。



- 取材活動...著名人から世田谷で貢献する方まで幅広く様々な切り口で取材を行い、FacebookなどのSNSで発信している。取材先はメンバー個人の興味関心に合わせて、企画・アポイント・取材・編集・発信まで個人やチームで行っており、取材を通しメンバー自身が多くの生き方や考え方に触れられ、知識・経験を増やすことが出来、キャリア形成の機会となっている。



- 掲載メディア...区のおしらせ せたがや新春特別号、世田谷ライフ、FM せたがや区長の談話室 等



- コラボ庁内所管...

取材協力依頼をした：オリンピック・パラリンピック担当課、国際課、区議会事務局、区民健康村・ふるさと交流課、児童課、砧総合支所地域振興課

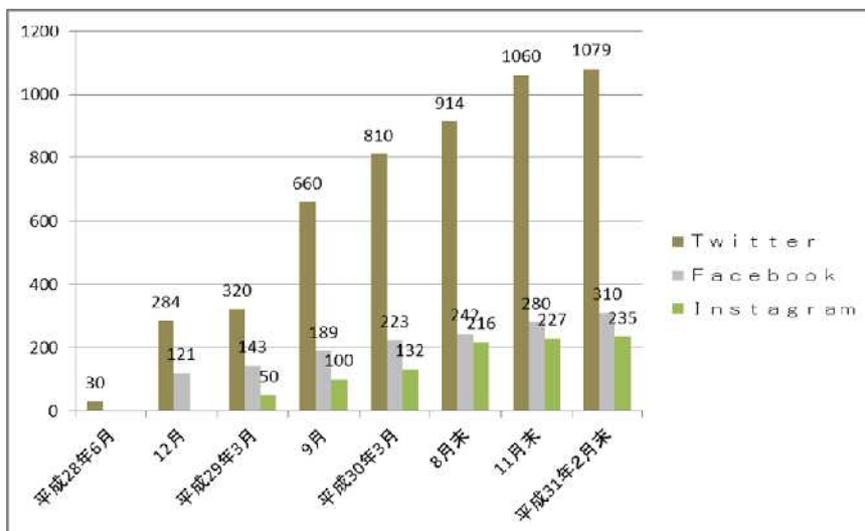
取材/中継/出演/コラボ等依頼を受けた所管：オリンピック・パラリンピック担当課、産業振興公社、都市デザイン課、広報広聴課、世田谷総合支所地域振興課

- まちあるき...メンバー個人のまちあるきに加えて、平均月1回ペースでまちに繰り出し、若者目線の新たなまちの魅力を発信している。



【数値でみる実績】

- ・フォロワー数



～事業・用語解説～

ア行

あいりす

小学5年生～24歳までの女性が利用できる若者の身近な居場所。事業運営は、区と連携協定を結ぶ昭和女子大学の学生が行っている。

アウトリーチ

支援ニーズがあるが、保健・医療・福祉施設等の拠点におけるサービスでは利用するのが困難な人に対して、状況に応じて専門スタッフが訪問して施設内と同等の必要なサービスを提供していく仕組み。

アセスメント

個人の状態像を理解し、必要な支援を考えたり、将来の行動を予測したり、支援の成果を調べたりすること。

生きづらさを抱えた若者

学校生活や就労時の体験、対人関係でのつまずきなどを起因として、社会生活や他者との関わりがうまくいかず、目指す生き方に向かって進めない、目指す方向がわからないために悩んでいる若者。

SNS

ソーシャル・ネットワーキング・サービスの略。インターネットを介して人間関係を構築できるスマートフォン・パソコン用のウェブサービスの総称。

カ行

教育相談室

子どもたちの健全な育成を図るため、教育相談員が教育についての心配ごとに対し、保護者の方の相談にお応えしながら、お子さんに対しても必要に応じた心理的な援助を行っている。

KPI

キー・パフォーマンス・インディケイター（重要業績評価指標）の略。組織やチームで設定した最終的な目標を達成するための、過程を計測・評価する中間指標のこと。

げんき（発達相談者相談・療育センター）

発達障害支援基本計画に基づいて、発達障害者の当事者、家族及び関係機関への相談、療育、地域支援を行う施設。

子ども計画

「世田谷区子ども計画」は、子どもが健やかに成長・自立でき、また、安心して子どもを産み、育て、子育てに夢や希望を感じることができる地域社会の実現に向け、子どもや子育てについての総合的な施策を進めることを目的としている。

世田谷区子ども条例

子どもが育つことに喜びを感じることができる社会を実現するため区が平成13年に制定している条例。条例では、子どもは「ひとりの人間として、いかなる差別もなく、その尊厳と権利が尊重される」とし、また、「自分の考えで判断し、行動できるよう、子ども自ら学んでいくことが大切である」としている。

サ行

サテライト

本拠地と離れたところにある小規模な拠点。

三茶おしごとカフェ

仕事探して困っている方への就職サポート施設。

児童館

区内に25館あり、子どもたちとの関わりをとおして健康で心豊かに育てていくための施設。各地域に1館ずつ中高生世代が活動しやすくなるよう中高生支援館を設置し、活動支援も行なっている。

児童養護施設退所者等支援事業

児童養護施設等を退所した子ども等の社会的自立を支援するために、平成28年度より、区が開始した事業。住居や居場所の支援に加え、返済不要の奨学金を給付している。

「情熱せたがや、始めました。」(略してねつせた!)

若者世代に必要な情報が届いていない課題より、若者自身が若者世代に馴染みのあるSNSを利用し世田谷の魅力を情報発信していく団体。

スクールソーシャルワーカー

子どもの家庭環境による問題に対処するため、教育現場や児童相談所と連携し支援をしていく福祉の専門家。

せたがや若者サポートステーション

働くことに踏み出したい若者たちとじっくり向き合い、本人やご家族の方々だけでは解決が難しい「働きだす力」を引き出し、「職場定着するまで」支援する施設。

青少年地区委員会

地域社会において青少年の健全育成を図るとともに、青少年をめぐる非行防止とその為の社会環境の浄化等を目的に各まちづくりセンターに設置された組織。区長から委嘱されたメンバーが中心となり、様々な活動を行っている。

セーフティネット

個人や企業に経済的なリスクが発生した際に、最悪の事態から保護するしくみ。

タ行

第三の居場所 掲載するか要検討

自宅でも、学校や職場でもない、安心して過ごせる心地の良い居場所。

たからばこ

中高生世代が利用できる若者の身近な居場所。事業運営は、区と連携協定を結ぶ日本大学文理学部の学生中心で行っている。

地域コンソーシアム

地域で様々な世代や団体が共同・協力しながら何らかの目的・目標をもった活動を行うこと。本報告書では、地域の大人と若者たちが日常的に交流ができる情報や活動の拠点(たまり場)として提案。

ハ行

ひきこもり(厚生労働省「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」より)

様々な要因の結果として社会的参加(義務教育を含む就学、非常勤職を含む就労、家庭外での交遊など)を回避し、原則的には6ヶ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態(他者と交わらない形での外出をしていてもよい)を指す現象概念。

ぷらっとホーム世田谷

就職や生活全般にわたる困りごとの相談窓口機関。

プレーパークせたがや

「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーにした遊び場。屋外での自由な「遊び」を通して得られる様々な体験や交流を通して、子どもたちに主体性や社会性を育む場所となっている。

プラットフォーム

土台。環境。

プロボノ

社会人が自らの専門知識や技術を生かして参加する社会貢献活動。

フォロワー

ツイッターを始めとするソーシャルサービスにおいて、特定のユーザーの更新状況を手軽に把握できる機能設定を利用し、その人を応援・活動を追っている者のことである。

ほっとスクール（適応指導教室）

心理的理由で登校できないでいる児童・生徒のための「心の居場所」として、自主性を養い、社会性を育みながら学校復帰に向けて気持ちを整えていくための支援を行う施設。

マ行

メルクマールせたがや

不登校・ひきこもりなどの生きづらさや困難を抱えた若者の相談・居場所支援機関。

ヤ行

ユースソーシャルワーカー

高校生を対象に卒業後の就労や家庭経済状況などに関する支援を行う仕組み、および、職員の呼び名。

ワ行

ワークサポートせたがや

仕事を探している方へ職業相談及び職業紹介をする施設。

世田谷区若者施策に関する調査
報告書

平成 30 年 9 月
株式会社インテージリサーチ

目次

1 .調査の概要	-89-
1 - 1 . 調査の目的.....	-91-
1 - 2 . 調査設計.....	-91-
1 - 3 . 調査項目.....	-93-
1 - 4 . 報告書の見方.....	-95-
2 .評価指標別の調査結	-97-
2 - 1 . 基本属性.....	-99-
2 - 2 . 若者の交流と活動の推進.....	-103-
2 - 3 . 生きづらさを抱えた若者の支援.....	-134-
2 - 4 . 若者の社会に向けた文化・情報の発信への支援.....	-148-
3 .資料編	-149-
3 - 1 . 調査票.....	-151-

1 調査の概要

1. 調査の概要

1 - 1. 調査の目的

区の若者を取り巻く実態を把握するとともに、これまでの若者施策について、評価・検証し、効果的なものとして体系化することを目的として実施。

1 - 2. 調査設計

(1) アンケート調査

	郵送による調査				施設等での配布による調査			
調査対象	平成 30 年 4 月 1 日現在、世田谷区に住民登録がある 15 歳～29 歳の若者のうち、住民基本台帳から無作為抽出した 6,000 件				青少年交流センターや若者総合支援センター等、主要な若者施策の利用者。			
調査方法	郵送により対象者に送付。 郵送または WEB で回答				利用施設窓口で、調査票または調査協力依頼チラシ（WEB 回答用アドレス表示あり）を配布			
調査期間	調査票発送日 平成 30 年 6 月 25 日（月） 提出〆切日 平成 30 年 7 月 13 日（金）				調査票配布期間 平成 30 年 7 月 1 日（日）～7 月 13 日（金） 提出〆切日 平成 30 年 7 月 23 日（月）			
回収状況	郵送による調査				施設等での配布による調査			
	有効回収数			有効回収率	有効回収数			有効回収率
	1,132 件			18.9%	103 件			-
	(内訳) 郵送回答	若者 全般 ¹	775 件	12.9%	(内訳) 郵送回答	交流・活動系 ²	67 件	-
						相談・支援系 ³	5 件	-
WEB 回答	若者 全般	357 件	6.0%	WEB 回答	交流・活動系	25 件	-	
					相談・支援系	6 件	-	

- 「若者全般」とは、施設等での配布による調査（交流・活動系、相談・支援系）以外の区在住 6,000 人を対象とした調査を指す。
- 「交流・活動系」とは、児童館や青少年交流センターなど、自主的なサークル活動や活発な交流を促す施設。
調査票配布先：児童館中高生支援館 5 館（池尻、代田、玉川台、喜多見、粕谷）
青少年交流センター池之上青少年会館、野毛青少年交流センター、プレーパーク、『情熱せたがや、始めました。』
- 「相談・支援系」とは、ひきこもりなどの生きづらさや困難を抱えた方からの相談を受け付けたり、居場所を提供したりする施設。
調査票配布先：メルクマールせたがや、せたがや若者サポートステーション、三軒茶屋の若者の居場所「あいりす」、上北沢の若者の居場所「たからばこ」

(2) ヒアリング調査

分類	項目
調査対象	区内の主要な若者施策の事業者及び利用者、地域で若者の活動を支えている団体
調査方法	子ども・青少年協議会委員1名、記録として調査機関1名が現地に伺い、対面を実施。 事業(施設)責任者、スタッフ、利用者は、それぞれ別にヒアリングを実施。
調査期間	平成30年6月27日(水)～平成30年7月25日(水)
調査機関	株式会社インテージリサーチ

1 - 3 . 調査項目

主に、以下の項目について把握、聴取した。

(1) アンケート調査

分類	主な調査項目
基本属性	<ul style="list-style-type: none"> ● 性別、年代 ● 就業経験・状況 ● 居住年数 ● 在学または卒業した学校 ● 同居家族 ● 家庭の暮らし向き
地域への愛着	<ul style="list-style-type: none"> ● 住んでいる地域への愛着度 ● 地域で参加している活動 ● 愛着を感じる理由
自分の居場所	<ul style="list-style-type: none"> ● 自分の居場所 ● 家や学校、職場以外の「第三」の居場所 ● 学校や職場以外の時間の過ごし方
自分のこと	<ul style="list-style-type: none"> ● 自己肯定感、自己有用感 ● 自分自身について当てはまること ● 身近な人とのコミュニケーション手段・頻度 ● 話したり相談したりする相手 ● 困っていることや悩んでいること、相談相手 ● 尊敬できる身近な大人
地域への貢献	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域で役に立っていると感じるものの有無 ● 地域で役に立っていると感じる時
将来イメージ	<ul style="list-style-type: none"> ● 20年後の将来への明るいイメージの有無 ● 具体的な20年後のイメージ
外出状況	<ul style="list-style-type: none"> ● 外出頻度 ● あまり外出しなくなった年齢、きっかけ ● 6か月以上継続している外出頻度、その年齢、きっかけ
活動への参加状況	<ul style="list-style-type: none"> ● 活動への参加状況 ● 活動に参加するための条件
区の実施の活用・参加状況	<ul style="list-style-type: none"> ● 区の実施の認知度・活用状況 ● スタッフ・運営側としての参加意向 ● スタッフ・運営側として参加するための条件
専門機関の認知・活用状況	<ul style="list-style-type: none"> ● 専門機関の認知度・活用状況 ● 専門機関に相談する際の迷い・不安の有無 ● 知ってから活用するまでの期間 ● 時間が経過してから活用となった理由
<施設利用者のみ> 専門機関への満足度	<ul style="list-style-type: none"> ● 調査票の受領場所 ● 困りごと・悩みごとの改善状況 ● 相談したことによる変化 ● その場所での支援への満足度とその理由

(2) ヒアリング調査

対象施設				分類	事業者、活動団体等 (施設長、スタッフ等)	利用者
交流・活動系	相談・支援系	児童館	町会・商店会・青少年地区委員			
				基本属性	<ul style="list-style-type: none"> ● 施設に来る若者の年代、特徴 ● 若者が施設に来るきっかけ、理由 	<ul style="list-style-type: none"> ● 年齢 ● 現在の状況 ● 施設に来るきっかけ、理由
			-	施設に来る若者の変化	<ul style="list-style-type: none"> ● 施設に来る前後での若者の変化 ● 施設を安心して利用してもらうための工夫 ● 課題 	<ul style="list-style-type: none"> ● 期待通りだったか ● 施設に来たことでの自分自身の変化 ● また来たいと思うか
			-	事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて 特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて	<ul style="list-style-type: none"> ● 事業を始めた経緯や、事業を実施する理念や意義、価値、目指す目標 ● 工夫（参加を促す、若者と接点を持つ等） ● 効果 ● 課題 ● 今後の展望 	<ul style="list-style-type: none"> ● 参加した具体的なイベント ● 参加したきっかけ ● 参加した感想 ● 今後の参加意向 ● どんな目的で行っている事業だと思うか
-	-	-		地域での交流活動	<ul style="list-style-type: none"> ● 若者の参加状況 ● 若者の参加についての考え ● 参加する場面 ● 工夫点 ● 課題 ● 町会やPTAとの連携 	
				他の世代と交流する仕組み	<ul style="list-style-type: none"> ● 実施状況 ● 必要性 ● 工夫 ● 課題 	<ul style="list-style-type: none"> ● 他の世代と交流する機会の有無 ● 施設内での他の世代との交流状況（親しい人ができたか等） ● 交流するきっかけ ● 交流した感想
				施設・事業の運営	<ul style="list-style-type: none"> ● 若者の意見を取り入れているか ● そのための工夫 ● 施設長とスタッフの意識の違い・関わり方 	<ul style="list-style-type: none"> ● 自分の意見が施設運営に活かされていると感じるか

1 - 4 . 報告書の見方

- (1) 調査結果の数値は、回答率(%)で表示している。%の母数は、その質問項目に該当する回答者の総数であり、その数(度数)はnで示している。
- (2) %の数値は、小数点第2位で四捨五入し、小数点第1位まで示している。よって、「は1つ」などの質問であっても、各回答の数値の合計が100.0%にならない場合がある。
- (3) 回答は、単一回答(は1つ)と複数回答(はいくつでも)の選択式の回答と、具体的に数値を回答する場合がある。複数回答の設問の場合は、その回答割合(%)の合計が100.0%とならないことがある。
- (4) 「交流・活動系」「相談・支援系」等の記載がないデータは、郵送による調査(若者全般)の回答のみを集計したものである。
- (5) 縦軸の項目について無回答あるいは不明の回答があったものについては、データを掲載していないため各項目のデータ数の合計が総数と一致しないことがある。
- (6) 本調査と類似した調査のうち、可能な設問については比較を行っている。

年度	実施主体	調査タイトル	調査対象、標本数	調査方法	実施期間	有効回収数・回収率	本報告書(グラフ内)での表記
平成25年度	世田谷区	中高生世代アンケート調査	世田谷区に居住する12~17歳(平成25年4月1日現在)の子ども6,000人(各年齢1,000人ずつ)	郵送配布・郵送回収	平成25年11月7日~11月25日	1,439人(24.0%)	25区
平成28年度	内閣府	若者の生活に関する調査	全国の市区町村に居住する満15歳から満39歳の者5,000人及び同居する成人家族 ⁴	調査員による訪問留置・訪問回収	平成27年12月11日~12月23日	本人3,115人(62.3%) 家族2,897人	28内「生活」
平成28年度	内閣府	子供・若者の意識に関する調査	全国の15歳から29歳までの男女6,000人 ⁵	インターネット調査	平成28年12月14日~12月20日	6,636人	28内「意識」

4 : 198 市区町村 200 地点から層化二段無作為抽出法

5 : 有効回答数を 6,000 サンプルとし、標本数を全国 7 ブロックに分け、ブロックごとの 15 歳から 29 歳までの人口比率を割付(標本数 6,000 サンプルは、有効回答数から無作為抽出により選定を行なった。)

2 評価指標別の調査結果

2. 評価指標別の調査結果

2-1. 基本属性

< 性年齢 >

若者全般（p1 1参照）では、女性25～29歳が24.6%と最も高く、次いで女性20～24歳が18.0%、男性25～29歳が16.2%となっている。問1、問2。

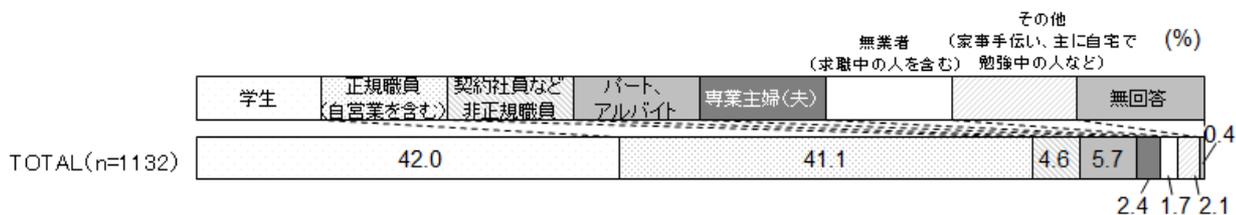
図 2-1 性年齢(単一回答)



< 現在の状況 >

若者全般では、学生が42.0%と最も高く、次いで正規職員（自営業を含む）が41.1%となっている。問5

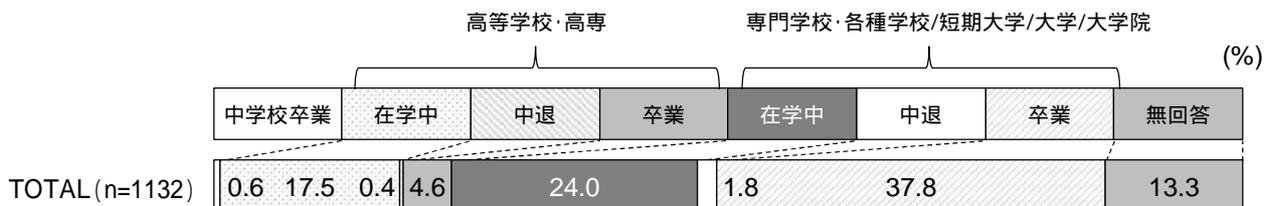
図 2-2 現在の状況(単一回答)



< 在学または卒業した学校 >

若者全般では、「専門学校・各種学校/短期大学/大学/大学院 卒業」が37.8%と最も高く、次いで「専門学校・各種学校/短期大学/大学/大学院 在学中」が24.0%、「高等学校・高専 在学中」が17.5%となっている。問7

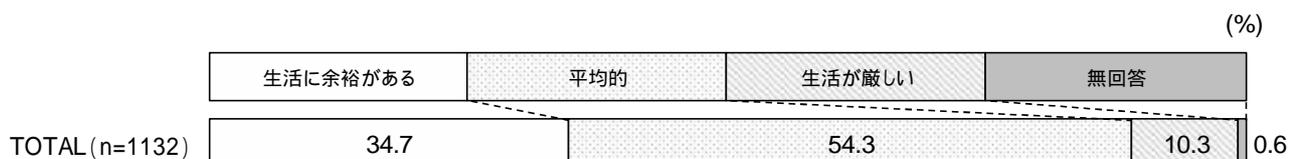
図 2-3 在学または卒業した学校(単一回答)



< 暮らし向き >

暮らし向きについて、「生活が厳しい」から「生活に余裕がある」を9区分で把握し、「生活に余裕がある」に近い3区分を「生活に余裕がある」、中央の3区分を「平均的」、「生活が厳しい」に近い3区分を「生活が厳しい」として算出したところ、全体では、「平均的」が54.3%と最も高く、次いで「生活に余裕がある」が34.7%となっている。問8

図 2-4 暮らし向き(単一回答)

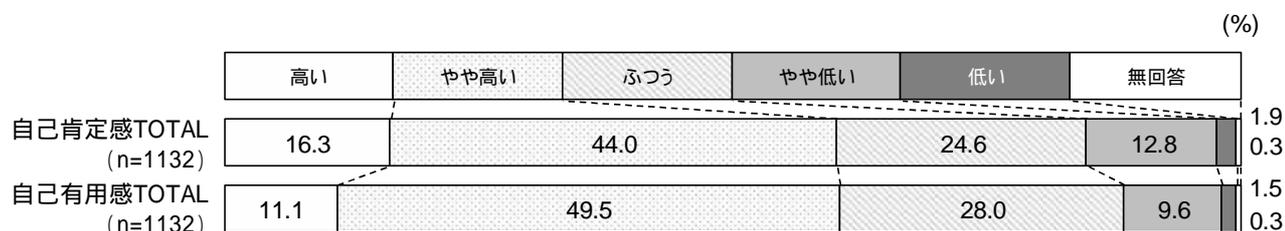


<自己肯定感・自己有用感>

自己肯定感に関する設問(「自分には自分らしさというものがあると思う」「目標を持って頑張っていると思う」「自分自身のこと好きだと思う」「私には得意なことがあると思う」「自分の意見が言えていると思う」)について、「すごくそう思う」を2点、「まあそう思う」を1点、「あまりそう思わない」を-1点、「ほとんどそう思わない」を-2点として回答者ごとに平均値を四捨五入し、2点を「高い」、1点「やや高い」、0点「ふつう」、-1点「やや低い」、-2点「低い」として集計した。 問14 ~

自己有用感に関する設問(「他の人から必要とされていると思う」「困っている人がいたら助けたいと思う」「自分の力を地域に役立てたいと思う」「自分の力を発揮したり、試したりする機会があると思う」「いつか自分にふさわしい仕事に出会えると思う、あるいは、すでに自分にふさわしい仕事に就いていると思う」)について、「すごくそう思う」を2点、「まあそう思う」を1点、「あまりそう思わない」を-1点、「ほとんどそう思わない」を-2点として回答者ごとに平均値を四捨五入し、2点を「高い」、1点「やや高い」、0点「ふつう」、-1点「やや低い」、-2点「低い」として集計した。 問14 ~

図 2-5 自己肯定感・自己有用感(単一回答)



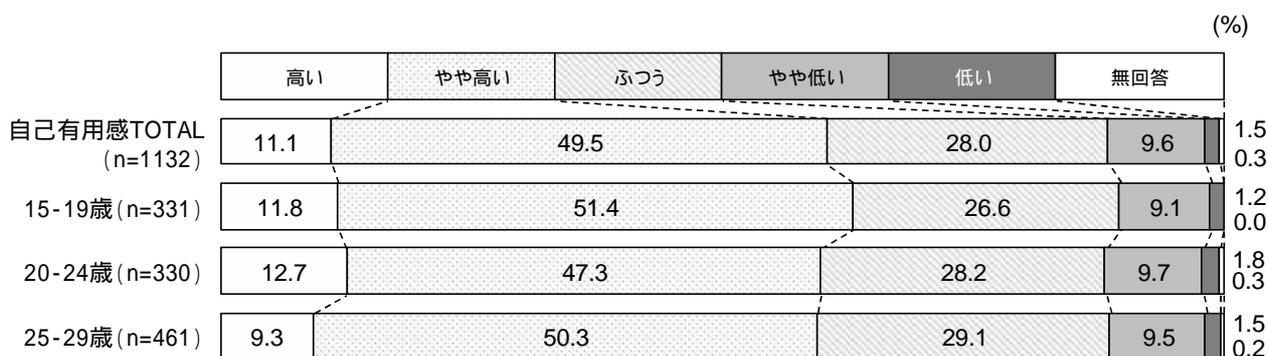
自己肯定感について、年齢別にみると、25~29歳でやや低くなっている。 問14 ~ 、問1

図 2-6 自己肯定感(単一回答) / 年齢別



自己有用感について、年齢別にみると、25~29歳でやや低くなっている。 問14 ~ 、問1

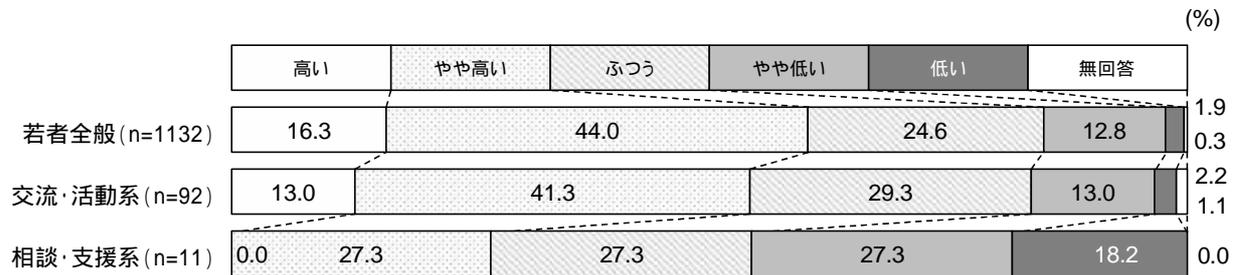
図 2-7 自己有用感(単一回答) / 年齢別



自己肯定感について、対象者別にみると、若者全般、交流・活動系と比較し、相談・支援系は低くなっている。

問 14 ~ 、対象者別

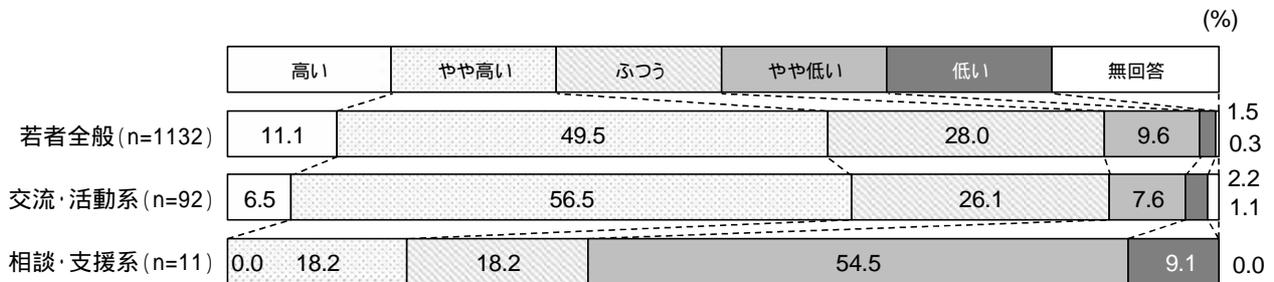
図 2-8 自己肯定感(単一回答) / 対象者別



自己有用感について、対象者別にみると、若者全般、交流・活動系と比較し、相談・支援系は低くなっている。

問 14 ~ 、対象者別

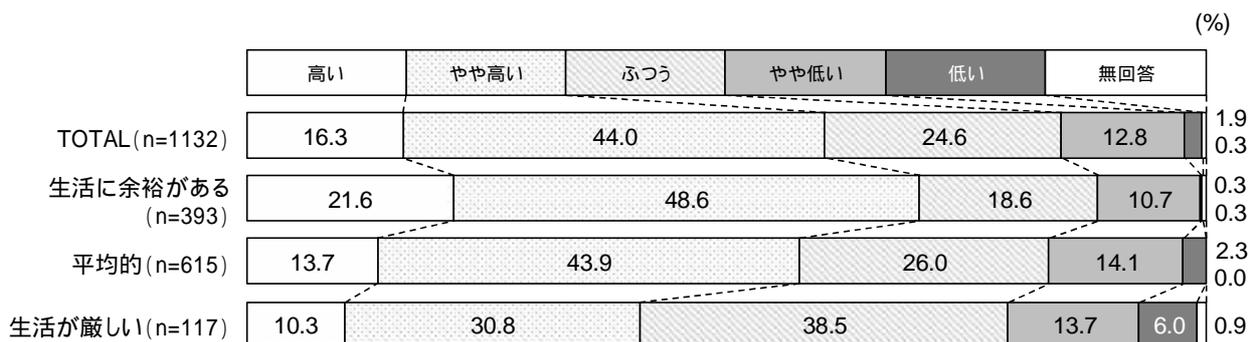
図 2-9 自己有用感(単一回答) / 対象者別



自己肯定感について、暮らし向き別にみると、生活に余裕があるほど、自己肯定感が高くなっている。 問 14

~ 、問 8

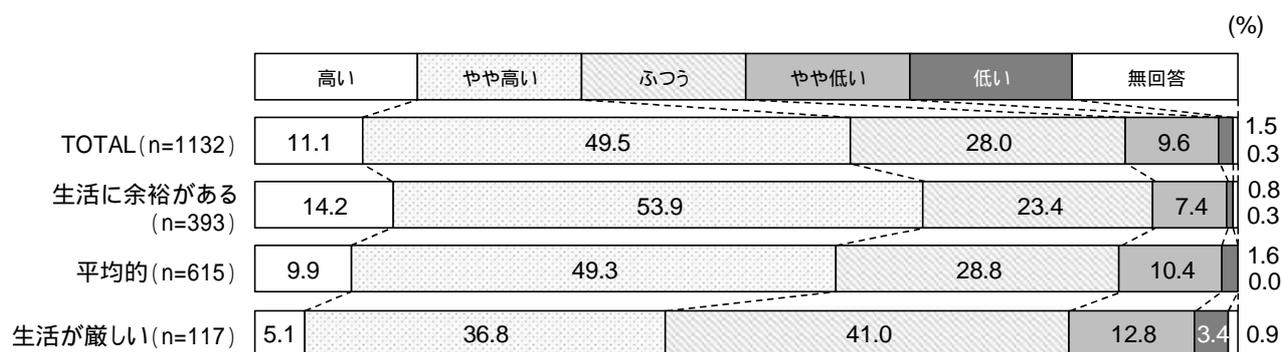
図 2-10 自己肯定感(単一回答) / 暮らし向き別



自己有用感について、暮らし向き別にみると、生活に余裕があるほど、自己有用感が高くなっている。問 14

～ 、問 8

図 2-11 自己有用感(単一回答) / 暮らし向き別

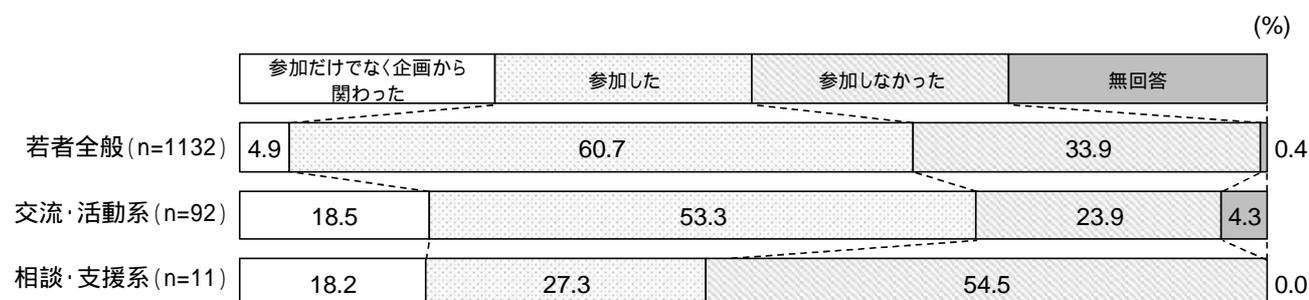


2-2. 若者の交流と活動の推進

(1) 指標 若者自らの主体的な活動

最近2～3年の間に、学校や仕事以外で「国や地方自治体の開催するイベント」「企業やNPO等、民間団体の開催するイベント」「地域行事（祭りなど）」「地域活動（サークル活動、NPO活動、清掃、防災活動など）」「ボランティア」へ参加した状況について尋ねた。回答を対象者別にみると、「参加だけでなく企画から関わった」の割合は、若者全般4.9%に対し、交流・活動系では18.5%と高くなっている*。問25～、対象者別

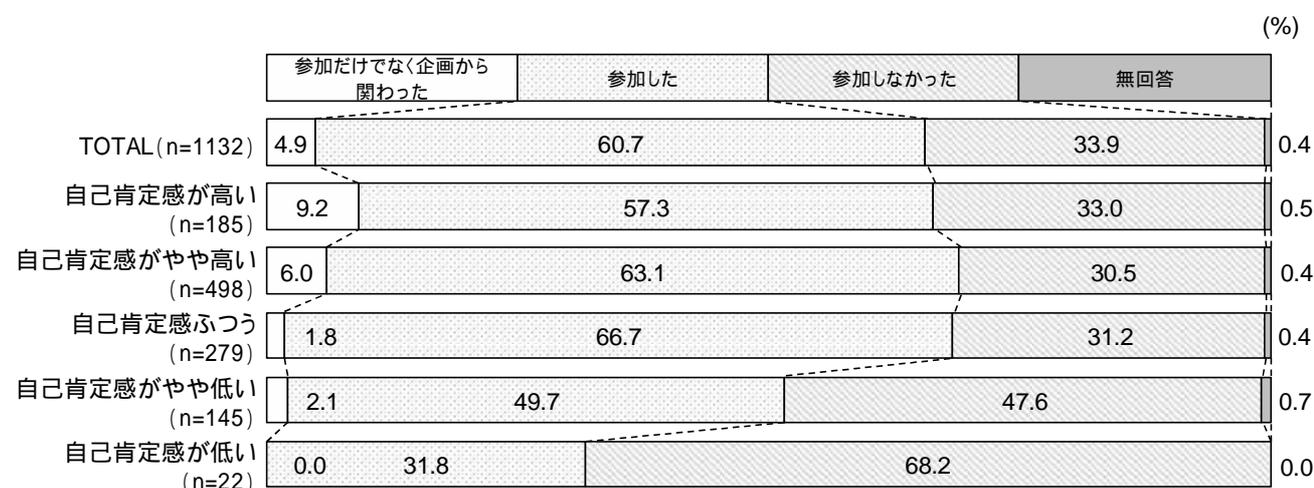
図 2-12 活動への参加状況 ～（単一回答）/対象者別



*いずれかの活動に「参加だけでなく企画から関わった」と回答している場合は、「参加だけでなく企画から関わった」とみなして割合を算出した。

活動への参加状況について、自己肯定感*別にみると、自己肯定感が低いほど「参加しなかった」割合が高く、自己肯定感が高い人では「参加だけでなく企画から関わった」割合が9.2%と高くなっている。問25～、問14～

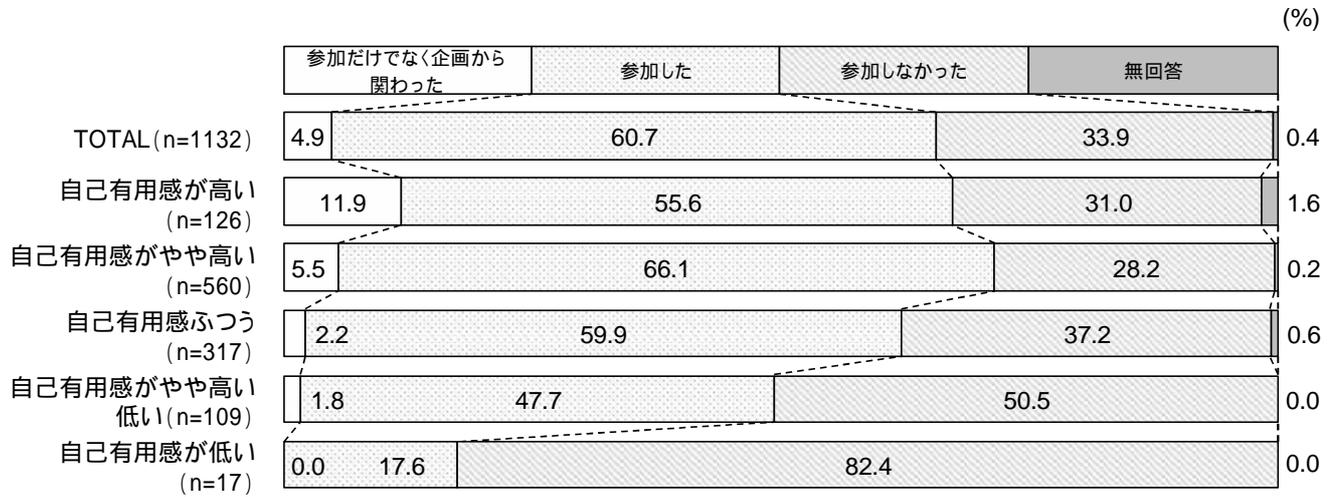
図 2-13 活動への参加状況 ～（単一回答）/自己肯定感別



2. 評価指標別の調査結果

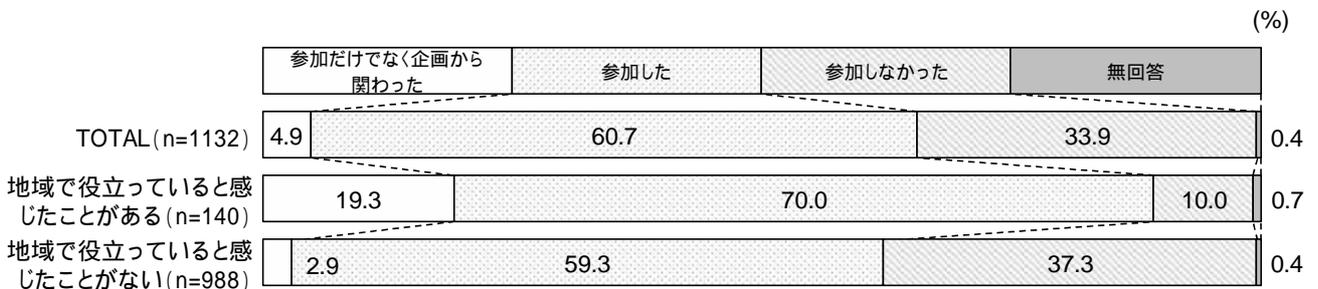
活動への参加状況について、自己有用感別にみると、自己有用感が低いほど「参加しなかった」割合が高く、自己有用感がやや高い人では「参加した」割合が66.1%、自己有用感が高い人では「参加だけでなく企画から関わった」割合が11.9%と高くなっている。問25～、問14～

図 2-14 活動への参加状況 ～ (単一回答) / 自己有用感別



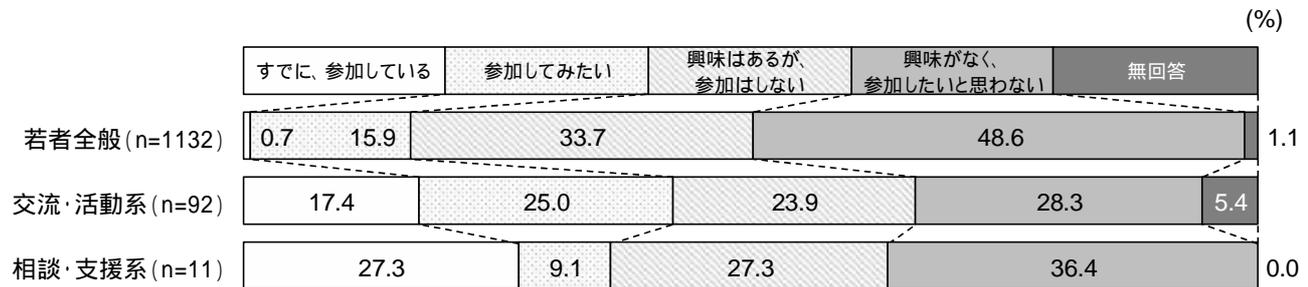
活動への参加状況について、地域で役に立っていると感じたことの有無別にみると、地域で役に立っていると感じたことがある人は「参加だけでなく企画から関わった」が19.3%、「参加した」が70.0%と高くなっている。問25～、問21

図 2-15 活動への参加状況 ～ (単一回答) / 地域で役に立っていると感じたことの有無別



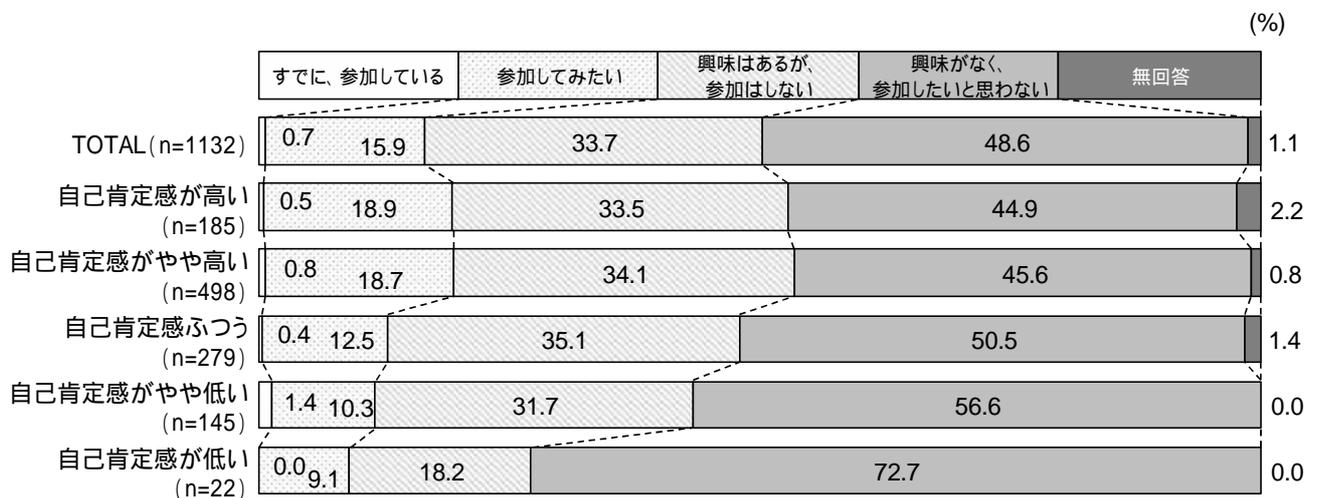
取組みへのスタッフや運営側としての参加意向について、対象者別にみると「すでに、参加している」割合は、交流・活動系が17.4%に対して、若者全般では0.7%と低くなっている。問27-1、対象者別

図 2-16 取組みへのスタッフや運営側としての参加意向(単一回答) / 対象者別



取組みへのスタッフや運営側としての参加意向について、自己肯定感別にみると、自己肯定感が低い人ほど「興味がなく、参加したいと思わない」割合が高くなっている。問27-1、問14 ~

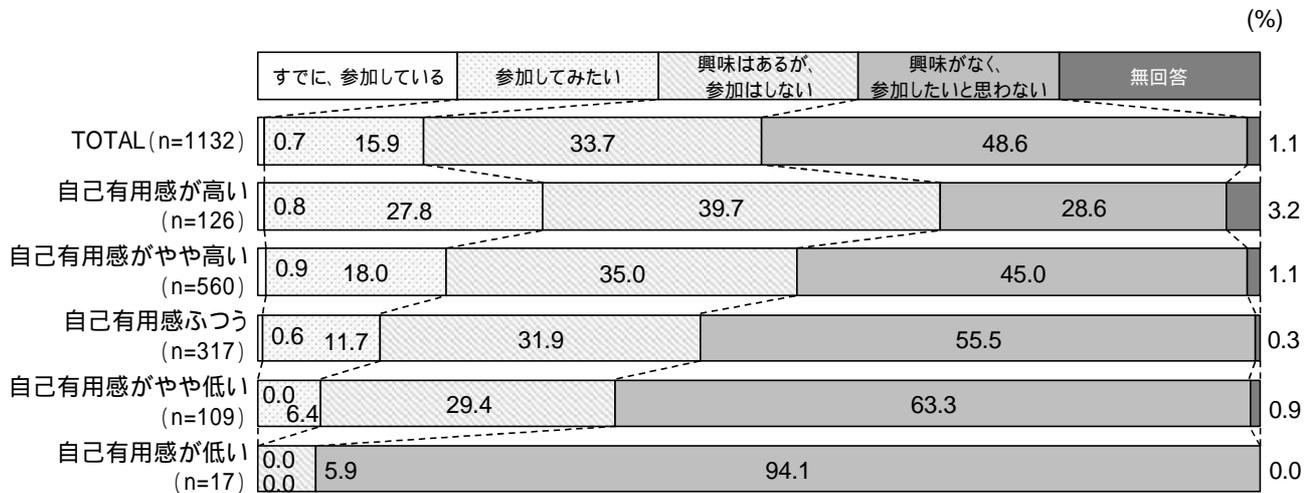
図 2-17 取組みへのスタッフや運営側としての参加意向(単一回答) / 自己肯定感別



2. 評価指標別の調査結果

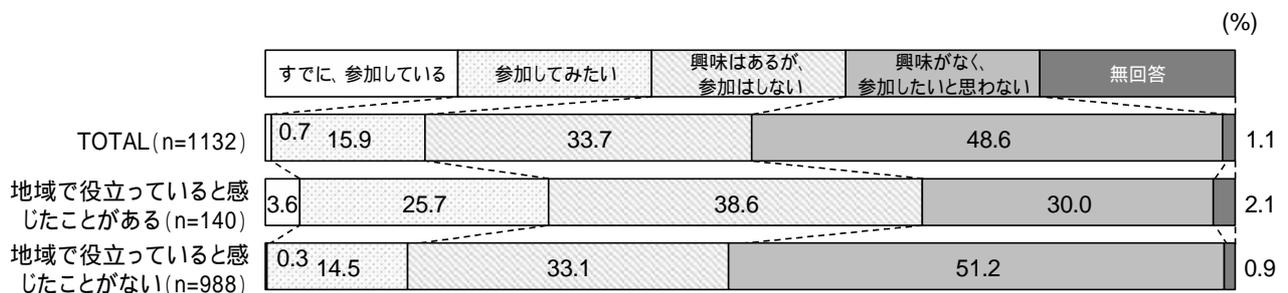
取組みへのスタッフや運営側としての参加意向について、自己有用感別にみると、自己有用感が低いほど「興味がなく、参加したいと思わない」割合が高くなっており、自己有用感が高い人では「参加してみたい」が27.8%と高くなっている。 問27-1、問14 ~

図 2-18 取組みへのスタッフや運営側としての参加意向(単一回答) / 自己有用感別



取組みへのスタッフや運営側としての参加意向について、地域で役に立っていると感じたことの有無別にみると、地域で役に立っていると感じたことがある人は「すでに参加している」が3.6%、「参加してみたい」が25.7%と高くなっている。 問27-1、問21

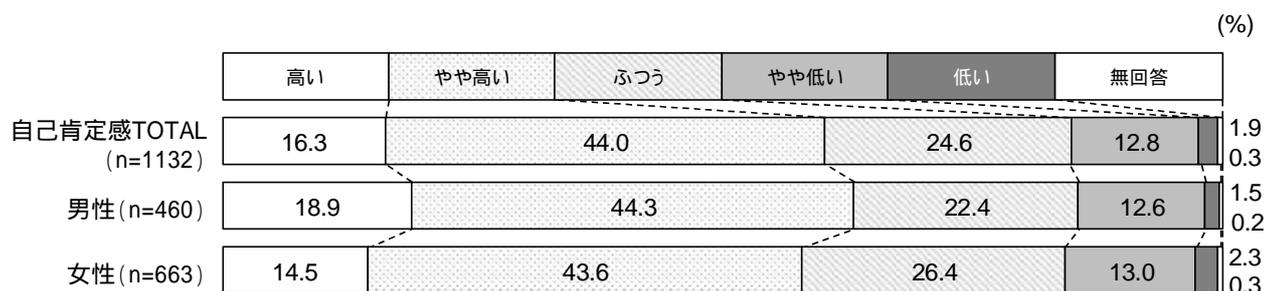
図 2-19 取組みへのスタッフや運営側としての参加意向(単一回答) / 地域で役に立っていると感じたことの有無別



(2) 指標 自立と成長を促す

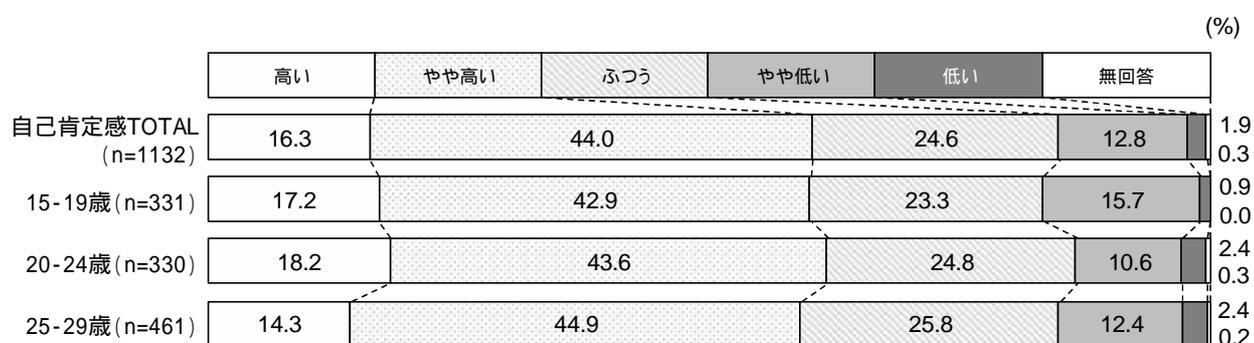
自己肯定感について、性別にみると、男性と女性で大きな差はみられない。問14 ~ 、問2

図 2-20 自己肯定感(単一回答) / 性別



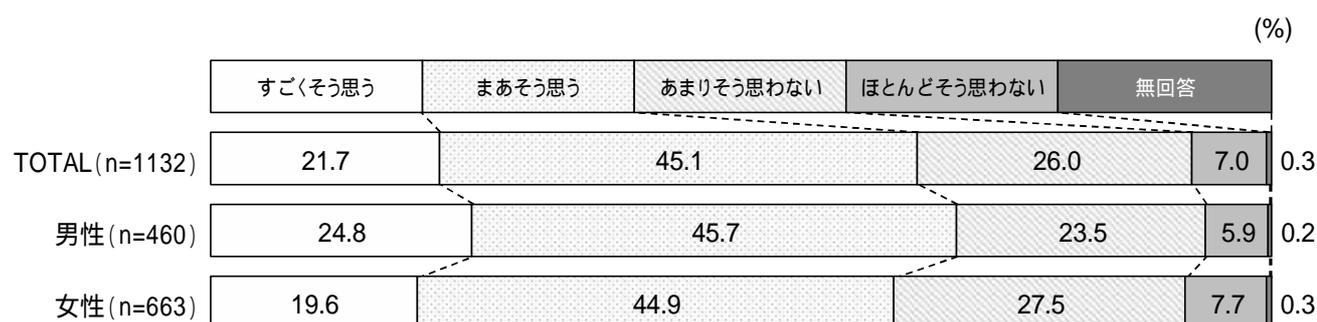
自己肯定感について、年齢別にみると、年代によって大きな差はみられない。問14 ~ 、問1

図 2-21 自己肯定感(単一回答) / 年齢別



「目標を持って頑張っていると思う」について、性別にみると「すごくそう思う」は男性が24.8%に対し、女性は19.6%となっている。問14 ~ 、問2

図 2-22 自己肯定感 目標を持って頑張っていると思う(単一回答) / 性別



「目標を持って頑張っていると思う」について、年齢別にみると、25～29歳では、「すごく思う」割合が17.1%と低くなっている。問14、問1

図 2-23 自己肯定感 目標を持って頑張っていると思う(単一回答) / 年齢別

	すごく思う	まあ思う	あまりそう思わない	ほとんどそう思わない	無回答	(%)
TOTAL (n=1132)	21.7	45.1	26.0	7.0	0.3	
15-19歳 (n=331)	24.5	40.5	29.0	6.0	0.0	
20-24歳 (n=330)	25.5	48.2	19.4	6.7	0.3	
25-29歳 (n=461)	17.1	46.6	28.2	7.8	0.2	

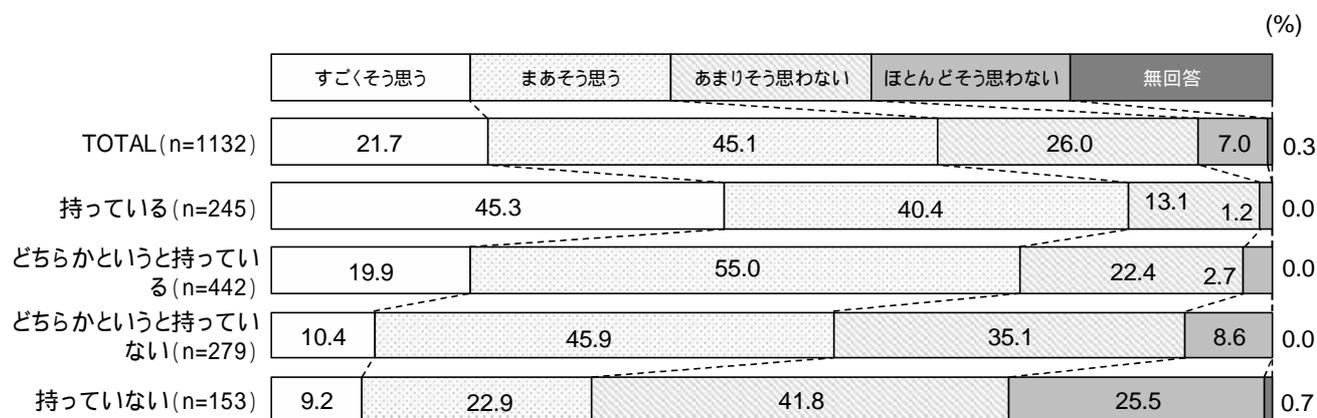
「目標を持って頑張っていると思う」について、活動への参加状況別にみると、「参加だけでなく企画から関わった」人は「すごく思う」割合が35.7%と高く、「参加しなかった」人は「ほとんどそう思わない」割合が9.6%と高くなっている。問14、問25～

図 2-24 自己肯定感 目標を持って頑張っていると思う(単一回答) / 活動への参加状況別

	すごく思う	まあ思う	あまりそう思わない	ほとんどそう思わない	無回答	(%)
TOTAL (n=1132)	21.7	45.1	26.0	7.0	0.3	
参加だけでなく企画から 関わった (n=56)	35.7	41.1	21.4	0.0	1.8	
参加した (n=687)	21.7	46.6	25.3	6.1	0.3	
参加しなかった (n=384)	19.8	43.0	27.6	9.6	0.0	

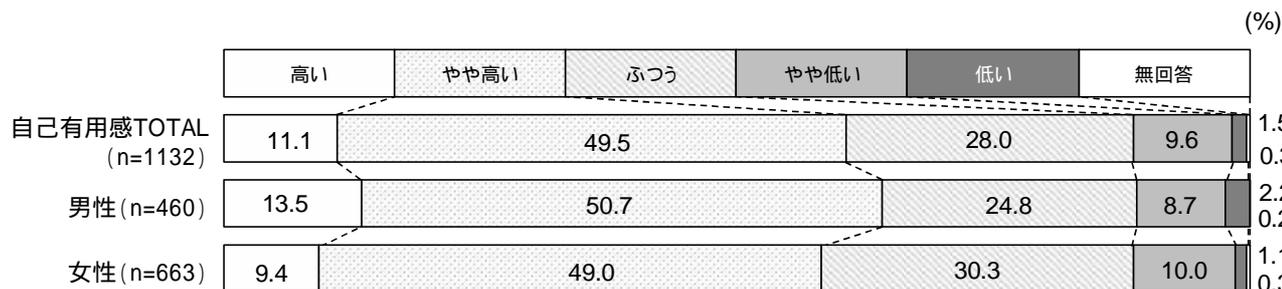
「目標を持って頑張っていると思う」について、20年後の自分の将来に明るいイメージを「持っている」人は「すごくそう思う」が45.3%、「どちらかというを持っている」人は「まあそう思う」が55.0%と高くなっている。問14、問22

図 2-25 自己肯定感 目標を持って頑張っていると思う(単一回答) / 自分の将来についてのイメージ別



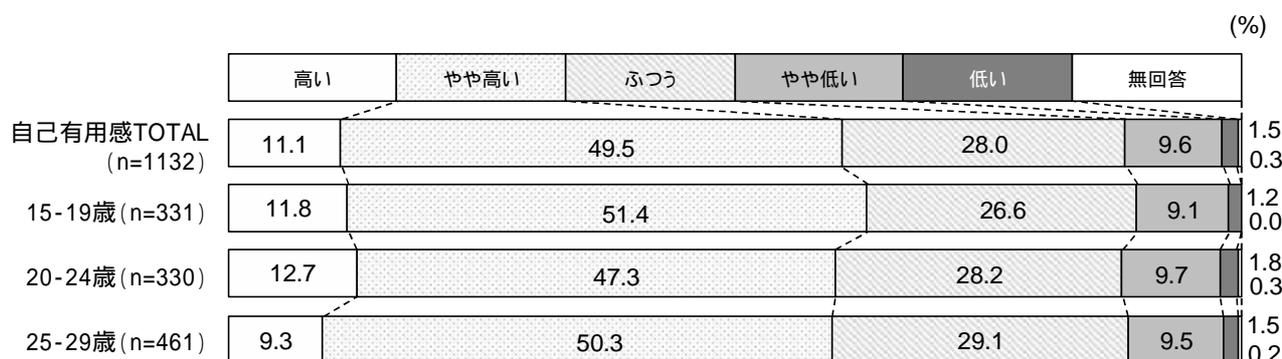
自己有用感について、性別にみると、男性は高い割合が13.5%と高い一方、女性は9.4%と低くなっている。問14 ~ 、問2

図 2-26 自己有用感(単一回答) / 性別



自己有用感について、年齢別にみると、年代によって大きな差はみられない。問14 ~ 、問1

図 2-27 自己有用感(単一回答) / 年齢別



「自分の力を発揮したり、試したりする機会があると思う」について、年齢別にみると、25～29歳では「ほとんどそう思わない」が9.1%と高くなっている。問14、問1

図 2-28 自己有用感 自分の力を発揮したり、試したりする機会があると思う(単一回答) / 年齢別

	すごく思う	まあ思う	あまりそう思わない	ほとんどそう思わない	無回答	(%)
TOTAL (n=1132)	21.7	42.5	28.4	7.0	0.4	
15-19歳 (n=331)	23.3	41.7	30.5	4.5	0.0	
20-24歳 (n=330)	25.2	41.5	26.7	6.4	0.3	
25-29歳 (n=461)	18.0	44.5	28.0	9.1	0.4	

「自分の力を発揮したり、試したりする機会があると思う」について、活動への参加状況別にみると、「参加だけでなく企画から関わった」人は「すごく思う」割合が39.3%と高くなっている。問14、問25～

図 2-29 自己有用感 自分の力を発揮したり、試したりする機会があると思う(単一回答) / 活動への参加状況別

	すごく思う	まあ思う	あまりそう思わない	ほとんどそう思わない	無回答	(%)
TOTAL (n=1132)	21.7	42.5	28.4	7.0	0.4	
参加だけでなく企画から関わった (n=56)	39.3	42.9	10.7	5.4	1.8	
参加した (n=687)	21.8	43.4	29.1	5.4	0.3	
参加しなかった (n=384)	18.8	41.4	29.7	10.2	0.0	

コミュニケーションの頻度について、年齢別にみると、15～19歳では「頻度が高い」が26.0%と高く、年齢が高くなるほど、コミュニケーション頻度が低くなっている。問16、問1

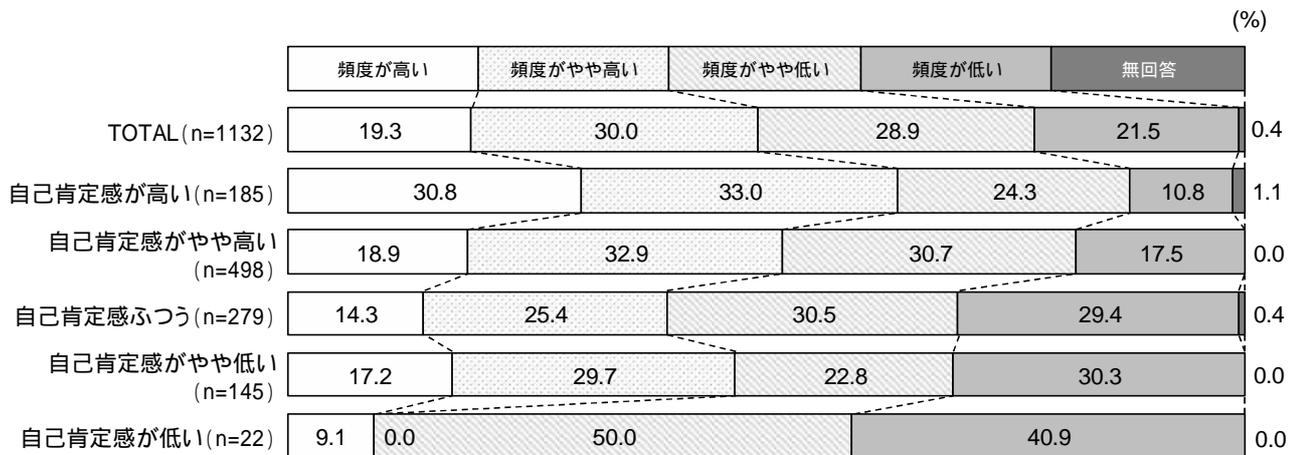
図 2-30 コミュニケーションの頻度(単一回答) / 年齢別

	頻度が高い	頻度がやや高い	頻度がやや低い	頻度が低い	無回答	(%)
TOTAL (n=1132)	19.3	30.0	28.9	21.5	0.4	
15-19歳 (n=331)	26.0	31.7	22.1	19.9	0.3	
20-24歳 (n=330)	20.9	28.2	30.9	19.7	0.3	
25-29歳 (n=461)	13.4	29.9	33.0	23.2	0.4	

*コミュニケーションの頻度について、普段の生活で、身近な人と、どのくらいコミュニケーションをとっているか「毎日」を5点、「週に数回」を4点、「月に数回」を3点、「年に数回」を2点、「ほとんどしない」を1点、「まったくしない」を0点として回答者ごとに平均値を算出し、2.5点以上を「頻度が高い」、2.0～2.5点未満を「頻度がやや高い」、1.5～2.0点未満を「頻度がやや低い」、1.5点未満を「頻度が低い」として集計した。問16

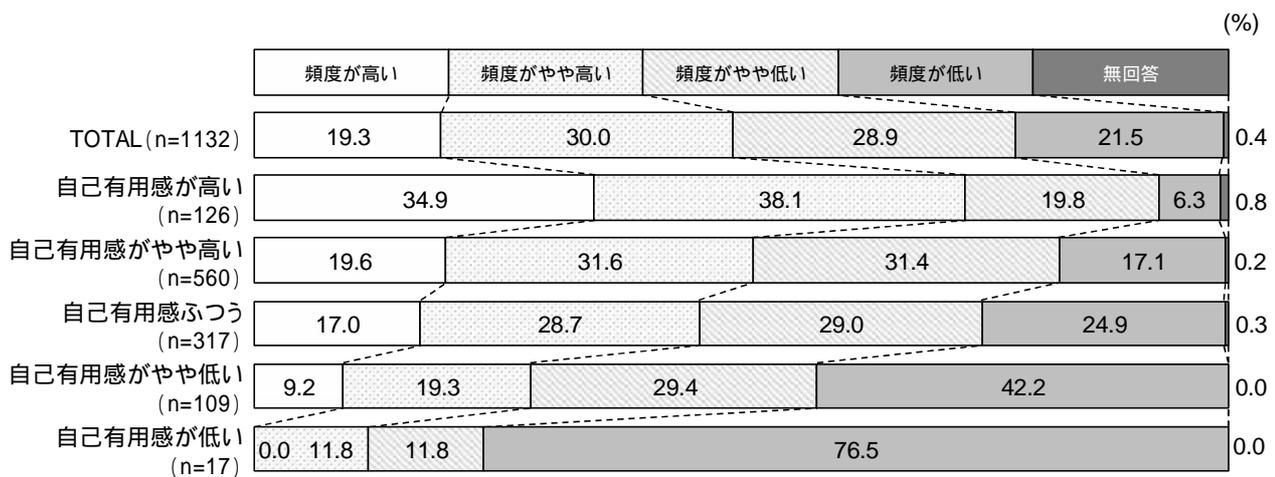
コミュニケーションの頻度について、自己肯定感別にみると、自己肯定感が低いほどコミュニケーションの頻度も低くなっている。問 16、問 14 ~

図 2-31 コミュニケーションの頻度(単一回答) / 自己肯定感別



コミュニケーションの頻度について、自己有用感別にみると、自己有用感が低いほどコミュニケーションの頻度が低く、自己有用感が高い人は特にコミュニケーションの頻度が高くなっている。問 16、問 14 ~

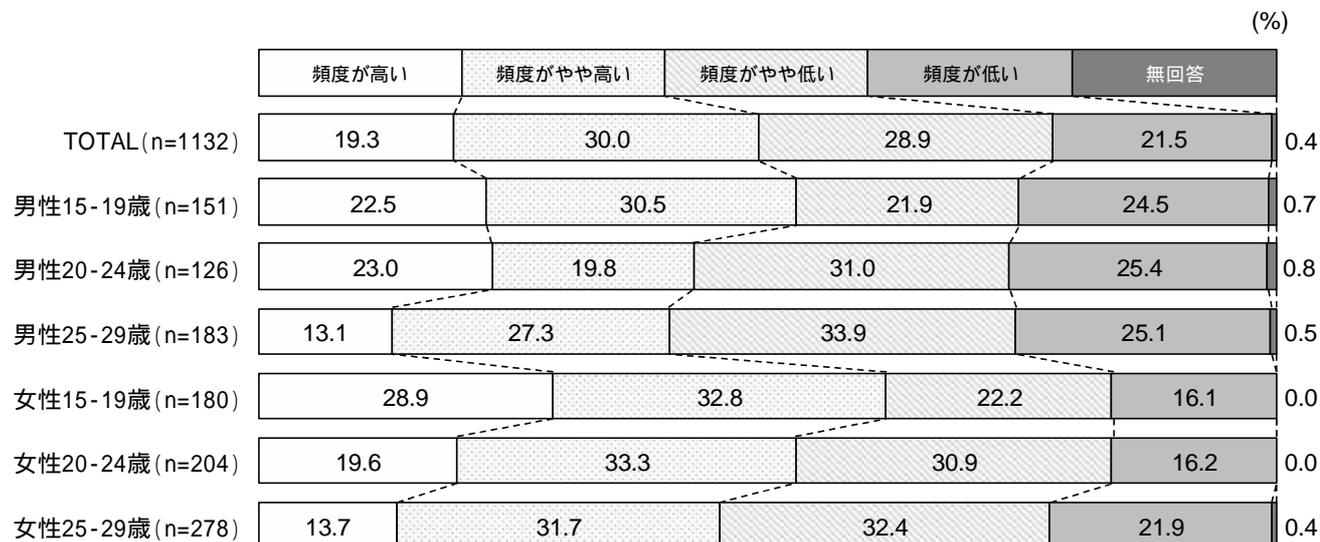
図 2-32 コミュニケーションの頻度(単一回答) / 自己有用感別



(3) 指標 世代を超えた出会いや交流の機会の積極的な創出

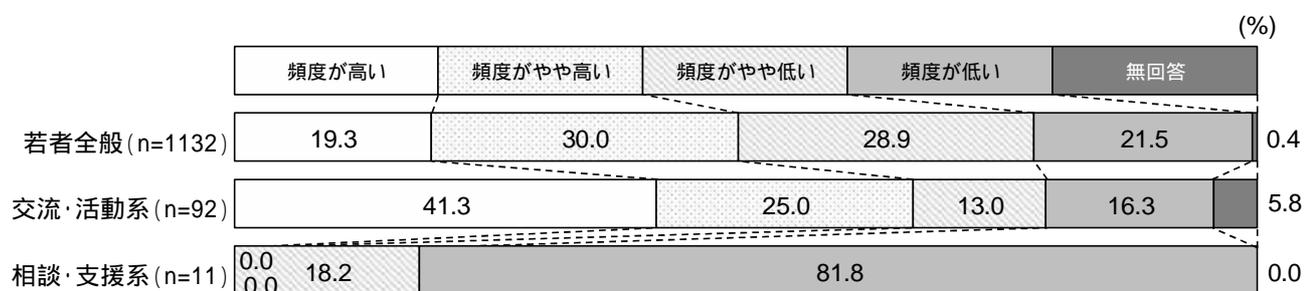
コミュニケーションの頻度について、性年代別にみると、女性15～19歳では「頻度がやや低い」以上の割合が83.9%と高く、「頻度が高い」が28.9%となっていることから、コミュニケーションの頻度が高いといえる。問16、性年齢別

図 2-33 コミュニケーションの頻度(単一回答) / 性年齢別



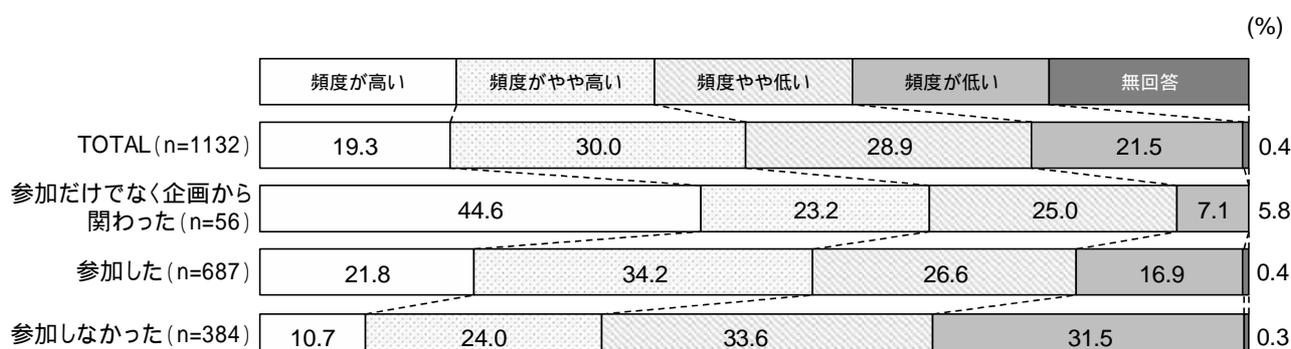
コミュニケーションの頻度について、対象者別にみると、「交流・活動系」ではコミュニケーションの頻度が高い割合が41.3%と高いのに対して、若者全般では19.3%となっている。問16、対象者別

図 2-34 コミュニケーションの頻度(単一回答) / 対象者別



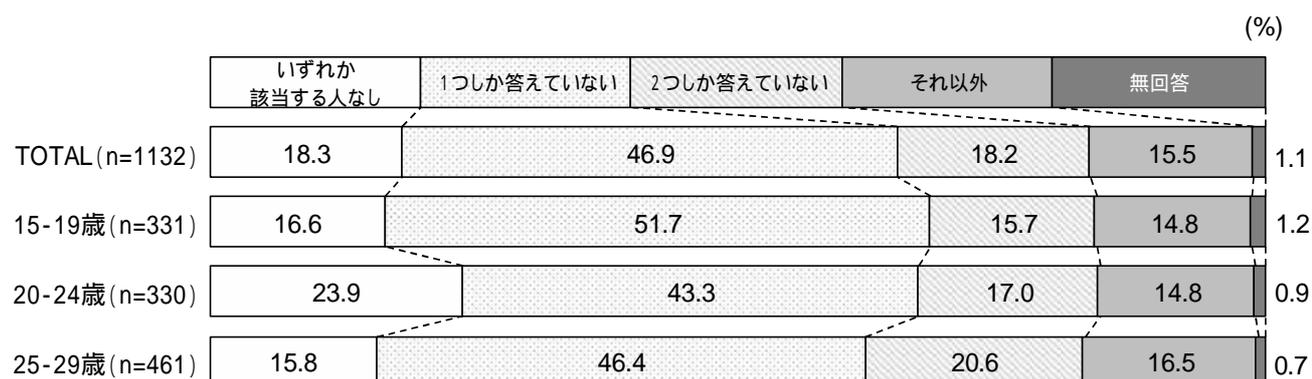
コミュニケーションの頻度について、活動への参加状況別にみると、「参加だけでなく企画から関わった」人はコミュニケーションの頻度が高いのに対して、「参加しなかった」人はコミュニケーションの頻度が低くなっている。問 16、問 25 ~

図 2-35 コミュニケーションの頻度(単一回答) / 活動への参加状況別 ~



話したり相談する相手について3つまで回答できるが2つ以下しか答えていない人について、年齢別にみると、20~24歳では「いずれか該当する人なし」が23.9%と高く、15~19歳では「1つしか答えていない」が51.7%と高くなっている。問 17、問 1

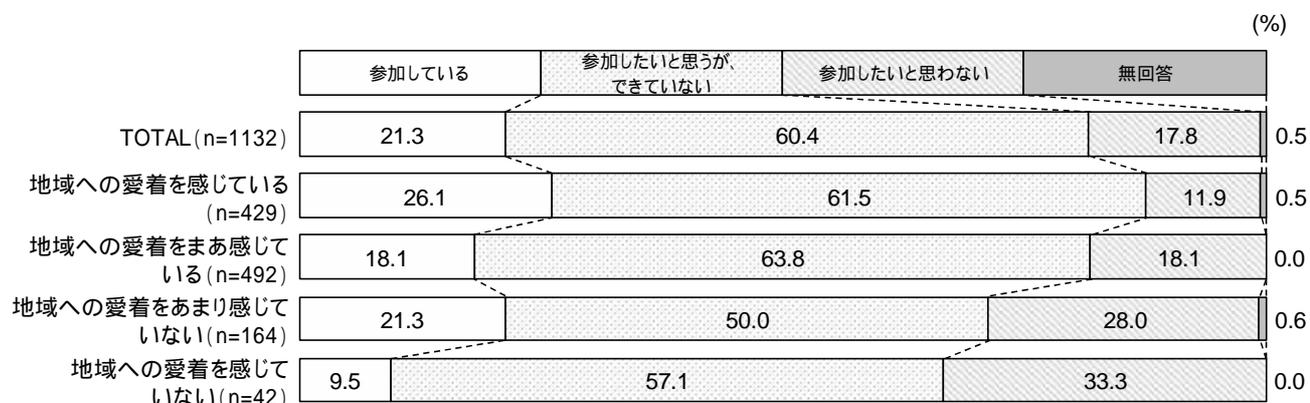
図 2-36 話したり相談する相手(単一回答) / 年齢別



(4) 指標 若者社会への参加・参画意識の醸成

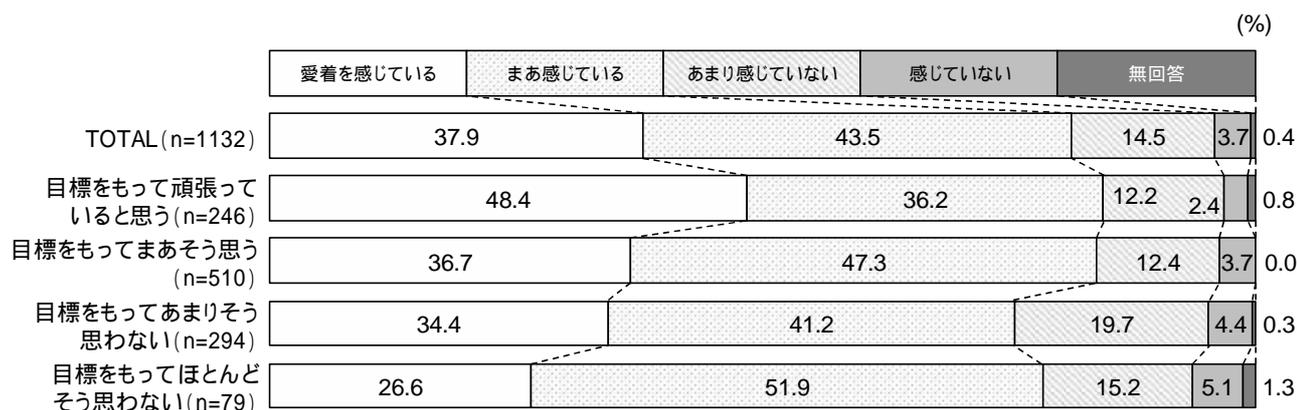
地域住民による主体的な活動について、住んでいる地域への愛着度別にみると、地域への愛着を「感じている」人は、主体的な活動に「参加している」割合が26.1%と高くなっている。問10、問9

図 2-37 地域住民による主体的な活動(単一回答) / 住んでいる地域への愛着度別



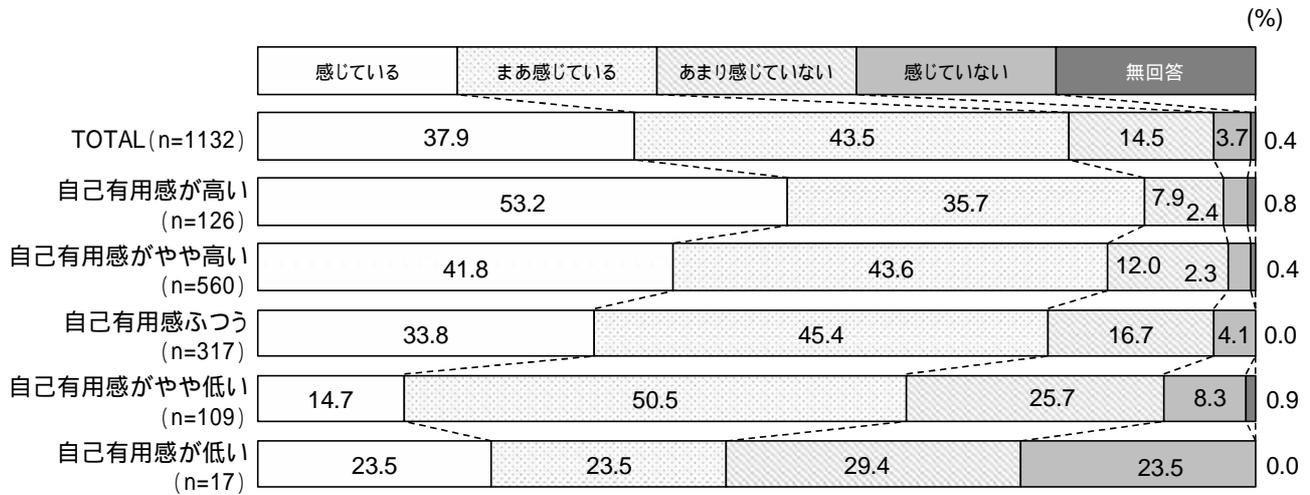
住んでいる地域への愛着について、自己肯定感(目標をもって頑張っていると思う)別にみると、目標を持って頑張っていると思うほど、住んでいる地域に愛着を「感じている」割合が高くなっている。問9、問14

図 2-38 住んでいる地域への愛着(単一回答) / 自己肯定感 目標を持って頑張っていると思う割合別



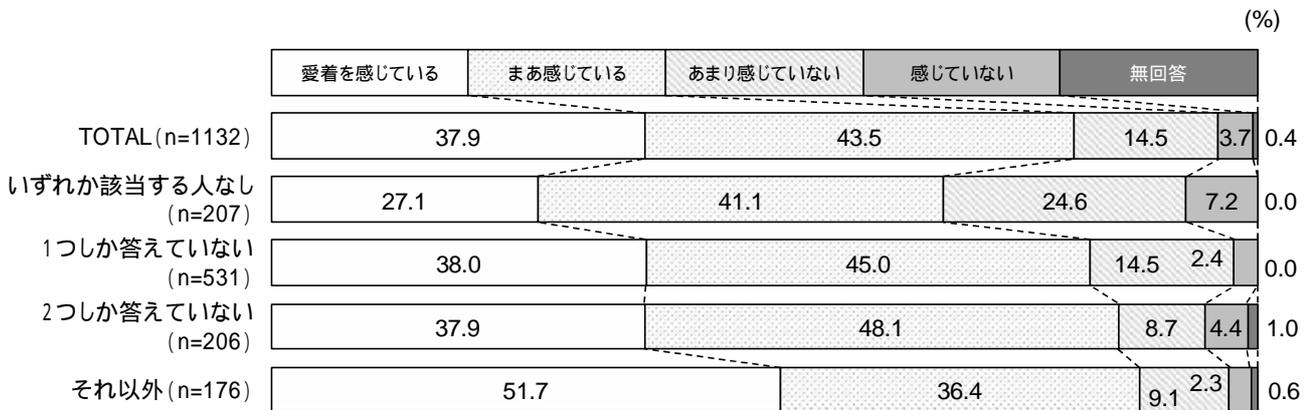
住んでいる地域への愛着について、自己有用感別にみると、自己有用感が高いほど、地域への愛着を「感じている」割合が高くなっている。問9、問14 ~

図 2-39 住んでいる地域への愛着(単一回答) / 自己有用感別



住んでいる地域への愛着について、「楽しいこと、うれしいこと」「悲しいこと、嫌だったこと」「他の人に言えない本音」等さまざまな場面で話したり相談したりする人がいるか尋ねる設問で、いずれかに「該当する人なし」との回答があった方は、地域への愛着を「感じていない」割合が7.2%と高くなっている。問9、問17

図 2-40 住んでいる地域への愛着(単一回答) / 話したり相談したりする相手別



2. 評価指標別の調査結果

住んでいる地域に愛着を感じる理由について、同居区別にみると、「配偶者と同居」では「緑や公園が多い」が57.0%と高く、「同居人はいない」では34.2%と低くなっている。また「父か母と同居」では「治安がよく、安全」が64.6%と高く、「上記以外の人と同居」では45.9%と低くなっている。問9-1、問4

図 2-41 住んでいる地域に愛着を感じる理由(複数回答)/同居4区分別

	n=	住んでいる人がやさしくて親切	住んでいる人のモラルが高い	住んでいる人同士に温かいつながりがある	治安がよく、安全	街がきれい	緑や公園が多い	気に入ったお店や商店街がある	利用している電車や沿線の街が好き	お祭りや地域のイベントが好き	有名人が多く住んでいる	テレビやニュースでよく話題になる	このまちにステータスを感じている	物価が安い	その他	無回答
TOTAL	921	21.4	22.0	9.6	61.7	35.4	42.0	40.0	51.9	11.8	6.3	6.6	16.6	1.2	5.9	0.1
父か母と同居	584	21.2	22.3	11.1	64.6	35.3	42.0	37.2	51.5	13.4	8.0	5.8	16.1	0.9	6.5	0.0
同居人はいない	161	17.4	19.9	7.5	60.9	38.5	34.2	46.0	56.5	6.2	1.9	7.5	16.8	3.1	5.0	0.6
配偶者と同居	114	27.2	27.2	6.1	57.0	31.6	57.0	42.1	46.5	13.2	4.4	7.9	18.4	0.9	5.3	0.0
上記以外の人と同居	61	23.0	16.4	6.6	45.9	36.1	36.1	47.5	54.1	9.8	3.3	9.8	18.0	0.0	3.3	0.0

住んでいる地域に愛着を感じる理由について、現在の状況別にみると、学生では「お祭りや地域のイベントが好き」が15.9%と高く、正規職員(自営業を含む)で9.0%と低くなっている。また非正規職員/パート、アルバイトでは「治安がよく、安全」が50.0%と低くなっている。問9-1、問5

図 2-42 住んでいる地域に愛着を感じる理由(複数回答)/現在の状況別

	n=	住んでいる人がやさしくて親切	住んでいる人のモラルが高い	住んでいる人同士に温かいつながりがある	治安がよく、安全	街がきれい	緑や公園が多い	気に入ったお店や商店街がある	利用している電車や沿線の街が好き	お祭りや地域のイベントが好き	有名人が多く住んでいる	テレビやニュースでよく話題になる	このまちにステータスを感じている	物価が安い	その他	無回答
TOTAL	921	21.4	22.0	9.6	61.7	35.4	42.0	40.0	51.9	11.8	6.3	6.6	16.6	1.2	5.9	0.1
学生	396	24.0	19.2	11.9	62.6	34.8	41.4	38.9	48.0	15.9	9.3	6.1	15.2	0.8	4.8	0.0
正規職員(自営業を含む)	367	18.0	26.2	7.4	62.7	37.3	40.6	40.1	55.0	9.0	4.4	7.4	18.5	1.4	6.0	0.0
非正規職員/パート、アルバイト	98	18.4	15.3	11.2	50.0	24.5	43.9	41.8	55.1	10.2	2.0	5.1	16.3	2.0	7.1	1.0
専業主婦(夫)	24	37.5	29.2	8.3	79.2	41.7	62.5	45.8	50.0	8.3	8.3	8.3	20.8	0.0	4.2	0.0
無業者/その他	36	25.0	25.0	2.8	61.1	47.2	44.4	41.7	55.6	2.8	2.8	8.3	11.1	2.8	13.9	0.0

*住んでいる地域への愛着について「感じている」「まあ感じている」と回答された方に理由を尋ねた。

住んでいる地域に愛着を感じる理由について、学校種別ごとの在学等状況別にみると次のとおりである。問9-1、問7

図 2-43 住んでいる地域に愛着を感じる理由(複数回答)/学校種別ごとの在学等状況別

	n=	住んでいる人がやさしくて親切	住んでいる人のモラルが高い	住んでいる人同士に温かいつながりがある	治安がよく、安全	街がきれい	緑や公園が多い	気に入ったお店や商店街がある	利用している電車や沿線の街が好き	お祭りや地域のイベントが好き	有名人が多く住んでいる	テレビやニュースでよく話題になる	このまちにステータスを感じている	物価が安い	その他	無回答
TOTAL	921	21.4	22.0	9.6	61.7	35.4	42.0	40.0	51.9	11.8	6.3	6.6	16.6	1.2	5.9	0.1
中学校卒業	7	0.0	14.3	0.0	71.4	42.9	42.9	57.1	42.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
高等学校・高専在学中	162	25.9	11.7	15.4	55.6	28.4	49.4	34.6	46.3	25.3	13.6	5.6	11.7	1.2	3.7	0.0
高等学校・高専中退	4	50.0	0.0	0.0	75.0	25.0	50.0	25.0	75.0	25.0	25.0	0.0	25.0	0.0	0.0	0.0
高等学校・高専卒業	44	27.3	13.6	13.6	54.5	31.8	47.7	38.6	61.4	18.2	4.5	13.6	15.9	0.0	9.1	0.0
専門学校・各種学校/短期大学/大学/大学院在学中	229	22.3	24.5	9.2	67.7	38.9	36.2	42.8	49.8	9.2	6.6	6.1	17.5	0.4	6.1	0.0
専門学校・各種学校/短期大学/大学/大学院中退	15	20.0	40.0	13.3	60.0	33.3	46.7	53.3	60.0	0.0	0.0	6.7	13.3	0.0	6.7	0.0
専門学校・各種学校/短期大学/大学/大学院卒業	340	19.4	25.9	7.9	62.4	37.1	42.1	43.2	55.9	9.1	3.2	7.6	17.9	2.1	6.2	0.3

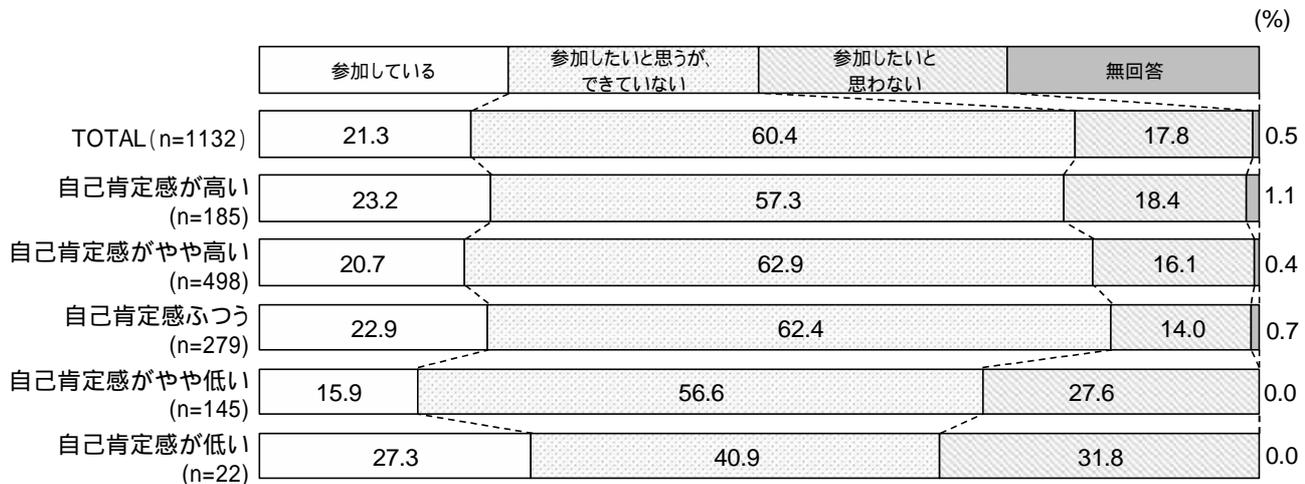
住んでいる地域に愛着を感じる理由について、地域で役に立っていると感じたことの有無別にみると、地域で役に立っていると感じたことがある人は、「住んでいる人がやさしくて親切」「住んでいる人同士に温かいつながりがある」「お祭りや地域のイベントが好き」の割合が高くなっている。問9-1、問21

図 2-44 住んでいる地域に愛着を感じる理由(複数回答)/地域で役に立っていると感じたことの有無別

	n=	住んでいる人がやさしくて親切	住んでいる人のモラルが高い	住んでいる人同士に温かいつながりがある	治安がよく、安全	街がきれい	緑や公園が多い	気に入ったお店や商店街がある	利用している電車や沿線の街が好き	お祭りや地域のイベントが好き	有名人が多く住んでいる	テレビやニュースでよく話題になる	このまちにステータスを感じている	物価が安い	その他	無回答
TOTAL	921	21.4	22.0	9.6	61.7	35.4	42.0	40.0	51.9	11.8	6.3	6.6	16.6	1.2	5.9	0.1
地域で役立っていると感じたことがある	129	37.2	31.0	20.2	62.8	41.9	51.2	48.8	58.1	27.1	12.4	11.6	22.5	3.9	4.7	0.0
地域で役立っていると感じたことがない	790	18.7	20.5	7.7	61.4	34.4	40.4	38.5	50.9	9.2	5.3	5.8	15.7	0.8	6.1	0.1

地域住民による主体的な活動（緑化・植花活動、資源回収などのリサイクル運動、高齢者や障害者などのための活動など）への参加状況*について、自己肯定感別にみると、自己肯定感が低いほど「参加したいと思わない」割合が高くなっている。問10、問14 ~

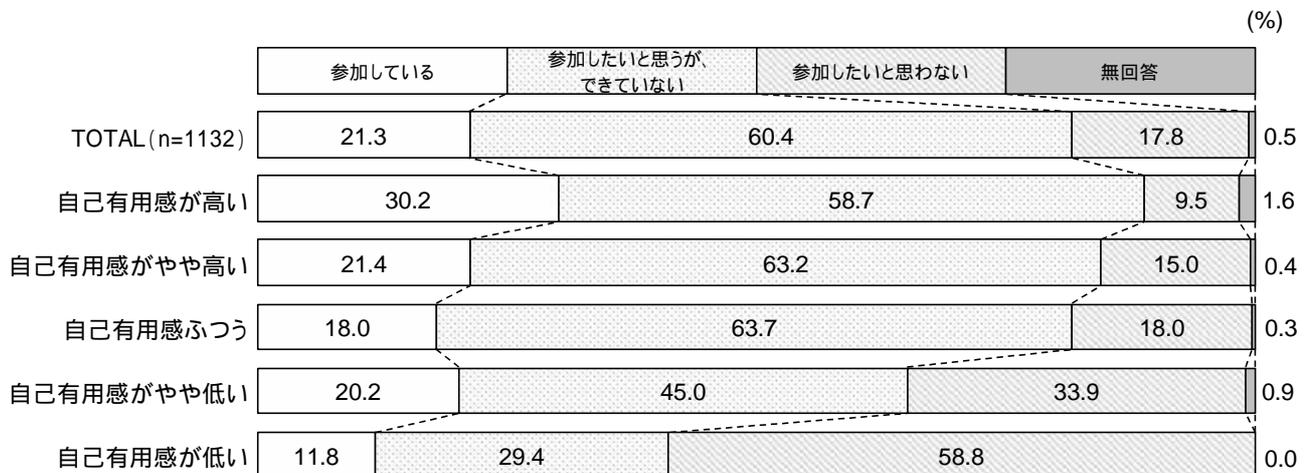
図 2-45 地域住民による主体的な活動(単一回答) / 自己肯定感別



*いずれかの活動に「参加している」と回答している場合は、「参加している」とみなして割合を算出した。

地域住民による主体的な活動について、自己有用感別にみると、自己有用感が低いほど「参加したいと思わない」割合が高くなっている。問10、問14 ~

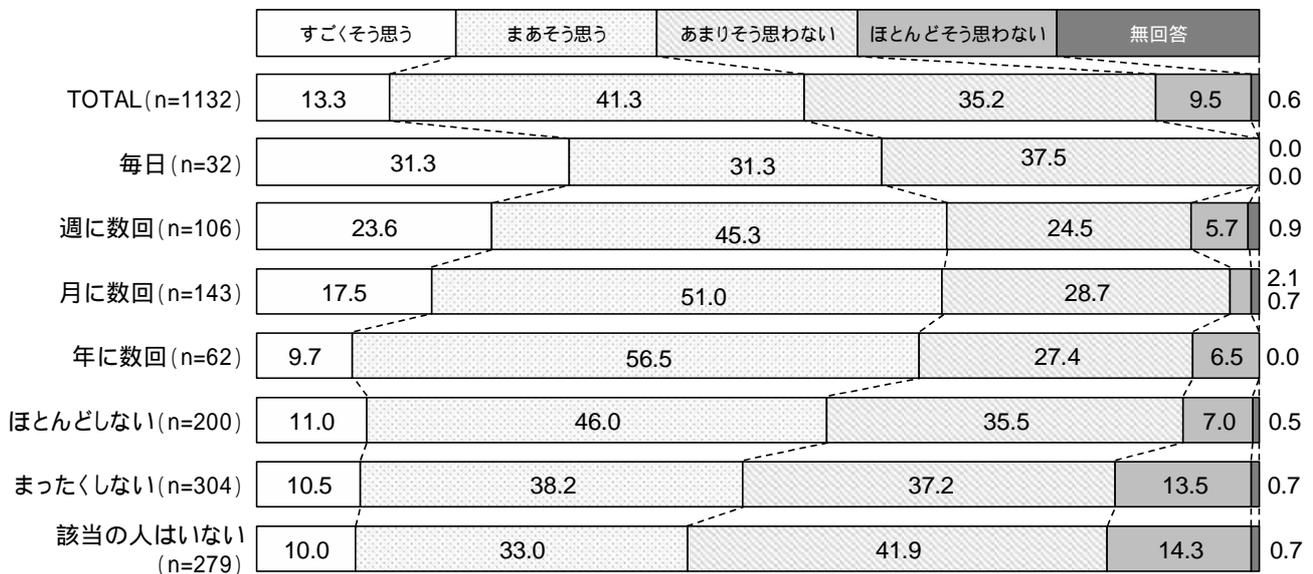
図 2-46 地域住民による主体的な活動(単一回答) / 自己有用感別



2. 評価指標別の調査結果

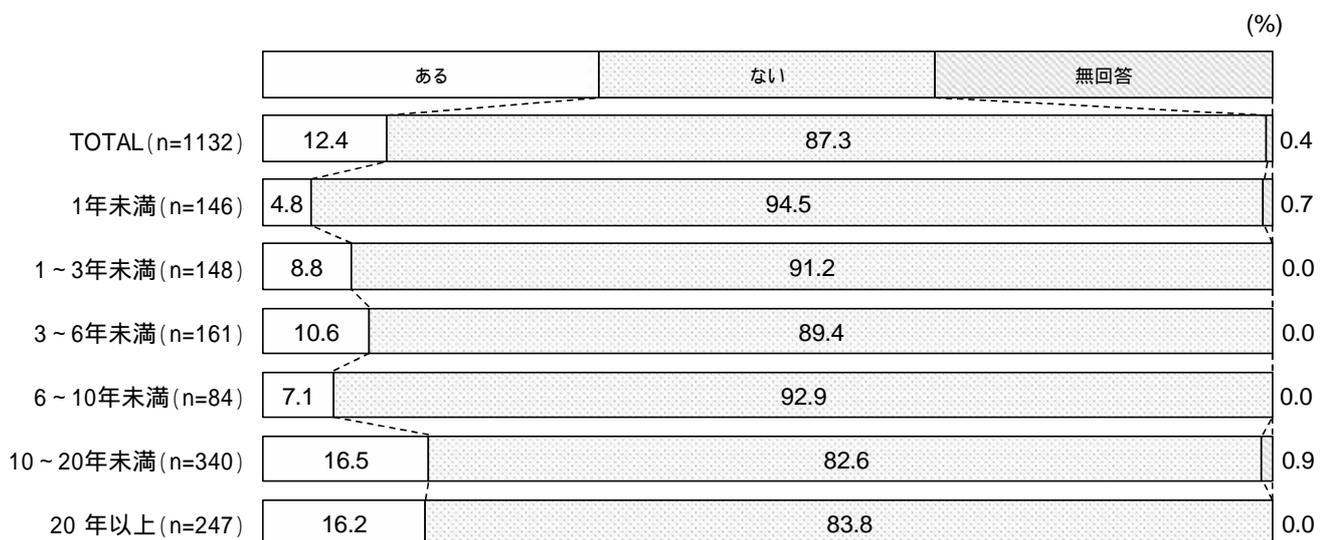
「自分の力を地域に役立てたいと思う」について、コミュニケーションの頻度「近所・地域の人」別にみると、「毎日（コミュニケーションを取っている）」と答えた人は「すごくそう思う」が31.3%、「週に数回」と答えた人は同23.6%と高くなっている。「まったくしない」と答えた人は「ほとんどそう思わない」が13.5%と高くなっている。 問14、問16

図 2-47 自己有用感 自分の力を地域に役立てたいと思う(単一回答) / コミュニケーションの頻度別 近所・地域の人 (%)



地域で役に立っていると感じたことの有無について、居住年数別にみると、居住年数が10年以上では「ある」の割合が高くなっている。 問21、問3

図 2-48 地域で役に立っていると感じたことの有無(単一回答) / 居住年数別 (%)



(5) 指標 安心して中高生世代が地域で過ごせる場や機会の拡充

居場所がある割合について、性年齢別にみると、女性 15～19 歳では「安心して過ごせる場所」「心をゆるせる仲間と会える場所」「普段の生活を忘れられる場所」の割合が高く、男性 25～29 歳では「好きなことが自由にできる場所」の割合が低くなっている。問 11、性年齢別

図 2-49 居場所がある割合(単一回答)/性年齢別

	n=	安心して過ごせる場所	一人になれる、他人に干渉されない場所	好きなことが自由にできる場所	心をゆるせる仲間と会える場所	自分を受け入れてくれる場所	普段の生活を忘れられる場所	あてはまるような居場所はない	無回答	(%)
TOTAL	1132	87.4	73.1	71.0	72.3	76.5	49.0	5.0	0.5	
男性15-19歳	151	86.8	68.2	67.5	74.2	80.1	47.7	7.3	0.7	
男性20-24歳	126	81.7	77.8	73.0	69.0	70.6	49.2	5.6	0.0	
男性25-29歳	183	86.9	65.6	61.7	65.6	73.2	41.5	6.6	0.0	
女性15-19歳	180	95.0	76.1	76.7	83.9	84.4	58.9	1.1	0.6	
女性20-24歳	204	86.8	75.5	75.5	69.1	71.6	46.1	5.9	1.0	
女性25-29歳	278	86.3	74.1	70.9	72.3	77.7	49.6	4.7	0.4	

*問 11 の「居場所」には、家や学校、職場（アルバイト先含む）を含む。

居場所がある割合について、居住年数別にみると、10年以上では「安心して過ごせる場所」「心をゆるせる仲間と会える場所」「自分を受け入れてくれる場所」の割合が高くなっている。問11、問3

図 2-50 居場所がある割合(単一回答) / 居住年数別

	n=	安心して過ごせる場所	な一人になれる、他人に干渉されない場所	好きなことが自由にできる場所	心をゆるせる仲間と会える場所	自分を受け入れてくれる場所	普段の生活を忘れられる場所	あてはまるような居場所はない	無回答	(%)
TOTAL	1132	87.4	73.1	71.0	72.3	76.5	49.0	5.0	0.5	
1年未満	146	81.5	75.3	71.2	66.4	72.6	45.2	4.1	0.0	
1～3年未満	148	85.8	75.0	70.3	71.6	70.9	50.7	6.1	0.0	
3～6年未満	161	84.5	76.4	72.0	67.7	72.0	49.7	5.0	0.6	
6～10年未満	84	90.5	73.8	67.9	78.6	85.7	48.8	3.6	0.0	
10～20年未満	340	91.5	72.4	73.2	77.6	80.9	51.5	4.1	0.6	
20年以上	247	87.9	70.0	69.6	70.9	76.9	47.0	6.9	0.0	

居場所がある割合について、子供との同居有無別にみると、子供と同居していないほうが「一人になれる、他人に干渉されない場所」「好きなことが自由にできる場所」「心をゆるせる仲間と会える場所」の割合が高くなっている。問11、問4

図 2-51 居場所がある割合(単一回答) / 子供との同居有無別

	n=	安心して過ごせる場所	一人になれる、他人に干渉されない場所	好きなことが自由にできる場所	心をゆるせる仲間と会える場所	自分を受け入れてくれる場所	普段の生活を忘れられる場所	あてはまるような居場所はない	無回答	(%)
TOTAL	1132	87.4	73.1	71.0	72.3	76.5	49.0	5.0	0.5	
子供と同居している	56	92.9	46.4	42.9	58.9	76.8	39.3	3.6	0.0	
子供と同居していない	1071	87.4	74.7	72.7	73.3	76.8	49.7	5.0	0.3	

居場所がある割合について、同居区分別にみると、同居人がいないと「一人になれる、他人に干渉されない場所」「好きなことが自由にできる場所」の割合が高くなっている。問 11、問 4

図 2-52 居場所がある割合(単一回答) / 同居4区分別

	n=	安心して過ごせる場所	一人になれる、他人に干渉されない場所	好きなことが自由にできる場所	心をゆるせる仲間と会える場所	自分を受け入れてくれる場所	普段の生活を忘れられる場所	あてはまるような居場所はない	無回答	(%)
TOTAL	1132	87.4	73.1	71.0	72.3	76.5	49.0	5.0	0.5	
父か母と同居	690	90.4	72.2	71.7	75.5	80.1	50.4	4.9	0.3	
同居人はいない	221	82.4	86.4	81.0	71.5	66.5	47.5	4.5	0.0	
配偶者と同居	135	89.6	61.5	60.0	65.9	83.0	46.7	4.4	0.0	
上記以外の人と同居	81	75.3	66.7	59.3	61.7	65.4	46.9	7.4	1.2	

居場所がある割合について、現在の状況別にみると、「安心して過ごせる場所」「心をゆるせる仲間と会える場所」「自分を受け入れてくれる場所」と回答した学生の割合が高くなっている。問 11、問 5

図 2-53 居場所がある割合(単一回答) / 現在の状況 5 区分別

	n=	安心して過ごせる場所	な一人になれる、他人に干渉されない場所	好きなことが自由にできる場所	心をゆるせる仲間と会える場所	自分を受け入れてくれる場所	普段の生活を忘れられる場所	あてはまるような居場所はない	無回答	(%)
TOTAL	1132	87.4	73.1	71.0	72.3	76.5	49.0	5.0	0.5	
学生	476	91.4	74.6	74.2	77.7	81.1	52.3	3.6	0.6	
正規職員(自営業を含む)	465	84.7	73.8	69.7	70.5	75.3	49.0	6.0	0.0	
非正規職員/パート、アルバイト	117	82.1	66.7	68.4	64.1	65.8	39.3	7.7	0.0	
専業主婦(夫)	27	92.6	59.3	59.3	66.7	77.8	44.4	7.4	0.0	
無業者/その他	43	88.4	79.1	69.8	62.8	72.1	44.2	2.3	0.0	

居場所がある割合について、学校種別ごとの在学等の状況別にみると、「好きなことが自由にできる場所」「心をゆるせる仲間と会える場所」と回答した専門学校・各種学校/短期大学/大学/大学院在学中の割合が高くなっている。問11、問7

図 2-54 居場所がある割合(単一回答)/学校種別ごとの在学等状況別

	n=	安心して過ごせる場所	一人になれる、他人に干渉されない場所	好きなことが自由にできる場所	心をゆるせる仲間と会える場所	自分を受け入れてくれる場所	普段の生活を忘れられる場所	あてはまるような居場所はない	無回答	(%)
TOTAL	1132	87.4	73.1	71.0	72.3	76.5	49.0	5.0	0.5	
中学校卒業	7	71.4	85.7	57.1	57.1	57.1	28.6	0.0	0.0	
高等学校・高専在学中	198	89.9	69.7	70.2	77.3	80.8	52.0	4.5	1.0	
高等学校・高専中退	4	100.0	50.0	75.0	50.0	75.0	25.0	0.0	0.0	
高等学校・高専卒業	52	80.8	63.5	67.3	57.7	67.3	36.5	5.8	1.9	
専門学校・各種学校/短期大学/大学/大学院在学中	272	92.6	78.7	77.9	78.3	81.3	52.2	2.9	0.0	
専門学校・各種学校/短期大学/大学/大学院中退	20	80.0	60.0	60.0	65.0	65.0	45.0	5.0	0.0	
専門学校・各種学校/短期大学/大学/大学院卒業	428	86.0	73.4	71.0	70.6	75.0	47.9	5.8	0.0	

居場所がある割合について、暮らし向き別にみると、生活に余裕があるほど、それぞれの居場所がある割合が高くなっている。問11、問8

図 2-55 居場所がある割合(単一回答) / 暮らし向き別

	n=	安心して過ごせる場所	一人になれる、他人に干渉されない場所	好きなことが自由にできる場所	心をゆるせる仲間と会える場所	自分を受け入れてくれる場所	普段の生活を忘れられる場所	あてはまるような居場所はない	無回答	(%)
TOTAL	1132	87.4	73.1	71.0	72.3	76.5	49.0	5.0	0.5	
生活に余裕がある	393	93.6	80.2	79.1	78.6	83.5	56.2	2.3	0.0	
平均的	615	85.9	71.1	69.4	71.5	75.8	48.6	6.3	0.3	
生活が厳しい	117	76.9	62.4	54.7	59.0	59.0	28.2	7.7	0.0	

居場所がある割合について、自己肯定感別にみると、自己肯定感が高いほど、それぞれの居場所がある割合が高くなっている。問11、問14 ~

図 2-56 居場所がある割合(単一回答) / 自己肯定感別

	n=	安心して過ごせる場所	一人になれる、他人に干渉されない場所	好きなことが自由にできる場所	心をゆるせる仲間と会える場所	自分を受け入れてくれる場所	普段の生活を忘れられる場所	あてはまるような居場所はない	無回答	(%)
TOTAL	1132	87.4	73.1	71.0	72.3	76.5	49.0	5.0	0.5	
自己肯定感が高い	185	92.4	87.0	84.9	84.9	88.1	68.6	2.2	1.1	
自己肯定感がやや高い	498	91.0	75.1	74.3	77.7	82.3	53.4	3.4	0.2	
自己肯定感ふつう	279	87.8	69.9	68.1	67.0	74.2	40.9	4.3	0.4	
自己肯定感がやや低い	145	75.9	59.3	53.1	55.9	54.5	30.3	11.0	0.7	
自己肯定感が低い	22	40.9	40.9	36.4	27.3	27.3	13.6	36.4	0.0	

居場所がある割合について、自己有用感別にみると、自己有用感が高いほど、それぞれの居場所がある割合が高くなっている。問 11、問 14 ~

図 2-57 居場所がある割合(単一回答) / 自己有用感別

	n=	安心して過ごせる場所	一人になれる、他人に干渉されない場所	好きなことが自由にできる場所	心をゆるせる仲間と会える場所	自分を受け入れてくれる場所	普段の生活を忘れられる場所	あてはまるような居場所はない	無回答	(%)
TOTAL	1132	87.4	73.1	71.0	72.3	76.5	49.0	5.0	0.5	
自己有用感が高い	126	92.1	87.3	82.5	86.5	88.1	64.3	3.2	0.8	
自己有用感がやや高い	560	92.9	77.9	77.5	80.4	85.5	55.5	2.7	0.4	
自己有用感ふつう	317	83.3	63.1	61.8	64.4	67.5	41.6	6.0	0.6	
自己有用感がやや低い	109	69.7	62.4	53.2	43.1	48.6	22.9	14.7	0.0	
自己有用感が低い	17	70.6	64.7	58.8	47.1	47.1	29.4	17.6	0.0	

第三の居場所がある割合について、対象者別にみると、交流・活動系では、「安心して過ごせる場所」「好きなことが自由にできる場所」の割合が若者全般に対して高くなっている。問12、対象者別

図 2-58 第三の居場所がある割合(複数回答)/対象者別

	n=	安心して過ごせる場所	一人になれる、他人に干渉されない場所	好きなことが自由にできる場所	心をゆるせる仲間と会える場所	自分を受け入れてくれる場所	普段の生活を忘れられる場所	あてはまるような“居場所”はない	無回答	(%)
若者全般	1132	45.6	33.1	36.3	42.7	33.5	28.5	14.9	2.5	
交流・活動系	92	64.1	38.0	54.3	47.8	32.6	19.6	7.6	1.1	
相談・支援系	11	18.2	9.1	9.1	18.2	54.5	9.1	36.4	0.0	

問12では、家や学校、職場(アルバイト含む)以外で上記のような居場所があるか尋ねており、これを「第三の居場所」と表現している

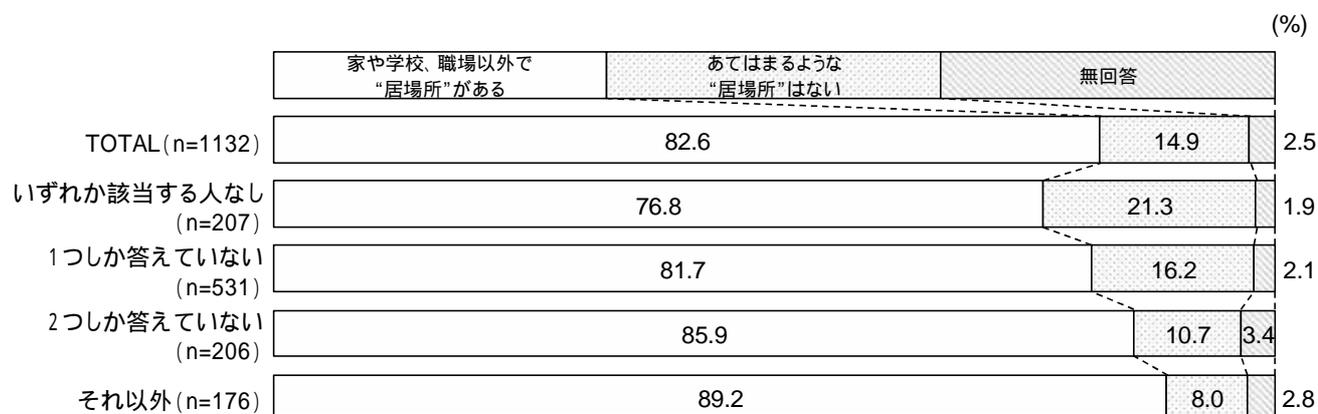
第三の居場所がある割合について、困っていることや悩んでいることの有無別にみると、困っていることや悩んでいることがない人は「安心して過ごせる場所」「好きなことが自由にできる場所」がある割合が高くなっている。問12、問18

図 2-59 第三の居場所がある割合(複数回答)/困っていることや悩んでいることの有無別

	n=	安心して過ごせる場所	一人になれる、他人に干渉されない場所	好きなことが自由にできる場所	心をゆるせる仲間と会える場所	自分を受け入れてくれる場所	普段の生活を忘れられる場所	あてはまるような“居場所”はない	無回答	(%)
TOTAL	1132	45.6	33.1	36.3	42.7	33.5	28.5	14.9	2.5	
ある	611	41.6	30.4	33.1	40.3	32.7	26.8	18.0	1.6	
以前はあった	132	48.5	36.4	37.1	47.7	34.1	28.0	12.9	3.0	
ない	362	50.3	36.2	40.9	44.8	34.3	31.5	11.0	2.5	

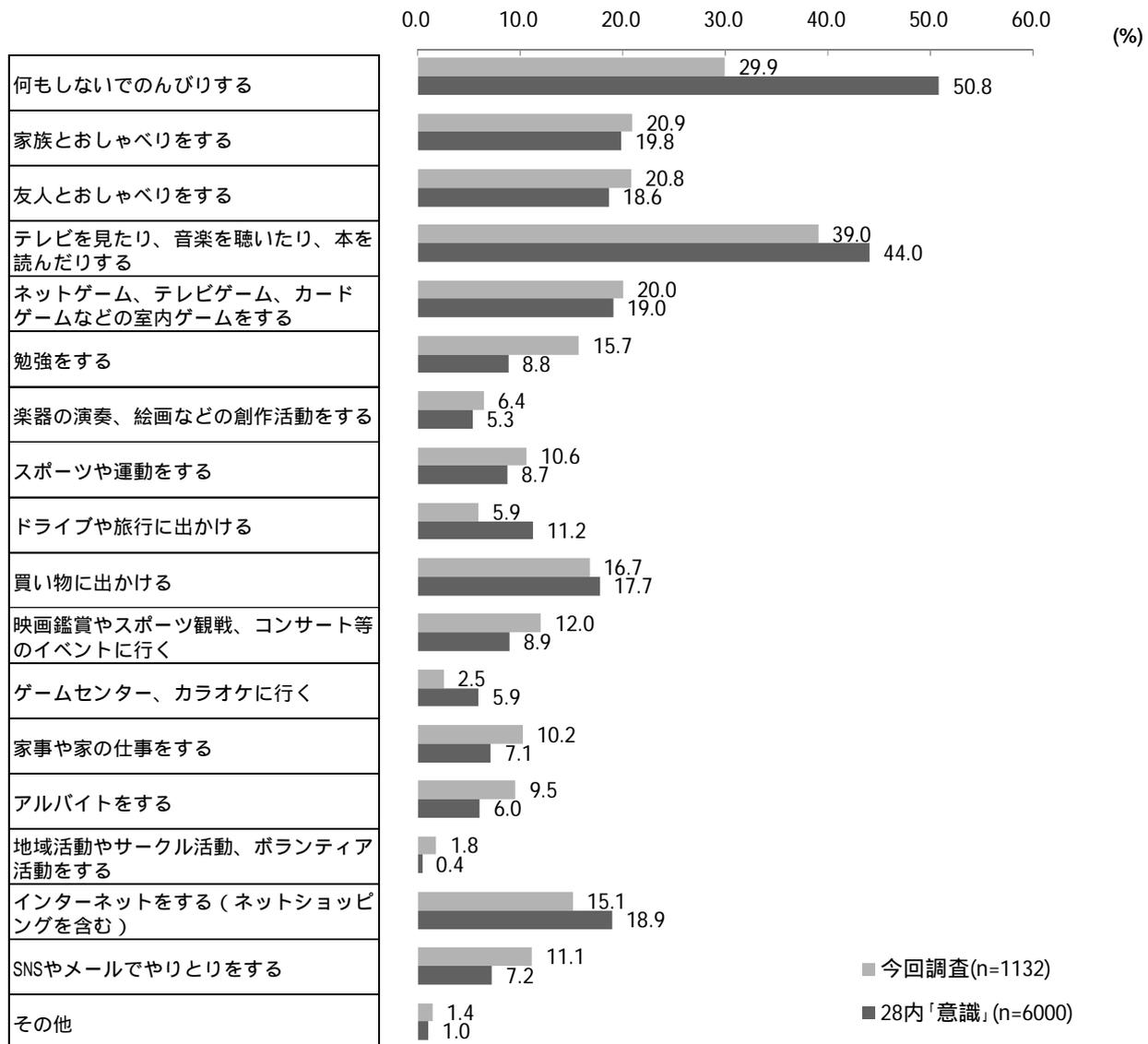
第三の居場所がある割合について、「楽しいこと、うれしいこと」「悲しいこと、嫌だったこと」「他の人に言えない本音」等さまざまな場面で話したり相談したりする人がいるか尋ねる設問で、いずれかに「該当する人なし」との回答があった方は、第三の居場所が「ない」割合が高くなっている。問12、問17

図 2-60 第三の居場所がある割合(単一回答)/話したり相談したりする相手別



学校や職場以外の時間の過ごし方について、類似調査と比較すると、平成28年度 内閣府「子供・若者の意識に関する調査」*よりも今回調査のほうが「勉強をする」「SNSやメールでやりとりをする」割合が高くなっている。問13、類似調査との比較

図 2-61 学校や職場以外の時間の過ごし方(複数回答) / 類似調査との比較



*比較した設問は、学校や職場と関わらない時間をどのように過ごしたいと思うか(優先度の高い事項3つまで)である。ただし選択肢を、以下のとおり統合している。

「楽器の演奏、工作などをする」 「楽器の演奏、絵画などの創作活動をする」

「映画鑑賞やスポーツ観戦に行く」 「映画鑑賞やスポーツ観戦、コンサート等のイベントに行く」

「ボランティア活動をする」 「地域活動やサークル活動、ボランティア活動をする」

児童館利用者へのヒアリングにおいて、児童館に来るようになったきっかけは、家が近所だから、小さいころから来ていたから、友達に誘われたから等さまざまだが、今では児童館が自分の居場所になっているという声が多く聞かれた。

(6) 指標 同世代だけでなく、多様な地域住民と若者が主体的に関わる連携

住んでいる地域に愛着を感じる理由について、性年齢別にみると、男性20～24歳では「住んでいる人のモラルが高い」が31.7%と高くなっているが、女性15～19歳では12.6%と低くなっている。また、女性15～19歳では「有名人が多く住んでいる」が11.3%と高くなっているが、女性25～29歳では1.8%と低くなっている。

問9-1、性年齢別

図 2-62 住んでいる地域に愛着を感じる理由(複数回答)/性年齢別

	n=	住んでいる人がやさしくて親切	住んでいる人のモラルが高い	住んでいる人同士に温かいつながりがある	治安がよく、安全	街がきれい	緑や公園が多い	気に入ったお店や商店街がある	利用している電車や沿線の街が好き	お祭りや地域のイベントが好き	有名人が多く住んでいる	テレビやニュースでよく話題になる	このまちにステータスを感じている	物価が安い	その他	無回答
TOTAL	921	21.4	22.0	9.6	61.7	35.4	42.0	40.0	51.9	11.8	6.3	6.6	16.6	1.2	5.9	0.1
男性15-19歳	119	22.7	16.8	12.6	58.0	29.4	42.0	34.5	44.5	21.0	10.9	7.6	12.6	1.7	7.6	0.0
男性20-24歳	104	20.2	31.7	6.7	61.5	43.3	37.5	43.3	61.5	9.6	7.7	5.8	21.2	2.9	6.7	0.0
男性25-29歳	147	19.7	23.8	8.8	59.2	35.4	49.0	43.5	51.0	9.5	5.4	7.5	17.0	2.7	3.4	0.0
女性15-19歳	151	27.2	12.6	14.6	58.9	32.5	39.7	36.4	47.7	17.9	11.3	6.0	13.2	0.0	5.3	0.0
女性20-24歳	166	19.3	23.5	7.8	64.5	37.3	38.0	40.4	53.6	8.4	4.8	7.2	19.9	0.6	5.4	0.0
女性25-29歳	227	19.4	24.7	7.9	65.2	35.7	43.6	41.4	53.7	8.4	1.8	6.2	16.7	0.4	7.0	0.4

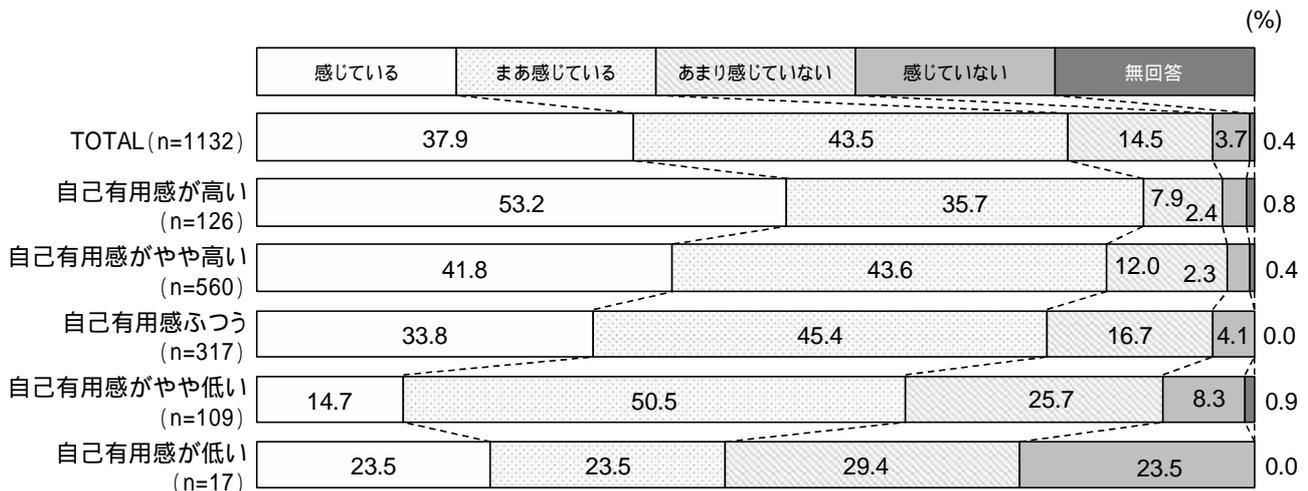
住んでいる地域に愛着を感じる理由について、居住年数別にみると、20年以上では「利用している電車や沿線の街が好き」が57.9%と他と比較して高く、3～6年未満では「住んでいる人のモラルが高い」が11.4%と低くなっている。問9-1、問3

図 2-63 住んでいる地域に愛着を感じる理由(複数回答) / 居住年数別

	n=	住んでいる人がやさしくて親切	住んでいる人のモラルが高い	住んでいる人同士に温かいつながりがある	治安がよく、安全	街がきれい	緑や公園が多い	気に入ったお店や商店街がある	利用している電車や沿線の街が好き	お祭りや地域のイベントが好き	有名人が多く住んでいる	テレビやニュースでよく話題になる	このまちにステータスを感じている	物価が安い	その他	無回答
TOTAL	921	21.4	22.0	9.6	61.7	35.4	42.0	40.0	51.9	11.8	6.3	6.6	16.6	1.2	5.9	0.1
1年未満	92	25.0	28.3	9.8	63.0	43.5	34.8	38.0	53.3	4.3	1.1	4.3	12.0	1.1	4.3	0.0
1～3年未満	102	20.6	25.5	5.9	61.8	37.3	47.1	47.1	52.0	6.9	1.0	9.8	18.6	2.9	2.0	0.0
3～6年未満	132	21.2	11.4	5.3	52.3	33.3	39.4	44.7	52.3	14.4	4.5	6.8	17.4	3.0	5.3	0.8
6～10年未満	66	16.7	18.2	3.0	72.7	37.9	40.9	34.8	50.0	9.1	6.1	10.6	16.7	0.0	6.1	0.0
10～20年未満	299	24.4	22.4	13.7	61.5	33.1	43.5	40.1	47.5	16.7	11.4	6.0	14.7	0.3	7.4	0.0
20年以上	228	18.0	24.6	10.1	63.2	35.1	42.5	36.4	57.9	10.1	5.3	5.7	19.7	0.9	6.1	0.0

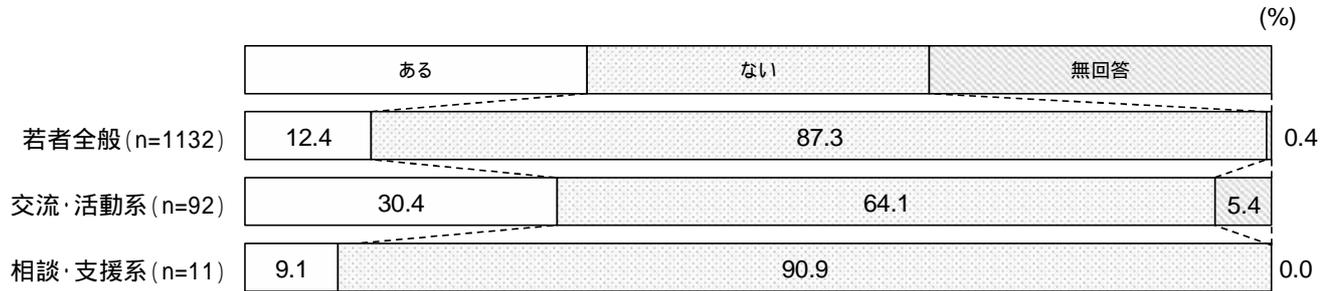
住んでいる地域への愛着について、自己有用感別にみると、自己有用感が高いほど、地域への愛着を「感じている」割合が高くなっている。問9、問14～

図 2-64 住んでいる地域への愛着(単一回答) / 自己有用感別



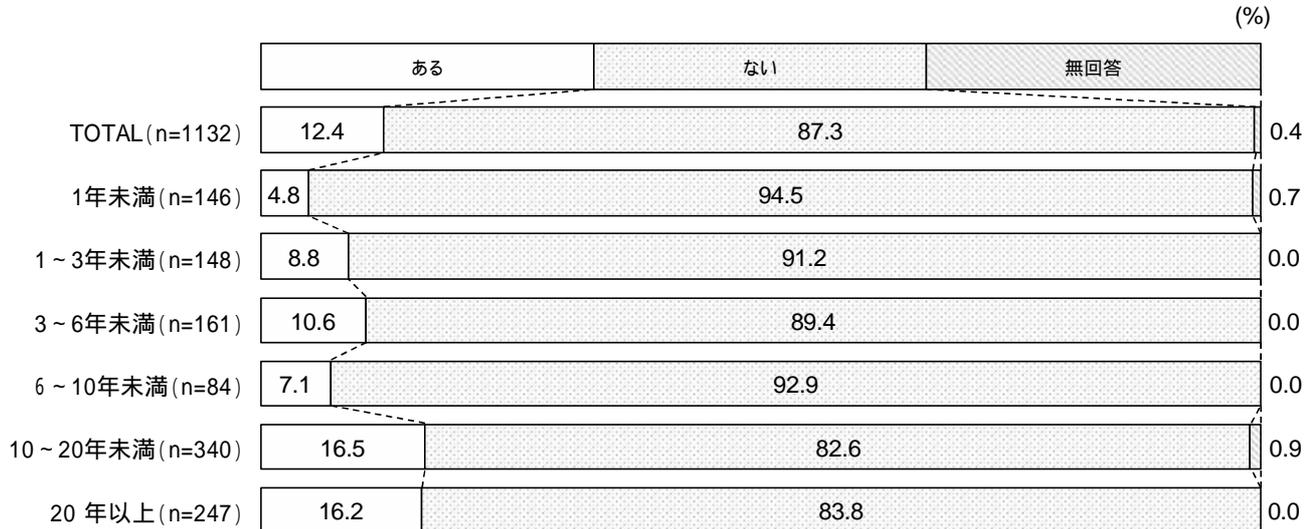
地域で役に立っていると感じたことの有無について、対象者別にみると、交流・活動系では「ある」が30.4%と若者全般よりも高くなっている。問21、対象者別

図 2-65 地域で役に立っていると感じたことの有無(単一回答) / 対象者別



地域で役に立っていると感じたことの有無について、居住年数別にみると、10年以上では「ある」割合が16%以上となっている。問21、問3

図 2-66 地域で役に立っていると感じたことの有無(単一回答) / 居住年数別



ヒアリングにおいて、町会等を通して、若者が地域住民と主体的に関わる場を設けているところも多く、そういったところに来る若者は、まちへの関心が高いといった声も聞かれた。

2-3. 生きづらさを抱えた若者の支援

(1) 指標 生きづらさを抱えた若者及び、その家族を対象とした相談支援

専門機関の認知度について、外出の頻度別にみると、ひきこもりがちな人は「心の悩みに対応する病院・診療所」「心理相談・カウンセリングなどをする民間施設」がそれぞれ35.0%、「ワークサポートせたがや・三茶おしごとカフェなどの就労支援機関」が30.0%と高くなっている。問28、問23

図 2-67 専門機関の認知度(複数回答)/外出の頻度別

	n=	メルクマールせたがや	ワークサポートせたがや・三茶おしごとカフェなどの就労支援機関	せたがや若者サポートステーション	げんき(発達障害相談・療育センター)など発達障害者支援機関	ぶらっとホーム世田谷(生活困窮者自立支援機関)	セクシャル・マイノリティのための世田谷にじいろひろば電話相談	ほっとスクール(適応指導教室)	教育相談室	児童相談所	保健福祉センター子ども家庭支援センター	保健福祉センター健康づくり課	保健福祉センター保健福祉課	せたがやホッと子どもサポート(子どもの人権擁護機関)	保健所・保健センター	所(心の悩みに対応する)病院・診療所	民間施設	上記以外の心理相談・カウンセリングなどをする民間施設	あてはまるものはない	無回答
TOTAL	1132	5.3	12.0	6.1	6.4	6.4	3.3	9.7	20.6	37.8	19.8	22.4	20.5	16.7	40.5	30.1	12.6	12.3	40.4	1.1
ひきこもりがち	20	10.0	30.0	10.0	15.0	0.0	0.0	5.0	5.0	20.0	5.0	15.0	15.0	10.0	35.0	35.0	15.0	15.0	35.0	0.0
それ以外	1112	5.2	11.7	6.0	6.2	6.6	3.3	9.8	20.9	38.1	20.1	22.6	20.6	16.8	40.6	30.0	12.6	12.2	40.5	1.2

「ふだんの外出について尋ねる設問において「ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事のみときだけ外出する」「ふだんは家にいるが、近所のコンビニなどには出かける」「自室からは出るが、家からは出ない」「自室からほとんど出ない」と回答した人。問23

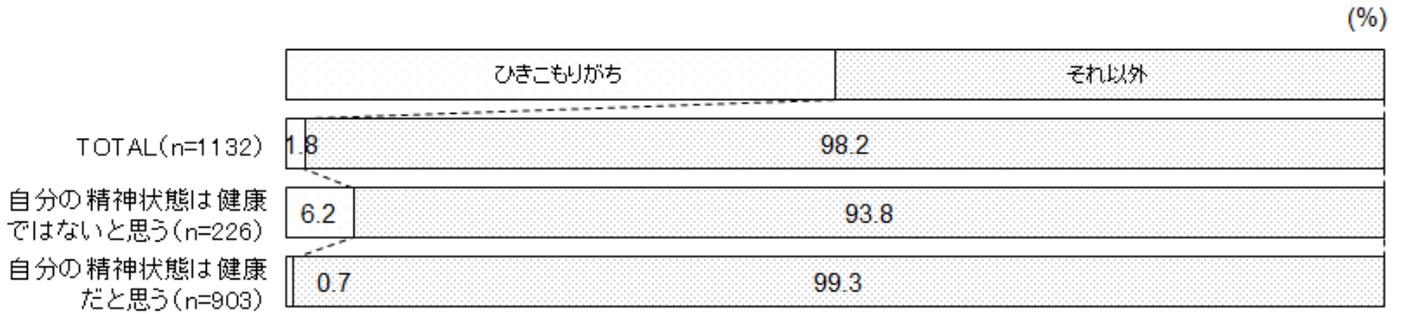
専門機関の認知度について、居住年数別にみると、居住年数が10年以上では「教育相談室」「児童相談所」「保健所・保健センター」の割合が高くなっている。問28、問3

図 2-68 専門機関の認知度(複数回答)/居住年数別

	n=	メルクマールせたがや	ワークサポートせたがや・三茶おしごとカフェなどの就労支援機関	せたがや若者サポートステーション	げんき(発達障害相談・療育センター)など発達障害者支援機関	ぶらっとホーム世田谷(生活困窮者自立支援機関)	セクシャル・マイノリティのための世田谷にじいろひろば電話相談	室)ほっとスクール(適応指導教室)	教育相談室	児童相談所	保健福祉センター子ども家庭支援センター	保健福祉センター健康づくり課	保健福祉センター保健福祉課	保健福祉センター保健福祉課	せたがやホッと子どもサポート(子どもの人権擁護機関)	保健所・保健センター	診療所(心の悩みに対応する)病院	民間施設	上記以外の心理相談・カウンセリングなどをする民間施設	あてはまるものはない	無回答
TOTAL	1132	5.3	12.0	6.1	6.4	6.4	3.3	9.7	20.6	37.8	19.8	22.4	20.5	16.7	40.5	30.1	12.6	12.3	40.4	1.1	
1年未満	146	1.4	9.6	1.4	2.7	5.5	1.4	2.7	9.6	21.2	11.0	13.7	13.7	6.2	31.5	24.7	8.9	6.8	58.2	2.1	
1~3年未満	148	2.0	6.8	1.4	6.1	4.7	0.7	4.1	10.8	23.6	17.6	18.2	16.2	8.8	21.6	17.6	4.7	6.1	62.8	2.0	
3~6年未満	161	6.8	16.1	9.9	8.1	6.8	5.0	6.2	18.6	30.4	18.0	21.7	20.5	18.6	37.9	28.6	9.3	10.6	41.6	0.0	
6~10年未満	84	8.3	13.1	7.1	6.0	11.9	3.6	7.1	19.0	36.9	26.2	27.4	26.2	13.1	35.7	32.1	15.5	15.5	45.2	1.2	
10~20年未満	340	7.4	9.4	6.2	6.5	6.2	4.4	16.2	30.6	50.0	23.2	22.4	21.2	25.6	47.1	33.2	15.3	15.9	27.1	1.2	
20年以上	247	4.9	16.2	7.7	7.3	5.7	3.2	10.9	21.1	44.1	20.2	28.7	23.9	15.4	51.8	37.2	17.0	14.2	32.4	0.8	

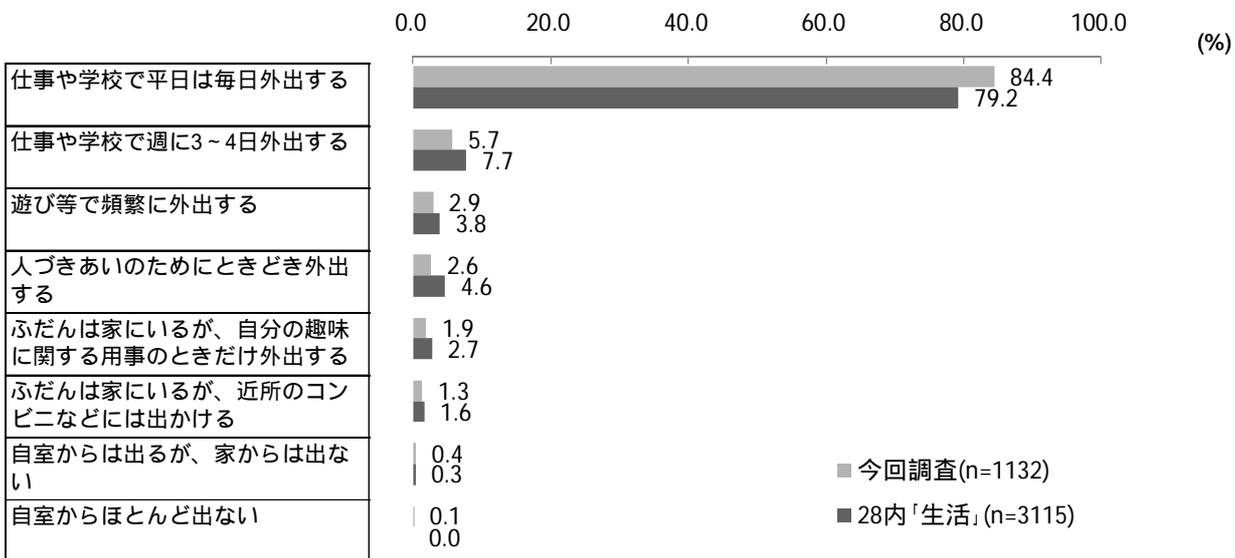
外出の頻度について、自身の精神状態別にみると、「自分の精神状態は健康ではないと思う」人のほうが、「ひきこもりがち」の割合が6.2%と高くなっている。問 23、問 15

図 2-69 外出の頻度(単一回答) / 問 15



外出の頻度について、類似調査と比較すると、平成 28 年度 内閣府「若者の生活に関する調査」よりも今回調査のほうが「仕事や学校で平日は毎日外出する」が5.2ポイント高くなっている。問 23、類似調査との比較

図 2-70 外出の頻度(単一回答) / 類似調査との比較



(2) 指標 安心して利用でき、対人関係や社会生活に対する自信を取り戻せるような「居場所」の構築

専門機関の認知度については、P42の図2-67のとおりであるが、利用状況について、外出の頻度別にみると、ひきこもりがちな人は「(心の悩みに対応する)病院・診療所」が20.0%と高くなっている。問28、問23

図 2-71 専門機関の利用状況(複数回答) / 外出の頻度別

	n=	メルクマイルセタがや	ごたがやサポートセタがや・三茶あし	せたがや若者サポートステーション	げんき(発達障害相談・療育センター)など発達障害者支援機関	ぶらっとホーム世田谷(生活困窮者自立支援機関)	せ田谷にじろひろげ電話相談	ほっとスクール(連立指導教室)	教育相談室	児童相談所	保健福祉センター子ども家庭支援センター	保健福祉センター健康づくり課	保健福祉センター保健福祉課	せたがやホッと子どもサポート(子どもの人権擁護機関)	保健福祉センター	所へ心の悩みに対応する(病院・診療)	民間施設	上記以外の心理相談・カウンセリングなどとする民間施設	あてはまるものはない	無回答
TOTAL	1132	0.4	1.9	0.6	1.1	0.3	0.1	0.5	1.1	1.3	0.9	2.2	1.8	0.4	3.2	3.7	0.4	0.7	87.7	1.1
ひきこもりがち	20	0.0	0.0	5.0	5.0	0.0	0.0	5.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.0	20.0	5.0	5.0	70.0	0.0
それ以外	1112	0.4	1.9	0.5	1.0	0.3	0.1	0.4	1.2	1.3	0.9	2.2	1.8	0.4	3.1	3.4	0.3	0.6	88.0	1.2

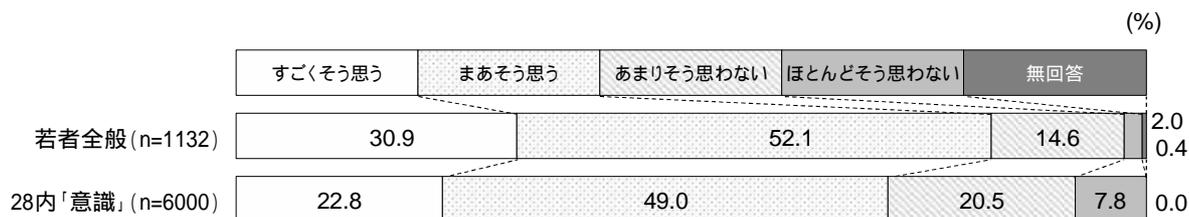
困っていることや悩んでいることの有無について、自身の精神状態別にみると、「自分の精神状態は健康ではないと思う」人のほうが、困っていることや悩んでいることが「ある」割合が82.3%と高くなっている。問18、問15

図 2-72 困っていることや悩んでいることの有無(単一回答) / 自身の精神状態別

	困っていることや悩んでいることがある	以前はあった	困っていることや悩んでいることはない	無回答	(%)
TOTAL (n=1132)	54.0		11.7	32.0	2.4
自分の精神状態は健康だと思う (n=903)	46.8		13.7	37.1	2.3
自分の精神状態は健康ではないと思う (n=226)	82.3		3.5	11.9	2.2

自己肯定感「自分には自分らしさというものがあると思う」について、類似調査と比較すると、平成28年度内閣府「子供・若者の意識に関する調査」よりも今回調査のほうが、「すごくそう思う」と「まあそう思う」の合計が11.2ポイント高くなっている。問14、類似調査との比較

図 2-73 自己肯定感 自分には自分らしさというものがあると思う(単一回答) / 類似調査との比較



類似調査において比較した設問は、自己診断を行う設問のうち「自分には自分らしさがあると思う」か。
 ただし、尋ねる設問への回答を次のとおり読み替えた
 「あてはまる」 「すごく思う」
 「どちらかといえばあてはまる」 「まあ思う」
 「どちらかといえばあてはまらない」 「あまりそう思わない」
 「あてはまらない」 「ほとんどそう思わない」

困っていることや悩んでいることの有無について、居場所の有無別にみると、困っていることや悩んでいることがある人は、居場所が「ない」と回答する割合が高くなっている。 問 18、問 11 (居場所の有無)

図 2-74 困っていることや悩んでいることの有無(単一回答) / 居場所の有無別



困っていることや悩んでいることの有無について、ほしい居場所の有無別にみると、いずれかの居場所がほしい人は、困っていることや悩んでいることが「ある」割合が高くなっている。問 18、問 11(ほしい居場所の有無)

図 2-75 困っていることや悩んでいることの有無(単一回答) / ほしい居場所の有無別

	困っていることや悩んでいることがある	以前はあった	困っていることや悩んでいることはない	無回答	
TOTAL(n=1132)	54.0		11.7	32.0	2.4
安心して過ごせる場所がほしい (n=131)	63.4		6.9	26.0	3.8
一人になれる、他人に干渉されない 場所がほしい(n=270)	64.4		9.3	25.2	1.1
好きなことが自由にできる場所が ほしい(n=304)	64.8		8.9	24.7	1.6
心をゆるせる仲間と会える場所が ほしい(n=259)	63.7		8.5	25.5	2.3
自分を受け入れてくれる場所が ほしい(n=222)	67.6		7.7	23.0	1.8
普段の生活を忘れられる場所が ほしい(n=467)	65.7		10.7	22.3	1.3
そうした居場所がある/ ほしいと思わない(n=508)	42.5	13.6		40.7	3.1

困っていることや悩んでいることの有無について、類似調査と比較すると、平成 25 年度 世田谷区「中高生世代アンケート調査」*よりも今回調査のほうが、「ある」の割合が 3.7 ポイント高い。問 18、類似調査との比較

図2-76 困っていることや悩んでいることの有無(単一回答) / 類似調査との比較

	ある	ない	無回答	(%)
今回調査(n=1132)	54.0		43.7	2.4
25区(n=1439)	50.3		48.4	1.2

*比較した設問は、今、悩んでいること、不安なことはありますか。ただし選択肢について、今回調査では、以下のとおり統合している。

「以前はあった」「ない」「ない」

また、平成 25 年度世田谷区「中高生世代アンケート調査」からは「わからない」を除外している。

2. 評価指標別の調査結果

困っていることや悩んでいることの有無について、話したり相談したりする相手がインターネット上の知り合いかどうかでみると、インターネット上の知り合いに話したり相談したりする人は、困っていることや悩んでいることが「ある」割合が69.5%と高くなっている。問18、問16

図 2-77 困っていることや悩んでいることの有無(単一回答) / 話したり相談したりする相手がインターネット上の知り合いかどうか別

	ある	以前はあった	ない	無回答	(%)
TOTAL(n=1132)	54.0		11.7	32.0	2.4
インターネット上の知り合い (n=141)	69.5		7.8	21.3	1.4
それ以外(n=979)	52.0		12.4	33.3	2.3

同居区分について、インターネット上の知り合いに話したり相談したりする人は、「同居人はいない」割合が26.2%と高くなっている。問4、問16

図 2-78 同居4区分(単一回答) / 話したり相談したりする相手がインターネット上の知り合いかどうか別

	父か母と同居	同居人はいない	配偶者と同居	上記以外の人と同居	無回答	(%)	
TOTAL(n=1132)	61.0			19.5	11.9	7.2	0.4
インターネット上の知り合い (n=141)	56.0			26.2	11.3	6.4	0.0
それ以外(n=979)	61.6			18.6	12.2	7.3	0.4

外出の頻度については、インターネット上の知り合いに話したり相談したりする人は、「ひきこもりがち」の割合が3.5%と高くなっている。問23、問16

図 2-79 外出の頻度(単一回答) / 話したり相談したりする相手がインターネット上の知り合いかどうか別

	ひきこもりがち	それ以外	(%)
TOTAL(n=1132)	1.8	98.2	
インターネット上の知り合い (n=141)	3.5	96.5	
それ以外(n=979)	1.3	98.7	

2. 評価指標別の調査結果

今、困っていることや悩んでいることが「ある」または「以前はあった」と回答した方を対象として、下記の人物がどのくらいサポートしてくれるかについて、対象者別にみると、交流・活動系では、「塾や習い事の先生」「近所・地域の人」の割合が若者全般よりも高くなっている。 問 19、対象者別

図 2-80 サポートしてくれる人(複数回答) / 対象者別

n=	父	母	祖父母	配偶者・恋人	兄弟・姉妹	友人	学校の先生	塾や習い事の先生	アルバイト仲間・職場の同僚	職場の上司・先輩	近所・地域の人	インターネット上の知り合い	相談機関の人	医師	あてはまるものはない	無回答	
若者全般	1132	41.3	56.7	29.5	25.2	30.5	54.8	17.6	8.0	22.7	26.0	4.9	10.4	4.9	12.8	35.8	0.4
交流・活動系	92	31.5	40.2	28.3	16.3	25.0	43.5	26.1	16.3	8.7	9.8	10.9	14.1	4.3	6.5	52.2	0.0
相談・支援系	11	27.3	63.6	27.3	18.2	27.3	45.5	9.1	9.1	9.1	9.1	0.0	9.1	81.8	54.5	9.1	0.0

身の周りで尊敬できる人の有無について、対象者別にみると、交流・活動系では、「地域行事や地域活動で関わった人や近所の人」が若者全般に比べ 14.1%と高くなっている一方、「家族」は 51.1%、「職場・バイト先の上司・先輩」は 16.3%と低くなっている。 問 20、対象者別

図 2-81 身の周りで尊敬できる人の有無(複数回答) / 対象者別

n=	家族	親戚	友人	恋人	学校の先生	塾や習い事の先生	職場・バイト先の上司・先輩	職場・バイト先の同僚・後輩	サークルや部活の先輩	サークルや部活の仲間・後輩	地域行事や地域活動で関わった人や近所の人	その他	いない	無回答	
若者全般	1132	70.1	21.2	58.8	16.6	19.2	9.5	32.5	14.8	16.9	8.7	2.2	2.7	8.1	0.8
交流・活動系	92	51.1	19.6	62.0	10.9	27.2	16.3	16.3	9.8	19.6	10.9	14.1	5.4	5.4	7.6
相談・支援系	11	45.5	18.2	45.5	18.2	27.3	9.1	0.0	0.0	18.2	9.1	0.0	0.0	9.1	0.0

身の周りで尊敬できる人の有無について、類似調査と比較すると、平成 25 年度 世田谷区「中高生世代アンケート調査」よりも今回調査のほうが、「職場・バイト先の上司・先輩」が 27.8 ポイント高い一方、「学校の先生」が 12.2 ポイント低くなっている。 問 20、類似調査との比較

図 2-82 身の周りで尊敬できる人の有無(複数回答) / 類似調査との比較

	親戚	学校の先生	塾や習い事の先生	職場・バイト先の上司・先輩	いない
今回調査(n=1132)	21.2	19.2	9.5	32.5	8.1
25区(n=1439)	17.9	31.4		18.6	4.7

居場所がある割合について、自身の精神状態別にみると、「自分の精神状態は健康ではないと思う」人は、いずれかの居場所がない割合が高くなっている。問 11、問 15

図 2-83 居場所がある割合(複数回答)/自身の精神状態別

	n=	安心して過ごせる場所	一人になれる、他人に干渉されない場所	好きなことが自由にできる場所	心をゆるせる仲間と会える場所	自分を受け入れてくれる場所	普段の生活を忘れられる場所	あてはまるような居場所はない	無回答	(%)
TOTAL	1132	87.4	73.1	71.0	72.3	76.5	49.0	5.0	0.5	
自分の精神状態は健康だと思ふ	903	91.3	76.0	75.0	77.3	82.8	53.5	3.5	0.6	
自分の精神状態は健康ではないと思ふ	226	72.6	61.5	55.3	53.1	51.8	31.4	11.1	0.0	

ほしい居場所がある割合について、自身の精神状態別にみると、「自分の精神状態は健康ではないと思う」人は、いずれかの居場所がほしい割合が高くなっている。問 11、問 15

図 2-84 ほしい居場所がある割合(単一回答)/自身の精神状態別

	n=	安心して過ごせる場所	一人になれる、他人に干渉されない場所	好きなことが自由にできる場所	心をゆるせる仲間と会える場所	自分を受け入れてくれる場所	普段の生活を忘れられる場所	そう思わなかった居場所がある/ほしい	無回答	(%)
TOTAL	1132	11.6	23.9	26.9	22.9	19.6	41.3	44.9	0.5	
自分の精神状態は健康だと思ふ	903	7.9	20.7	22.9	18.7	14.0	36.7	50.4	0.6	
自分の精神状態は健康ではないと思ふ	226	26.1	36.7	42.9	39.4	42.0	59.7	23.0	0.0	

居場所がある割合について、外出の頻度別にみると、「ひきこもりがち」な人は、「それ以外の人」に比べて「心をゆるせる仲間と会える場所」が30.0%、「自分を受け入れてくれる場所」が35.0%と低くなっている。問11、問23

図 2-85 居場所がある割合(単一回答) / 外出の頻度別

	n=	安心して過ごせる場所	一人になれる、他人に干渉されない場所	好きなことが自由にできる場所	心をゆるせる仲間と会える場所	自分を受け入れてくれる場所	普段の生活を忘れられる場所	あてはまるような居場所はない	無回答	(%)
TOTAL	1132	87.4	73.1	71.0	72.3	76.5	49.0	5.0	0.5	
ひきこもりがち	20	80.0	65.0	45.0	30.0	35.0	25.0	15.0	0.0	
それ以外	1112	87.5	73.2	71.5	73.1	77.2	49.5	4.9	0.5	

(3) 指標 生きづらさ・困難を抱えた若者支援に向けた関係機関との連携による重層的な支援
 支援への満足度について、「満足している」が81.8%、「満足していない」が9.1%となっている。問32

図 2-86 支援への満足度(単一回答)

		(%)		
		満足している	満足していない	無回答
TOTAL(n=11)		81.8	9.1	9.1

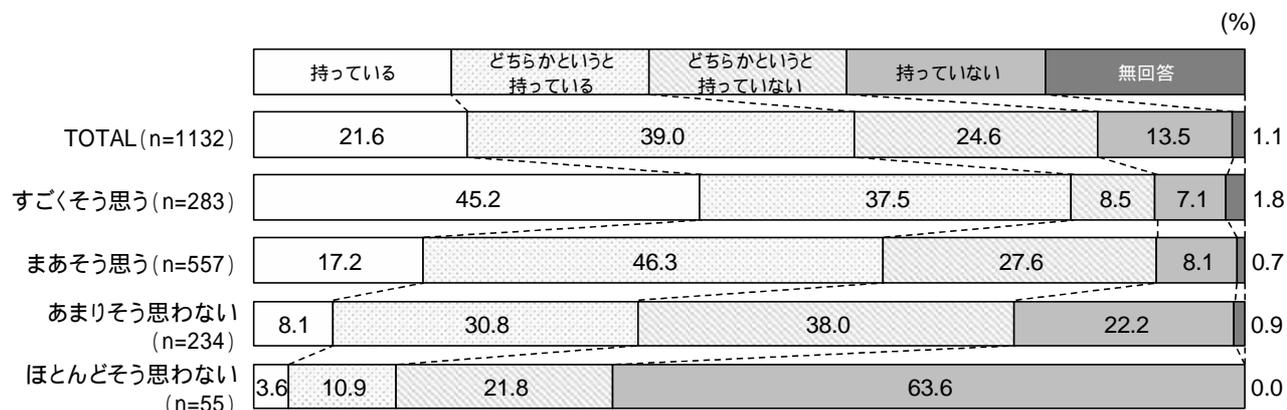
ヒアリングにおいて、相談・支援系の施設にくる若者に対しては、その施設だけで支えるのではなく、さまざまな機関と連携するきっかけづくりを行っているという声が聞かれた。

(4) 指標 社会的自立に向けた支援

20年後の自分の将来のイメージについて、明るいイメージを持っているかどうか尋ねた。

20年後の自分の将来のイメージとして、「いつか自分にふさわしい仕事に出会えると思う、あるいは、すでに自分にふさわしい仕事に就いていると思う」について、自己有用感別にみると、「そう思う」割合が高いほど、将来のイメージを「持っている」割合が高くなっている。問22、問14

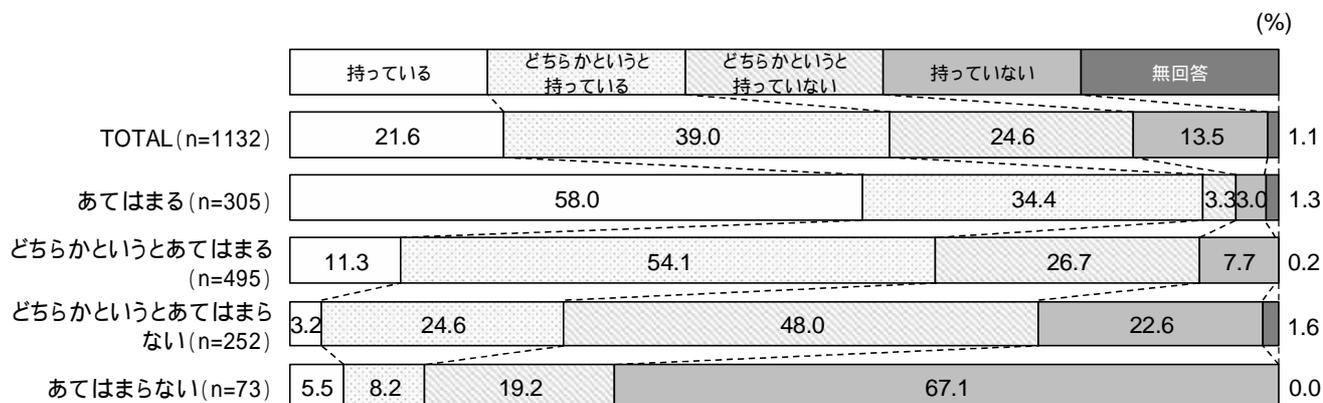
図 2-87 自分の将来についてのイメージ(単一回答) / 自己有用感別 いつか自分にふさわしい仕事に出会えると思う、あるいは、すでに自分にふさわしい仕事に就いていると思う



20年後の自分の将来のイメージについて、具体的なイメージ別にみると、「自分がやりたいと思っている仕事をしている」ことがあてはまる人ほど、将来のイメージを「持っている」割合が高くなっている。問22、問22

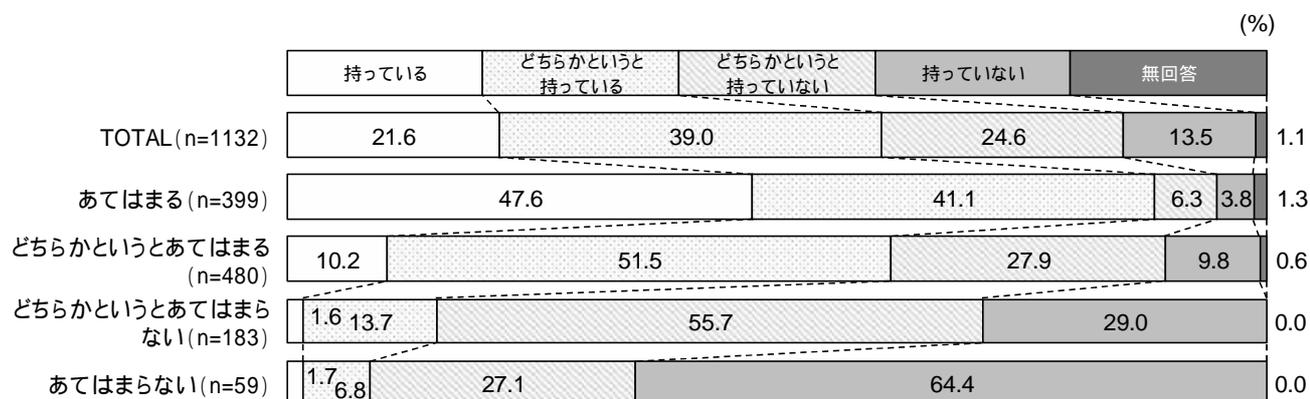
- 1

図 2-88 自分の将来についてのイメージ(単一回答) / 具体的なイメージ 自分がやりたいと思っている仕事をしている別



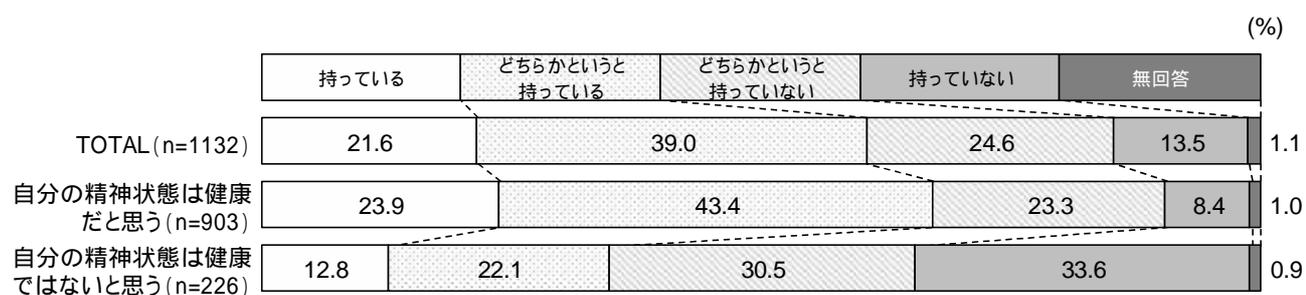
20年後の自分の将来のイメージについて、具体的なイメージ別にみると、「生きがい、やりがいを見つけている」ことがあてはまる人ほど、将来のイメージを「持っている」割合が高くなっている。問22、問22-1

図 2-89 自分の将来についてのイメージ(単一回答) / 具体的なイメージ 生きがい、やりがいを見つけている別



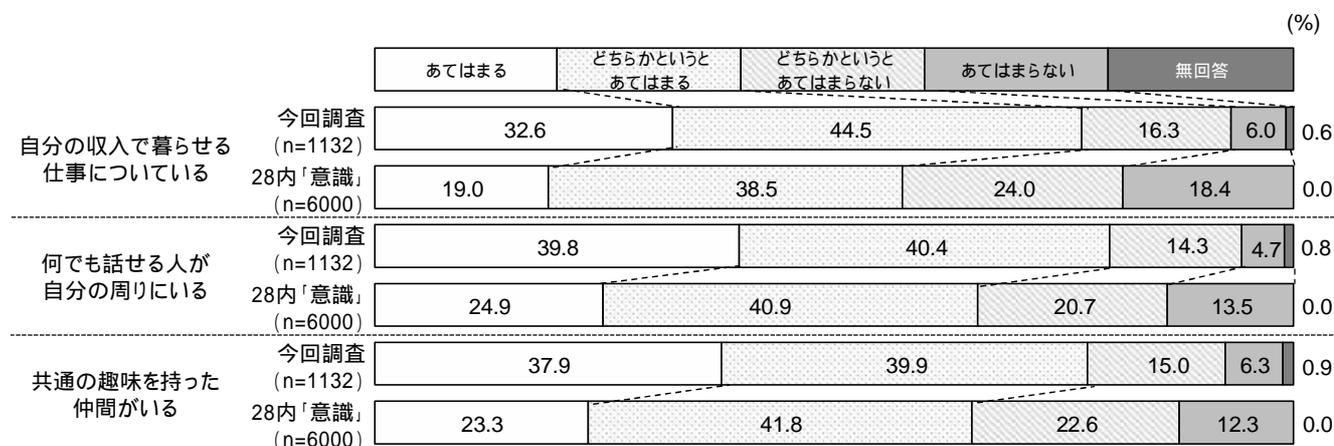
20年後の自分の将来のイメージについて、自身の精神状態別にみると、「自分の精神状態は健康ではないと思う」人ほど、将来のイメージを「持っていない」割合が高くなっている。問22、問15

図 2-90 自分の将来についてのイメージ(単一回答) / 自身の精神状態別



20年後の自分のイメージについて、類似調査と比較すると、平成28年度内閣府「子供・若者の意識に関する調査」よりも今回調査のほうが、「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の合計は、「自分の収入で暮らせる仕事についている」で19.6ポイント、「何でも話せる人が自分の周り」にいてる」で14.4ポイント高くなっている。問22、類似調査との比較

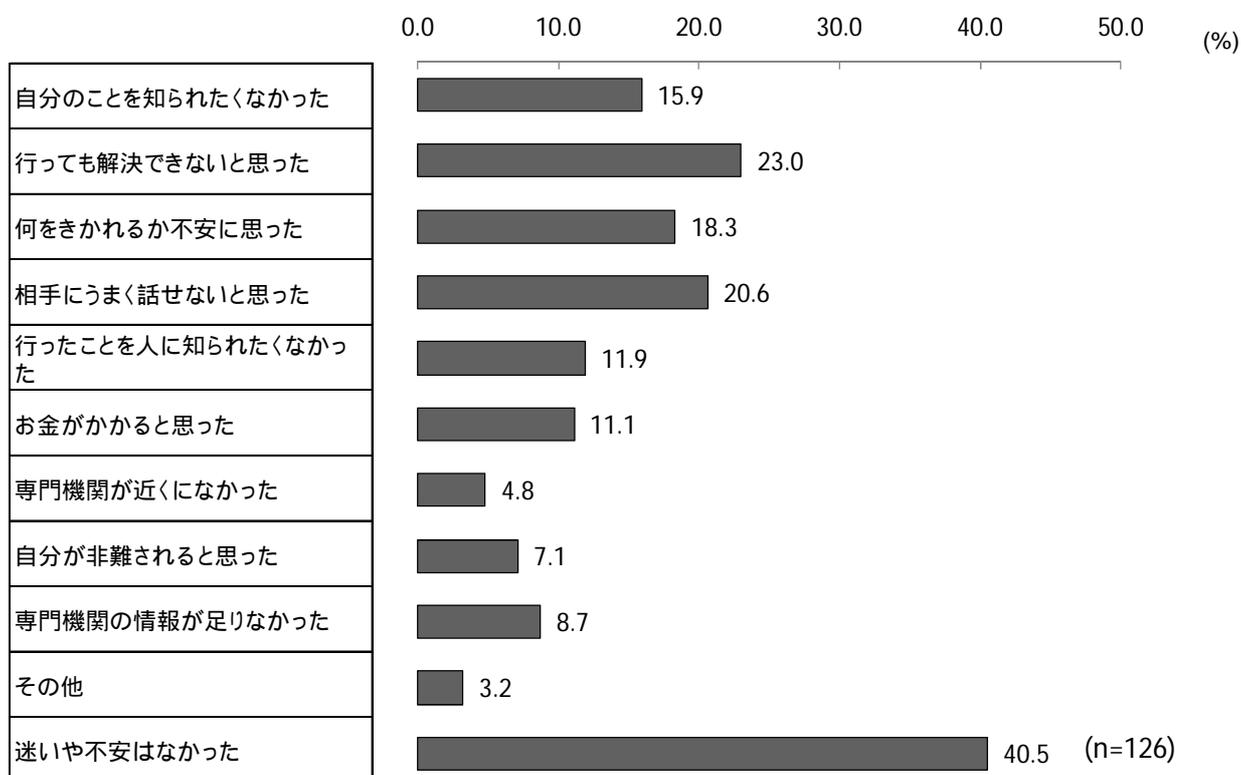
図 2-91 自分の将来についての具体的なイメージ(単一回答) / 類似調査との比較



(5) 指標 早期支援の重要性

アンケート調査問 28 に掲載した専門機関について、いずれかを「知っていて利用したことがある」と回答した人(142名)のみを対象とし、相談するとき以下のような迷いや不安があったかか尋ねたところ、「相手にうまく話せないと思った」が24.6%と最も高く、次いで「行っても解決できないと思った」が22.5%、「何をきかれるか不安に思った」が19.7%となっている。なお、「迷いや不安はなかった」は38.0%である。問 29

図 2-92 専門機関に相談するときの迷いや不安の理由(複数回答)



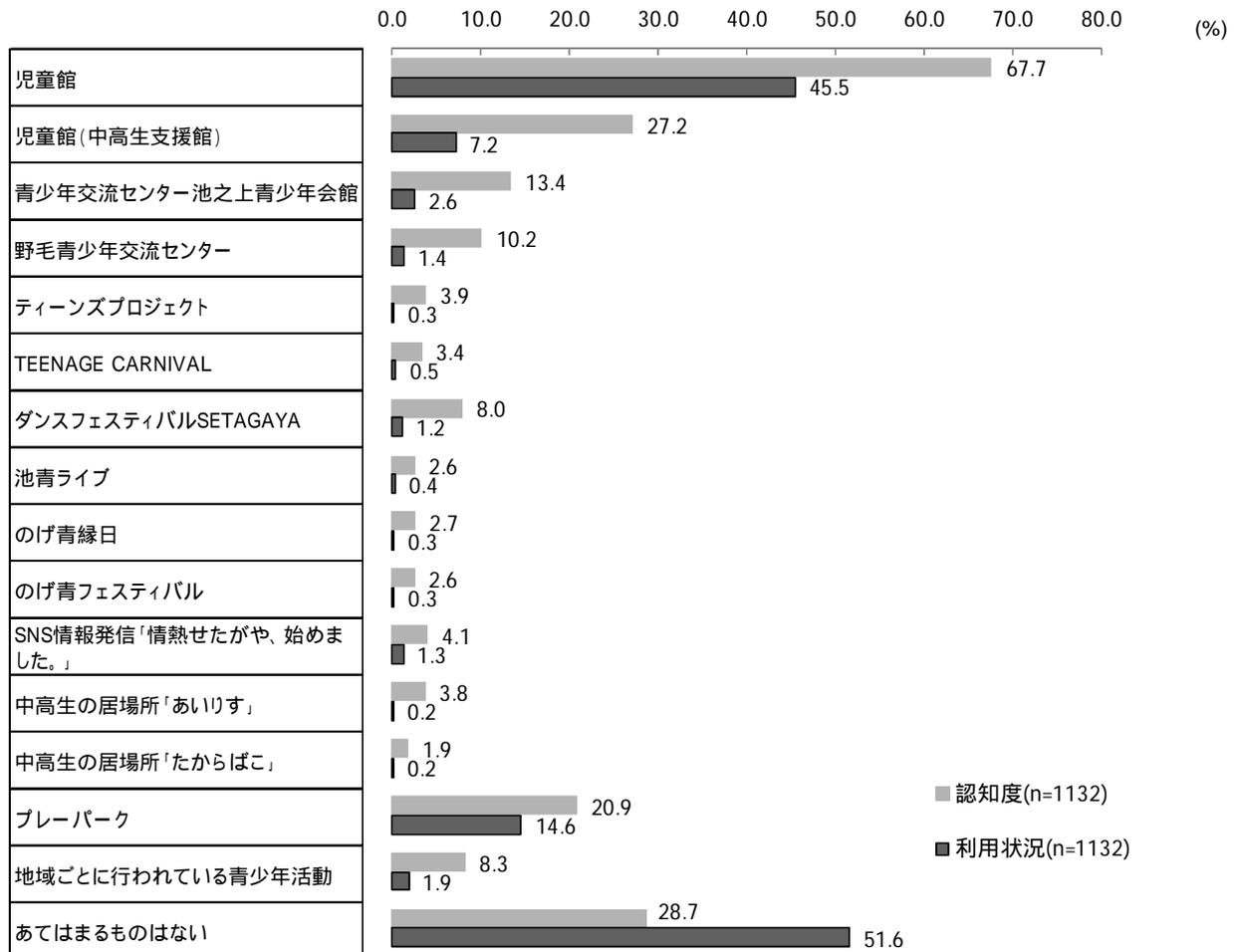
2 - 4 . 若者の社会に向けた文化・情報の発信への支援

(1) 指標 若者の主体的な取組みを支援する仕組みの構築

世田谷区が行う取組みへの認知度については、「児童館」が67.7%と最も高く、次いで「児童館(中学生支援館)」が27.2%、「プレーパーク」が20.9%となっている。

利用状況については、「児童館」が45.5%と最も高く、次いで「プレーパーク」が14.6%となっている。 問
27

図 2-93 世田谷区が行う取組みへの認知度・利用状況(複数回答)



3 資料編

1. 資料編

3 - 1 . 調査票

世田谷区若者施策に関する調査

調査ご協力をお願い

初めまして。私たちは、世田谷区役所の若者支援担当課です。

若者支援担当課では、若者の皆さんが地域でいきいきと力を発揮できるよう、施設の運営や、事業・イベントの実施といった施策に取り組んでいます。

例えば、若者が様々な交流や活動をする施設「青少年交流センター（池之上、野毛）」や、生きづらさを抱えた若者に向けた居場所・相談の場「メルクマールせたがや」の運営や、SNSを使った若者による地域の情報発信「情熱せたがや、始めました。」などを行っています。（別紙「世田谷区の取組みの概要」「専門機関の概要」をご覧ください。）

このアンケートは、若い皆さんの日常生活のこと等を何うとともに、区のこれまでの施策を振り返り、これからどんなことに取り組んだらよいかについて、区が考えていくために実施します。

突然のお願いで恐縮ですが、より充実した若者施策の実現の一助として、ぜひご回答いただければと思います。

どうぞよろしくお願いいたします。

※ ご回答内容はすべて統計的に処理しますので、個々の調査票の結果が公表されたり、お答えいただいた方の情報等が公表されることは一切ございません。

※ この調査結果については、報告書を作成のうえ、概略を世田谷区のホームページに掲載する予定です。

平成30年6月

世田谷区子ども・若者部若者支援担当課

アンケートのご記入にあたって

- 本アンケートは、インターネットまたは本紙のどちらかご都合の良いほうで、**平成30年7月13日（金）**までにご回答ください。

- インターネットの場合は、下記のURLにアクセスのうえ、IDとパスワードをご入力しご回答ください。
インターネット調査画面URL：<https://sv.netr.jp/setagaya>

ID: パスワード:

※ インターネット画面でのURL入力では、ブラウザの検索窓ではなく、アドレス（URL）が表示されている「アドレスバー」に入力をお願いします。



- 本紙に直接ご回答いただく場合は、同封の返送用封筒でご投函ください。
- 本調査は、15～29歳の区民から無作為抽出した方と若者施策の利用者を対象としています。
- 結果は統計的に処理しますので、回答者が特定されたり、回答いただいた内容が他の目的に使用されることはありません。
- この調査は世田谷区が株式会社インテリサーチに委託して実施しています。調査に関してご不明な点がございましたら、下記までお問い合わせください。

【調査委託先】株式会社インテリサーチ 世田谷区若者施策に関する調査問い合わせ窓口

電話：03-5294-7368

（受付時間：平日9時30分から17時（12時～13時を除く））

【実施主体】世田谷区子ども・若者部若者支援担当課

電話：03-5432-2585 FAX：03-5432-3050

問1 平成30年4月1日時点のあなたの年齢をお答えください。(n=1132)

平均 22.7 歳

問2 あなたの性別をお答えください。(〇は1つ) (n=1132)

1 男性 40.6% 2 女性 58.6% 無回答 0.8%

問3 現在、あなたは世田谷区に住んで何年ぐらいになりますか。あてはまるものを1つお答えください。(○は1つ) (n=1132)

1	1年未満	12.9%	3	3～6年未満	14.2%	5	10～20年未満	30.0%
2	1～3年未満	13.1%	4	6～10年未満	7.4%	6	20年以上	21.8%
							無回答	0.5%

問4 現在、あなたと同居している方について、あてはまるものをすべてお答えください。(○はいくつでも) (n=1132)

1	父	52.1%	4	祖父母	8.9%	7	その他の親族	0.9%	10	その他	1.4%
2	母	60.1%	5	配偶者	11.9%	8	恋人	3.4%	11	同居人はいない	19.5%
3	きょうだい	42.5%	6	自身のお子さん	4.9%	9	友人	0.9%		無回答	0.4%

問5 あなたの現在の状況をお答えください。ただし、複数に該当する場合は、主なものをお答えください。(○は1つ) (n=1132)

1	学生	42.0%	5	専業主婦(夫)	2.4%
2	正規職員(自営業を含む)	41.1%	6	無業者(求職中の人を含む)	1.7%
3	契約社員など非正規職員	4.6%	7	その他(家事手伝い、主に自宅で勉強中の人など)	2.1%
4	パート、アルバイト	5.7%		無回答	0.4%

問6 あなたの就業経験について、あてはまるものを1つお答えください。(○は1つ) (n=1132)

1	現在就業している	55.1%
2	現在は就業していないが、過去に就業経験がある	6.6%
3	これまで就業経験はない	37.4%
	無回答	0.9%

問7 あなたが現在在学している、または最後に卒業(中退を含む)した学校はどれですか。あてはまるものをそれぞれ1つお答えください。(○はそれぞれ1つ) (n=1132)

学校の 種別	1	中学校	0.8%	3	専門学校・各種学校	9.9%	5	大学	55.7%
	2	高等学校・高専	23.4%	4	短期大学	2.6%	6	大学院	6.3%
無回答	1.4%								
在学等の状況	1	在学中	41.8%	2	卒業	43.3%	3	中退	2.1%
								無回答	12.8%

問8 あなたの家の暮らし向き(衣・食・住・レジャーなどの物質的な生活水準)は世間一般と比べてみてどの程度だと思われますか。あなたの実感で、あてはまるものを1つお答えください。(○は1つ) (n=1132)



問9 住んでいる地域への愛着を感じていますか。あてはまるものを1つお答えください。(地域の範囲は、ご自分の近隣から広くは世田谷区全体までを指すものとします。)(○は1つ) (n=1132)

1	感じている	37.9%	3	あまり感じていない	14.5%
2	まあ感じている	43.5%	4	感じていない	3.7%
				無回答	0.4%

問9で「1 感じている」「2 まあ感じている」と回答された方のみお答えください。

問9-1 どんなどころに愛着を感じていますか。あてはまるものをすべてお答えください。

(○はいくつでも) (n=921)

1 住んでいる人がやさしくて親切	21.4%	8 利用している電車や沿線の街が好き	51.9%
2 住んでいる人のモラルが高い	22.0%	9 お祭りや地域のイベントが好き	11.8%
3 住んでいる人同士に温かいつながりがある	9.6%	10 有名人が多く住んでいる	6.3%
4 治安がよく、安全	61.7%	11 テレビやニュースでよく話題になる	6.6%
5 街がきれい	35.4%	12 このまちにステータスを感じている	16.6%
6 緑や公園が多い	42.0%	13 物価が安い	1.2%
7 気に入ったお店や商店街がある	40.0%	14 その他 ()	5.9%
		無回答	0.1%

問10 地域では、地域住民による主体的な活動が数多くあります。こうした活動について、あなたはどのように行動していますか。あてはまるものをそれぞれ1つお答えください。(○はそれぞれ1つ) (n=1132)

	参加している	参加したいと思うが、できていない	参加したいと思わない	無回答
①緑化・植花活動	1.2%	41.8%	56.0%	1.0%
②資源回収などのリサイクル運動	15.7%	35.9%	47.8%	0.6%
③高齢者や障害者などのための活動	2.0%	41.8%	55.1%	1.1%
④子どもや青少年育成のための活動	2.7%	47.2%	49.4%	0.8%
⑤子どもにスポーツ・社会・文化を体験させる活動	3.3%	51.3%	44.6%	0.8%
⑥外国人と交流する活動	2.7%	58.4%	38.1%	0.9%
⑦地域における有害な環境(ピンクビラ、有害図書など)を浄化する活動	0.3%	31.0%	67.8%	1.0%
⑧まちづくりに関する活動	0.9%	41.9%	56.4%	0.9%
⑨地域の防犯・防災のための活動	2.3%	46.0%	51.0%	0.7%
⑩事故や犯罪から子どもを守る活動	1.2%	47.5%	50.4%	0.8%

問11 あなたにとって、次のように感じられる“居場所”はありますか。また、ない場合は、そうした“居場所”がほしいと思いますか。あてはまるものをそれぞれ1つお答えください。なお、家や学校、職場(アルバイト先含む)を含みます。(○はそれぞれ1つ) (n=1132)

	そうした居場所がある	そうした居場所がほしい	そうした居場所が欲しいと思わない	無回答
①安心して過ごせる場所	87.4%	11.6%	0.5%	0.5%
②一人になれる、他人に干渉されない場所	73.1%	23.9%	2.3%	0.8%
③好きなことが自由にできる場所	71.0%	26.9%	1.2%	0.9%
④心をゆるせる仲間と会える場所	72.3%	22.9%	3.9%	0.9%
⑤自分を受け入れてくれる場所	76.5%	19.6%	2.8%	1.1%
⑥普段の生活を忘れられる場所	49.0%	41.3%	8.7%	1.0%

問12 あなたにとって、家や学校、職場（アルバイト先含む）以外で、“居場所”と感じられる、次のような場所がありますか。あてはまるものをすべてお答えください。（○はいくつでも）（n=1132）

1 安心して過ごせる場所	45.6%	5 自分を受け入れてくれる場所	33.5%
2 一人になれる、他人に干渉されない場所	33.1%	6 普段の生活を忘れられる場所	28.5%
3 好きなことが自由にできる場所	36.3%	7 あてはまるような“居場所”はない	14.9%
4 心をゆるせる仲間と会える場所	42.7%	無回答	2.5%

問12で「7 あてはまるような“居場所”はない」と回答された方のみお答えください。
問12-1 あなたにとってどのような“居場所”が必要ですか。具体的にお答えください。

問13 あなたは、学校や職場以外の時間をどのように過ごしていますか。優先度の高いものを3つまでお答えください。（○は3つまで）（n=1132）

1 何もしないでのんびりする	29.9%	13 食事に出かける	13.9%
2 家族とおしゃべりをする	20.9%	14 パーティに出かける	0.4%
3 友人とおしゃべりをする	20.8%	15 映画鑑賞やスポーツ観戦、コンサート等のイベントに行く	12.0%
4 テレビを見たり、音楽を聴いたり、本を読んだりする	39.0%	16 ゲームセンター、カラオケに行く	2.5%
5 ネットゲーム、テレビゲーム、カードゲームなどの室内ゲームをする	20.0%	17 家事や家の仕事をする	10.2%
6 勉強をする	15.7%	18 アルバイトをする	9.5%
7 塾や習い事に行く	5.6%	19 自分のアイデアで売上をつくる	0.5%
8 楽器の演奏、絵画などの創作活動をする	6.4%	20 地域活動やサークル活動、ボランティア活動をする	1.8%
9 スポーツや運動をする	10.6%	21 インターネットをする（ネットショッピングを含む）	15.1%
10 ドライブや旅行に出かける	5.9%	22 SNSやメールでやりとりをする	11.1%
11 散歩に出かける	3.9%	23 その他（ ）	1.4%
12 買い物に出かける	16.7%	無回答	7.1%

問14 あなたは自分のことをどのように思っていますか。あてはまるものをそれぞれ1つお答えください。(○はそれぞれ1つ) (n=1132)

	すごく そう思う	まあ そう思う	あまり そう思わない	ほとんど そう思わない	無回答
①自分には自分らしさというものがあると思う	30.9%	52.1%	14.6%	2.0%	0.4%
②目標を持って頑張っていると思う	21.7%	45.1%	26.0%	7.0%	0.3%
③自分自身のことが好きだと思う	18.3%	45.8%	26.4%	9.0%	0.4%
④私には得意なことがあると思う	23.6%	44.3%	25.4%	6.4%	0.4%
⑤自分の意見が言えていると思う	23.1%	45.4%	25.2%	6.1%	0.3%
⑥他の人から必要とされていると思う	13.6%	49.9%	28.7%	7.5%	0.3%
⑦困っている人がいたら助けたいと思う	37.6%	54.6%	5.6%	1.8%	0.4%
⑧自分の力を地域に役立てたいと思う	13.3%	41.3%	35.2%	9.5%	0.6%
⑨自分の力を発揮したり、試したりする機会があると思う	21.7%	42.5%	28.4%	7.0%	0.4%
⑩いつか自分にふさわしい仕事に出会えると思う、あるいは、すでに自分にふさわしい仕事に就いていると思う	25.0%	49.2%	20.7%	4.9%	0.3%

問15 次に挙げられたことについて、あてはまるものをそれぞれ1つお答えください。(○はそれぞれ1つ) (n=1132)

	はい	どちらかといえ ばはい	どちらかといえ ばいいえ	いいえ	無回答
①身の回りのことは親にしてもらっている	18.9%	34.5%	13.1%	33.2%	0.4%
②食事や掃除は親まかせである	28.5%	25.3%	7.7%	38.3%	0.3%
③朝、決まった時間に起きられる	44.5%	29.8%	15.3%	10.1%	0.4%
④深夜まで起きていることが多い	40.5%	27.5%	16.3%	15.1%	0.5%
⑤昼夜逆転の生活をしている	3.9%	10.2%	19.6%	65.4%	1.0%
⑥新聞の政治や経済・社会報道に目を通す	15.6%	25.9%	26.9%	31.2%	0.4%
⑦自分の周りには理不尽と思うことがたくさんある	19.3%	36.0%	32.4%	11.8%	0.4%
⑧誰とも口を利かずに過ごす日が多い	2.9%	7.6%	25.0%	64.2%	0.3%
⑨人と会話をするのはわずらわしい	2.7%	12.0%	31.1%	53.9%	0.4%
⑩知り合いや親族に信頼できる人はいない	4.9%	4.6%	18.6%	71.6%	0.3%
⑪自分の精神状態は健康ではないと思う	6.8%	13.2%	25.4%	54.3%	0.3%
⑫自分の今の状況について考えることがある	47.4%	35.3%	9.6%	7.2%	0.4%
⑬家や自室に閉じこもっていて、外に出ない人たちの気持ちがわかる	22.3%	30.6%	21.7%	25.1%	0.4%
⑭嫌なことがあると、自分も家や自室に閉じこもりたくなる	18.9%	26.9%	25.4%	28.4%	0.4%

問16 あなたは普段の生活で、身近な人と、どのくらいコミュニケーションを取っていますか。あてはまるものをそれぞれ1つお答えください。なお、コミュニケーションには、直接会うだけでなく、電話やメール、SMS等の手段も含まれます。(〇はそれぞれ1つ) (n=1132)

	毎日	週に 数回	月に 数回	年に 数回	ほとんど しない	まったく しない	該当の 人は いない	無回答
①地元の友人	8.1%	13.3%	20.7%	22.1%	11.6%	10.7%	12.9%	0.6%
②高校(高校時代)、大学(大学時代)の友人	30.0%	19.6%	21.0%	16.4%	6.6%	3.3%	2.7%	0.3%
③その他の友人(学校、職場以外)	13.4%	17.8%	21.3%	15.1%	12.7%	4.9%	14.1%	0.6%
④恋人	24.3%	5.9%	2.6%	0.3%	1.1%	1.0%	64.0%	0.9%
⑤学校の先生	8.8%	10.9%	4.2%	8.0%	12.4%	28.1%	26.9%	0.8%
⑥塾や習い事の先生	1.8%	8.4%	4.9%	2.7%	6.1%	21.7%	53.9%	0.5%
⑦アルバイト仲間	3.1%	11.0%	5.9%	5.4%	6.5%	11.7%	55.6%	0.8%
⑧職場の人	28.1%	13.9%	7.2%	1.9%	3.8%	3.7%	40.6%	0.8%
⑨近所・地域の人	2.8%	9.4%	12.6%	5.5%	17.7%	26.9%	24.6%	0.5%
⑩インターネット上の知り合い	8.2%	8.9%	5.4%	3.4%	8.0%	10.5%	55.0%	0.6%
⑪家族(同居している人)	69.0%	8.7%	1.8%	0.4%	0.6%	0.7%	18.1%	0.7%
⑫親族や同居していない家族	6.7%	22.8%	28.7%	22.0%	7.2%	5.2%	6.9%	0.5%

問17 次のことについて、話したり、相談したりする場合、主に誰と話をしますか。

それぞれ①～⑭のうち、あてはまる人を3つまでお答えください。(〇はそれぞれ3つまで)(n=1132)

	楽しいこと、うれしいことを話す場合	悲しいこと、嫌だったことを話す場合	身の回りのことで、自分の考えや主張を伝える場合	ニュース等で見聞きしたことに対する自分の考えや主張を伝える場合	他の人に言えない本音を話す場合
①地元の友人	22.3%	18.3%	16.0%	9.5%	17.1%
②高校(高校時代)、大学(大学時代)の友人	58.1%	49.4%	46.1%	32.5%	38.8%
③その他の友人(学校、職場以外)	15.5%	11.9%	12.0%	9.9%	9.6%
④恋人	23.9%	20.9%	18.1%	13.5%	16.4%
⑤学校の先生	1.5%	1.9%	4.4%	3.4%	1.5%
⑥塾や習い事の先生	1.1%	0.5%	1.2%	1.1%	0.3%
⑦アルバイト仲間	3.8%	2.7%	3.4%	2.5%	1.6%
⑧職場の人	16.3%	13.5%	19.8%	20.3%	5.9%
⑨近所・地域の人	0.4%	0.6%	0.8%	1.1%	0.4%
⑩インターネット上の知り合い	7.5%	5.9%	6.5%	6.4%	5.0%
⑪家族(同居している人)	57.5%	49.7%	53.5%	51.9%	36.6%
⑫親族や同居していない家族	22.7%	19.5%	19.0%	14.5%	15.4%
⑬その他()	0.6%	0.7%	0.5%	1.1%	1.8%
⑭該当する人はいない	1.1%	4.9%	3.1%	8.2%	12.4%
無回答	3.7%	4.7%	5.0%	6.2%	5.1%

問18 あなたは今、困っていることや悩んでいることはありますか。あてはまるものを1つお答えください。(○は1つ) (n=1132)

1	ある	54.0%	2	以前はあった	11.7%	3	ない	32.0%	無回答	2.4%
---	----	-------	---	--------	-------	---	----	-------	-----	------

問18で「1」～「2」と回答された方のみお答えください。

→問19 あなたが困っているときや悩んでいるときに、次の①～⑭の人はどのくらいサポートしてくれますか。あてはまるものをそれぞれ1つお答えください。(○はそれぞれ1つ) (n=743)

	してくれ る	まあして くれる	あまりして くれない	して くれない	該当の人 はいない	無回答
①父	30.7%	32.3%	12.2%	12.9%	10.5%	1.3%
②母	56.9%	29.5%	5.4%	5.0%	1.9%	1.3%
③祖父母	16.6%	28.4%	11.3%	22.9%	17.9%	3.0%
④配偶者・恋人	25.4%	12.9%	3.2%	2.7%	52.5%	3.2%
⑤兄弟・姉妹	18.4%	28.0%	14.5%	18.3%	17.4%	3.4%
⑥友人	41.9%	41.6%	6.9%	4.7%	2.7%	2.3%
⑦学校の先生	9.0%	17.8%	8.6%	16.8%	44.3%	3.5%
⑧塾や習い事の先生	3.8%	8.5%	3.4%	13.1%	67.4%	3.9%
⑨アルバイト仲間・職 場の同僚	9.2%	25.4%	9.7%	12.4%	38.8%	4.6%
⑩職場の上司・先輩	12.7%	26.9%	9.3%	10.0%	37.7%	3.5%
⑪近所・地域の人	1.7%	5.8%	6.6%	33.1%	48.6%	4.2%
⑫インターネット上 の知り合い	3.2%	12.7%	5.2%	15.2%	59.8%	3.9%
⑬相談機関の人	1.9%	5.5%	2.7%	7.8%	77.7%	4.4%
⑭医師	5.4%	14.1%	3.0%	6.6%	66.2%	4.7%

→問18で「1」～「2」と回答された方のみお答えください。

問19-1 問19の①～⑭の人以外に、サポートしてくれる人はいますか。サポートしてくれる人がいる場合、具体的にお答えください。

--

問20 あなたの身の周りに尊敬できる人はいますか。あてはまるものをすべてお答えください。(○はいくつでも) (n=1132)

1	家族	70.1%	8	職場・バイト先の同僚・後輩	14.8%
2	親戚	21.2%	9	サークルや部活の先輩	16.9%
3	友人	58.8%	10	サークルや部活の仲間・後輩	8.7%
4	恋人	16.6%	11	地域行事や地域活動で関わった人や 近所の人	2.2%
5	学校の先生	19.2%	12	その他 ()	2.7%
6	塾や習い事の先生	9.5%	13	いない	8.1%
7	職場・バイト先の上司・先輩	32.5%		無回答	0.8%

問2-1 あなたは自分が地域で役に立っていると感じたことがありますか。あてはまるものを1つお答えください。(○は1つ) (n=1132)

1 ある	12.4%	2 ない	87.3%	無回答	0.4%
------	-------	------	-------	-----	------

問2-1で「1 ある」と回答された方のみお答えください。

問2-1-1 地域で役に立っていると感じたのはどんな時ですか。あてはまるものをすべてお答えください。(○はいくつでも) (n=141)

1 地域イベント・コミュニティに参加した時	34.0%
2 地域イベント・コミュニティの運営に携わった時	18.4%
3 地域のボランティアに参加した時	26.2%
4 地域の人にあいさつや世間話、声かけをした時	28.4%
5 日常生活で困っている地域の人を助けた時	41.8%
6 その他()	8.5%

問2-2 あなたは20年後の自分の将来について、明るいイメージを持っていますか。あてはまるものを1つお答えください。(○は1つ) (n=1132)

1 持っている	21.6%	3 どちらかというと思っていない	24.6%
2 どちらかというと思っている	39.0%	4 持っていない	13.5%
		無回答	1.1%

問2-2-1 あなたが持っている20年後の自分のイメージについて、あてはまるものをそれぞれ1つずつお答えください。(○はそれぞれ1つ) (n=1132)

	あてはまる	どちらかというと思ってはまる	どちらかというと思ってはまらない	あてはまらない	無回答
①自分がやりたいと思っている仕事をしている	26.9%	43.7%	22.3%	6.4%	0.6%
②自分の収入で暮らせる仕事についている	32.6%	44.5%	16.3%	6.0%	0.6%
③何でも話せる人が自分の周りにいる	39.8%	40.4%	14.3%	4.7%	0.8%
④健康的に生活している	37.7%	43.6%	14.1%	3.9%	0.6%
⑤結婚している	35.2%	30.3%	14.8%	18.7%	0.9%
⑥子育てに励んでいる	28.4%	32.0%	17.1%	21.7%	0.8%
⑦生きがい、やりがいを見つけている	35.2%	42.4%	16.2%	5.2%	1.0%
⑧共通の趣味を持った仲間がいる	37.9%	39.9%	15.0%	6.3%	0.9%
⑨地域や周りの人に認められている	14.9%	36.0%	31.6%	16.3%	1.1%
⑩地域・社会が抱える問題の解決に向けて、一役買っている	10.0%	21.8%	35.8%	31.4%	1.0%

問23 あなたは、ふだんどのくらい外出しますか。あてはまるものを1つお答えください。

(○は1つ) (n=1132)

1	仕事や学校で平日は毎日外出する	84.4%
2	仕事や学校で週に3～4日外出する	5.7%
3	遊び等で頻繁に外出する	2.9%
4	人づきあいのためにときどき外出する	2.6%
5	ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事のみときだけ外出する	1.9%
6	ふだんは家にいるが、近所のコンビニなどには出かける	1.3%
7	自室からは出るが、家からは出ない	0.4%
8	自室からほとんど出ない	0.1%
	無回答	0.7%

問24へ

→ 問23で「5」～「8」と回答された方のみお答えください。

問23-1 現在の状態になったのは、あなたが何歳の頃ですか。(n=43)

平均 22.5 歳

→ 問23で「5」～「8」と回答された方のみお答えください。

問23-2 現在の状態になったきっかけは何ですか。あてはまるものをすべてお答えください。(○はいくつでも) (n=43)

1	学校になじめなかった	14.0%	6	病気	14.0%
2	受験に失敗した	11.6%	7	障害	4.7%
3	就職活動がうまくいかなかった。	7.0%	8	妊娠した	18.6%
4	職場になじめなかった	2.3%	9	その他()	25.6%
5	人間関係がうまくいかなかった	16.3%	10	外出する必要がなかった	27.9%
				無回答	2.3%

問23で「1」～「4」と回答された方のみお答えください。

問24 あなたは今までに6か月以上連続して、以下のような状態になったことはありますか。あてはまるものを1つお答えください。(○は1つ) (n=1081)

1	ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事のみときだけ外出する	5.9%
2	ふだんは家にいるが、近所のコンビニなどには出かける	2.0%
3	自室からは出るが、家からは出ない	0.8%
4	自室からほとんど出ない	0.5%
5	上記1～4のような状態に6か月以上連続してなったことはない	83.7%
	無回答	7.0%

問25へ

→ 問24で「1」～「4」と回答された方のみお答えください。

問24-1 その状態になったのは、あなたが何歳の頃ですか。(n=100)

平均 19.2 歳

その状態はどれぐらい続きましたか。(n=100)

平均 2.8 年 月

問24で「1」～「4」と回答された方のみお答えください。

問24-2 その状態になったきっかけは何ですか。あてはまるものをすべてお答えください。
(○はいくつでも) (n=100)

1 学校になじめなかった	12.0%	6 病気	12.0%
2 受験に失敗した	7.0%	7 障害	5.0%
3 就職活動がうまくいかなかった	8.0%	8 妊娠した	2.0%
4 職場になじめなかった	13.0%	9 その他 ()	15.0%
5 人間関係がうまくいかなかった	25.0%	10 外出する必要がなかった	28.0%
		無回答	9.0%

問24で「1」～「4」と回答された方のみお答えください。

問24-3 その状態から、問23で回答した現在の状態になったきっかけや、役立ったことは何だと思えますか。具体的にお答えください。

問25 あなたは、最近2～3年の間に、学校や仕事以外で、次の①～⑫のような活動に参加しましたか。あてはまるものをそれぞれ1つお答えください。(○はそれぞれ1つ)
(n=1132)

	参加だけでなく 企画から 関わった	参加した	参加 しなかった	無回答
①映画、展示会、音楽などの鑑賞	6.4%	78.4%	14.6%	0.5%
②絵画や音楽などの創作活動	7.8%	22.6%	69.0%	0.6%
③スポーツ(観戦含む)	5.8%	59.1%	34.6%	0.4%
④観光	11.6%	73.9%	13.9%	0.6%
⑤自然体験(キャンプ、川遊び、天体観測など)	5.0%	41.5%	53.0%	0.4%
⑥国や地方自治体の開催するイベント	1.0%	17.3%	81.1%	0.6%
⑦企業やNPO等、民間団体の開催するイベント	1.9%	18.0%	79.5%	0.6%
⑧地域行事(祭りなど)	1.7%	51.9%	45.8%	0.6%
⑨地域活動(サークル活動、NPO活動、清掃、 防災活動など)	1.9%	14.5%	82.9%	0.7%
⑩ボランティア	2.3%	17.0%	80.0%	0.6%
⑪自己啓発セミナー	1.0%	7.5%	90.8%	0.7%
⑫国際交流イベント(外国人との交流、ホームステイなど)	1.4%	15.7%	82.2%	0.6%

問26 あなたは、どのような条件が整えば、学校や職場以外で他の人と一緒に行う活動(趣味の活動やボランティア、イベントなど)に参加・参画しようと思いますか。あてはまるものをすべてお答えください。(〇はいくつでも) (n=1132)

1	活動内容に興味・関心もてる	74.5%
2	いろんな人との出会いが期待できる	39.8%
3	自分のやりたいことを発見することが期待できる	39.9%
4	自由時間を有効に使うことが期待できる	27.0%
5	自分の抱えている問題の解消・緩和が期待できる	22.1%
6	新しい技術や能力を身につけたり経験を積んだりすることが期待できる	39.8%
7	進学、就職などで有利になることが期待できる	24.7%
8	困っている人の手助けになれる	26.9%
9	地域や社会をよりよくするのに役立つ	12.8%
10	活動する時間的余裕がある	44.7%
11	活動場所が行きやすい場所にある	43.1%
12	様々な情報が得られる	21.6%
13	参加するのに費用等がかからない	35.2%
14	短時間の活動や自分の都合にあわせて時間が設定できる	28.8%
15	必要以上に関わらないようにしてくれる	22.6%
16	活動団体の雰囲気がよい	41.9%
17	同世代の参加者が多い	33.8%
18	自分の意見を尊重してくれる	14.4%
19	友人や知人と一緒に参加できる	34.5%
20	その他 ()	1.4%
21	参加・参画したいと思わない	5.9%
	無回答	0.4%

問27 世田谷区が行なっている次の取組みについて、利用・参加したことがあるもの、知っているものはありますか。あてはまるものをそれぞれ1つお答えください。(それぞれの取組みの概要は別紙で紹介しておりますので参考にしてください。)(○はそれぞれ1つ) (n=1132)

		利用・参加したことがある	知っていたが利用・参加したことはない	知らなかった	無回答
施設	①児童館	45.5%	22.2%	32.1%	0.3%
	②児童館(中高生支援館)	7.2%	20.0%	71.9%	0.9%
	③青少年交流センター池之上青少年会館	2.6%	10.9%	85.4%	1.1%
	④野毛青少年交流センター	1.4%	8.7%	88.6%	1.2%
事業	⑤ティーンズプロジェクト	0.3%	3.6%	95.0%	1.1%
	⑥TEENAGE CARNIVAL (ティーンエイジカーニバル)	0.5%	2.8%	95.5%	1.1%
	⑦ダンスフェスティバル SETAGAYA	1.2%	6.8%	90.8%	1.1%
	⑧池青ライブ	0.4%	2.1%	96.3%	1.1%
	⑨のげ青縁日	0.3%	2.5%	96.1%	1.1%
	⑩のげ青フェスティバル	0.3%	2.3%	96.1%	1.3%
	⑪SNS情報発信「情熱せたがや、始めました。」 ※SNSを見たことがある場合、「1」とお答えください。	1.3%	2.7%	94.7%	1.2%
	⑫中高生の居場所「あいりす」	0.2%	3.6%	95.0%	1.2%
	⑬中高生の居場所「たからばこ」	0.2%	1.8%	96.9%	1.1%
	⑭プレーパーク	14.6%	6.4%	78.1%	1.0%
	⑮地域ごとに行われている青少年活動 (青少年地区委員会の活動など)	1.9%	6.4%	90.6%	1.1%

問27-1 問27の各取組みでは、若者がスタッフや運営側として子ども・若者を支援したり、地域を支える活動をしたり、若者に向けて地域の情報発信をしたりしています。こういった若者や地域に働きかける取組みにスタッフや運営側として参加してみたいと思いますか。あてはまるものを1つお答えください。(○は1つ) (n=1132)

1 すでに、参加している	0.7%	3 興味はあるが、参加はしない	33.7%
2 参加してみたい	15.9%	4 興味がなく、参加したいと思わない	48.6%
無回答		1.1%	

問28へ
問27-2へ

問27-1で「3 興味はあるが、参加はしない」と回答された方のみお答えください。

問27-2 どのような条件が整えば、参加してみたいと思いますか。あてはまるものをすべてお答えください。(〇はいくつでも) (n=381)

1	社会や地域への貢献度が高い	15.0%	9	収入が得られる	31.8%
2	能力・スキルが発揮・習得できる	33.6%	10	自分の意見が活動内容に反映される	7.6%
3	様々な情報が入手できる	15.0%	11	地域の人から感謝される	8.4%
4	活動団体の雰囲気が良い	37.3%	12	友人や知人と一緒に活動できる	20.7%
5	地域の人と知り合いになれる	12.9%	13	就職活動の際、自己PRにつながる経歴になる	16.5%
6	短時間の活動や自分の都合にあわせて時間設定ができる	53.5%	14	学校の授業・ゼミの単位や評価につながる	8.1%
7	活動場所が家や学校の近くにあり、通いやすい	40.4%	15	その他()	8.4%
8	活動場所までの交通の便が良い	27.8%	無回答		0.5%

問28 区内には、困りごとや悩みがあるときに利用できる専門機関がありますが、次の機関について知っているもの、利用したことがあるものはありますか。あてはまるものをそれぞれ1つお答えください。(各専門機関の概要は別紙でご紹介しておりますので参考にしてください。)(〇はそれぞれ1つ) (n=1132)

	知っている 利用したことがある	知っている が利用した ことはない	知らな かった	無回答
①メルクマールせたがや (生きづらさを抱えた若者の総合支援機関)	0.4%	4.9%	93.4%	1.3%
②ワークサポートせたがや・三茶おしごとカフェなどの就労支援機関	1.9%	10.2%	86.7%	1.3%
③せたがや若者サポートステーション	0.6%	5.5%	92.7%	1.2%
④げんき(発達障害相談・療育センター)など 発達障害者支援機関	1.1%	5.3%	92.2%	1.4%
⑤ぶらっとホーム世田谷(生活困窮者自立支援機関)	0.3%	6.2%	92.1%	1.4%
⑥セクシャル・マイノリティのための 世田谷にじいろひろば電話相談	0.1%	3.2%	95.4%	1.3%
⑦ほっとスクール(適応指導教室)	0.5%	9.2%	88.5%	1.8%
⑧教育相談室	1.1%	19.4%	78.2%	1.2%
⑨児童相談所	1.3%	36.5%	60.8%	1.4%
⑩保健福祉センター子ども家庭支援センター	0.9%	18.9%	78.9%	1.3%
⑪保健福祉センター健康づくり課	2.2%	20.2%	76.2%	1.3%
⑫保健福祉センター保健福祉課	1.8%	18.7%	78.3%	1.2%
⑬せたがやホッと子どもサポート (子どもの人権擁護機関)	0.4%	16.3%	81.8%	1.5%
⑭保健所・保健センター	3.2%	37.4%	57.9%	1.6%
⑮(心の悩みに対応する)病院・診療所	3.7%	26.4%	68.4%	1.5%
⑯民間施設(いわゆる「フリースクール」など) (施設名:)	0.4%	12.3%	86.0%	1.3%
⑰上記以外の心理相談・カウンセリングなどをする 民間施設(施設名:)	0.7%	11.6%	85.7%	2.0%

問28の専門機関について「1 知っていて利用したことがある」と回答された方のみお答えください。

問29 専門機関に相談する時、迷いや不安はありましたか。その理由についてあてはまるものをすべてお答えください。(〇はいくつでも) (n=126)

1 自分のことを知られなくなかった	15.9%	7 専門機関が近くになかった	4.8%
2 行っても解決できないと思った	23.0%	8 自分が非難されると思った	7.1%
3 何をきかれるか不安に思った	18.3%	9 専門機関の情報が足りなかった	8.7%
4 相手にうまく話せないと思った	20.6%	10 その他()	3.2%
5 行ったことを人に知られなくなかった	11.9%	11 迷いや不安はなかった	40.5%
6 お金がかかると思った	11.1%	無回答	7.1%

問28の専門機関について「1 知っていて利用したことがある」と回答された方のみお答えください。

問29-1 問28の専門機関のうち、1番最初に訪れた専門機関について、知ってから利用するまでにどれくらい時間がかかりましたか。あてはまるものを1つお答えください。(〇は1つ) (n=126)

1 1週間以内	19.0%	3 3か月以内	5.6%	5 1年以内	6.3%			
2 1か月以内	19.8%	4 6か月以内	3.2%	6 1年以上	10.3%			
					7 覚えていない	28.6%	無回答	7.1%

問29-1で「3」～「6」と回答された方のみお答えください。

問29-2 時間が経過してからの利用となった理由は何ですか。あてはまるものをすべてお答えください。(〇はいくつでも) (n=32)

1 自分のことを知られなくなかった	6.3%	8 専門機関に行かなくても何とかな	28.1%	
2 行っても解決できないと思った	21.9%	ると思った		
3 何をきかれるか不安に思った	9.4%	9 相談するのが面倒くさかった	12.5%	
4 相手にうまく話せないと思った	12.5%	10 自分が非難されると思った	12.5%	
5 行ったことを人に知られなくなかった	6.3%	11 専門機関の情報が足りなかった	9.4%	
6 お金がかかると思った		12 その他()	6.3%	
7 専門機関が近くになかった	12.5%	13 利用する必要があると思った	25.0%	
		6.3%	14 特に理由はない	25.0%

調査票が白色または水色の方へのアンケートは以上となります。
調査票が緑色の方は、次の問30以降もお答えください。

問30 この調査票を受け取った場所をお答えください。(〇は1つ)

1 メルクマールせたがや	3 あいりす
2 たからばこ	4 せたがや若者サポートステーション

問31 問30で回答した場所を利用したことによって、困りごとや悩みは改善しましたか。あてはまるものを1つお答えください。(〇は1つ)

1 改善した	2 改善しなかった
--------	-----------

次のページにも質問があります。

問3 1-1 その場所を利用した結果について、あなた自身の状態や気持ちに変化したことはありますか。あてはまるものをすべてお答えください。(〇はいくつでも)

状態の変化 【変化】	1 現状を変えるための認識を持つようになった 2 現状を変えるために支援者に促されて行動を起こすようになった 3 現状を変えるために自発的に行動に移すようになった 4 不安定さは残るものの、社会参加についての自覚を持ち、継続した社会参加のための行動を実践できるようになった 5 家族関係が改善した 6 同世代の仲間が増えた 7 世代の異なるいろいろな生き方をしている人たちと知り合いになれた 8 自分の価値観や生き方の選択肢が広がった 9 さまざまな知識や経験を得られた 10 自分の将来像が具体的になった 11 多様な選択肢の中から働き方を決めることができた 12 多様な選択肢の中から進学を決めることができた 13 特に状態の変化は感じていない
気持ちの変化 【変化】	14 自分の気持ちが楽になった 15 自分の考えや気持ちに整理がついた 16 何かしてみようと思った 17 失敗しても、また挑戦できる、やり直すことができると思えるようになった 18 人への恐さが軽減した 19 世の中が、嫌な人、悪い人ばかりではないと思えるようになった 20 社会とのつながりを実感できるようになった 21 社会に出て働くことは楽しいと思えるようになった 22 このような機関があつて良かったと感じている 23 このような機関をもっと早く利用していれば良かったと感じている 24 特に気持ちの変化は感じていない

問3 2 あなたはその場所で得られた支援に満足していますか。(〇は1つ)

1 満足している	2 満足していない	→ 問3 2-2へ
----------	-----------	-----------

問3 2で「1 満足している」と回答された方のみお答えください。

問3 2-1 満足している理由について、あてはまるものをすべてお答えください。(〇はいくつでも)

1 親身になってくれる専門家・相談員がいた	3 知り合いができた
2 適切な機関につないでくれた	4 その他()

問3 2で「2 満足していない」と回答された方のみお答えください。

問3 2-2 満足していない理由について、あてはまるものをすべてお答えください。(〇はいくつでも)

1 職員が親身になってくれなかった	3 知り合いができず、疎外感があった
2 状態がよくならなかった	4 その他()

アンケートは以上となります。ご協力ありがとうございました。

世田谷区若者施策に関する調査 自由記載欄回答

問9 - 1 問9で「1 感じている」「2 まあ感じている」と回答された方のみお答えください。
どんなところに愛着を感じていますか。あてはまるものをすべてお答えください。

親または自分が生まれ育った街だから(15) 都心に近くアクセスがよい、通勤に便利(15)
静か(5) 暮らしやすい(4) 友達がいるから(3)
スーパーが充実(3)(銀行、コンビニ、郵便局など便宜施設が多く便利など(1))
子どもが多く活気があり雰囲気がよい(2) ゴミの分別が少ないため楽(2)
古くからの住宅や商店がある(2) 所縁の土地(2)
多くの市民が社会を良くするためにがんばっている、ほどよい田舎感が好き、僕がこの街好きだから、
民度が高い

問12 - 1 問12で「7 あてはまるような“居場所”はない」と回答された方のみお答えください。
あなたにとってどのような“居場所”が必要ですか。具体的にお答えください。

特に必要ない。(家、学校、アルバイト先など)他に居場所がある。(56)
図書館のように気軽に立ち寄れて、趣味を楽しめる場所(14)
普段の生活(嫌なこと、時間、仕事など)を忘れてリフレッシュできる場所(10)
素でいられる、自分を受け入れてくれる、信頼でき心が落ち着く居場所(9)
交流できる場所(若者世代、異なる世代)(例:カフェ、英会話、趣味)(9)
一人でも過ごしやすいお気に入りの場所(人がいても雰囲気がよい空間、店、カフェ、柴犬カフェなど)(6)
学生が無料で学習、自習ができる場所(5) 自分の部屋、個室、一人になれる場所(5)
人の目を気にせず、スポーツや好きなことをしてリラックスできる場所(3)
わからない、見つけられていない、区が介入することではない(3)
外気温に影響されない静かな所(2) 自然が豊かで干渉されない開放的な場所(2)
食に困らずネットが使い放題の場所、一人じゃない居場所、向上心がもてる場所、
長くこの街に住みたいと思える場所、楽しい居場所、ゲームセンター、
馬事公苑。馬に親しんできた場所に子どもと一緒にいきたい、早く完成して利用したい、
乳幼児の子どもと一緒にいける漫画喫茶+プレイルーム+美容施設(美容院、ネイル、まつ毛パーマ)。子どもが
遊べる大部屋と、大部屋で飲めるドリンクバー、1時間だけ保育士さんに預けて自由な時間をつくりたい。利用
可能なピアノがあったら子どもに弾き語りをしたい。託児に抵抗があるが、すぐ隣やガラス張りなら安心できる。

問13 あなたは、学校や職場以外の時間をどのように過ごしていますか。
優先度の高いものを3つまでお答えください。

食事、飲み会(2)(家で)仕事する(2) 睡眠(2) 友人と遊ぶ(2)
起業活動、アウトドア(キャンプやグランピングなど) 児童館に行く、パチンコ屋、ペット、子育て、踊る、
小説を書く、車メンテナンス、図書館に行く、壁と話し合う、夢を追っている、恋人とおしゃべりをする

問17 次のことについて、話したり、相談したりする場合、主に誰と話をしますか。
それぞれ ~ のうち、あてはまる人を3つまでお答えください。

特になし。(2) 元彼(2) SNS、アーティスト、児童館、行きつけ店のバーテンさん、
仕事上のお客さま、自分、社長、心理カウンセラー、先輩、独り言、本音は皆に言う

問19-1 問19の ~ の人以外に、サポートをしてくれる人はいますか。サポートしてくる
人がいる場合、具体的にお答えください。

いない(26) 友人(5) 義両親(3) 犬(人ではないが)(3) よく行くお店の店員、仲間。(3)
前職の同僚(3) インターネット上で同じ悩みをかかえている人や励ましの言葉をみると支えられる。(3)
義兄弟(2) 学校の先輩(2) 恩師(2) 保育園の先生(2) 自分。(2) 専門のカウンセラー(2) 留
学時代のホストファミリー(2) 同居人(2) 年上のいとこ(2) 支援センターの先生(1)
先輩(部活(2) 大学(1) ボランティア(1)) 元上司(1) シェアハウスの住人、介護してくれる人、
訪問看護のOT、看護師、児童館、住まいについて管理会社の担当者、恋人、友人の家族、幼なじみの親、
相談する価値があると内容に当てはまる知人、幼少期のスポーツ指導者(コーチ)
(12)の人が1番相談にのってくれるし話しやすい

問20 あなたは身の周りに尊敬できる人はいますか。あてはまるものをすべてお答えください。

SNS・インターネット上の知り合い(5) 学校の先輩(3) 芸能人(3) 恩師(3) 仕事で出会った人(2)
先輩(趣味繋がり・他社)(2)
配偶者、友人の父親、飲み友達、元 職場の人、児童館の人、心理カウンセラー、プロサッカー選手、陸上選手、
有名人、応援しているアイドル、アーティスト、俳優

問21-1 問21で「1 ある」と回答された方のみお答えください。

地域で役に立っていると感じたのはどんな時ですか。

あてはまるものをすべてお答えください。

仕事を通じて役に立っている(6) アルバイトをしているとき、おさめた税金の額を見た時
カーブミラーが壊れているのを見つけて連絡した時、大雪で近所中(お年寄りの家の前)雪かきした時
リサイクル活動、医療関連の仕事のため、古布回収、児童館にいる、少子高齢化の町にうるおいを与えている

問23-2 問23で「5」～「8」と回答された方のみお答えください。

現在の状態になったきっかけは何ですか。あてはまるものをすべてお答えください。

在宅勤務(2) 出産後(2) 子育て中、いじめ、うつ状態、興味があった、志望校に行った事が失敗
親、大学の授業は週一回でそのほかにも趣味でたくさん外に出ている、大学院生のため
俗世との繋がりを断ち切り自然と一体化するため

問24-2 問24で「1」～「4」と回答された方のみお答えください。

その状態になったきっかけは何ですか。あてはまるものをすべてお答えください。

全てに疲れていた、適応障害、親が病気で面倒であり日光に当たりたくなかった、大学の授業がほぼなかった、出産の後、受験が終わり入学までの期間、なんとなく、家で好きなことしてた、仕事が忙しい、ストレス、外出しないと落ち着かない、職場のパワハラとセクハラで体調を崩した、親と反りが合わなかった、海外に住んでいたが日本に帰国し専門学校に通うため家で勉強などしていた、友人と出かけることが増えたりしたから。

問24-3 その状態から、問23で回答した現在の状態になったきっかけや、役立ったことは何だと思えますか。具体的にお答えください。

ない(3)(転職前にメンタル相談に行ったが、全くためにならなかった。(1))

家でできる趣味(1)(パソコン(1)) 環境の変化(2) コミュニケーションが役に立った。(2)

ハローワーク利用(転職(8) 転校(1) 予備校(1) アルバイトを始めた(1) 進学(4) 留学(1))

人間関係がうまくいかなかった。(上司、周りの人)(2) 病気の回復(2) 通院(3) 時間が解決(3)

悩みを聞いてくれた。サポートがあった。(家族(5) 学校の先生(1) 友達(7) 恋人(2) 周りにいる人(2))

フリースクール(1) 出産(1) 帰国(1) 芸能事務所を辞めた(1) 施設から学校に通う(1))

実家に帰るわけにいかず、一人暮らしのため、働かないと生きられないから、将来への焦り、

友人たちは家があまり近くないから遊んだり出来なかったため、安く食事できるところを見つけた、

家族と付き添って外出することが少なくなった、仕事がある時、外出する、

人と会話する難しさやストレスが原因で解消のために空港に行った、

子どもが大きくなり、復職が控えていた、学歴社会、今でも必要がなければ家から出ない

問27-2 どのような条件が整えば参加してみたいと思えますか。

あてはまるものをすべてお答えください。

自分に余裕の時間ができれば(12) 仕事と趣味で忙しいので参加不可(3)

気分がのれば、参加してみたい(2) 他にやるべきことがある(1) 受験・学業が忙しい(2)

ターゲットを社会的弱者に限定していない結果にきちんと繋がる企画であること。

とくに思わない、求められることや負担が大きすぎない、子供の面倒を見てくれる、内容による、

自分と同じ価値観の人が多くいる、もっと人気があれば、介助が必要なので参加できない、

一緒に活動する方々の能力が高い事、自分の特技が使えたら、人を傷付けない様な言い回しができたら

問29 専門機関に相談する時、迷いや不安はありましたか。その理由についてあてはまるものをすべてお答えください。

混んでいてなかなか利用できなかった(2)

問29-2 時間が経過してからの利用となった理由は何ですか。あてはまるものをすべてお答えください。

以前通っていた所でもらってる薬が余っていた、妊娠中に知って産まれてから利用した、体力、気力が無かった

問32-2 満足していない理由について、あてはまるものをすべてお答えください。

通い始めて時期が経っていない

資料4 世田谷区若者施策に関するヒアリング調査報告書

- 目次 -

1 . 青少年交流センター池之上青少年会館	173
2 . 野毛青少年交流センター	177
3 . 池尻児童館	181
4 . 代田児童館	184
5 . 玉川台児童館	190
6 . 喜多見児童館	195
7 . 粕谷児童館	201
8 . プレーパーク（羽根木・烏山）	206
9 . 情熱せたがや、始めました。	212
10 . メルクマールせたがや	217
11 . たからばこ	222
12 . あいりす	226
13 . せたがや若者サポートステーション	228
14 . 桜新町親和会	233
15 . 親和会	235
16 . 用賀商店街	237
17 . 下高井戸商店街	240
18 . 経堂青少年地区委員会	242
19 . 成城青少年地区委員会	244

ヒアリング対象一覧

ヒアリング対象	特徴
青少年交流センター 池之上青少年会館	青少年の自主的なサークル活動を促進し、その健全な育成を図ることを目的とした社会教育施設。
野毛青少年交流センター (運営：認定 NPO 法人文化学習協同ネットワーク)	「若者らしさ」を支え応援する、学びと交流のベースキャンプを目指した事業を進めている。
池尻児童館	平成 27 年度から、地域の児童館のうち 1 か所を、「中高生支援館（プレスポ）」に位置づけ、地域の中心となって、中高生世代の活動を応援している。中高生支援館は、開館時間を延長し、中高生優先の時間を設けたり、中高生向け設備が充実している。
代田児童館	
玉川台児童館	
喜多見児童館	
粕谷児童館	
プレーパーク（羽根木・烏山） (運営：特定非営利活動法人プレーパークせたがや)	「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーにした遊び場。常駐のプレーワーカーや地域のボランティアの方たちのもとで、普通の公園ではなかなかすることができない焚き火や泥遊び、木登りなどをすることができる。
「情熱せたがや、始めました。」 (運営サポート：NPO法人グリーンズ)	地域の魅力的なイベントや場・活動、若者にとって有益な取組み等を SNS で発信している若者チーム。
メルクマールせたがや (運営：公益社団法人青少年健康センター)	ひきこもりなどの生きづらさや困難を抱えた方からの相談を受け付けます。相談の内容によって「せたがや若者サポートステーション」やその他の関係機関と連携しながら支援を行っている。
たからばこオーブナー (運営サポート：公益財団法人児童育成協会)	大学生世代の若者がサポーターとなって企画・運営している中高生の居場所。
あいりす (運営サポート：公益財団法人児童育成協会)	大学生世代の若者がサポーターとなって企画・運営している中高生の居場所。
せたがや若者サポートステーション (運営：特定非営利活動法人ワーカーズコープ)	就職や働くことに不安がある若者を、個別相談、各種プログラムで支援。
桜新町親和会 (玉川地域 町会)	<div style="border: 1px solid blue; border-radius: 20px; padding: 10px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> <p>身近な地域の活動の中で、若者がどのように関わっているか、町会・自治会、商店街、青少年地区委員会より各 2 か所を訪問し、ヒアリングを行う。訪問先は、地区ごとの活動状況も参考に、地域に偏りがないよう選定をした。</p> </div>
親和会 (烏山地域 町会)	
用賀商店街振興組合 (玉川地域 商店街)	
下高井戸商店街振興組合 (北沢地域 商店街)	
青少年経堂地区委員会 (世田谷地域 青少年地区委員会)	
青少年成城地区委員会 (砧地域 青少年地区委員会)	

世田谷区若者施策に関する調査

ヒアリング調査 議事要旨（青少年交流センター池之上青少年会館）

2018年06月30日（土）

場所：池之上青少年館

出席者

池之上青少年会館：館長、職員

池之上青少年会館利用者：7名

世田谷区子ども・青少年協議会 小委員会委員

ヒアリング内容（館長）

1 基本属性

- 小・中・高・大学生主体（今日は高校生多い）。午後2～5時は小学生、後の時間帯になると大学生、高校生。性別の偏りはない。お子様から人生の先輩方まで対象。水・木は小学生が早く来館。年間利用者数7万人（当初は4万人程度）。
- 来館者の9割は友人同士。1人で来るのは1割。
- 多聞小、代沢小など広い地域から来館あり。
- イベントは児童館へ、家が近ければ代田、代田南へ行っている。
- かつては青年対象の施設だったが、その後、中・高生の居場所として位置付けられ、現在は子どもたちの個性や学年に合った特徴ある事業を展開。

2 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- 子ども計画に沿って実施（所管が子ども・若者部に異動後）。利用者数は平成元年以来、年間4万人から工事をはさんで上下した。また事業仕分け時は館事業見直しを行ったこともあったが、利用者は増加傾向。
- 現計画では、仲間づくり、子ども計画、異学年交流に力を入れている。次に自己実現を支援するプログラム（環境づくり）に力を入れている（中高生が自分たちで考え話し合うなどする機会）
- 館実施の3本柱が、文化祭、ダンスフェスティバル、ライブ。商店街・地域とコラボで実施。ライブは3年前より実施。
 - ダンス、ライブでは、自己実現（体を動かす、楽しむ、発表での達成感）が子どもたちに良い影響を与えている。
 - 「順位、ランク付け」でなく発表し合う機会、仲間づくりの確認できる機会になっている。
 - 中高生の部活経験者の参加のほか、大学生（日本体育大学、日本女子体育大学等）、民間の指導者の参加があり、異学年、世代間交流の場となっている。
 - プロのメンバー（舞台監督、音響、照明、スタッフ）と参加者とのコミュニケーションがあり一体感が生まれている。参加者もプロとつながることができる機会となっている。
 - 青少年交流センターを取りまとめるイベント等ができれば良いと考えている。

3 施設・事業の運営

- 屋根つき広場と思ってもらえるような施設を目指している。
- 近年、施設を使い慣れてきた団体が減る傾向あり。5人以上のサークルを作る動きがない。中高生には団体登録での利用という条件がハードルになっている模様。若者運営委員会で使い勝手等検討が図られればと思っている。
- 今後ダンスフェスティバル参加者らが館の空き時間で活用してもらえればと考えている。
- 読書室の真下の絨毯コーナーで子どもたちを観察できる。
- 地域によって異なるのかもしれないが、最近の子どもたちは「干渉されすぎ」「干渉されやすい」と感じる。そういう中で、ここは自由に使えるところと感じている。

4 施設に来る若者の変化

- イベント（リーダースクール含む）に来た時点では不安そうにしているも、終えた時には誇らしげ、あ

るいはお兄さんお姉さんになった（成長した）達成感のある顔になっている。

- 夜型の生活だった若者が、講座参加を通じて、起きて午前中から参加するようになった。
- 親世代が子どもの頃から館を知っていることもあり、子ども連れて講座参加のケースもある。
- 利用者との信頼関係を作ることを大事にして、イベントについての個別意見を聞いたりして意見を吸い上げる関係をつくっている。職員会議で事前に意見を把握したうえで反映できるようにしている。

5 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

- イベント、ダンスフェスティバルのDVD鑑賞
 - 高校の教諭（ダンス専門の先生もいる）の振り付けがしっかりしている。ゲネプロ、リハーサルもしっかり行っている。
 - 会場の設備もイベントに協力的である。
 - 他区（板橋区）でやりたいとの意向もある。
 - こちらから都立高校を回り、イベント参加を打診している。部活の先生、生徒と信頼関係を作りながら参加に結び付けている。
 - ダンスフェスティバル（3月実施）は、高校生活の最後の記念になったと喜んでもらっている。保護者（祖父母含め）がよく観に来ている。卒業後、OB・OGになっても一般の部で参加する者もいる。
 - 卒業後、指導者になる子どももいる。
 - ダンスフェスティバルの様子をDVD作成後（4、5月ごろ）学校を回ってあいさつして渡している。部活の先生に見てもらうことで次の年につないでいる。
 - 「池青ライブ」は、小学生から始めた子が中学生になりバンドをつくって発表している。このライブでが発表の場となっている。

6 施設紹介

- 相談室、読書室（自習室もあり夜10時まで）、屋上テニスコート（1時間単位無料）和室（文化祭で子どもたち対象のお茶席や着付け教室でも利用）学習室1（多目的。音楽室、ダンスでも利用）学習室2（夜間打合せ等での利用あり）壁（廊下や階段に活動記録を模造紙で張出している）、1Fフロア（飲食自由な空間）音楽室（防音扉、楽器備え付け）施設受付・隣接グラウンド（小、中、高生みなど利用）絨毯コーナー（飲食物持ち込み可）

ヒアリング内容（職員）

1 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- リーダースクールについて
 - 平成26年教育委員会から区長部局に移管されたが、それ以前にリーダースクール育成組織（青年の家、ジュニアリーダー）が合併してできた。移管前は、学習の観点が強くと講座開催参加が成果だった。今は子どもたちとの関係づくりから先につなげる取組みへと変わってきている。
 - ユースリーダー事業の一環として位置づけ。対象年齢は中学生以上25歳未満。年齢でインリーダー（中学生から高校2年まで）、アウトリーダー（高校3年以上）に区分。
 - 目的は、地域を担う若者を育てる、リーダーを育てるというのを目指して、地域の担い手、リーダーづくりのために行っている。企画から実施まで、自主運営的な活動の経験の機会を提供している。
 - リーダースクールは月2、3回。現在登録は44人。アウトリーダーは殆ど参加なし。イベント時の手伝いで参加するケース。
 - 課題は、全区からの募集のため、育成後地域につながりにくい点があげられる。
 - 子ども計画では、リーダースクールと児童館のボランティアリーダーと一緒にユースリーダー事業を通して地域に循環していくという形だが、児童館は地元密着型に対しリーダースクールは全区の広がりのため地元密着になりにくい。
 - リーダースクール出身者は、野毛青少年交流センター職員にいたり、他地域のイベントの実行委員会に関わるなど、スクールの目指す形にはなっている。

2 施設・事業の運営

- 今後中高生を対象に、職員が積極的に関わりをもって利用者である若者たちと良い関係を作って、その

先につながる何かを展開できるようにしたい。(イベントの実行委員への勧誘など。)

- 館自体、「大人の見守る目がある自由に遊べる公園」のようなイメージで作られている。信頼関係づくりの観点から、利用者には一緒にゲームをしようと声かけするところから始めている。

3 施設に来る若者の変化

- 読書室利用者には、勉強で利用するメリットはあるが、関係づくりは難しかった。挨拶ぐらいまで。
- 自分たちがどう関わりを持てるか。そこで子どもたちから面倒くさいと思われるかもしれないが、やり取りを何回も重ねる。学校のように決まったことでなく、もっと本当に子どもたちがやりたいこと、くだらないことを思い切ることができる場と、それを一緒にやってくれる大人がいると、子どもたちは良かったと思えると思う。

4 他世代と交流する仕組み

- 職員が、その青少年との関係を作っているかどうか全てベースだと思う。
- 他世代との交流は、普段友達同士で遊ぶのとはまた違ったことができるということもあって、それは大きな経験になる。
- ダンスフェスティバルは、実行委員になる中高生との関係をどう作るかが重要と思う。

5 施設・事業の運営

- スタッフそれぞれ経験値が異なるので考え方を一つにまとめるのは大変だと思う。基本は利用者と関係を作っていくことだと思っている。
- 子ども計画にある地域の担い手をつくるのは難しく、リーダースクールをうまく目的に沿った形に持っていくにはどうすれば良いか、等考えている。

6 地域での交流活動

- 池ノ上の商店街イベントと同日に池青ライブを実施している。普段から館を利用される関係もあり、相互連携が図られている。
- 地元でない学校の生徒も多く、リラックスした雰囲気を利用して利用している。
- リーダースクールを通じて、地域のお祭りに積極的に出るよう、企画している。また学校以外で地域のつながりができ、他のイベントの手伝いに参加する、遊びに行くなどの関係が作れば良い。引っ張るタイプの子どもに周囲のメンバーがにつながる形ができると良いと思っている。

ヒアリング内容(高校生)

1 基本属性

- 4名：全員高校2年生男性。週半分は読書室、自習室で勉強。中学生の頃から一緒にいる。部活を終えて来館し午後9時～10時まで利用。
- アットホームな感じで、一緒に勉強することでやる気、メリハリがつく。

2 施設に来る若者の変化

- 通う場所ができ、勉強習慣がついた。

3 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- イベントをしているのは(掲示を見て)知っているが、参加はない。七夕の短冊に書いた程度。

4 他の世代と交流する仕組み

- 他世代と交流はない。声をかけられると挨拶する程度。声をかけてくれる大人がいることは、アットホームな感じで居やすい。自宅、友人宅のようにくつろげる。

5 施設・事業の運営

- A君はコミュニケーション力が高く、子どもたちとも話している。
- 行くと友人がいるので、自分の居場所になっている感じ。

ヒアリング内容（高校生）

1 基本属性

- 高校3年男性2名、女性1名
- 保育園のころから来ている。今は試験勉強で利用。小学生のころは週1回放課後に利用。中学ではあまり来なかった。1階テーブルや読書室を利用。
- 一人で来ることはない。勉強して飽きたら話す。

2 施設・事業の運営 満足度

- 寄れる場所がなく、ここで満足。大学に入っても来たい。

3 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

- 参加はしたことはない。

4 施設・事業の運営 好意度・施設職員との関わり

- 遊び道具が沢山あり、涼しいので施設は好き。
- 図書館と違って、静かにしなくていい。

世田谷区若者施策に関する調査

ヒアリング調査 議事要旨（野毛青少年交流センター）

2018年7月5日（木）

場所：野毛青少年交流センター

出席者

センター長

スタッフ：1名

世田谷区子ども・青少年協議会 小委員会委員

ヒアリング内容（センター長）

1 基本属性

- 主な利用者層は中高生、大学生、30代を含めた若者年代。近年は近隣の小・中学生も放課後に来ている。年齢幅は広がっている。
- 地域の層の流入が特徴。若年層は、施設の特性に興味を持って、リピーターとして来るといったケースも多く、口コミ、ネットで広がっている部分もある。
- 新規来館者は、実人数に対して別館含め3割程度と思われる。その中で、一見であまり来なくなる人もいるし、またばらばらとやって来る人もいる。

2 施設に来る若者の変化

- 「自分がいてもよい場所がきちんとある」という場に対する信頼感が出てくる。
- 寄り道するというよりは、遠方からわざわざ来る人もいる（千葉県から来る例もある）。
- 「進路」についての関心が大きく、ほかの同年代の若者からの刺激、スタッフからの刺激もある。次はどのような一歩を踏み出すかが見えてきた、という人たちも多い（振り返ってみての変化）。
- こちらからは意図的な工夫はせず、日常的にシンプルに声を掛ける、名前を覚える、挨拶をするといった類のことの積み重ねが大きい。
- 年齢が多様化すると、求めているものも多様化するので、単一プログラムで答えるのは無理が出る。
- 来館者に「どこで知ったの？」と聞くと、向こうから、「友達です」といって連れてくる子もいるので、「へえ、そうなんだ」という感じで話をしながら、「今日は何をする？」と声掛けしていく。勉強をしに来る中高生でもそれだけでは物足りなく、声を掛けられるのを待っている子もいる。

3 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- 開所5年が経過しているが、地域のインフラとして認めていただけるか、という側面はある。いろいろな世代の人のニーズに応えられるよう、中身のブラッシュアップが課題。
- ここからいろいろなことを学び感じて、地域やいろいろな世界とつながっていくためのベースキャンプのような位置付けも目指す必要もある。そのための方向性や目標がいくつかある。
- 子どもや若者たちと一緒に作り上げていく。メンバーシップや信頼関係をつくり上げ、何か1つのプログラムをここで一緒に作り上げる。
- 目的の異なる利用者同士が互いに意識し合うようなつながりを狙っているところもある。多様な人が混在する空間をやるよりほかはない。不便さも含めてお互いに飲み込みながらやっていく。
- 1人1人の背景に深掘りすることにはならないことが多い。スタッフ側も入り込むか否かの葛藤はある。
- イベントの立ち上げ方
 - 利用者自身が発信・声かけもあれば、スタッフが先導し監督的に進めるものもある。
 - プログラム（例、映画上映会）によっては、場所だけ用意することもある（極端に人数多い）。また、一定期間かけて好きに絵を描く等、参加規模がつかめないこともある。

4 他の世代と交流する仕組み

- 日常的には、多世代の交流。ゲームの持ち込みもある。
- 食事関連のプログラムは、中学生男子（質より量で食べにくる）、面白半分を手伝う大人世代、乳幼児の子連れで来て、離乳食をあげながらご飯を食べる等、子ども食堂に近いような形が生まれつつある。

- 利用者の急な増減には対応しづらく、難しい課題。
- 宿泊はある程度スタッフが主導するが、子どもへの告知、仲立ちする若者もいる。一緒に泊まり、子どもたちの面倒を見つつ、スタッフと一緒にモノを作って、プログラムを作る、という若者もいる。1つの世代交流という感じ。
- 農園での農作業は地域の方が、世話好きな地域のおじさんのような感じで経験値を生かしてお手伝いしてくれる。
- 地域の方々は若者たちの迷いには手を出して教えるが、様子を見ていてくれることが多い。だから若者は自由に取り組むことができる。
- 演劇グループの活動ではスタッフが介在しながら、生の、きちんとしたものを、日常の中でふとした折に触れられるような交流も生まれている。

5 施設・事業の運営

- 若者の意見は、結構取り入れている。若者が役割を求めてきている部分があり、役割を保証するという意味で互いに認め合う、発言する場を保証することの方が多。そのため、若者が企画する会議を毎月持っている。日常的には会議で出てきたアイデアが形になっていくパターンが多い。
- 予算面で厳しかったり近隣への負担をかけたりするような場合には、代替りのやり方を提案し一緒に考える等して調整し、現実的な所に落ち着かせることがある。
- 施設長、スタッフ間のずれ調整は、管理・維持面と企画内容で起こることがある。来館者を見守るスタッフもいれば、一緒に取り組んで巻き込むスタッフもあり、スタッフのキャラクターによっても異なる。
- 若者からのアイデアに共感して横につき、進めることはある。一方、1人のスタッフに負担がかかり過ぎないように、ほかのスタッフがオブザーバー（発言の有無に関わらず）の役割をすることもある。

ヒアリング内容（スタッフ）

1 基本属性

- 施設全体では、小・中・高校生も男の子が多い。小学生は最近、いろいろな学校・学年の子が、ゲームを通じて仲良くなってきている。
- 中学生は、部活が始まって来なくなる。高校生は新規でつながり直すことが多い。小・中学生は継続、高校生は部活のつながり等（以前はバンドつながりが多かったが演劇、アート関係でのつながりも多い）、大学生世代はサポートステーション等のつながりでの来館者が多い。
- 若者が利用しやすいよう、スタッフとしては大人ぶらないようにしている。喧嘩でもフラットにそれぞれの言い分を聞く。普通に世間話をする、等。
- 遊ぶときに、どこの学校の何年何組の誰、と聞かないから居やすい、名前を知らなくても、いたら遊ぶし、どこの学校かも分からないからすごくいろいろなことができるということ。高校生は「仮面を被らずにいられる」「演じなくてよい」と話している。
- スタッフとしては、受験・テストと気に掛けるが、若者とは、「今日はどうして来たの」「どんな気分」というところから始めるよう心がけている。

2 施設に来る若者の変化

- やりたいことをやりたいと言える場所だと、少し根付いてきている。やりたいことを言ってよい、聞いてくれる人がいる、それを月一会議で言おう、というのは、小学生も来ている人たちも思っている。あの子ども言ってくれるようになった、といった効果はある。
- スタッフ側から少し仕掛けが必要なきもあり、子どもたちの自主性をつぶさずに、一緒にやろう、とどこまで投げかけられるか。彼らのやりたいという気持ちを、どこまで伸ばせるかと考えている。

3 他の世代と交流する仕組み

- 学校とは違う自分を持てる、「学校の年組の誰」と言わないまま一緒に遊ぶことができる場所というのが、1つの魅力と思っているの、そうした環境にしたい。
- 中高生層が少なくなっているの、中高生が面白いと思うところをどこまで担保しきれるかは課題。
- 小学生が面白く遊び、そこに中学生が交じって、高校生・大学生も面白い、といった雰囲気はつくれていると思う。フューチャーハブが動き出しているの、そこで何かできるかもしれない。

4 施設・事業の運営

- 空間があると、何となく自分の居心地の良い場所を各々で見つけてくるが、本当にそこが良いのかは聞かないとわからない。なるべくコミュニケーションを密に取っていききたい。発達に遅れのある子とは、「この人にだったら話せる」という関係をぜひ作りたい。

ヒアリング内容（利用者）

1 基本属性

- 20代男性(A)。高校でジャグリングを始めて部を作り、ここが同級生の地元で良い練習環境があるというので教えてもらって来始めた。自宅は板橋区で、自転車で来ている。週4回くらいホールで練習しており、1回あたり10時間は練習している（最初から最後まで）。
 - 使い始めの1年はあまり話すことがなかったが、最近は、周りの人やスタッフと結構話す。月一会議に参加して企画できるので、みんなで絵を描く会をやろうとなった。それがきっかけで、みんなとしゃべるようになった。
 - 昔から絵が好きで描く機会がない人がたまたまここに結構いて、友達になって、一緒に描くことになった。
 - ジャグリングの練習にはとても環境は良い（天井がもう少し高ければなおよい）。友達も呼んでいる。野外ではゲリラ的にパフォーマンスしている。
- 10代女性。以前はよく勉強しに来ていた。4年くらい来ている。近所に住んでいて、勉強スペースを探して来てみた。
 - 当初は図書館に来る感じで来ていたが、スタッフに声をかけられて優しく接してもらえてよかった。絵を描くのが好きなので、たまにポスターを描いている。お絵描きの宴に参加（5、6人が参加）。こういう交流が生まれるとは全然思っていなかった。
- 20代男性(B)。のげ青では、世田谷ジュニアリーダースクールのミーティングをしたときにいろいろな人と遊んだり、話したりしているので、この施設を利用してきた。
 - 最初は年が近い人同士だったが、最近は小学生とも仲良くしている。
 - いろいろなイベントに参加しており、みんなで一緒に企画を立てながら宿泊もした。

2 施設に来る若者の変化

- 何にしてもみんなやる場所がなくて、集まってきているように見える。こういう場があって当然、全国にあるべき。（20代男性A）
- 高校生の夏に、「のげ青縁日」の手伝いを求められ、ボランティアをやることになった。友達とかき氷を作った。（10代女性）
- スタッフからの声かけは、「ぐいぐい来る」感じだった。月一会議に途中から時々出るようになると、歌のうまい人と一緒にカラオケの企画をし、人を集めて歌うイベントをやる等、途中から自発的にいろいろするようになった。定期的にやった方が、人が集まると思って、やっている。（10代女性）
- 友人を連れて来たら、いろいろなイベントに参加するようになり、友人から月一会議に誘われた。（20代男性A）
- お絵描きの宴のメンバーが固定化しているので、新しい人も入れたい。そこが居場所にもなっている。できる限り参加していきたい。（10代女性）

3 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- カレー作りには結構参加している（今年2月くらいから始めた）。主催の人に個人的に「手伝わない？」と言われて始めた。参加費300円で、2～3人くらいで作っている。毎週火曜に14合くらい炊いて、大量に作る。毎回なくなるくらい。お代わりは無料。（20代男性A）
- 野毛フェスにも参加。別館に貼るためのポスターや展示を少し手伝ったときに熱が入った。展示物を共有して、文章としてまとめるというもの。原作が漫画だったので、その漫画のコマと一緒に展示しようという話になり、あまり人手なく、来てほしいと言われた。（10代女性）
- 生き物係というロングプログラム（現在は実施していない）があり、生き物が好きな人が集まって、外で生き物に関するイベント（多摩川に行く等）をやった。（20代男性B）
- 私の企画で、ソーラーパネル作り、電力会社から専門の人に来てもらって、ソーラーパネルに関することを教えてもらった。（20代男性B）

- 今までと同じように、みんなで誰でも参加できるような企画を立てていったら、小学生も大人もみんな喜ぶと思う。(20代男性B)

4 他の世代と交流する仕組み

- ほとんど、他の世代、年上の世代と活動している。あまり同じ世代で固まらないというのは良いところ。(10代女性・20代男性A)
- 絵を描くとき、カレーのときもおじさんから小学生まで、全然知らない人も普通に声をかけてくるが、普通に友達になる。(10代女性・20代男性A)
- いろいろなジャンルに精通している人がいて、自分の話題を持っている人が多いという感じがする。(10代女性・20代男性A)
- 学校では、同じ年の人と閉じ込められて、学年で区切られるのがすごく嫌だった。必ず話すのは年上か年下で、それが普通だと思っていたから、ここに来て、まともな場所を見つけたという感じ。小学校におじいちゃんがいてもよい。その方が普通だと思う。(20代男性A)
- 異年齢との出会いや刺激に飢えているとも言えるのかもしれない。その方が普通という感覚が近いのかもしれない。(館長)
- 兄弟がいないので、同年代よりは、年上の人の方が話しやすい。あまり考えなくてもよい、素を出して会話ができる。同年代だと気遣うことが増える人がいるという感じはある。(10代女性)
- 同年代でのつながりのある子どもたちもいる。全部許容しようとする、多様性につながる。(館長・20代男性A)

5 施設・事業の運営

- 月一会議での提案は、スタッフでなくても通るので、反映されないという心配はない。会議でスタッフ側は、「どんどん提案してね」というスタンス。今まで、1人 1案を出すよう言われた。(20代男性A)
- 企画は月に10件は超える。物理的に不可能なもの以外は、実現する気があるかどうか。却下されることはあまりない。(20代男性A)
- 倍速で映画の上映会をやっている。人の出入りがいろいろあり、ストーリーも早く展開させようとスタッフ間で話があったらしい。提案すれば、ほぼ何でもできる。(館長・20代男性A)
- 企画を出せても、自ら引っ張るためにはやる気が必要。そういう場合はスタッフに相談すれば助けてもらえる。(10代女性・20代男性A)
- こういう施設はちょっとした居場所になるので増えてほしい。単純に飲食できる勉強スペースはなかなかない。(10代女性・20代男性A)

世田谷区若者施策に関する調査
ヒアリング調査 議事要旨（池尻児童館）

2018年6月30日（土）
場所：プレスポ池尻児童館

出席者
池尻児童館館長、スタッフ、
世田谷区子ども・青少年協議会 小委員会委員

ヒアリング内容（館長）

1 基本属性

- 小学生が多く、中学生は友人同士（1人で来る子も）、高校生は1人、2人。
- 小学生の約8割が池尻小学校。他に三宿小学校、多聞小学校。

2 施設に来る若者の変化

- 来る前後での変化はある。健康習慣、社会性が身につく（靴箱への靴のしまい方）など。
- 小学生は、職員とのコミュニケーションで自分の気持ちが言えるようになる。
- いじめられる子、いじめる子等、双方で、自分と相手との距離感を学ぶ指導が必要なのか、判断が求められる。
- 学校にいかず児童館に来る子どもやその家族への配慮など個別対応となる。

3 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- 事業の理念として、「四季を感じてほしい」「手や体を使って何かを作る」（健康や情緒）ということを大事にしている。理念は行事の形として残っている。子どもからは、「食べ物系」の要望が多い。自分たちで何を作るか考え、手伝いをして片付けもする。イベントを一緒にやって一緒に喜び合えばよい。
- イベント参加の工夫では、子どもたちの各家庭、学校で全戸配布、町会で配布。幼稚園でもお知らせを掲示。
- イベントでは、対象ごとに高齢者、民生委員、登録サポーターの支援がある。

4 他の世代と交流する仕組み

- 祭りの1ヶ月ぐらい前から、お店のコーナーの準備のためなどものすごい人が児童館に集まってきて、何ヶ月間かは、相当な交流がある。
- 企画内容により世代間のサポートがみられる（ダンスやキャンプ：小学生に中学生や大学生のボランティア参加）、ゲーム系は少人数で友達同士になる。
- 対象年齢（18歳まで）を過ぎたら予約はできないが、手伝い、ボランティアは歓迎している（平成30年3月末で条件を整えた）。

5 施設・事業の運営

- 子どもからの要望は、アンケートへの回答を掲示しているが、特に大人の声が、ためになった。大人の方が現実に即した気づきや提案があった。
- 職員間でも意見、方針の違いは出るが、話し合っって相互理解する。
- 具体的でない部分もあるが健全育成から逸脱せず運用すれば違いはない。

ヒアリング内容（スタッフ）

1 基本属性

- 利用のきっかけは、小学生から中学生、高校生と継続利用のケースもあるなど居心地の良い居場所になっている。
- 学校で仲間関係が築けない子どもが、一人で居場所を求めてくるケースもある。
- 親しくしていた職員といった「人」を求めてやって来る中高生もいる。そのため、そのスタッフの異動後なども引き付けておけるかが課題。

- 重い話ではなく、フランクな話し相手を求めるケースが多い。
- 2 施設に来る若者の変化
- 中高生は殻に閉じこもりがちだが、徐々に職員と打ち解け意思疎通できるのがうれしい瞬間。ただし、個別では、踏み込みすぎないよう距離感を考えている。
 - 継続的に来館してもらうためのキーワードは「自主性」、「参画」。自分たちのやりたいことができることが、意欲や自主性につながる。
 - 地域に出かける経験もあり、社会貢献意識も植えつけられていく。まずは関係性をつくってからの呼びかけをしており、現在試行中。
 - 以前に比べ、誘っても「いやだ」、「やりたくない」と言ったり、評価を気にする、失敗を怖がるなど気持ちが出ると子どもが増えてきていると感じる。子どもの側で常にいろいろな場面で「正解」「不正解」といった評価がある感じ。何かに縛られている感じが生きづらさにつながらなければよい。
 - イベント準備に行ける子どもの中には「いつでも行ける」子どももいて、館のレギュラーメンバーになっている。
- 3 他世代と交流する仕組み
- 日常的なケース
 - 小学生が乳児を抱っこさせてもらう体験（乳幼児の母親と交流しながら）
 - 歌詞の書きとめを通じた高校生と乳幼児の母親との交流
 - イベントで居合わせた同士の交流や日常そのままをイベントに生かせる工夫があればよい。
 - 児童館側で仕掛けた事例「親子でリトミック～中高生参加編」(乳幼児が集まる場所に中高生が関わる場面を作りたい)には、中高生4, 5人参加。
 - 交流機会を生む活動(「芽吹きのお茶の指導」)、「民生委員(乳幼児の手型、足型をとる)」、「(各小学校の)おやじの会」(餅つき、テント張りなど力仕事)」がある。
- 4 施設・事業の運営
- 館長と職員間のチームワークはよく取れている。職員間でのミーティングでそれぞれの意見をすり合せしている。距離感が大事なことは、子ども・利用者間との関わり方と同様のところがある。館長は、今あるもののしっかりとした継続を望んでいる。
 - 子どもたちに「友達同士で楽しく過ごせた」経験、感動の共有、一緒に達成したり、充実感を抱いたりする経験をいかに多く行うかが重要。ゲームをする子どもが多いことが気になる(館長)。
 - 「何でもOK、何でも成功。とにかくやろうよ」と、なるべく敷居を低く、いろいろなことをみんなでやっっていこうというスタンスで取り組めたらよい。

ヒアリング内容(利用者)

- 1 基本属性
- 5名：高校2年男性、高校1年女性、高校2年男性(2名)、中学1年男性
- 2 施設に来る若者の変化
- 1歳から、児童館の近くの保育園の終了後母親と一緒にベビー広場に通った。小学校になっても行っていた。
 - 友人の誘いで児童館に来るようになった。
 - 児童館とプレーパークとBOPは必ず行った。
 - プレーパークは野外のため暑い、児童館は涼しいところで運動ができるし、水も飲める。
 - 小さい子の面倒をみられるようになった、という実感はある。
 - 学校の友達と来ると、保育園の友達、他の学年の子どもや他の学校の子どもとも仲良くなれて、友達がたくさんできて、楽しくなる。
 - ここだと年齢に関わりなく付き合っている。敬語は使わない。
- 3 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて
- 特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて
- ビーチボールを使ったバレー(ビーチバレー)大会を企画実施した。他にハロウィン(お菓子を配って

食べる。コスプレしている人もいた。) バンドライブ(ノンジャンル)

- 実現しての成長や反省については実感がないが、企画・実行してみんなが楽しんでもくれたのは良かった。
- バンドは他の場所でもやってみたい。ホールよりは、夏の晴れた日に野外ライブができたら良い。

4 他の世代と交流する仕組み

- プロの人(ギター、ドラム)が来て、3ヶ月に1回ほど教えてもらう機会があった。
- 村祭りは児童館でやった。世田谷公園の青空まつりでは、いろいろな児童館がお店を出した。PTAのお母さんたちも参加。
- プレーパークのバンドの人をゲストとして呼んだ。
- 手伝いをしてみて疲れたけど楽しかった。またやってみたい。

5 施設・事業の運営

- 他の児童館の職員に比べて(良い意味でも悪い意味でも)ゆるいところがある。自分たちが言ったことや意向はちゃんと聞いてくれて、やろうとしてくれる。
- 児童館の予算的な事情でできないときなど「できないけど、これならできるよ」と考えてくれる。自分たちの言ったことは、やっていい、と聞いてくれる。
- 空間の広さでいえば、移転前のほうが大きかった。サッカーボードゲームがなくなってしまったのが不満。バトミントン、バレーボール、サッカーをやっているとボールが天井に当たってしまい、低くて小さい子どもに当たってしまう。
- 音楽室を使えるようになり、中学生以上であれば、貸出用の楽器を使えるようになり、良かった。
- 中庭のような家庭農園があり、流しそうめんをやる。夏の水遊びは庭でできるから、小さい子どもたちにとっては楽しい。

世田谷区若者施策に関する調査
ヒアリング調査 議事要旨(代田児童館)

1 回目：2018 年 7 月 06 日(金)
2 回目：2018 年 7 月 19 日(木)
場所：代田児童館(代田区民センター)

出席者

代田児童館館長、スタッフ 1 名
世田谷区子ども・青少年協議会 小委員会委員

ヒアリング内容(館長)

1 基本属性

- 年代
 - 圧倒的に中学生が多く、その次に多いのが高校生。
 - 大学時代を通じて、後輩の面倒を見ながら過ごしていく子どもいる。
- 後輩の面倒を見られるようになる目標を持つ中高生もいる。そういう世代を育てなければとは考えていないが、そういう子どもがいたら大歓迎。
- 中高生の施設としては恵まれた環境。友達とスポーツをしたい、という子どもが圧倒的に多い。
- 職員との関係や、先輩格の大学生世代との関係、地域の方々との関係等が来館の動機付けの一番になっている子どもは非常に少ない。

2 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて(1)

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- 約束づくり
 - 児童館運営自体、やり方を変えていっている。どういうルールだったら尊重し合えるか、きちんと投げかけキャッチボールをして、今度共有しようと積み重ねていくこと。職員と子どもたちが一緒に作ったものはルールではなく、約束。
- 体力もあり、自由に、大人に構われずに好き勝手にやりたいと子どもに、「大人が使い方を規制するルールを作って、遊びづらい場所になる」と伝え、児童館らしい物事の伝え方、大事なものを共有していこうとする職員の姿勢、ルールを共有していくようにしている。
- 子どもたちも、児童館の使い勝手の、良いものは守り、悪いものは変え、もしかしたら悪く変えてしまうこともあるかもしれないということを、大事にしている。

3 施設に来る若者の変化

- 児童館側の方針
 - ここを大事にする、良い場所を引き継いでいきたいという気持ちをしつこく、何度も繰り返し伝えていくということ。
- ここに行けば、今困っている子どもが、助けてもらえる、せめて聞いてもらえる、ということで思い出してほしい。
- 高い目標を目指してスポーツや勉強をしていた子どもたちの方が、怪我、人間関係等で続けられなくなったり、志望の高校に行けずに受験を終えたときの転び方、「怪我」(つまづき)が大きい。児童館に、スポーツ、勉強ができて、できなくてもよい場所に戻ってこられるような関係をたくさんつくり、一時的にでも支えることができればと思う。

4 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて(2)

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- 子どもたちが出入りすることによって、出会える大人を増やしていきたい。出会いは「こういうことが大事だ」と伝える大人が増えるということ。多様な価値観を持っている大人と出会いながら育てていきたい。
- サマーキャンプは児童館の活動が好きで、仕事を休んだり、家庭をやり繰りしてまで関わって下さる大人の方たちが一緒に行ってくれる。小学校高学年や中高生が、「面白い人がいるな」「もしかしたら僕も

大きくなったら、児童館のキャンプと一緒にいくような大人になるかな」と、どこかで思うかもしれない。そういう刺激になる出会いは大事。うちの職員も、できれば子どもたちにとってそういう大人でいてほしい。

- 限られた時間とフィールドの中で、子どもたちが体験できる一番のことは、自分にとって大切だと思えるような人と会うことなので、そういう場面を作りたい。
- 高校卒業の18歳から、19歳になるところがとても大事。(高校卒業したばかりの子どもに言うとしてもかわいそう、追い出される感じになるので、)高校3年生の初めに「来年になったらただ児童館に遊びに来るだけにはできない。高校を卒業した後、この児童館とどう関わっていくのか、関わらないで巣立っていくのか。今年1年かけてよく考えて」と伝える。追い出すのではなく、「さんのように地域の大人としてこの児童館の活動を支えるという関わり方はできる」「くんのように、大学に行って、BOPや児童館でアルバイトをして、地域の子どもたちから慕われるアルバイトのお兄さんになりながら児童館に関わることもできる」または、「あなたはスポーツが大好きなのだから、徹底的にそれができる大学を目指して進学して、児童館から旅立ってもよいよ」ということをきちんと話しておく。ずっとここにもよいとなると、ここにしか居場所のない若者をたくさん輩出してしまうリスクがある。
- 仮にいったん関係が切れても、高校3年生までそんな話ができるくらい関係性が持てた子どもは、親世代になったら戻ってくるので、輪がつながっていく。
- 児童課が長年やっているTEENAGE CARNIVAL(ティーンエイジ・カーニバル)は、前身のYMFという音楽イベントの時代から数えると20年以上。出演者だった女の子が、2人くらい世田谷区児童課の職員になっている。
- 本来、1人の若者としての成長を祈り支えていくべき仕事のはずが、地域のためになる人材育成ということがそんなに盛り込まれてくるのか、と思う。
- 課題
 - この地域は少ないが、貧困等、子どもにとっての家庭的なハンディキャップにより、目指したいものや、若いときに体験しておきたいことができない子どもが確実に増えてきている。
 - 楽器を買えない子どもに楽器や機材が児童館にあれば、最初の一步を踏み出すことはできると思う。経済的理由でできない、という子どもが最近増えてきた。
 - 社会福祉の部分と児童館は、これまではそれほど近しくなくてもよかったが、これからはそうも言っていない。
- 家庭の経済事情で、都立高校しか選べず受験へのモチベーションが上がらず、勉強に身が入らない、荒れる、という子どもが増えてきた。進学に少しでも前向きになれば、という気持ちで支えている。

ヒアリング内容(スタッフ)

- 1 基本属性
- 利用者の年代
 - 0歳から18歳、高校3年生まで。幼児は大人同行、おじいちゃん、おばあちゃんの来館もある。小学生の利用が多い。世田谷区は3年生までは学童に行っている子が多く、4~6年生の利用が多い。
 - 中学生の来館は日によって全く異なり、金、土の午後6~7時のティーンズタイム目的の子が多い。試験期間中は部活動もなくなるので、多い。
 - 児童館が中高生支援館を掲げ、職員もその層に力を入れている。近隣の中学校からの利用者が一番多く、運動が好きな子が一番多い。体育館、音楽室もこの児童館の強み。
 - 施設ができて5年と日も浅く、小学生からつながっていても中高生になると来る子が少ない傾向だったが、去年や今年は、中学生になってもずっと利用している子が多い。場所や目的を除いて、ふらっと遊びに来ている子がいる。
 - 中高生来館のための工夫
 - 職員が雰囲気づくりに取り組んでいるのが一番大きい部分。入口で入館表を書く際に、職員1人1人が声かけし歓迎している雰囲気をつくるよう特に気を付けており、職員全体に共有できている。
 - 挨拶はしつこくしようとして心にかけている。中高生をとっても歓迎している、と、毎回気を付けて伝えるようにしている。
 - スポーツが好きであればスポーツを介してコミュニケーションを取る中から関係が良くなって何回も来てくれるようになることもある。中高生は特に丁寧に行っていかなければ関係が築けない。
 - 共有している具体的な目標、「中高生の活躍機会」はずっと掲げている。

2 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- 若者の自立成長を促すプログラム、音楽室を利用している子どもに向けては、代田音楽ライブを実施。
- サマーキャンプは今年、中学生7人が参加。中学生には小学生のサポート募集をかけた。中学生には地域の活動も積極的に関わってもらおうようにしており、地域にも理解してもらいたい、知ってもらいたい。
- 親や先生以外の地域の人等いろいろな大人に「頑張っているね」と言われることはとても嬉しいこと。
- 子ども祭りでは、中学生は自分たちが楽しむというより、サポート側に回ってもらいたい。
- 「昔ここで子どもがお世話になっていたから関わらせてもらっている」という地域の住民やPTA等の協力者の方たちがメインで運営している。
- 中学生も地域住民等、大人と関わる良い機会になっており、かなり成長する。祭りに関わった地域の大人、職員全員で反省会を行う場に中学生が入って感想を言ってもらおう。
- 子ども祭りに出る中学生のグループは、誘って10人くらい(昨年度は10人)。今年は中学生の利用もかなり増えており、積極的に手伝いを声かけしている。認められるという経験、大人に認められる経験が今は少ない。「よくやってくれている」と言われる機会はあまりない。お祭りの手伝いというと、最初はやはり「めんどくさい」と言うが、やってみたらすごく満足して帰っていく。
- 「月1ティーンズ」
 - 月1回、3館から支援担当職員が集まって、企画検討している。ここは中学生支援館でもあるので、中学生支援館のティーンズタイムを活用し、交流をして活躍機会としてもらう。
- スポーツか、代田音楽ライブを世田谷区全体に広げたらよい。
- 挫折する子どもへの対応
 - 部活を頑張っている子どもは多く来ている。運動施設があるので、練習や友達とバスケットボールやバレー等をしている。
 - 部活中の怪我で一気に挫折を味わい、親にも期待されているから自信をなくす、部活動にも参加できないから居場所がなくなり、学校の部活の仲間とうまくやっていけない、となったときに、児童館を思い出してほしい。心の支えになるような場所でありたいと、ずっと思っている。アプローチの仕方が行事等いろいろあるが、行事に誘い込むのも日常の関係がないとできない。
- 課題
 - 代田音楽ライブに出演する子どもたちが、サポーター側にも回ってほしい、サマーキャンプに参加してほしい。お祭りも手伝ったことがない子どもたちなので、音楽以外の部分でも活躍してほしい。
- 異動で職員が替わっても、新しい職員との関係を築ける子もいる。児童館でリーダーをやることで自信をつけてもらえたらと思う。
- 職員の関わりを全く求めず場所だけのために何度も利用する子どもいるがそういう子どもにも、積極的に関わるようにしているがなかなか心が通じ合わない。お互いに価値観が違うので、伝わらないというのは職員としては結構悩む。どうしたらわかり合えるのかというのが大きな悩み。
- 中学生は急な関係づくりは難しい。よく来る小学生が遊んでいるところに、つながりのなかった中学生がたくさん来て占有してしまうと、感情的になってしまうことがある。「みんなが使えるように工夫して使うように」との声掛けしかできない。小学生の方がよく理解して、遊べるスペースで、自分たちができることを楽しくやってくれている。
- 今来ている中学生が、ここを嫌だと思わずに、職員が異動しても、ここで活躍してほしい。部活動や、ほかの活躍機会がある子どもはぜひ羽ばたいてほしいが、戻ってきてもよい場所として代田児童館があるということを伝えていきたい。

3 地域での交流活動

- 地域、社会との関わりとして、代田児童館の児童館祭りを行っている。来場者も含めると1,000人規模。中学生が10人、来場者が600人くらい、スタッフが400人くらい。子ども祭りは地域の交流の機会になっている。
- お知らせを地域に配布している。地域でお会いすることも多いので、イベントをお誘いし子どもたちに教えてくださることもあった。中学生でも、イベント案内して「手伝いに行つて」というとやってくれることもある。
- 中学生にはそのような関わり方が嬉しいのかなと思う。「中学生になったら、手伝う側に回る」ということを意識して、声かけする。

- 地域や社会が、中高生の若者たちを煙たがらないこと。難しい時期なので、当たりが強い中学生、高校生はやはり多い。大人が嫌いな雰囲気に来る子もいるが、折れずに関わりを持つ。
- 子ども祭りでは、「すごくよくやっているね」と地域の人に褒められるということが、とても多かった。

4 他の世代と交流する仕組み

- 中高生への影響
 - 中高生にとっては、地域の大人、自分より先輩世代に認めてもらう、褒めてもらう、声をかけてもらうという多世代のつながりは重要で、貴重な経験。
- 代田音楽ライブで先輩関係とか、仲間と同世代と一緒に作り上げた経験が、先輩を大人として見て、今も関わっていると聞き驚いた。

5 施設・事業の運営

- 若者の意見を取り入れる仕組み
 - 月1ティーンズで必ず希望を聞く。自主企画のボードゲームの希望を出してくれたことが最近あった。意識的に運営側、企画側をやっていく機会は月1ティーンズの中では取り入れている。
 - 目的はみんな一緒。意見のぶつかり合いはあるが最終的にはあるべきところに落ち着く。それぞれの価値観を言い合って、意見をぶつけ合うことで、一番良いアプローチや良い企画が生まれているのを感じる。
 - 今回ヒアリングした4名の利用者はそれぞれ違う個性だが、職員の個性や価値観が違っているからこそつながっている。職員間でも意見がぶつかることがあるが、全く悪いことではない。

6 施設に来る若者の変化

- 最近の子どもたちは、両極端だと思う。生きづらい子どもも中には来ている。学校に行かずに児童館に何の目的もなく来て、こちらに話しかけるわけでもなく、こちらから話しかけてみたら意外といろいろ話した、という発見があった。彼のスイッチになっていたら嬉しい。高校では美術部に入ろう、と言っている。バスケット部で頑張っていた子どもが美術部に入るという発想になることに驚いた。「絵がうまいと褒められたことがきっかけだ」と言っていたので、何かを褒められたり誰かに声をかけてもらったりしたことがきっかけで、変わっていく姿というものを彼のおかげで目の当たりにした。
- 区内のほかの児童館と比べると、活発な子が集まる児童館だと聞いた。運動や音楽、部活でも大活躍している子どもも来ている。スポーツや音楽を打ち出したことで利用者はかなり増えている。

ヒアリング内容（利用者）

1 基本属性

（参加者）4名

- A 高校3年 区内在住、学校も区内
- B 高校3年 区内在住（近隣）、学校も区内
- C 高校1年 区内在住（近隣）、学校は他区
- D 高校1年 区内在住（近隣）、学校は他区

● 来館のきっかけ

- A：高1の夏くらいから。代田音楽ライブの前から。部活の先輩に音楽設備がよいと聞いて来た（軽音楽部）。
- B：改装前の児童館のときからずっと通っている。中学校3年生くらいのときに新しくなったと聞き、パンフレットを見て音楽室があるのがわかりギターをやりたくて来た。
- C：最初に来たのは小学6年生のころ。友達に誘われて来た。その後中学2年生になってから来始めた。
- D：中1くらいから。その前はときどき来ていた。

● 利用頻度

- A：高校3年受験生。時間があれば、ドラムが上手で好きなので、週に多くて4日くらい。
- B：来る頻度は週に2、3回。1人で音楽の練習をしに来る。家だとあまり練習できないから（ギター）。
- C：頻度は週1か週2くらい。下校時に寄っていく感じ。中学のころは、来る頻度が週3、週4で来ていた。

- この場のとらえ方
 - A：受験勉強から逃げられる場所。親に勉強しろと言われなくてよい。1人で練習が多く落ち着ける。ドラムの設備が足りない。
 - B：ただで遊べる場所。お金を使わなくても笑顔になれる。スタッフがいてくれるだけで安心感がある。ギターの設備が足りない。
 - B：母親が小学校の先生をやっているので、子どものころから、「児童館に行ってみたら」と言われて、行ったらすごく楽しかった。アクティブでない子どもたちでも、こういう工作室があるので工作でもしたら、面白いと思える。
 - D：ボードゲームか、バスケットをやっている。
- 職員から必ず近況を聞く。こちらも気になるし、本人たちも素直。

2 施設に来る若者の変化

- 児童館に来てから変わったこと
 - A：ドラムがうまくなった。
 - C：来るようになってから、後輩等いろいろな人に触れ合う。いろいろな人と関わることが増えた。
 - D：初めてのゲームのときはいろいろ困惑したが、今は自分の作戦を出せるようになった。
 - Dさんについて：小学生とも一緒に遊べるので、ゲームをやってくれている。昔は職員と遊ぶことが多かったが、最近は小学生を巻き込んで遊ぶことができるようになった。

3 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- 年間の柱の行事は、サマーキャンプ、子ども祭り、低学年キャンプ。
 - D：中3のときに参加。母親に自分で行くと言った。もう少しみんなと触れ合いたいと思った。楽しかった
 - C、Dさんは、低学年キャンプのリーダーとして参加。
 - C：中学3年生のときに参加。児童館の職員から誘われたこともあるが、自分でも参加して小学生と関わるのも楽しかった。
- B：代田音楽ライブ（中高生主催）には、5回参加。みんな違う学校から参加。Kさんは、みんなと積極的に関わっている。
- B：代田音楽ライブのミーティングがあります。子どもたちで完成させるもので、いろいろな人たちが参加している。
- D：ここの友人たちとは通学や帰りが、一緒になる。

4 他の世代と交流する仕組み

- 身近なことを話せる大人、家族との会話
 - A：話す。
 - B：家族とは話せない。進学先についての希望を相談に乗ってもらう。
- 身近なことを話せる大人、安心できる人（家族以外）
 - B：音楽の先輩。
 - A：それほどいない。
 - D：大学生と一緒に遊んだりはしていた。代田音楽ライブのときに知り合った。
 - Bが信頼している大人として思い浮かべた人は、代田音楽ライブで以前知り合った人で、当時はお互いに高校生だったが、現在彼は立派な大人になって社会に出ていった。
- 居場所について
 - B：SNSを居場所だとは思わない。居場所というよりリアルな場所だと思う。
 - A：暑過ぎず、寒過ぎず、1人になれるところ。空調が効いていて、日当たりが良いところ。
 - D：ここは夕方になると夕日がとてもきれい。
- 楽しいとき
 - A、B：音楽をしているとき。
 - A：代田音楽ライブで会った人で、一緒にライブを月1くらいでやっている。そこに出ているときが楽しい。
 - B：ここに通って成長している感じはある。ここでないと練習できない。

5 施設・事業の運営

- 成長につながっていく予感
 - B：代田音楽ライブにずっと出てやっているの、必然的にまとめ役をやることになった。意見を聞いてまとめたり、タイムスケジュールを考えたりリーダー性みたいなものを学んだ。将来的に何かをプロデュースすることにも役に立つかもしれない。
 - 何をしたいか、ベースがない状態から始めます。それで、平場でやるよりは一段上がったところでやりたいという意見が出て、土台はないので本人たちの発想で一緒につくる。
- 北沢地域の全3児童館が集まって、月に1回は合同企画を実施している。ボードゲーム、バドミントン、スポーツとボードゲームの2本立て。
 - 普段遊べないほかの児童館の人とか、この機会に会える。コンテンツの内が楽しい。
- 家からの距離
 - B：3分くらい。
 - C：15分くらい。
 - D：20分くらい。週に4回くらい来ている。
- 児童館で過ごすこと
 - B：クラブ活動していても、強引にでも来ている。
 - D：金曜日と土曜日は、中高生が7時までいられる。
 - C：都合がつけば日曜日だと1日中いることもある。
 - D：親はここに行くとはわかっているので、「行ってきます」とだけ言う。
 - A：最初はとて来づらかった。
 - B：最初は友達に言えなかった。「スタジオに行っている」と言っていた。

世田谷区若者施策に関する調査
ヒアリング調査 議事要旨（玉川台児童館）

2018年7月25日（水）
場所：玉川台児童館

出席者
玉川台児童館館長
世田谷区子ども・青少年協議会小委員会委員

ヒアリング内容（事業者、館長）

1 基本属性

● 施設に来る若者の年代や特徴

- 地元の中学生、私立の学校に行っている（地元の）中学生、若者世代までさまざま。中学生が一番多く、次に高校生、その次が若者。若者はここを知っている子しか来ないので、コアなメンバー。
- 30代の「ザ・こども」というチームもいる。瀬田納涼盆踊り大会に出店している。働いていたり、自分探しをしていたりする人もいる。
- 中学生は、用賀中学校、瀬田中学校（最も多い）、深沢中学校から。
- お祭りで、中高生が売上げた分は、彼らが欲しいものを児童館で買うことに使わせていただいている。居心地良くいられる場所を求めてくる子どもが多く、ソファ・オーディオ・マンガ本等を購入している。これらは地域の人にも理解してもらっている。
- この児童館は既存の部屋を活用して、中高生支援館仕立てにしている。中高生のコーナーは工作室。テーブルと椅子、ソファ、漫画と雑誌がある。また、ジュースや綿あめの売上げで、子供たちからの希望があった音楽が聴けるコンポと漫画とソファを購入（）。
- 誰にも干渉されず、友だちとゲームをしていたり、塾の宿題をやっていたり、漫画を読みながら1人で過ごしている子どももいたり、とタイプが分かれる。
- 「大丈夫チーム」がいる。「参加しない？」と誘っても「大丈夫」といって、自分たちだけで時間を作りたいという、常連の子どもが10～15人くらい来る。全体の約半分。残り半分はスポーツ、私たちとの会話、手伝い、盆踊り大会のゲームコーナー担当、など。
- その場所にいる人と緩やかなことを共有したいと思う子どもたちは少しずつ増えている。ほかの地域からここに来ることも、支援館を始めて3年で少しずつ増えてきた。
- 水曜日と土曜日の1時間の延長時間を目安に、17時ぐらいに来ている。少数の子どもが常連になってきた。
- この辺の中高生は私立の学校に行き、地域を離れる子が多いが、子どもの頃遊んだ児童館に自分たちの居場所があることに気づいて、またやって来る。
- 子どもたちの参画がなかなか進まない。子どもたち自身で企画、イベントを組んで実践するところまでは難しい。お膳立てをして、手伝えることには、やるよ、という。しかし自身で次にやりたいことを言って、目指すのが難しい。「かき氷を食べたい」、「水遊びを本気でやりたい」と言った子が当日に参加しない。
- チームや仲間が出来て、この人たちと一緒にやりたいという気持ちまで育てないと難しい。
- 以前中高生・大学生と泊まり込みで子どもたちの意見表明の場を持ったとき、「自分たちの居場所が欲しい」と言っていた。最終的に、居場所と、仲間と、意見が言えるネットワーク、の3つが欲しいという話にまとまった。現在の中高生の考えていることとそれほど差はないと思う。
- 最近は、スマホのバーチャルな世界の中で実現できたり、満足している若者も多いと思う。
- 一方で少し頑張っ、面倒だけど企画に乗って、みんなと一緒にやって面白かったら次やろう、と言って参加してくれる子どももいるが、なかなかみんなでやろう、という動きまではつくりていない。

2 施設に来る若者の変化

- 子ども自身の変化というのも、本人の中にあると思う。「大事にされている」という実体験により、居場所があり、受け入れてもらえて声をかけてくれる人がいる、と思うことが、ふるさとの思い。
- お父さん、お母さんになって、こんなことをしているよ、保育の学校に行っているから児童館でボラン

ティアする、といて帰ってくる人がいることは、私たちにとっての喜び。その間の成長というのがその人の中にある。

- 地域中高生全体数の10～15%くらいの子どもがここを居場所にしてもらうと良い、と思う。
- 子ども自身に児童館が必要な時期があり、受け入れられて居場所としてあればよい。自分探しの場所として来る子、不登校の子には、友人に会わないよう別学区から来る子もいる。そういうこともあって良いと思う。
- 子育て支援から中高生支援まで全部やるので職員も大変だが、職員自身もやりがいや達成感が持てるよう、事業を組んでいけるとよい。どこの児童館も、中高生自身が児童館を近しく思っていない中で難しい。児童館という名称から行ってはいけないと思っている中高生も多いはず。

3 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- 中高生支援の年間目標である「中高生がリーダー意識やスタッフ感覚を持って活動する気持ちを育む」が、なかなか作れずハードルが高い。
- 中高生自身が自分の児童館として、やりたい、大事にしたい、など意欲を持ってスタッフ的感覚で活動する気持ちをつくっていききたい。今年度は地域のお祭りに子どもたちをどんどん連れて行こうという方針。
- 「育ててもらう地域の目」につながる、ふるさと感覚を持ってもらうことで将来地域の担い手になっていくと思う。
- T B T (Tamagawa Block jidoukan Teens)
 - 6つの児童館の中高生が集まって活動している。缶バッジを作ったり、ネームプレートを作ったりした。事務局は玉川台児童館。事務局として楽しめる子どもたちが育つことがねらいだがそこまで至っていない。
- 児童館は若者に頼りすぎてはいけない。若者も居心地が良すぎると卒業できなくなる。いきなり中学生からつながるようなスタートではなく、小学生時代からの積み重ねの上に中高生につながる。
- 彼らがスタッフを経験することで、児童館を離れても今度は地域の大人としてそのお祭りをずっと担ってくれる人もいる。

4 地域での交流活動

- 瀬田商店街の盆踊りへの出店、ふれあいラリーの説明会、用賀サマーフェスティバル、桜町小学校と京西小学校の夏祭りへの出店。敬老会からも出店調整をお願いされている。そういう場面に少しずつ中高生たちを連れて行く予定。
- 地域は、大きな意味での家庭、その人の属するところ、その中で自分の顔と名前がわかって、そこにいる人がわかっているのは大きな安心だと思う。子どもをつなぐために児童館は地域とつながると考えている。
- お母さんたち対象の茶話会を初めてやった。どこかにつながって、ほっとできたりガス抜きができたりすると、深刻な問題につながらずに済むこともあると思う。中高生も、学校以外で自分が気になっていることが話せる場所は大切。
- 最近リーダーと言える子どもたちが育ち始めているところ。

5 施設・事業の運営

- 若者の意見からの企画、意見の取り入れ等、行って来ているが、点から線になっていない。毎月意見を聞いているが、それほど大きな変化はないことに気が付いた。基本的に子どものやりたいことは、体を動かすことと食べること。
- 子どもたちは、遠出よりもここで何もなくて泊まりたい、遠くに行かなくてもよい、工作室で何もしないでいるのがよい、と言っている。一緒に遊んで、絡んで、時間を過ごし帰っていくので、そういう場所がよいと思う。
- キャンプに参加する中高生は、小学生のころから行っていたとか、活動の仲間がいるから行こうという子どもが多い。
- ボードゲームは3～4人でやりながら、一生懸命話さなくてもよいので、そこの中で少しずつ交流できるから仲良くなりやすい。
- 中高生担当者は1名だったが仕事量と負担が大きいので去年から児童館の中の高中生支援担当と、玉川

地域の中高生支援担当の2人を決めた。

- まずは地域の担当、翌年は館利用の中高生を考えてもらい、子どもの参画意識の育て方などを、相談しながらやっていくことで当事者意識を持ってもらう。

ヒアリング内容（事業者、スタッフ）

1 基本属性

- 4月から配属された。以前の児童館は子育て支援館だったが、ここはまた違う特徴を持っている。中高生側も、どんな人なのか、と身構えていることがあると思う。距離の置き方に悩みながら、試行錯誤しつつこの3ヶ月は過ごしている。
- 日常の来館は中学生が多い。水曜日と土曜日の夕方6～7時が高中生タイムで、中高生だけ1時間延長して使えるが、中学生のほうが多い。
- 去年の話では高校生も結構来ていたとのこと。今は、中学生が沢山、延長時間を目当てに、水曜、土曜日は来てくれている。中高生の延長タイムが存在する意義は多少なりともあると思う。
- ここでは、小学生から利用して中学生になり常連になっている子どもが多いというイメージ、リピーターが多い。
- 初めて来た中高生は、身構えていて、「自分たちはダンスの練習しに來ただけ」というドライな感じ。
- ここに来るきっかけ、理由
 - 友達同士の地元のつながりが1回離れて私立中学に行っている子どもは、学校の友達を呼んで来ているケースもある。私立よりも、地元の公立の子どもが多い。
 - 高校卒業した若者も、お手伝い、アルバイトで来てくれている。これまでの職員が大事に関わった積み重ねがあって、彼らは好きで来続けているのだと思う。
 - なかなか就職できなくて、居場所的な意味で来る青年もいる。
 - ◇ 「頑張らないといけないよ」と館長から厳しく言われて行動をし始めて、若者サポートステーションにつながっているケースがある。

2 施設に来る若者の変化

- 玉川台児童館の青年も、他分野の専門学校に通っていたが、今は児童館で働きたくて、そのための勉強をし始めた人もいる。児童館での活動がきっかけになっていると思う。
- 支援館として中高生の居場所を大切にしている、工作室は中高生の専用スペースになっている。
- 工作室という自分たちの居場所があることで、安心し落ち着けるのだと思う。

3 地域での交流活動

- 中高生支援館として、地域の中で活躍したり、地域の居場所を見つけたり、担い手になったり、職員側でサポートをしていけたらよいと思う。その一環として、子ども食堂に中学生と一緒にいった。地域の方と関わって、地域で見守る目を増やすことにもつながればよいと思っている。
- 今は瀬田中学校だけだが、児童館の広場に來ているお母さんと乳幼児を募って、中学3年生とお母さん・乳幼児の触れ合い交流をしている。毎年反響があって、最初はこわごわだったが、あやすにつれて笑ってくれて、温かい気持ちになった、という感想を聞いている。
- 人に関わることは明確な数字で表せないが目標を立てなければならぬ。ミッションと現実とのギャップを埋めることが求められる。理論はあっても具体化しにくい。
- 町会やPTAとのつながりについては、PTAの方、地域で中高生の活動支援している方などとの話し合いを持っている。何をすればよいのかわからないという意見もいただく。

4 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- 中学生に児童館があることを知ってほしい。クラスの中で児童館に行っているのは1～2人くらい。気軽に來られる場所と知ってもらいたい。最初に1回來るというハードルが高い。PR力はまだ足りない。区のウェブサイトから検索する中高生はほとんどいないと思う。
- お金を使わなくてもここで過ごせる、中高生が過ごしやすく、居心地も良い場所があることを知ってもらえれば、幅も広がると思う。
- 中高生といっても、小学生や乳幼児期からの関わり、継続性が大事なので、遊びに來てくれる子どもがより多くなったり、活動を活発にしたりするには、そこからの関わりが大事だと思う。

- 今の中高生も大事にしつつ、小学生や、今お父さんやお母さんと一緒に来ている幼児との関わりを大事にして、継続して丁寧に関わっていくことが必要。

5 施設・事業の運営

- 去年から、子どもたちとどんな児童館にしていきたいか話し合っており、小学5年生以上から入ってよいというルールについても、小学生から「中高生だけああいう部屋があるのはずるい」という話があった経緯がある。
- 中高生からは、「自分たちも中学生になるまで待ったから我慢してほしい」という意見もあった。中高生から意見を聞く場（作戦会議）は月1回設けている。
- 館長と職員との間の意識や関わり方の違いについては、方向性の違いは特にはない。積み重なっている部分が多い。理念は館長がしっかりされており、それを伝えてくれているので、私たちも動くところはわかりやすい。
- 全員そろってゆっくりミーティングする機会も、会議の数も多くて難しいが、ベースの部分の共通理解はあると思っている。
- 時間が取れるなら皆さんで話したい。

ヒアリング内容（利用者）

- A 高校3年生 男性
- B 中学2年生 男性
- C 中学2年生 女性

1 基本属性

- 学校
 - A：神奈川県内・中学時代に部活
 - B：用賀中学校
 - C：中学2年生
- 児童館に来るきっかけ・理由
 - B：今日はサマーキャンプの打合せで来た。普段は宿題、遊び、ボランティアのために来ている。宿題をやるにはうるさいのでイヤホンをしてやっている。
 - A：最初は、母から「サマーキャンプやっている」と言われ行ったのが初めて。職員とも仲良くなって、話を聞いてもらうこともあった。
 - C：小学校2年生のときに、母がここのイベントに申し込んだのが最初。4年生になるとBOPに行けなくなる。BOPと似ていたので来るようになった。
- ここに来るようになって良かった点・悪かった点
 - B：ここに来るようになって悪かったところは特にはない。ドラムをやっているのでもここでやれる。勉強もできる、ボランティアの関係で友達も作れる。ビリヤードができるのもよい。
 - A：良い点としては、職員との関わりがよく、親近感がわく。自由にイベントに参加できる。区内で餅つき大会などがあったので、参加しやすい、気軽に行けるのがよい。
 - C：保育園に常駐する栄養士になりたい夢があり、初めに保育士になろうと思っていた。全体を通して夢を見つけたのが児童館。中学校の夏休みの宿題で職場を調べた際に、児童館のことをいろいろ教わり、興味がわいて調べた。職員が全員明るい感じで接してもらえる。

2 施設に来る若者の変化

- B：昔からしょっちゅう来ていて、中学からボランティアを始めた。今は1つ2つ仕事ができるようになって、行動の範囲が広がったと感じた。体が大きくなると、できることが多くなる。
- A：こういう施設が近くになかった。今は家も児童館に近く、来やすい。年齢の幅が広いので、いろいろな人と触れ合ったりできるのが良い。
- C：1～3歳の子どもの面倒をみたり、お泊まり会のボランティアで遊んだりして、小さい子どもの感じ方がわかることがあり、勉強になる。

3 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- B：小学校低学年のお泊まり会に参加し、大学生ボランティアと職員の方と、中学生で打ち合わせをし

た。

- A：社会人になって落ち着いてきたら、ボランティアに関わりたい。手伝ったり、話しに来たりしたい。
- C：印象的なイベントは、毎年の子童館のお祭り。小学生低学年のお泊まり会は特に印象的で、2、3年生のときに参加。お世話になった学生ボランティアが社会人になり青年ボランティアに変わって、自分もボランティアのほうに入って、その人と夜のミーティングなどでも話して、自分も大きくなったと感じた。

4 他の世代と交流する仕組み

- C：青山学院大学の、青山子ども会というボランティアの人が来てくれる。元青子の人が社会人になっても青年ボランティアで来ている。日本体育大学の人もたまに来ていて。

5 施設・事業の運営

- C：子童館ミーティングの日は決まっている。ルールを変えてほしい小学生たちが来て職員たちと話し合っただけでルールを決めているらしい(ゲームルールの変更など)。職員と話合っただけで子どもたちが納得する場面もあった。
- C：ブルーレイプレイヤーを貸し出し可能にしてほしい(アニメが好きなので)
- B：ごみは持ち帰るルールだが、バッグの中で散らかしてしまうこともあり、ごみ箱を設置してほしい(昼食のごみは持ち帰りと言われている)。
- C：ここは1人で来ても、誰かしら知っている人もいて、通う中学校の人は来ないので、職員に愚痴も聞いてもらえる。
- A：大きなもの(イベント等)をみんなで作りたい。小学校から子童館に来たら良いと思う。用賀の方から来る子どもも対象に。あとは、みんなでご飯を食べて遊ぶこともやりたい。
- C：中高生が小さい子どもと接することは弟・妹がいない限りないと思う。将来の勉強にもなるから、接する場所がもっと多ければよい。小さい子どもを見ているだけで自分の視界が広がる。小さい子どもを見るボランティアが少ない。水遊びは、去年もボランティアで来たので、去年も今年も遊んでくれてありがとうとお母さんから言ってもらえると、やって良かったと思う。

世田谷区若者施策に関する調査
ヒアリング調査 議事要旨（喜多見児童館）

2018年7月14日（土）

場所：喜多見児童館

出席者

喜多見児童館職員

喜多見児童館館長

世田谷区子ども・青少年協議会 小委員会委員

ヒアリング内容（事業者）

1 基本属性

- 若者の年代
 - 午前中は0才からの未就学児、午後は小学生が終業時、中高生は夕方終業時に来館。
 - 地域の方も児童館に協力してくださっているので、おじいちゃん、おばあちゃんまで幅広く寄ってくれている。職員とコミュニケーションを取ったり、子どもたちの様子を見に来てくれたり、関わりに来てくれる。
- 地域とのつながり
 - 喜多見住宅の方とのつながりが大きい（町会関係）。また喜多見地区、宇奈根方面からも来館がある。親子連れでは、大蔵方面からも。隣接の狛江市からも多い。100～200メートル先が区境、市境。狛江市の児童館等があるが、子どもたちはうまく使い分けている。
- 利用のきっかけ
 - 小学生は、遊び場。居場所。終業後、友達と一緒に遊ぶ場所。
 - 来るきっかけはさまざま。
 - ◇ 幼児のひろばやサークルから来ている子は、そのまま喜多見小に行き、昔来ていたから遊びに来る、という子
 - ◇ 小学校で友達を作って、友達で誘い合って一緒に来る、お知らせを見てくる子もいる。
 - ◇ 学校でも、児童館が近くにあって、子どもの居場所で遊び場だ、という情報は出してもらえているようである。
 - 高校生は、バンド練習所を借りるのにお金がかかるので、児童館等を探して転々として来る。近隣にある2つの児童館は楽器を使う部屋が1つしかない。

2 施設に来る若者の変化

- 小学校の頃、お兄ちゃん、お姉ちゃんたちに遊んでもらって、自分が大きくなって、今度は下の子の面倒を見る、という異年齢の関わりが多い。縦のつながりが強く、リーダーシップを取る子が出てきたりする。
- 学校には行かず児童館には来ている、同年代の友達があまりおらず、ここで小さい子と関わる、といったケースもある。
 - 学校にあまり行かず児童館には毎日のように来ていたケースでは、職員が児童館での様子を中学校に伝え、入試合格後は、高校と児童館と中学校で、情報共有してネットワークづくりしながら見てきた。今は比較的落ち着いて、自分でバイト始めた。
 - もう1人の子は高校に入学後は友達関係も変わり、学校もきちんと行くようになった。ほかの子は、1回心が折れて、高校を辞めるか辞めないかというところまでいったが持ち直して、頑張っただけで毎日行っている。
- 学校へ行けない子への特別なケア
 - 居場所として使ってくれているので、先生でも親でもない大人、家・学校のことを言える特別な大人という存在になれるよう努力している。
 - 見守って、何かあったら力になる、本当に何かあったときにここに来てよい、というスタンスで対応している。
 - 子どもたちのことを認めてあげることが自信につながったり、一歩踏み出すきっかけになったりする。ある子の場合は、コミュニケーションノートを取る等、何かあったときに振り返りができるよ

うに対応している。

- 地域の方も一緒に関わってくれている。1人の子やほかの子ども達を全員で支えている。
- 14、15年前は一部荒れている生徒もいたようだが、私が異動してきた8年前には落ち着いてきた時期だったようだ。印象としてあまり派手な悪さや問題行動はあまり見受けられない。8年前、小学生・中学生だった子が高校を卒業したり、20歳くらいの年代なので、よく児童館に来ていた子たちは、時折自分の状況伝えてくれたりする。いろいろな事業に関わってもらったり、継続的なつながりはずっと持っている。

3 事業者が実施している若者向けの取り組みやイベントについて 特に自立や成長、地域交流を促す取り組みやイベントについて

- 中高生支援館
 - 5年前より中高生支援館に向け準備期間だった。1年先行開始した代田児童館等を参考にしながら中高生支援館の組み立てを始めた。
 - 中高生支援館が区内に5館あるが、地域によって関わり方、地域の様子、館のスタンス等、若干特色が出てきたりする。喜多見の地域に合う形での組み立てを考えた。
 - ◇ この地域は、地域の方たちが児童館に来て下さったり、密な関係なので、地域の方と中高生が関われる機会、中高生が自分達で発案したりして、地域の人たちと一緒に何かできないかというところも事業として活かさないか、特徴づくりをしてきた(児童館の花壇を畑に替える、屋台を中高生が自分達で作成、等)。
 - この部屋(元は和室)も、自分たちで過ごしやすい空間に変えた。ソファに似た椅子は中高生が自分たちで考えて工作。中高生自らが考え職員が支える。事業の組み立てで職員が案を出したり誘導することもあるが、職員先行とならないようにしている。
 - 館のスタンスと地域のスタンスと中高生の意見を反映させながらやっていくよう気を付けている。
- 子どもたちの自主性と反映
 - 意見は出るが、收拾がつかない。これからも中高生支援館は続けていくので、人間関係も壊れないよう、異世代交流も含め事業実施していきたい。意見を出し合い、いろいろな意見をもらいながら作っている。
 - 6月下旬くらいに、中高生たちの発案で、彼らが作った屋台を使ってパンケーキ屋を作った。
 - 屋台の活用はさまざま。年2~3回くらい(前回、前々回はアイスクリーム屋。ほかにラーメン、うどん、おでん、ソースせんべい、当てくじ屋等)。
 - 児童館前以外でも、喜多見地区の区民祭りへの出張屋台をした。中高生たちが屋台を引っ張っていく。いろいろなところで地域の人たちに見てもらえる機会をつくり、中高生の活躍の場を地域に効果的にアピールできている。
 - 反省点は、仕込み、食材計算等、一緒にやっても途中で投げ出す子もいる。そこは職員の仕事。部活や用事で毎回同じ子が集まるわけではない。当日以前の準備も関わってくる。どう人数をうまく集めてやるか、職員サイドとして大変。
 - 中高生も短時間でお客さんが集中して来たりするので、さばいていくのが大変だった。
 - パンケーキ屋でのクオリティが高かった。みんなが喜んで食べてくれる姿や達成感、やって良かったという声があがった。うまくいくと反省会のときに、次回のアイデア・意見もどんどん出てくるので、職員も一緒に話し込んで行く中で、何ヶ月か先の企画が決まっていく。
 - 作るジャンルが毎回違うので、毎回スムーズには行かない。試行錯誤だがそれも込みで楽しいのだと思う。今回のパンケーキは事前準備からとてもスムーズだった。核になっていた子が大丈夫だと自信を持ってやっていた。
 - 児童館で指導的な役割を担う子は、学校で生徒会や部活もバリバリやっている子もいれば、学校ではできなくても児童館で活躍できる子もいる。
 - 屋台は食べ物系が多い。地域の方と協力して畑で収穫できれば、中高生や小学生、小さい子も一緒に食べることもある。食べ物は人を引き付けるのには一番効果的と思う。
 - 毎月の行事でいろいろ散りばめてやっている(次の企画では外で食べ物を焼いて、線香花火をやる、等)。イベントの後に今後の行事について語り合う会を起こしたりもする。
 - 企画のアイデアをほかの児童館との交流で、と意見が出て、地域の中高生の担当者会議で提案して、賛同してくれる館もあったので、事業化・イベントみたいにして実施したこともある。派生して事業が成り立っていくこともある。

4 地域での交流活動

● 地域への投げかけ

- こちらから、地域に関わってほしいと投げかけもするし、今までも関わってくださっている地域の方から、情報や打診等、お話も来たりする。双方向でのやり取りがある。宇奈根の渡しも喜多見児童館発（世田谷区子ども夢プロジェクト）。
- 多摩川の源流をたどる企画の頃から関わってくれている子が、「宇奈根の渡し」で船の操縦、棹差しでお手本になってくれたり、子どもの実行委員長として頑張ってくれたり、すごく助かった。
- 子どもの意見は、企画段階で聞き入れる努力をしている。実際にできること、できないことははっきりしているので、無理なものはできないと伝えている。6人の職員にそれぞれスキル、得意分野があるので、職員間で力や知恵を借りながら、共有している。

5 施設・事業の運営

● 方針、スタンス等

- 4月から館長が交替。今の館長はこれまでの様子を聞かせてほしい、という感じ。そのままの流れの中で、知ろうとしてくれている。今までのことを大事にしていこうというスタンスを感じる。
- 基本的には、子どもたちや私たちがやりたいことを、大事にしてくれるスタンスだと思う。
- 経験上では2人（の館長）とも、現場から上がってきている方。児童館立ち上げから関わっていた方なので、地域を大事にしていくことが、地域力の向上につながる、子どもを育てる上で重要なことを熱く語ってくれていた。今の館長も若手の時から努力して勉強されてきた方。地域の方も大事にしている。子ども、お母さんの立場に立って、子ども中心で進めていこうという感じ。
- 同じ目標に向かうにも、プロセスが違う館長を経験すると、こちらも違う見方ができる。自分自身も勉強になった。

ヒアリング内容（事業者）

1 基本属性

● 利用のきっかけ

- 入館は、各家庭で、時間潰し等、人それぞれだが来る目的はみんな一緒。背景は人それぞれなので、例えばアンケートから読み解くことになる。
- 居心地が良い、人、職員がいる、楽しかったから、職員に話しておかなければいけないことがあった、といったようなおまけのようなものがきっかけになって、また来る。前に来た時の思いをつなげてまたここに来るのだと思う。
- 前日に来て次の日も来るというスパンもあれば、何年か空いて、ここにまた来たいという思いもある。
- 中学生、高校生になって初めて来る子は、友達に誘われて来てはまる子、中学生は特にそう。多くは、来ていたりピーターのお友達に誘われて来てはまる。高校生で来る子ももちろんいる。ここには音楽室もあるので、部活等で軽音楽をしている子も来る。
- ここに来れば何ができるのかをリサーチしてやってくる子もいる。
- 高校生くらいだと何かしら目的を持ってくる子が多い。一方で何の目的もなく来ると、部屋を徘徊する子がいると心配なので、声をかけたりする。何の目的も持たない子が一番心配なタイプ。盗難のこともあるので、声をかけたりする。

2 施設に来る若者の変化

- ここではトランプでみんなで遊ぶ。子どもにとっても良い効果がある。個でなくみんなで遊ぶ。
- （別施設での例）ここに来ながら自分の特性や、やりがいや夢、自分の居場所、存在感を感じた先の仕事に就こうと考え、目的が見つかった子たちもいた。自分の心が育ってきた、自分が分かってきた、対人の中で得られたものがある、そういう成長を見せる子がいた。

3 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- 中高生に対するまなざしは基本の部分では絶対同じ。参加・参画、自分でやりたいことをやってみる。
- 小学生にはこちらから行事を提示。中高生には自分たちが何をやりたいかを聞くことから始め、年間行

事のプログラムに取り込んで進めていく。

- 自分たちがやっていることが楽しくかつ自己肯定感が高められることにつながっていく。それが参加・参画の良さ、成果。
- 自己肯定感の醸成は些細なことで構わない。まずは自分たちが楽しかった経験と、楽しませてくれた、励ましてくれた相手がいって、その中で、学校の中では得られない、地域との接点である児童館という施設でできるというのは良かったと思う。児童館はそういう仕掛けをしている。
- 引っ込み思案の子は、行事のお客さん側としてでも接点があればよいと思う。
- 子どもたちの中にも、それぞれの役回りがあってもよいと思う。私たち職員だけではなく、上の世代が、次につなげるような声掛けや、背中を押ししたりすること。それが縦のつながりのある集まりの中で大事なこと。

4 施設・事業の運営

- 課題は、すべての青年を網羅できないこと。児童館は中学校まで。中高生以上の生活範囲の広がりを見ると、ウェブサイト自分でアクセスする以外ない。目的意識を持った子たちがアクセスするが、それ以外の子たちがわからない。そこから先に引きこもりがあったのか等、見えてこない。ネットワークから漏れる子が出ないようにしたい。
- 中高生の参加が少ない。リピーターは来るが、新規の子がなかなか来ない。

5 地域での交流活動

- この児童館が、地域の人との交流が盛んな要因は、団地の一角にあるので、歴史の刻みを一緒にしている点があると思う。児童館に遊びに来ている子たちが、団地祭りに行ったり、地域との「のり代」が地域イベントにあたりするのは大きいと思う。
- 児童館でお祭りをするから地域の人たちに来てもらう。そういう目的を持って大人たちを集める、集まる。それが大事だと思う。一番大事なのは、それを通して地域の人たちを集めて、地域の人たちとみんなで1つのことを共有してやること。日本的なつながりの風景を真似た形。
- 児童館のイベントが無事に始まり、終わる、多くの人数が必要だからと地域に振って、団体が人数を集める。それで集まったものの成果（作られよう）が人間関係、生きがいみたいな形で地域に還元されるというのが児童館の所以だと思う。
- 地域の人たちとの交流の場では、子どももちろん、地域の方々の取組み、厭わずやって下さる方たちに対して私たちがそれを裏切らない、同じ思いを返してあげる、ということ。喜多見に来て、なおさらそういう思いが強くなった。

6 その他、施設・事業の運営

- 子どもたち、中高生の気質が、以前と最近とで違う点は、子どもの内側から出る声を、子ども自身がつぶしてしまう、思春期の子は特に「別に…」とか言葉少なになっていると思う。
- 自己肯定感が低いから、自分を批判されたくないから、自分の内側を出さないといった感じ。ゲームでは夢中になれるが、いざ自分のことを人に言うのは拒む。何を言われるのかわからないから。そういうのが大きくなっていると思う。
- 今の学校の窮屈さは、親との関係も含めて本当に大変。児童館が、子どもたちのクールダウンと地域の人との交流の場になってくれれば。地域の方たちがいつもいてくれる、そういう仕掛けづくりが大事だと思う。
- ここは、8年の経験のある職員と3年目になる中堅の職員がいって、それを大らかに見ているママ的な職員がいって、職員構成で言ったらベストだと思う。一番大事なのはほかの職員がやっていることに信頼を置くということ。

ヒアリング内容（利用者）

- A：20歳：男性
- B：27歳：男性
- C：女性
- D：女性
- E：男性

1 基本属性

● 基本属性

- A：20歳 男性 フリーター
- B：27歳 男性 フリーター
- C：12歳 中1 女性
- D：14歳 中3 女性
- E：14歳 中3 男性

● ここに来るきっかけ、経緯

- A：小3か小4に、ドッジボールやらないかと誘われた。
- B：小1くらいから。ドッジボール。蒲田とかほかの児童館に行っていたが、ここが家から近いので、ここに来ている。行かなかった時期もあった。職員や上の人たちが代わると、児童館のやり方が変わる。
- C：小2のとき、友だちから遊ぼうと誘われた。イベントとか、楽しい。
- D：引っ越してきて、家が児童館に近かったので、来てみた。兄弟と一緒に来た。4年生のときに引っ越して来た。

2 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- E：小1で初めて来た。家が近くだった。きっかけは、小さい時からいろいろ、狛江のほうの児童館とか。引っ越してきて、児童館あるから、とこちらに来始めた。部活はバドミントン部だが、まだ部活を引退していないので、児童館に来られていない。
- イベントについて
 - D：イベント等、全部楽しい。最近「鉄板焼き甲子園」に参加した。砧地域の児童館が集まって、鉄板焼きをするイベント。
 - B：「鉄板焼き甲子園」は、企画案を樋口さん等が案として出す。
 - B：砧児童館の人たちでイベントの話が出て、樋口さんは、調理関係の経験があるので、担当になる機会が多い。樋口さんがまとめて、中高生に声かけている。
 - A：最近だと宇奈根の渡しに参加した。ずっと川に浸っていた（上流と下流に流されないように。紐を持って立つ係）。
 - E：部活をしているので、木曜・土曜の数時間だけ。木曜は、テスト前でない限りは結構参加していると思う。参加したものは全部楽しかった。

3 他の世代と交流する仕組み

- C：児童館に、5年生の友達がいる。
- A：職場でも、上下関係なく基本敬語で喋るが、違和感はない。
- B：職場では周りの人たちにはきちんと敬語を使う（自分も年が年なので）。この子たちには呼び捨てにされている。ドッジボールを自分が教えていたときに、小学生だったのでため口だったが、最近敬語でしゃべられると違和感があり、やめてほしい。こういうところでは上下関係なしでやってくればよい。
- 地域の交流で意識すること
 - A：年上と年下の異世代コミュニケーションを取れる。
 - B：午前中に工作室で地域の人が職員みたいなレベルで、みんなと関わっている人がいる。自分と同じ年くらいの息子がいるらしい。自分より来ていると思う。結構前の館長さんも知っているの。自分もその名前出されてもわからないくらい。

4 施設・事業の運営

● 欲しい設備等

- E：バドミントンコート。もっと遊技場を広くして、天井を高くして、いろいろな運動ができるとよい。
- A：自分としては、孤立するよりは、気軽に入って来られる部屋のほうがよい。
- B：もともと喜多見児童館は音楽室がなく、倉庫にいろいろなものが詰めてあったのを無理やり音

楽室にした、という感じ。音楽関係をやりたい人にとっては少し不便かと思う。代田児童館に行ったほうがよいと思う。

5 施設に来る若者の変化

- 児童館がなかった場合の過ごし方
 - A：ずっと家でゲームをしていたと思う。もともと児童館に来る前は、学校から帰れば大体家でゲームするか、友達と公園で遊ぶしかない。児童館に来てから、児童館で遊ぶようになった。
 - B：多摩川の河川敷で遊んでいたと思う。
 - C：小6のときにいじめられていて、児童館がなかったら学校も休んでいたかもしれない。
 - D：私は、学校は疲れるので、家で寝ていると思う。
- みんなで企画すること
 - D：パンケーキの企画は、案を出してやった。

世田谷区若者施策に関する調査
ヒアリング調査 議事要旨（粕谷児童館）

2018年7月7日（土）
場所：粕谷児童館

出席者
粕谷児童館 館長、スタッフ2名
世田谷区子ども・青少年協議会 小委員会委員

ヒアリング内容（館長）

1 基本属性

- 利用者
 - 中高生は1日平均5～6人。地元の子ども（地元の学校に通う）の利用が主。
 - 近隣高校の下校時に、地元でない高校生も来る。
 - （ヒアリング当日（土曜））キャンプ準備会に参加の中高生が来ていた。
 - 中学生の利用者のうち、小学生のころからの常連の利用者は仲間関係が出来ており、職員とも話し合う等、濃い関係ができています。職員との関わりを楽しみにしている。
- 利用時間区分の工夫
 - 午後5時以降は中学生のバスケットボール利用可とし、小学生の卓球利用とずらしている。
 - 塾があり午後6時に帰る子もいれば、部活帰りの午後6時半くらいに顔を出す子もいる。
- 児童館の規模・設備
 - 敷地面積としては区内児童館でも狭い方。2階の1部屋が乳幼児専用部屋で、1階と分離し乳幼児が安心して遊べる場所になっている。
 - 広場を含め児童館の活動ができる点は恵まれている。
 - ほかの館のような音楽室設備がないが、平成27年に中学生支援館になって防音（二重窓）構造になり、音楽活動はできる。
- 近隣からのクレームはほとんど受けていない。地域住民の方も協力的。（以前騒音での苦情申し入れに対応した）
- 中高生とスタッフとの関係
 - スタッフとは、学校、進路、友達、交際のこと、趣味等、なんでも話をしたがっている。親には言えない、友達同士だとうわさが広がるが、ここでは誰かにつながる不安はなく、スタッフの意見を聞きたいということもある。
 - 相談ごとに対しては、答えが欲しければスタッフの考えとして言う。
 - 来館時の様子、友人たちとの会話等から、キャッチの仕方、距離の加減は自然に測りながら接している。

2 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- 中高生支援館になったの状況
 - 毎月、中高生自ら企画する形式。大体、何かを作って食べるということに落ち着く。発想はそれほど斬新ではない。
 - 新年度に中高生に集ってもらい、前期は館から意見を提案し子どもが参加。後期は会議を持ち、子どもたちで企画検討。
 - お泊り会も実施（3月）
 - 烏山地域の4館が共同実施（7月のお泊り会）、大学生も含め13名参加。
- 中高生支援館の課題
 - 冊子は小学6年生に配布してもらおうが、実態を伝えるのが難しい。友達を連れてくるような広がりと思っている。
 - 午後6～7時の短時間の制約。施設環境（音楽専用室ではない、多種の活動を本格的にするスペースとしては物足りない）の課題がある。
 - 高校生は部活後の帰り道に30分程度立ち寄り、地元の子と遊ぶ機会を求めて居場所として来るパ

ターンがある。

- メルクマールせたがやにつなぎたいケースが何件あったが、区の制度上、本人自ら動かないとつなくことができない。

- 新たな取組み

- 月1 Teens。子どもたちに好きな日にちで企画させる。現在投げかけしている。
 - ◇ 中学生5人が参加して小学生キャンプを実施。中学生は小学生のリーダーとして参加（ほかの館で、6年生がキャンプの中学生リーダーにあこがれて中学生になって参加した例あり。）
- 中学生支援センターと児童館一緒に祭りの際に小中学生、大学生まで運営スタッフとして関わってもらう。いずれ地域の担い手となるような関係づくりを目指している。公募はせず、現在センター利用している中学生に声かけする。

ヒアリング内容（スタッフ）

1 施設に来る若者の変化

- 中学生支援館について

- 中学生は登録していれば、木・金は午後7時まで利用可。その時間を狙って来る子や、部活後に見慣れた仲間と会いに顔を出す、等の定着がある。
- 携帯電話で連絡し合って集まり、おしゃべりをして楽しんで帰っていく場。
- 子どもたちの方から学校での様子を話してくれることがある。小学生の学年が下の子の方が、職員を求めてくることが多いが、子どもによる。
- 中学生は、顔を見慣れている職員に対して、学校や家でのこと、進路、友達関係等について話することがある。館の職員でも必要に応じて、内容を共有している。

- 施設スタッフには、親でも先生でもなく、普段よく知っていて、大人としての意見は言ってくれて、聞き入れてもらえる、話せるだけで気持ちが高揚したりすることもあるのだろう。
- 他の児童館に比べ、小学生から一緒に育ってきている子の縦のラインがしっかりしている。「来れば誰かいるだろう」と、高校生になっても遊びに来て、しゃべったり、友達を呼んでみんなで遊んだり、そういう中学生の人数が多い。十数人から、少ないときは数人のときもある。部活や試験に関わらずに、来る子どもがいる。
- 地理的な要因以外に、館からも声かけをする。また、中学生向けイベントも多いので、新メンバーが入る。子どもの要望はできるだけ拾いたい。

2 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- Teens 企画

- 中学生向け。月1回開催を意識的に実施。食べ物系は、食べ物に絡めて遊びも取り入れている（午後5時～6時50分まで）。ほかにはハイキングも実施。
- 内容で参加年齢を検討（小学5、6年生から参加可能なものもあり）
- 新しい中学生の取り込みは難しく、6年生をターゲットにしても受験で塾通いする子もいる。中学3年は高校受験があり、高校になると通学先が遠い等、代替わりがある。小学6年生以前の小さいころから遊んでつながりを作っていくしかないと思う。

3 地域での交流活動

- 烏山地区の4児童館の合同行事では、チラシを中学校に配布する。小学5～6年生も含めた Teens 企画を取り入れ、上の年齢の子と過ごせる機会も入れている。
- はっきりとした反響はなかなかない。春休みのハイキングには、子どもたちが比較的参加した方だと思う（少ないときは4人、アスレチックも10人未満だった）
- 食べ物企画のときにハイキングを呼びかけし、行き先の意見を取り入れるが、部活や本人の都合で参加が難しいことがある。

4 他の世代と交流する仕組み

- 小学生世代と中学生をつなぐようなイベント

- サマーキャンプ（夏休み中に2泊3日、山梨県）は4年生～中学生までが対象。グループ分けをするときに中学生がリーダーになって進める。今回の小学4、5年生が中学生になったときに、下の

子を見るような、循環になるとよい。

- お祭りやデイキャンプでは、中高生にはスタッフとして手伝ってもらい、ゲームコーナーで小学生を楽しませてあげる等、運営を補助するスタッフとして意識的に入れている。
- 参加する中高生は固定化し、よく来ている子たちである。声をかけやすく、行事のこともわかっている。今年はいつ頃か、と聞いてくる。「手伝って」となることも多い。
- 中高生だけでなく、小学生でも声がかかれば、20～30分でもどう時間をつくるか、意識している。
- なじみのメンバーが大事に思ってくれるので、気持ちを受け止め、誘われたらどう応えるか、皆が同じように取り組んでいると思う。

5 施設・事業の運営

- 中高生は時間的な制約もあり、継続的にはつながりにくい。部活、バイトで興味が移り成長していくので、頑張れと押し出してあげたい。しかし中高生が来なくてよいのかというジレンマもある。
- 「ははとも」イベント（思春期の子どもの親の悩みや情報交換の場）を、毎月1回開催しているが、メンバーが固定化していたので、今年度はサポーター講座を実施、講師を呼んでのグループワークを企画した。
- メルクマールせたがやに訪問し話を聞く機会があり、連携・協働の重要性を現場の職員がわかっているかが重要であると思った。

ヒアリング内容（利用者）

1 基本属性

- 大学生、女性。保育園のころから姉と一緒に通い近くに居住。
- 高校生、男性。児童館は小学生のころから利用
- 高校生、男性。小学校高学年くらいから利用。
- 児童館イメージ
 - 昔から来ている場所、落ち着く場所、友達と落ち合う集会所。
 - 学校の先生に縛られない場所があるとよい。
- 小学生でイベントに参加し、一緒に遊んだ。年を重ねるにつれ、子どもたちのお世話、ハイキングの付き添いをした。児童館は18歳までだが、「いつでも来てよい」と言ってもらえる。
- ほぼ毎日部活帰りに立ち寄ってボードゲーム等をやっていた。親がいないから居心地が良い。職員は、友達のような感覚で話すことができる大人という位置づけ。
- 職員が異動した先の児童館に会いに行き、そのイベントを手伝ったこともある。その館の人たちも受け入れてくれた。
- 新しい職員とも遊んだりして、ここでよいかな、と感じている。

2 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- 最近、プロの人を呼んで話を聞く会が多い（漫画家、バスケットボールのプロの選手）。プロの人たちと関わられるのはよいと思う。
- 中高生の声を職員がうまく拾ってくれる。学校ではできることとできないことがあるが、中高生会議では、やりたいことも定期的に聞いてくれるという印象がある。
- 「誰かがいる」のがこの魅力。長い間いるから、小さい子の知り合いもいるし、そのお母さんも知り合い。小学生もイベントを通して仲良くなる。
- 児童館に違う学校の子が来ると仲良くなる。他の学校の子と関わる機会が多くなる場所。他の学校の同世代とは、職員がつなげてくれることが多かった。
- Teens タイムは活用されていると思う。
- 館への希望
 - 時間延長。究極では一日中。現実的には午後7時半～8時までを希望。
 - バスケットボールの使用時間を、ずっと使えるように。バスケットのゴールの高さをもっと高くしてほしい。
 - 以前のように陶芸ができるとよい（以前は焼ける職員がいた）
 - 図書室、図書コーナー。

3 他の世代と交流する仕組み

- 館での人間関係は、先輩・後輩等、関係なく気を抜けるところがある。学校と違ってタメ口で話せる。お互い名前呼び捨て。自然とそういう雰囲気になっている。
- 本心で語り合える。
 - 学校だとグループやSNS等が最近が多く、LINE グループでも控えめに、あまり大きなこと言わないように、と感じて、慎重に慎重に、という感じ。
 - 児童館だと、自分が言ったことをみんなが認めてくれる感じがあって、学校にはない楽しさがある。思ったことをずばずば言うのは楽。
- 学校は建前がある。仲良くしなければいけない、集団から外れないように努力して、頑張っているところもある。外れたら、いじめではないがインターネット等でたたかれるのではないかとこの恐怖は結構感じている。児童館ではそういうことを感じる必要はない。裏で何か言われたとしても、「直接言って」となる。
- 学校は基本的に、行くことが強制。児童館は、来たいときに来られる。
- 学校の先生は、クラスの空気をつくって、強制させる、管理の空気をつくる、という感じ。ここは中高生中心で回っている感じ。自分たちで企画して行動できる。
- 学校の友達とは、話題を合わせなければいけない、ついていかないと、クラスでハブられる。そうしなければいけないのは、運動会等の行事があるからだと思う。「ペアになりなさい」と言われて、ペアにならない子もいるだろうし。「班で行動しなさい」と言われて、「なじめない班に行くのもいやだな」という感じだから、頑張って周りに合わそうとしているけれど、ここはそうしなくてよいかと思う。
- 学校は100人、200人、300人単位で動いているが、児童館は多くても、100人、200人までいくことはないと思う。そういう違いもあるのではないかと思う。
- 館では、バスケットボールやボードゲームで遊ぶ。何をして遊ぶかは気分で決めている。

4 施設・事業の運営

- 月1の中高生会議
 - 去年か一昨年に、ハイキングにどこに行くかというテーマで「江の島に行きたい」と言って、その他全員も賛成し本当に江の島に行けた。即決で決まってくのはよいと思う。児童館にあるものを持って行って、自分たちで遊びを考えよう、というものだった。
 - ここの仲間は例えていうと、家族みたいな感じ。
- 4つの児童館合同でのお泊り会
 - 計20人くらいが参加。
 - 今まで知らない人と関わることが楽しく、魅力とを感じる。児童館に来始めた頃の、知らない人と知り合ったばかりの頃の感じを思い出すことができるのではないかと思う。
 - 内容も全部中高生たちが事前に会議をして、ご飯の時間等はあるが、何が食べたいか、予算に合うものを買って、作って食べよう、と決める。
 - 以前参加したとき、夜通し話をするのが楽しかった。家だとLINEやTwitterを使っても、顔が見えない状態でしか話せない。こういうときくらいしか、きちんとフェイス・トゥ・フェイスで話せない。
 - 親からも「行ってこい」、「積極的にやれ」と言われた。

5 施設に来る若者の変化

- 児童館でいろいろな人、全然知らない人と話をしたり遊んだりして、全然知らない人と関わるシチュエーションを、模擬練習みたいな感じでやってこられたと思う。
- 中学校では部活後は家に帰ってからゲームをすることが多いが、児童館があると学校以外に外に出るということをするようになった。
- 昔と今では、来ている狙いも違っている。年上のお兄ちゃん、お姉ちゃんを「かっこいいな、憧れだ」と思ってその後ろをついていくだけだった。今は、誰かが来たら私がいる、私がいるから、遊んでいこうかという感じで、いつでも戻ってきてよいという立場、立ち位置にいる。
- 以前に比べて今の子はおとなし過ぎて不安。塾等に追われていることもある。「SNSをやらなきゃ」という子もいる。
- 大学生と関わることはめったにないので、こういうつながりがあるのは、自分が大学受験するとき等にも役立つと思う。昔から知っている人が大人になっているので、そういういろいろな経験を聞けるのが、

役立っていると思う。

- 以前はキャンプで、私が火の使い方や包丁の切り方を教える立場だったのが、今はこの子たちが下の子に教えている姿を見ており、大人になっているのだと思う。
- この子たちにも先輩の姿を見て、成長している自分の姿を見せて、後輩に成長させてほしいという思いもある。
- 同じように大学生で関わっているのは、自分以外はこの児童館にはあまりいない。
 - ほかの児童館は、子どもを産んでも関わっている人もいる。同世代の子も、就職してからもキャンプの手伝いに来てくれる子もいる。
- 今後の児童館との関わりは、高校での生活で精一杯で、どうなるか分からない。
- 高校では、児童館でのことは、ジャグリングみたいなものをしたりするくらいで、たまに誘う程度。
- ここではバンドができるので、「ここの児童館でもできる」と話をした。ここでできなくても「ほかに近い児童館があるから、そこで使えるよ」と勧めた。ダンスでも鏡を使えたりする。
- ほかの区はお金がかかる。高校も区内だったが、そういうところはよいねと言われた。
- 生きづらさを抱えていたり、学校へ行けなくなってしまった子を、どうやって支えていくか、学校以外に支えてくれる場所、そういう人たちが来てもらうにはどうしたらよいか
 - イベントに来ればよい。外での活動をもっと増やしていく。
 - 以前児童館で芦花公園で花の丘フェスタに出店のようなことをした。
 - 世田谷区民まつりで、粕谷児童館の職員が集まっているところにお手伝いに行って、来てくれた子に児童館を勧めることもあった。
 - 最近、外で活動してよい場所が少なくなっていると思う。そういうところをもっと増やすと、悩んでいる中高生がもっと児童館を知る機会になると思う。

世田谷区若者施策に関する調査

ヒアリング調査 議事要旨（プレーパーク（羽根木・烏山））

2018年7月13日（金）

場所：羽根木区民集会所

出席者

羽根木プレーパーク 事業者（職員）
羽根木プレーパーク 事業者（世話人）
烏山プレーパーク 事業者（世話人）
烏山プレーパーク 若者：A
羽根木プレーパーク 若者：B、C
世田谷区子ども・青少年協議会 小委員会委員

ヒアリング内容（若者）

1 基本属性

- A：。空手教室で通っていた場所の近くにプレーパークがあったので、当時の友達と一緒に来ていたが、今は自分だけ来続けている。
 - ここでは、2歳から90歳まで友達。
 - ここでは、プレーワーカーのように働く。烏山プレーパークでは、プレーワーカーが1人休むと、代わりに9時に来て開館して作業したり、日曜は閉館して作業するために急いで帰ったりしている。
- B：普段からよく来ている。2、3歳の頃から通っていた。小学校が近かったので、毎日通っていた。学校の友人たちは、羽根木プレーパークのことは知らない。
 - 本当に仲の良い子しか誘えない。学校では猫をかぶっているがここでは素になれる。プレーパークと学校でのキャラが多分全然違うので、学校の友人には見せられない。
- C：羽根木プレーパークに通っている。小学校の頃から通い、いったん離れたが中学校のときに戻ってきた。基地作りや木材の運び方とか学べるから面白い。友人も来ていたが自分だけは来続けている。
 - 中学校の人となじめなかったが、ここでは素でしゃべれる仲間を見つけられて、楽しい。中学校のときは趣味の合う人がいない感じだった。
 - ここに来る人たちは、ほかの子の思いがわかると思う。
 - 小さい子どもたちも来るので、自然と面倒見がよくなる。
- キャラの使い分け（学校とプレーパーク）
 - A：そのときの流れで、キャラを決めている。そのとき必要な、空いている役をやろうかなという感じ。
 - B、C：プレーパークでの役を学校でやっても、浮いている感じ。
 - A：プレーパークに同じ世代があまりいないので、自然と違ってくるのだと思う。最近の若者についていくのが必死。
 - B：考えていることがそもそも違う。同い年の子でも、携帯の中のこと、テレビの話等、私は、アルバイトをしているからテレビもそんなに見ない、最近の流行っているものは全然わからないし、言葉遣いも、SNS上で流行っているものを聞いても意味がわからない。

2 他の世代と交流する仕組み

- B：学校では気の合う仲間以外の人といってもつまらない。
- C：小学校6年生くらいにはそう感じていた。プレーパークでは、自分を活かす場面が結構ある。中学校で音楽をしていて、プレーパークもみんな楽器をしていて趣味が合う。ライブ等も誘ってもらったりした。

3 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- B：ライブ企画、キャンプ（力仕事）。キャンプでは高校生になると、みんなの寝場所を先に行って大人と作っておく、ワークという作業をする。キャンプ場での番線（太い針金）締め作業も楽しかった。
- プレーパークの目指すイメージ

- A: 4か所ごとにあり方も、職員も異なるので、プレーパークに来る世代も遊び方も異なる。
- B: 多世代交流の場。今は見守る側になる考えも持っているし、引っ張っていこうとも思う。いろいろな刺激を受けられるような場。
- C: 学校等で悩みを抱えた人が来て、居やすい場所をつくる、というふうに聞いている。

4 施設に来る若者の変化

- 常連の子が減ってきている。その分、昔から居た身としては居づらくなってきた。
- 世代交代が進んだ感じ。「こうなりたい」と思っていた人たちが、仕事の都合でいなくなり、ワーカーもいなくなったりして、今は自分たちが引っ張らねば、とプレッシャーも感じる。
- 時代の変化もあるが、ワーカーも感じが変わった。以前に比べみんなと遊ぶことをやりたくないというときには断ってくる。断り方も結構冷たい感じと感ずる。
- 「(ワーカーから仕事を)手伝って」と言われるのと違って、「(これを)やらなきゃいけない」と言われる。ワーカーの姿勢がだいぶ変わった。
- ワーカーが異動する、辞める等で常に新しい人が1年に1人入ってくる。毎年追い出し会をしている。
- ワーカーがいるにもかかわらず、(子どもがいないと判断したかもしれないが)自分たちが来る子や施設内の様子を見たりしていることがある。

5 施設・事業の運営

- ワーカーに対する不満
 - ワーカー自体は気づいていないと思う。伝えても仕方ない、という感じ(既に何回か伝えたことがある)
- 最近は、流行りがない。自分たちで流行をつくらせていない。(小学生、中学生のときは、カードゲーム、どろけい等。)流行りがあれば、遊ぶきっかけ、来るきっかけにはなるかなと思う。
- 過疎化している。以前は約束していなくても遊ぶ子は必ずいた。今は小学生たちと、「やあ」と言って終わるくらい。ワーカーと少し話すか、お母さんたちと少し話すか、その程度。
- これからは、プレーワーカーを育てよう、もっと多く関われるようにしようかなと思う。どの世代よりも、小学生と就学前の人のほうが友達が多いと思う。
- 小さい子どもに名前を覚えてもらえるのは嬉しい。羽根木はお母さんと子どもが多い(自主保育をプレーパーク内で実施している)。ライブをやればお母さんたちが覚えていてくれることがある。
- 今後の関わり方
 - ライブ等の行事には関わっていききたい。専門学校、仕事等があってもなるべく行きたい。
 -

ヒアリング内容(事業者)

1 基本属性

- 羽根木プレーパークのプレーワーカー。新卒で勤め始め6年目。当初は、埼玉から通っていた。大学の求人ですプレーワーカーの仕事を知り、興味本位からここへ来た。
 - 高校時代、社会教育施設でスタッフとして関わり、プログラム作りやいろいろな人と関われるのが面白そうだなと感じたのが興味を持った理由。ボランティアの立場で参加者に近い距離で接したことが、プレーワーカーの仕事のきっかけになっている
- プレーパークは特殊な場所。来る子たちとより近い距離で、教師でもなく、1人の大人として関われるのは面白い。
- 学校でも、家でもなく、地域の場所というところがいいと思う。
- プレーワーカーの場合、子どもとは対等な立場で関わる。一緒に、やりたいことを考えたり、子どもに寄り添ったりというところ等は上下関係ではない。プレーワーカーはボランティアではなく仕事なので、より責任感を持つ。子どものペースや立場に合わせることに難しい部分はたくさんあり、最初は自分の立ち位置に悩んだ。
- それぞれの年代が互いに認め合っていけるのが理想ではあるが、やはり各人の固定観念により、否定的な部分が入ってきてしまうと、関わり方が難しくなっていくと思うことはある。

2 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- 何かを一方的にしてあげる場所ではない。
- 子どもたちが自由に伸び伸びとという一方、近隣への音の注意や配慮が必要（閉園後の音、声等への苦情）。
- 子どもと一緒に来る親から、ここで何ができるのか、教えてくれるのか、といったことをすぐ聞かれることが多い。ここは何をやってもいいと説明するが、理解してもらうのが難しい。
- 勝手に遊ぶより丁寧に許可を取ってくる子が増えてきた。これをやってよいか、使ってよいか、と聞かれたら、内容によってはOKできない、等と許容範囲を考えてしまう。
- 子どもたちが自ら何か考えてやることが少ないかもしれない。何をやるにも親、学校から許可を確認しなければいけないことが多いと思う。子どもにはそれが当たり前になっていると思う。
- 来園者には使えるものは全部提供し、勝手に取り出して持っていく形を取っている。
- 初めての来園者には意識的に声かけしている。挨拶、声かけ、プレーパークの紹介も行っている。
- 若者たちも小さい子と関わることをきっかけに、お母さんたちの見る目も変わり、それぞれ自然体で関わって、小さい子と中高生世代の子と、それを見た乳幼児のお母さんとが繋がっていく様子も自然と見られる。
- プレーパークに来る子ども自体は減っている。特に中高生世代の子たちは減っている。

3 施設に来る若者の変化

- ここが、何をやってもよい場所だと思えば子どもたちが本当に自由に遊び始めたりする。根本にはやりたいことを持って遊びだす子もいれば、すごく慎重になる子もいる。
- こういう場所だとわかれば、その瞬間から変わる子、様子見ながら動く子もいる。そういう環境を選ぶ子もいれば、来なくなる子もいるし、何回か来て少しずつやりたいことをやるようになる、という感じ。
- またプレーパークの中でも人目につかないようなところを選んで遊ぶ子もいる。
- 働き始めた1年目から比べると、中高生世代の子たちはとても減り、新たな中高生はあまり増えていないと思う。当時のワーカーが思春期世代の子どもたちに力を入れたいという意向があり、そのワーカーの在籍期間も長く信頼もあり多くの子どもたちが集まり中高生もたくさんいた。
- そのワーカーがいなくなって、そこから徐々に減っている傾向もあり、ワーカーの存在が特に大きいと感じている。
- 中高生の年代の子たちがいるか、利用しているかと、期待して来る子もいると思う。
- 何かあれば集まる子たちだが、日常的に来る感じではないと感じる。1つはつまらない、と言われたことがあった。また、来ていた子たちの変化（高校や大学、就労）もある。プレーパーク以外に自分の居場所を見つけられたのだということならばよい。ただ、ほかの理由があるとしたら心配になる。
- あり方として、子どもたちのやりたいことが実現できる場、そこに向かう過程の中で、自信を付けていたり、いろいろな人と関わったり、モチベーションや、やる気を持っていてもらえたらと思う。
- 音楽、ライブイベントは毎年実行している。子どもたちに声かけをして、一緒に遊具作りをする話をしながら実現まで一緒にできるといいが、他のこととのタイミングや、ほかのことに手がかかったりする。
- 子どもからはやりたいと言われたまま終わることもあり、ワーカーにやってほしいという依頼なのか、自分で責任を持ってやるという希望なのか、考えてしまうこともある。

4 施設・事業の運営

- 処遇や働き方について
 - マンパワーは不足しているかもしれない。羽根木プレーパークは常勤だとプレーワーカーが3人しかいない。日常の現場運営と、イベントのときはイベントも考えながらとなる。時期により、余裕があるとき、まったく余裕がないときがある。
 - 1年でメンバーが変わってしまうこともあり、経験年数が少ないワーカーと組むと、仕事の対応範囲に差が出てきてしまう。今年は私以外の2人が変わった。最近は同じメンバーで何年も続くことがない。毎年どこかのプレーパークで入れ替えがあるので、子どもたちにとっても変化は激しいと思う。
 - プレーワーカーという仕事自体、NPOの有給職員なので、普通の企業に比べたら年間の給料も少ない。
 - プレーパークは6時までだが、その後、中高生が来ると毎日残業みたいな形になる。羽根木は3人

だがほかの現場は2人で週5～6日を回したりする形になるので、体力的にきつく、年齢面も考えてしまう。

- 若者たちとの距離も近い分、仕事とプライベートの切り替えも個人に求められる。
- 本当にこの仕事を一生していきと思っている人も少ないのかもしれない。ここで2～3年経験して次のステップと思っている人もいる。
- 子どもたちへの影響
 - 4ヶ所のプレーパークの9人のプレーワーカー中、半分くらいが辞めて入れ替わりがあり、ここ最近では2、3人変わったりした。子どもたちにとってはめまぐるしく環境が変わっていると思う。
- 中高生への支援
 - プレーパークでの中高生支援は、日常プラスアルファの感覚になっている。通常の開館時間が、中高生が来られる時間ではない。羽根木プレーパークは月に2回中高生の時間として、閉園時間後9時までは若者の時間をつくっているが、そこまで仕事としてできるような形があれば、力を入れていけると思う。
 - 閉園時間後になってしまうと、現場にはいるが仕事としてでなく、ただいる感じになる。
 - (中高生からすれば)プレーワーカーが、一緒にいる時間をどれだけ大切にしたいと思っているかというところにもつながっているので、「(あいつは)早く帰ってしまうからつまらない」と思われてしまう。
 - 以前は、プレーワーカーは夜の時間も子どもたちと過ごすことについて、ボランティア精神で、自分が関わりたいからいる、という部分がすごく大きかった。そこを今のワーカーたちに求められると、難しい部分もある。
 - (子どもたちが)夜遅くに来たら、「今日はごめん」というときもあれば、話してご飯を食べに誘ってプレーパークを離れたりする等、本人の様子も見ながら、自分の時間・体力とも相談しながら関わっている。
 - ほかのワーカーには求めないが、自分の働き方がほかのワーカーに影響を与えてしまうと思う部分はある。中高生と関わる夜の時間も、自分たちの仕事として保障されながらできるとよいと思う部分もある。
 - 小さい子から中高生・若者まで見ていて、どこかを切り離して考えるのはすごく難しい。乳幼児から中高生までを見守っていききたい。
- 単にワーカーと若者とのやり取りだけではなく、月1回の世話人との会や運営委員会で話したりすることで、世話人も関わろうとしてくれている。

ヒアリング内容(世話人)

1 基本属性

- 区の委託事業で、世話人とプレーワーカー(職員)とで一緒に運営を行っている。主に月1回の世話人会でいろいろ運営の話をする。職員のプレーワーカーが休みのとき等は、代わりに現場に立つ。
- プレーパークの目的は、子どもたちが自由に遊び、やってみたいことにも挑戦できるようにすること。居場所づくり。
- 世話人として8～9年目。最初は遊びの意味がよくわからないところもあったが、被災地の子どもの遊び(津波ごっこ等)で心を癒していくということから遊びの意味がよく理解できた。
- 集中して遊んで、いろいろなことを忘れて、気持ちがりフレッシュできる、そういうことがとても大切で、意義があると思っている。プレーパークはそのための場所づくり。その意味を広げていくこと、子どもがそうやって遊べる居場所をつくるというのが、プレーパークの意義か、と思う。
- 羽根木プレーパークでの自主保育の世話人係から始まり、自分の子どもが小学校入学後もそのまま世話人をしている。
- 烏山プレーパークが近くにあり、子ども連れで毎週通い、たまたまプレーワーカーが辞めたときに、若者支援をしている人から依頼された。

2 施設に来る若者の変化

- 羽根木プレーパークに関しては小学生が少なくなっている。乳幼児のおでかけひろばができて、乳幼児が来やすくなって増えていることで小学生が来づらいのかなと思う。
- 中・高校生は、9年間ずっといたリーダーが入れ替わった影響もあると思うが少し減っている。羽音ロックというイベントはずっと続いているので、その頃になると増える。
- コミュニケーション能力がとても高い若者も見られ、親、祖父母からいろいろなことを教わってきた感

じがする。結局、遊びの延長で、遊びをしたいからこそやらなければならない、というのができているのかなと思う。

- 自分の子どももプレーパークに通っていくうちに、ワーカーがすごく好きになって、常にくっついて回って、いろいろな話を聞いたり、ワーカーが接している子どもの様子を見ていたりして、自分でやりたいもの、見たいものをどんどんやっているのではないかと思う。
- 中高生全般に見ていて、思うこと
 - いじめが見えにくい、陰湿だと思う。携帯、LINEの普及で、LINEグループが出来て、そこから外されることがある。
 - プレーパークはもう少し安心できる場になっているとよいと思う。長い目で関係性が築ける可能性のある場所、やりたいことができる場所だと思う。
 - (プレーパークからしばらく離れて)何かあったときにふらっと戻ってこられるという、そういう場所であればよいと思っている。実際、何年かぶりに戻ってきて、それから毎日来ているという若者等いろいろいる。

3 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- 烏山プレーパークは毎週金曜日に夕食会を行っている(6~9時)。多いと10人、少ないと1人のときもある。ほかのプレーパークから来る子たちもいる。結構定着している。夕食会は小学生は参加できず、中高生が主。
- ワーカーは、たまたまプレーパークに来ている中学生以上の子には夕食会に誘っている。
- 烏山プレーパークは、近所の子たちが多い。羽根木プレーパークは、ふらっと来る子はあまりいない。お友達伝いに来たり、常連の子で来ていたり、イベントに参加して面白そうだなということで来たりすることがある。年齢層は広い。若者ということで、30代等も常連で来ている。
- 羽根木の夕食会参加者は、中高生が半分で、20~30代が半分。年齢層の高い人は毎回来ている感じがする。中学生は部活を終えてからの参加が難しい。保護者に電話してご了承いただく等、確認を取ることもある。

4 他の世代と交流する仕組み

- 羽根木プレーパークでは、夕食会にはあまり世話人が入っていない。若者だけの時間を大切に考えており、余計に入らず、距離を取っているところがある。
- 若者たちは、自然に、来ている赤ちゃんを抱っこして遊んでおり、面倒見が良い。自分の子どもが生まれたときにもナチュラルに接することができるように思う。

5 施設・事業の運営

- プレーパークの課題
 - 羽根木プレーパークとしては、小学生、中学生がもう少し来てくれればと思っている。
 - 小学生受けする遊具が作り変え中で使えなかったりするのが来ない理由として本当に大きく、心が掴めていないと思う。
 - 閉園時間は6時なので、若者のニーズに合っているのか疑問に思う。中高生は来るのが難しいと思う。
 - 月に2回、9時まで開園しているが、4回に増やせば若者にとって、よいと思う。
 - 子ども話を聞いてあげるには、マンパワーがもっと必要だと思う。世話人も足りない。
 - 羽根木プレーパークの夕食会とは別に「だべり会」をしていて、その時々でやるのが違うので、初めての子ども加わりやすいかと思う。
 - 外遊びをしたいが、児童館では物足りないという方は、プレーパークと使い分けている子もいる。
 - 初めて来た子で、何で遊んでいいかわからない子が結構いる。向き不向きがあると思う。
 - スタッフ間では率直に意見交換ができていると思う。月1回の世話人会でいろいろ決めているが、なかなか終わらないくらい話をしている。子ども優先で決めることが基本。
- 働き方の課題
 - プレーワーカーの交代が早いのが、世話人の立場でも、ワーカーがもっと育てほしいと思う。勤務実態が厳しいのか、とも思う(給与や勤務時間等)。ずっと続ける仕事ではない、と思っているかもしれない。

- プライベートとの境が難しい職業だと思う（閉園後に若者が来たときに放っておけない等）
- 4つある現場すべてで、プレーワーカーを3人にしてほしい。通常、ワーカーは2人常駐体制だが、体調が悪く代わりに急きょ世話人が入らなければならないこともある。世話人も足りていない。
- プレーパークでの火や水を使った自然体験等、火や水の取扱いも含めとても重要だが、たき火は、最近煙等による近隣の苦情で実施が難しい環境にある（烏山プレーパークでは、ほぼ扱えなくなっている）。
- 学習支援もできたらと思っているが、なかなか手が回らない。夕食会や子どもの孤食化への取組み等、最近気にはなっている。プレーパークでやってもいいのではと思う。
- 中学生が自由に球技で遊べる場所がない（中学校の校庭開放がないのでバスケができない、公園で野球の硬球が使えない）。
- 10何年か前には、子育て支援に対する理解がなく、税金を使って何をやるのか、という感じだった。今は子育て支援の必要性は広く理解されたが、そういう考え方（税金を使って何をやるのか）が若者支援についてスライドしてきている。ただし、60代、70代の人たちからの理解が得られない。
- 若者支援の一環で、思春期の子どもを持つ保護者のお茶会をやっている。子どもの小学校時代からの親同士のつながりが、子どもが大きくなるにつれて切れている（転勤等で世田谷区に入ってくる親は話す相手がない、等）。お茶会は、「グループ」の手法をとり、その場だけの、心に浮かんだことを話すだけの機会だが、それでも参加してくる。親支援がなかなかない。思春期の子育ての仕方がわからない、という親もいる。

世田谷区若者施策に関する調査

ヒアリング調査 議事要旨（情熱せたがや、始めました。）

1回目 2018年7月4日（木）

場所：世田谷区役所第1庁舎2階1・2・1会議室

2回目 2018年7月19日（木）

場所：世田谷区役所第1庁舎5階庁議室

出席者

情熱せたがや、始めました。（以下、ねつせた！）事業者：担当者（2回目）

ねつせた！運営メンバー：2名（1回目）

ねつせた！メンバー：1名（2回目）

世田谷区子ども・青少年協議会 小委員会委員

ヒアリング内容（事業者）

1 基本属性

● 団体のプロフィール

- ウェブサイトを運営するNPO法人。greenz.jpというメディアを運営して、12年目。greenz.jpでは、環境問題、ソーシャルデザイン、社会の課題解決アプローチの実践者の紹介を行っている。
- ねつせた！では、会議への参加、議事録作成、毎月のツイッター、フェイスブック、インスタグラムのSNSのフォロワーや反応を分析しシェアしている。

● ねつせた！を知ったきっかけ

昨年度のねつせた！受託事業者から、講師としてお声がけいただいていた。以前より取材、ワークショップゲストとして前事業者とつながりあった。

● フォロワーについて

- 現在、ターゲットや提供内容等、検討中。
- 主なフォロワーは大学生。取材で関わった、区内のお店、事業者の方、商店街の方、コミュニティの中心になっている人は少しずつ認識してくれている。

● 現行の方針

- 参加メンバーの居場所をつくりながら、彼らが実現したいこと・関心事を通じて、世田谷区の魅力を発信していく事業であること。
- 事業者としては、書くこと、編集、発信を専門にしている。スキルアップ、彼らの関心事、きちんと取材して伝えることのバックアップが一番大事だと思っている。今後どういう段階を踏んでいくか、課題を感じている。

2 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

● スキルアップ

- グリーنز編集部が講師となり、講座を実施。ノウハウ重点に集中的に講座を持つと可能性を感じる。
- 長い文章の書き方、取材の仕方（苦労していた）等、テクニックで改善できるところがある。
- 現段階はスキルの手前。実際誰がどう動くか、チーム編成を決めたい。ねつせた！の団体としてのビジョン検討は、もう少しという感じ。
- 誰に何を届けたいか、自分たちも一緒に行動し、読者を巻き込んでいくようにしたいという方針までは出来ている。

● 運営（企画）会議

- 企画案は匿名での事前提出。出てきたアイデアへのフィードバックの位置づけ。
- メンバーから話し合いの仕方を提案・意見もらって、運営会議メンバーでシミュレーションしたりする（大学生たちが主）。
- 皆ボランティアなので、「好き」という気持ちを優先するのであれば、無理に難しいところに飛び込んでいく必要はない、と個別に話をしている。
- メンバーが取材する店、イベント、風景は新しい発見で、地域は1つの側面だけではないことを伝

えられるSNSがあると面白いと思う。ねつせた！のコミュニティの作り方は私自身も勉強になる。

- 学生メンバーの変化
 - 意見を伝えるために工夫していることが見えてきた。メンバーも提案をしてくれるようになった。
- 現行の課題
 - メディア運営、単純にフォロワーを増やすことや、記事のクオリティを上げていく、等の依頼がある一方、学生メンバーは個々に志向性が異なるので、その点への配慮も必要。メディアスキルをみんなに盗んでほしいと思う。
- 3 施設・事業の運営
- メンバーの納得感
 - 学生メンバーは、納得感がないと前に進みづらい。各自この場で自分のやりたいことや、自分のスキルを發揮できるかどうか。別の人の意見でも自分のやりたいことにつながられるか。
 - まちに関する興味・関心を深めていきたい人と、話したり伝えたりしていくことに興味がある人には、ここは良い場所。
- 増やしたいフォロワーのイメージ
 - 彼らと年代で、地域活動、コミュニティに関心がある学生や若い人。周りの大人が、若い人の盛り上がり、若い人同士のコミュニケーションでじわっと派生していけばよい。
 - 現時点では、この取組みをご存知の方が応援をしてくれている段階で、他は関係する学生団体や個人のつながりが多い感じがする。
 - 純粋に世田谷というまちがあって住んでいる、という共通点と、家でも学校でもバイト先でもない第3、第4のところに魅力や面白味を感じていると思うが、そういうところにまだリーチできていないと思う。
- 社会人に仕事を聞くシリーズは、仕事を選んだ理由、きっかけ等、哲学的なことしか聞けないが、むしろそれが若者による良い企画であると思うので、うまくやっていければ良いと思う。
- SNSの情報発信は出来ているので、今後深掘りした記事を作ることに力を入れられたらと考えている。
- SNSについて
 - SNSは、情報源でもあり、コミュニティでもあり、逃げ場所にもなる。1人にもなれるし、多数の人とつながれる「若者の居場所」という認識。
 - 利点は沢山ある。若い人がまちにいると若い人自身がハブになって、地域の人と人のつなぎ目になれる。本人たちにその自覚はなくてもかわいがられてラッキーという、そのくらいで良いと思う。強い意味や目的を持たなくても、まちにいられるのはセーフティネットになっていると思う。
- メンバーから、運営メンバーが頑張っているの、その負荷を分散したほうがよい、と提案されている。
- 人数が10~15人であれば、区内のほかの場所、地域でもコミュニティはつくれると思う。

ヒアリング内容（学生運営メンバー）

1 基本属性

- 参加メンバー
 - 参加メンバー17名中、メインは学生。半数以上が大学生。高校生が増えてきた。価値観、関心事の幅が広がってきた。
 - 参加者の特徴として、まちづくり、自分の関わるボランティア活動に関心がある層と、メディア運営、物書き、映像・メディア研究への関心層（伝えること、魅力を引き出して編集して伝えることに関心がある層）とがある。
 - リーダーシップ発揮型の人はいない。みんなでこのコミュニティを盛り上げようという緩やかな連携がある。対話をしながら進めていく、メンター的なリーダーがいる。
 - 対人関係の苦手なタイプも中にはいる。外での生きづらさを、ねつせたに来ることによって解消している人もいると思う。居場所の役割もある。
- A：大学4年女性。
 - 運営メンバーのBと同年齢（中高、大学も一緒）。
 - 友人Bが活動していて話を聞いて興味を持った。
 - ◇ 友人Bより、世田谷区の情報、魅力を発信する、「自分たちの意見を通してくれるから、好きなことも挑戦しやすい」と聞き、地域に焦点を当てている点や、アットホームなところでのつながりを大切にしている点に関心を持った。大学で社会学を専攻していたこともあり、もともと

多文化共生に興味があった。

- スタッフの印象は、温かく、優しい印象。30代の方もいらっしやっただので、いろいろな方と関われると思ったのが大きかった。
- 記事によってターゲットを変えている。区の大きいイベント、ラーメンのイベントならばいろいろな人が来る。シングルマザーのイベントは背中を押したい思いで発信している。同年代を意識して発信はしていない。
- 商店街のフェアのイベントをツイートすると、お店屋さんから「お気に入り」していただいたり、SNS映えするような記事には区在住の中高生、大学生がアクションしてくれたりする。記事によってその人の心の動くポイントが違う。
- 記事を作るときに、見たらどう心が動くか、それがその人の魅力になって豊かになるか、と考える。性別や年齢は特に気にしていない。
- B：大学4年生女性。
 - 大学3年生(昨年)より参加している。フェイスブックでねつせた!の広告を見て、イベントの企画・運営にも興味があり、面白そうと思い参加。ねつせた!の環境が良いと思い、Aさんを誘った。大学外でコミュニティをつくるのが好き。
 - 活動に区が絡んでいるということを最初は知らなかった。
 - 当初は社会人と一緒にやるイメージがなく、戸惑いもあったが、ねつせた!はこういうものなのだと思って以降は、社会人とのつながりを持つのは学生にとって大事だと思うようになり、良いと思う。
 - データでは、利用者層の7割は39歳までの若者だが、SNS上でもあり、読者の実感はつかみにくい。
- C：大学3年生男性。
 - 大学2年生(昨年)より参加。1年の夏に、区報でねつせた!は知っていた。まちづくりに興味あり。
 - コミュニティには関心はなく、やりたいことをやる手段、方法に関心があった。大学のフィールドワークの授業で、おじいちゃんに話を聞いたことがきっかけ。
 - コミュニティには、根本的なところで良い子が多い。もともと良い土壌があったから溶け込みやすいということもあるが、運営目線では自然と良い子が入ってきていると思う。
 - 区のバックアップがあることで自分たちの負担は減っている。
 - 実際にどのくらい若者に届いて、その若者が動いて、「ねつせた!がきっかけでこうしました」という、お客様の声のようなものはないので読んでもらっているという感触はわからない。歯がゆいところ。一方で区内のお店や団体で「いいね」をしてくれている。

2 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- メンバー全員が月2~3回のSNS、ツイッターでの投稿を行っている。
- 年間の取組み
 - 20人未満のメンバーが2層構成(運営メンバー、メンバー)で活動。そこに事業者と区がついている。
 - 運営メンバーが会議を運営。全体会議は月に2回くらい。集まって話してみんなで行く記事もあれば、1人でプロジェクトを考えてみんなを巻き込む記事もある。
 - ◇ 全体会議では、事業理念、ビジョンの検討を実施。
 - ◇ メンバーは月2回会議、運営会議は週1回。
 - 主な活動は、1人1人がSNSのツイッターの記事を書いて、皆でチェック。執筆は運営メンバーが投稿計画を設定しそれに沿って投稿。
 - ◇ まち歩きやお祭り、成人式の取材等をしている。
 - ◇ 記事内容には制約を設けず、各自で考えて準備する。
 - 現在ビジョン検討中。年代・性別等は特定のものに絞るか等、どうすればみんなが納得できるビジョンとなるか話し合っている。皆、バラバラに考えているが、それぞれ思いがある(再確認できている)。前期は、SNS上や地域で出会う等「つながり」系がテーマ。
- ねつせた!の良さ
 - 店にヒアリングに行ったり、SNS投稿もしたり、楽しそうと言われる。コミュニティの観点、いろいろな人がいること、が発見になっている。

- やりたいことができる環境。事務局がバックアップしてくれる。
- ターゲット層
 - 中学生から大学生までの学生。社会人は考えていない。
 - 理想としてはねつせた！をいろいろ知ってもらい、何かを検索したときにねつせた！が出てきたらフォローしてくれたら嬉しい。
- 踏み出したくても踏み出せない、居場所がない人たちに、世界を身近に感じてほしい。つながりがあったら価値観も広がる、自己肯定にもつながるから、ねつせた！でなんらかの勇気を与えられるものが提供できたらと思う。
- 以前、各自でプロジェクトを企画、進行することがあった。経堂の商店街のお店、地域密着のお店取材し紹介した。訪問してお店の人やお客さんの話を取り入れて、いろいろな人の意見を聞くことで伝えられることが増えると思った。おすすめメニュー、人気のメニューのほか、地域の人に愛されている理由等、温かさを伝えられるような人情味のある記事にしようと思った。
- 学校での活動と異なり、いろいろな世代の人と意見を交わすのはねつせた！のオリジナルだと思う。
- 区がねつせた！に対して何を期待しているのかということは、話し合いの議題にはなっていない。区としてどういう目的で、何をしてほしいのかと気になる。

3 事業に関わる若者の変化

- 自分自身、物事をもっと広く考えられるようになりたい。メンバーの記事を1つ1つ読むと、思い入れがよく表れていて楽しい。
- メンバーと関わり、いろいろなところに行き、そこでいろいろな人の話を聞いて、まちや人と関わりを持てる、出会いを感じ取れることが魅力的。
- 区のスタンス、自由に意思を尊重して、好きなことをやって良い、という包容力に驚かされた。こちらから話すのを待ってくれている、話せる環境をつくっているということがとても伝わってくる。
- フォロワーの数は意識しつつも、ねつせた！の個性を大切にしたい。
- ねつせた！自体明確なコンセプトを絞ってはいないので、響く記事はあっても、満足はしていないと思う。
- 居場所のイメージ、評価
 - ねつせた！やSNSは、リアルではできないことが可能であることもあり、居場所になっているのではないか、と思う。芸能人等、自分の好きな趣味を追いかける、フォローするアカウントを持つ等、自分の好きなものだけを追いかけられる空間にいられることが居場所だと思う。
 - リアルでは言えない、カミングアウトできないような、性同一性障がい、整形ということもツイッターでは言えたり、自分の殻を破れたりする空間でもあると思う。
 - 普通の日常生活では味わえない安心感、本来の自分でいられるという感覚を否定していない。(SNSで写真を上手に撮る子がいるが、インスタグラムでわざとフィルターで統一感を出して、みんなから評価されること等、そういったことで自己認識、自己肯定感、自己顕示欲が満たされていくと思う。そういうところで自分の可能性や得意なことを見つけられるポイントだと思う。)
 - 区が若者に焦点を絞った取り組みやるということにギャップがあって話題性もあり、興味を惹かれると思う。

4 地域での交流活動

- 活動を通じた変化
 - 地域の人と関わることで、みんな意思があって1人1人の思いがあってそういう行動をしているということ、相手の事情を考えるようになった。
 - 大学の授業で港区のコミュニティカフェに行った(「芝の家」)。NPO法人が運営していて、学生メンバーが固定で参加しボランティアをしながら地域の人が話し合う空間。小学生や高齢者まで幅広くいて、その中での中間層である大学生や中高生たち若者が、周りに気を利かせて自分の好きなことや相手をするなどで、小学生や高齢者の間もとれて、中間色になれるのかなと思っている。
- 活動の中で、若者が地域の人と話す機会、関わる機会が多いとは言えない。時間がなくてできていない。自分のまちなのに、見ているようで見ていなかった。もったいない。
- まちを知っていることのメリットは、主体的になっている気がする。
- ずっと世田谷に住んでいるだけで、家があったというだけのつながりでしかない。家・学校だけではなく、新たな場所が地域のつながりにできる。地域ではなくても良いのかもしれないが、地域の方がつな

がしやすいと思う。自分の居場所が家・学校以外にあれば、それで自信がついたり、相談する相手ができたりする。そういったことが自分の中高生時代にはなかったのも、それができるのであれば、そのつながりは素敵だと思う。

- 自分の何かに触れるものを見つける手段として、地域や大人があるのは1つの手だと思う。
- 人と話すのが難しい人や、友達関係が難しい人たちの居場所にもなっていると信じている。いろいろな意見を聞いて、全否定をしない、褒めるところは褒めて、否定のニュアンスを柔らかい言葉で返すよう意識している。そのルールは多分第2期から、土壌が続いている。絶対続けたいと思う。

5 他の世代と交流する仕組み

- ねつせた！では、高校生から、区担当者の大人までが交流範囲。他には取材先の方。他世代との交流により、何が流行っているか、ということ等、大人が私たちに興味を抱くのと同じだと思う。自分の知らないもの、好奇心が芽生えるもの、きらきらしているものを見ることで、温かくなる。

6 施設・事業の運営

- ねつせた！の風土として否定しない文化があり、根付いている。「SNSで発信する上でのNG」というものでなければ、個人の意見は尊重されている。内容により、改善等、意見を言うことはある。
- 運営としては、メンバーフォローをしつつ引っ張っていく役割もあるので、積み重ねで学ぶことはある。
- ねつせた！は、自分にとっての居場所だと思っている。いろいろな関わり方をする人にとって、居場所になるような運営ができれば良いと思う。
- ねつせた！のコミュニティとしての視点は新鮮で自らの勉強になっている。なんらかの結果が欲しい。
- 同年代の若い人たちには、まちにもっと興味を持ってほしい。そのためにビジョンとしては、もっと地域に溶け込みたい。まち歩きをしたら、売りは何か、このまちに対してどのように感じているか、という話を伝えるというのが、(まちに興味を持ってもらう)きっかけになりやすい。
- 若者は大きな決断にまだ巡りあっていないからこそ小さなところにも魅力や発見を見い出せるところが、感性としては必要と思う。
 - 大人がくだらないと思ったり、気にも留めなかったりするようなことでも若者が拾い上げることによって、もしかしたら大人の大変な生活、仕事や育児に追われている人でもふっと気が抜けるような発見や気づきが届けられるかなと思っている。
- 口コミ情報は信用されやすいし、ハードルを下げるができる。若者が若者に届けることで情報が伝わりやすいと思う。
- 毎日投稿する中で、夏祭り等イベントものはリツイートが伸びることがわかった。
- 高校生メンバーには、年齢的にも差はなく、過保護になる必要はないことがわかった。高校生だけの視点もあるので、(高校生が)参加することは肯定的に考えている。
- 若者支援担当課の中にねつせた！はあるので、内部では若者支援、若者の居場所は完成されているが、ねつせた！が若者に届けるという意味で若者支援が全然出来ていない。統計が取れていないことも課題。
- 区、事業者、ねつせた！の運営メンバー、メンバーという構造になっているが、コミュニケーションや、意識の違いで困っていることはある。
- 4月から社会人だが、運営メンバーとしての自信は社会に出ても役立つと思う。取材をしているいろいろな話を聞いたことも、コミュニケーションの部分で言えば、絶対に社会に役立つと思う。
- リーダーは魅力的で、いろいろなことを引っ張って、組織に携わって成長できて刺激のある役割だと思うが、自分のペースで届けていきたいので、(リーダーを)そんなにやりたいとは思わない。

世田谷区若者施策に関する調査
ヒアリング調査 議事要旨（メルクマールせたがや）

2018年7月11日（水）

場所：メルクマールせたがや（世田谷ものづくり学校）

出席者

メルクマールせたがや 施設長、スタッフ5名
世田谷区子ども・青少年協議会 小委員会委員

ヒアリング内容（スタッフ）

1 基本属性

- 来館のきっかけ、利用者層
 - 平成26年9月に開所し4周年になる。開所当時から利用継続されている方もいる。
 - 元々せたがや若者サポートステーションがあり、就労以前で滞留してしまう方たちへのケアのため、メルクマールせたがやを地続きとして同じ場所に作り、お互いに行き来できるようなところをつくらうというのが、当初の理念、きっかけ。
 - 関係機関からの紹介が最も多い。次いで区報、ウェブサイトを見て。
 - 年齢層は20代が全体の約5割。次いで10代と30代が25%ずつ。
 - 利用者の7割がひきこもりの方。本人の来館目的は、「まずは家から一步踏み出す」という利用者が多いが、明確な理由を持っている方もおり、個々ばらばら。
 - ご家族の利用では、「本人への関わり方、どう声掛けしたらよいか、どうしたら動いてくれるのか」、課題を抱えている方が多い。

2 施設に来る若者の変化

- 利用者の意識、属性
 - ひきこもりになった理由、原因は明確ではなく、「なぜかわからないが、動けなくなった」というケースが多い。なぜ動けなくなったか自覚的にはわからないという方もいる。
 - 相談対応するなかで、ひきこもりの理由を明確に言うケースは少ない。いろいろな情報や経緯を聞く中で、エピソードとして不登校、いじめ等あるが、本人はそれが原因だとは「ピンと来ない」感じ。断定はできないが、複合的な原因だと思う。
 - ひきこもりのきっかけとしては、不登校だったり、就職で進めなかったり、という方は多い。
 - 保護者からも「よくわからない状態だが、何とかしなければ」と、言われて来たり、あいまいな感じのまま来たりする方が多い。
 - 毎年作成している事業報告書には、不登校経験者が約7割。挙がってくる背景や要因としては、家族関係や対人関係能力に乏しいことが多いと思う。
- 本人と家族との意思疎通
 - 親からの申込の場合、本人の意思とのずれ、親に本人の意思が見えづらい、本人の困り感がそもそも自覚されていないことがある。中高生世代から39歳までの各年齢層で本人の意思とのずれがある。
 - 本人が若ければ親も若いので、親のモチベーションも高いと思う。協力への意欲も高い印象がある。
 - 本人の利用目的が明確であれば動き出しは早い。何を目指していかを一緒に考えていく。
 - 親だけが焦って、本人も「どうにかしなければ」と思っているもなかなか動き出すに至らない、というパターンがある。
- ティーンズサポート事業（平成28年度からの重点事業）
 - 本人の年齢が若いほど、動いていける、変化が大きい。
 - ひきこもり期間が3年未満だと、1年の間に、居場所につながる、他の関係機関の利用が始まる、就学・アルバイトにつく、という動きもある。
 - 3年未満だと、必然的に本人年齢も若いので、利用期間というよりは、本人の年齢やひきこもりの期間が大きい。

3 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- 支援の考え方
 - 本人がどうなりたいかに合わせて支援を組み立てていく。ニーズは変わっていくので、くみ出すのが一苦労だが、合わせて支援も変えていく。まずは近場の目標を設定する。(こちらがあらかじめ組み立て、それに乗ってもらおうという考え方はとらない。)
 - 相談を通じて目標が明確化していくケースもあれば、話をしても明確化しない人たちもいて、そういう人には居場所を使ってもらって、代弁していく中でいろいろなことを感じてもらうというやり方をする場合もある。
 - 中学生・高校生等は、体験を通じて彼らに合うものを考えて「これはどうか」と促すことはあるが、居場所体験や相談でも、やってみてどうだったか、何がやりたいのか、一緒に考え、振り返っていくことを心掛けたい。
- 支援の課題
 - 動いていない、仕事もしていない、就学もしていないが、生活が安定しているケースや、家庭が上手くいっていて、何となく毎日普通に暮らせているケースへの対応は難しく、本人とつながるのが難しい。
- 支援のニーズに合わせるということ
 - 利用登録制をとっており、オープンというよりクローズドな居場所という意味では守られた空間の中で安心感をもってもらう。
 - 活動ルームとスタッフルームがつながっており、スタッフの関係が利用者にも伝わっていると思う。清潔感等も利用者は敏感。
- 利用者の変化
 - 居場所で表情が良くなる、話さなかった人が話すようになる、アルバイトを始めた、等。他の利用者と自主的に話す機会が増えるとなじんできている、他人に興味を持って話せるようになっていることが把握できる。
 - 活動性が上がる、外出頻度が上がる、いろいろなプログラム、イベントに参加できるようになる。
 - 自ら目を背けたいような苦しい体験や葛藤を、言葉にできるようになるのは大きな変化。自ら認めたと上で、活動もできるという点がすごく変わったと感じる。話しているときも、満足感、安心感があるようである。
 - 最初来た時点の、訳もわからず引きこもっているときの、何もわからないという苦しさよりは、「自分はこれが苦しい」と言えるところが変化した。
 - 言葉にできるということは、整理ができています。そういう過程が進んでいると思う。本当は行動上で、客観的に第三者も共有できる変化(就学人数、就職が決まった人数等)を公開したいが難しい。
 - 言葉が増えた、表情が増えた、ということは、本人自身の内的な変化で、変わってきたと感じるところ。
 - 毎日のミーティングで、相談の報告、結果の共有を行っている。利用者の小さな変化は把握しやすいが、バイトを始める等、大きな変化の際は慎重な把握が必要になる。
- 業務の認知・理解
 - 資格の肩書があるとイメージを持ってもらえることはある。
 - 対象年齢が幅広く、家族から始まり、説明、家族関係の把握等、個別性が高いので説明自体難しい。
 - 相談と居場所の2つの支援を組み合わせ、利用者にあった支援を行なっている。時には、片方だけの支援になることもある。利用が途切れないよう丁寧な対応が必要で、ご家族や関係者には説明が必要なときがある。
 - 居場所利用には、過去、対人関係の調査、居場所の紹介を含めて、本登録まで1ヶ月をかける。
- 支援範囲
 - 世田谷区全域が支援対象地域なので、遠方の場合には訪問相談も行っている。烏山地域、玉川地域等は訪問の負担感や長時間要する。立地の課題でいえば、もっと中心や拠点が増えたらよいと思う。
 - 現状は400家庭くらいがつながっているが、推計だと10倍は見込まれる。新規の開拓が足りず、地域にも眠っているとの指摘もある。
- 個別性への対応
 - ティーンズサポート事業からは、10代、20代前半の若い利用者につながってきていると思う。義務教育課程で既に生きづらさを抱えた層への支援継続が課題である。

- 不登校が長く、20代を超えてから勉強の遅れを取り戻したいという方が勉強できる先がない。当方で学習支援できる状況ではない。参考書等、居場所に置いて見られるようする等してはいる。
- 中卒の場合、小学校くらいから不登校があると、学習経験がない場合もあり得る。小学校高学年くらいからの内容をやり直さなければならない。個別に、どこから何をすればよいのかという段階の人が多と思う。
- 自習室を設けたところで、何も始まらない。ある程度労力を掛けなければいけない。
- 支援環境・体制面
 - 今あるリソースの中でやるとなると、自習スペースを設けることも考えるが、セミナールーム自体も、結局は相談の臨時スペースとして使うことが多くなる。相談ブースも実質2つしかなくて、この部屋を含めて3つ。スタッフも平均7名の体制なので、その中で相談と居場所と訪問となってくると、限定的な感じになってしまうかもしれない。
- 貧困層への対応
 - 10代くらいから厳しいと聞く。20代でドロップアウトしているとわかっている人たちに対する学習支援。リソースがあれば、そこを活用していけたらよいかもしれない。
 - 就労したくても学びなおしができていない、勉強していないというところがコンプレックスになる。
- 就業体験できる機会づくり
 - 地元の会社、事業所で就業体験できるとよい。自発的な層を丁寧につないでいければと思う。
- 機能の充実
 - メルクマールせたがや1ヶ所で機能が集約され、専門機関の連携の一端を担えればよい。メルクマールせたがやは総合相談窓口的な機能や役割があって、丁寧なつなぎ、関係機関との調整をしていくようになればと思う。
 - メルクマールが5支所にそれぞれ拠点を設けることができれば、すごくやりやすく、より地域に近いところで支援できるなと思う。
- 教育との連携
 - 早期支援から世代がつながっていくと思う。仮に何かあったときに戻って来られる場所という意味で、認知度も上がる。
 - 20代で勉強し直すよりは、中高生くらいのほうが選択肢も残っている。親もモチベーションが高いので、家族と協力体制が組みやすいと思う。教育機関との連携、いかに切れ目なく引き継いでいくか。

4 施設・事業の運営

- 第3土曜日に全体会議を開いて、施設長も含めて職員も可能な限り参加している。施設長は現場の意見を取り入れようとしており、現場スタッフに聞いてくれる。施設長は利用者視点を大切にしている。
- 居場所のスタッフが、必ず1枠に2名としている。2名である程度回すよう、慎重に居場所を共有していて、その人の状態がすごく不安定だったら、もう少し相談の方につないで、ということに配慮しながらやっている。
- メルサポ事業は、事前申込がなくても利用できる。今年度から第1、第4土曜日にやっている。なるべくメルクマールでやっている居場所の形は保ちつつ、新たな層にも、敷居の低い入口をつくりながらやっている。

ヒアリング内容（施設長）

1 基本属性

- 利用者属性では、ひきこもりが全体の7割くらい。
- 来所のきっかけは、家族が困って来るというのが多く半数以上は、家族がまず相談に来られる。
- 44%は関係機関からの紹介。複合的な問題を抱えている。病気、家族関係、ずっと不登校等、本当に様々である。
- ひきこもった理由、背景は実はとても難しい。不登校等の場合、いじめが本当に事実としてあるのか、周りから見るとそうでもない、本人の中では事実でも、なかなか理解されにくい。
- 不登校の子どもたち等の症状と対応
 - 本人が、当初は訴えることができず、ほとんどの子たちは、引きこもった理由がよくわからないということが多い。ひきこもりでも、体が言うことを聞かなくなる、お腹が痛くなる、起きられない、気持ち悪い、吐き気がする、そういった状態がまず身体にあらわれる。

- 何が原因でそうなったのか本人もわからないという状況で、まずはカウンセリング、心理療法で、どういことが起こっているのかということ聞き取っていく。本人の心をほぐすような形で信頼関係をつくる中で、少しずつ本人が自分で気づいて、話せるようにしていく。全体的にいうと家族関係は、大きいと思う。
 - ✧ 家族関係でいえば、お父さんとお母さんが仲良くなってほしいと思っている。母子分離不安もあるが、逆にお母さんが子どもに密着し過ぎていることもある。
- 親のどちらかに精神疾患があったり、うつを抱えていたりするケースも結構多い。子どもが「うちの家族関係がおかしくなっている」というSOSを出す。言葉ではうまく言えず、不登校になってみたり、身体症状を出してみたり、というケースも多い。

2 施設に来る若者の変化

- 非常に個別性は高く、本当に思っていることや、やりたい事を聞き出すのに時間がかかる。聞き出す際もうまく言葉にならない方もやはり多い。「こうなりたい」という姿が見えてくるのが、メルクマールセタがやの利用者の理想の姿です。
- 関係機関からの紹介では、メルクマールに居場所があるというのがすごく大きい。医療機関でドクターと1対1でずっとやっていて行き場所がない、でもメルクマールに行けば、居場所がある。デイケアとはちがって、もう少し緩やかで、若い人たちが来られて、スタッフがいて、少し楽しい居場所があるところ、関係機関からの要望としては強いのではないかと思う。
- どこにも行き場がない若者たちが集える居場所の要望は関係者では共通しており、その環境は提供できていると思う。
- 安心して利用してもらう工夫
 - 利用するなかで、居場所で見せる顔と相談で見せる顔が違うので、居場所で見せてくれる健康的なところが安心できる環境の中で、伸びていく。
 - 主治医がいる方が多いので、主治医の意見書がどうしても必要。意見書をもらって来てもらうようお願いし、登録制としている。自分自身の心の安全、他者から受ける心身の安全を守ること。
- メルサボ
 - 登録なしでも、とりあえず行ってみようかな、くらいの感じで、メルクマールセタがやとセタがや若者サポートステーションで共同して始めたところ。
 - 敷居の低い居場所で、準・ひきこもりの方も来ることができる。準・ひきこもりなので、相談と言われても何を話してよいかもわからないし、相談というほどでもない、でも居場所がないなあ、という若者が来られる居場所をつくらうということで始めた。
 - ニーズがあるとは思いますが、社会に全くない状態から始めようとしている。発想自体、広げていくのは難しい。そういう場所に行ってもよいのだ、と若い人に思ってもらえるまで、かなり時間がかかる。地域全体でそういう風土をつくっていく必要がある。5、6年のスパンはかかる。そういうことがあちこちできてくれば、ずいぶん若者支援は変わって来る。
- 早期支援
 - 15歳、18歳で支援が切れてしまうので、その切れ目のところをどうつないでいくか。メルクマールセタがやに来ている中では、不登校経験のある方が71%。不登校でどこかへ行った、通信制の高校に入った、進路が決定した、となっても、結局また行けなくなっている人が非常に多い。所属がなくなり、学校にも所属できない、でも一旦進路が決まったという形で、例えば教・相にもなかなか戻れないときに、そこをうまく最初からつないでいくことで助けにつながり、早期支援が可能となる。
 - 学校との連携になるので、在学中からの支援となる。昨年度から重点事業として、今年度も、きちんと進めていく。特に、スクールソーシャルワーカー、ユースソーシャルワーカーとの同行面接という形で。
 - スクールソーシャルワーカーが引きこもっている方たちを在学中から訪問し、そこに同行する。卒業後には、スクールソーシャルワーカーはある程度期限が限られ、1年や半年で卒業してしまうと関わられなくなる。そこをうまくそのまま引き継ぐ支援ができるように、という仕組み。在学中から不安定な方はたくさんいると思うが、その情報が入ってこない。そこをうまく情報のやりとりができ、連携がある程度でき、早期につなぐことができればよい。

3 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- 土台づくりが役目。
 - 就労以前に生きる意欲自体がなく、どう生きてよいかわからない、という方たちに、生きる意欲をどう復活させるかは非常に難しく、まずは安心して自分を出せる場、主体性を取り戻してもらう場をつくること。
 - クッキング、ヨガ、ゲーム等さまざまな活動するなかで主体性、主張する機会を取り戻していくことが非常に重要。
 - 空気を読み過ぎて、周りに合わせることによって結局自分が言いたいことが言えなくなっている。
- まだ地域に眠っている人が、いっぱいいる。地域の人たちが、一人一人の若者を応援して欲しい。
- メルクマールせたがやがワンストップ、ハブ機能をもって、各サテライトにつなぐことができれば、一番よいと思う。

4 施設・事業の運営

- スタッフは、個々で複合的な対応をしている。来談者との信頼関係を非常に大事にしている。

5 他の世代と交流する仕組み

- 多世代によるダイバーシティ交流は大事。今後は、せたがや若者サポートステーション、野毛青少年交流センター等に行っている方たちともうまく交流できればと思う。
- (継続利用者の状況) 3年以上継続来所している人は、かなり良くなっている、広がってきているという実感はある。スタッフも同様に感じている。
- (地域への期待) 地域があたたかい感じを持ってほしい。若い人たちは地域の人から「今何やっているのか、どこで仕事しているのか」と聞かれることを避けたがる。本人たちも、そうすべきなのにそうしていないという自責感がある。そうしたギャップを取り除く必要がある。
- 地域の人たちにも、いろいろな若者がいて、それぞれががんばっていると知ってほしい。働いていなくても、自身の中では、成長し続けている。そのままの彼ら彼女らを認めて欲しい。
- 自分たちも今はこうだが、模索していて、受け入れられている中でいろいろつかんでいく、そういう土壌をどうやってつくっていくか。
- 自分たちと同じ人たちとだけ付き合う風潮が若者たちにある、いわゆる若者の生活圏の内閉化が言われているが、それにはいろいろな地域のイベント等は必要だろう。
- 他の取組みやイベント等で、つながっておくことが、まずはやれることだと思う。3、4年積み重ねることによってできてる、と長い目で見てほしい。相談・居場所・アウトリーチ、機関連携、イベントへの参加等メルクマールせたがやのスタッフが、がんばっているところを評価してほしい。
- 相談に来た方の「心のケア」を行い、関係機関とやりとりする中で、その方が相談依頼先へ戻ることもあり、そうした行ったり来たりの関係性が出来てくるとよい。

世田谷区若者施策に関する調査
ヒアリング調査 議事要旨（たからばこ）

2018年06月27日（水）
場所：世田谷区役所第三庁舎第6休養室

出席者

たからばこ運営事業者：スタッフ
岡さんのいえ TOMO：オーナー
世田谷区子ども・青少年協議会 小委員会委員

ヒアリング内容（事業者）

1 基本属性

- たからばこを利用している若者の年代
 - 中学生が主である。常連が5人おり、友人を1～2人連れてくることがある。
 - 中学生の時に利用しており、高校に進学してからも時々来る高校生や、高校を中退して働いているという外国籍の利用者もいる。
 - ◇ 外国籍の利用者はあまり日本語を理解していないようだが、居心地が良いようで、毎回来ている。
- 運営に携わる学生スタッフ
 - 日本大学、学習院大学、創価大学、日本体育大学、国立音楽大学、東京大学、首都大学東京に通う学生であり、1回につき2～3人が来る。
 - 利用者の中高生と年の近いスタッフとして運営に携わっている。
- 中高生がたからばこに来るきっかけ
 - ある中学2年生の女子は、母親がスタッフとして関わっていたため、幼児のころから「岡さんのいえ」に出入りしていた。本人が対象年齢になり、通うようになった。
 - 昨年まで事業を手伝っていたプレーワーカー（ ）の関係で、声をかけた中学生男子が今も通い続けている。
 - 利用理由、育った環境、国籍等様々であるが、それなりにあたたかい時間を過ごしている。
 - 何度か一緒に時間を過ごして分かったことは、部活がある子どもは部活に行っており、家に親がいる子どもは帰宅しているため、どちらにも属さない子どもが来ているということである。
プレーワーカー：遊びの場で、子どもの遊びを活性化させるスタッフ
- 大学生のスタッフが「たからばこ」に関わるきっかけ
 - 最初の2年間は日本大学文理学部社会学科の後藤（範章）研究室と、大学連携でつながった。
 - 昨年3年目を迎えたが、サポートに入っていたプレーワーカーが急病で業務に携われなくなり、運営メンバーや若者支援担当課と相談したうえで、いろいろな大学に公募をかけた。
 - ◇ 東京大学とは以前からつながりがあり、教員を通じて希望する学生に来てもらった。

2 施設に来る若者の変化

- 施設に来る前と来た後での若者の変化
 - 小学校でも中学校でも浮いており、攻撃性が高かった利用者がある。利用当初は何を言っても否定し、大学生のスタッフに罵声を浴びせた。しかし、その利用者の置かれた背景を理解し、つながり続けることで、いろいろなことが分かってきた。今は笑顔も見せ、児童館にも毎日のように行っていると聞いている。
 - ◇ その利用者が暴言を吐くのは、受容される場所なのかどうかを試しているように感じる。ここは安心できる場所であり、甘えても良い、自分のことを話しても良いという「受容」を心掛けてきた。
 - それ以外の利用者も、年の近い大学生からいろいろな刺激を受けており、交流を通して相互に変化しているように感じる。
 - 利用者はお腹を空かせているので、食事会でなくても、余った食材で食事を作り、待っているようにしている。

- 若者の変化を促す工夫
 - 子どもたちの様子を見ながら仕掛けや向き合い方を考えてきた。最初から手順が決まっていた訳ではない。
 - 日本大学文理学部福祉学科4年の学生が、福祉で学んだことを細やかに実践していた。
 - ◇ ある中学3年の利用者は「中学を出たら働く」と話していたが、その大学生が食事に誘い、「大学は楽しいよ」などと伝えていたようだ。結果として、その利用者は進学を決意し、現在は高校に通っている。
 - ◇ 学生から学ぶことはたくさんある。
- 施設を安心して使ってもらおう工夫
 - 多少態度が悪いことには目をつぶっている。
 - ◇ 「ゲームをやめなさい」「手伝いなさい」と言うのは最低限にしているようにしている。
- 若者の変化を促す仕組みに関する課題
 - 中高生については、ある程度の問題は我々の力で対処できるが、専門的な機関につなげる必要があるケースもあり、見極めが難しい。
 - ◇ 例えば家庭内の問題の場合、家庭に踏み込むことは難しく、本人へのアプローチや、保護者に会った時に声をかけることができるくらい。それ以上は専門機関につなげる必要がある。
 - 利用者は集団として何かをすることが苦手な子どもたちだが、信頼関係を作ること、自発的な動きが出てくることを期待している。
 - ここには専門家はいないが、「抑止力」の場にはなっている。家に帰りたくないために繁華街に行くくらいであれば、たからばここに寄ってもらった方が良いと考えている。

3 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す仕組みやイベントについて

- 取組みやイベント等の有無
 - 結果的に自立や成長につながる場面がある。
 - 事業を始めた経緯、理念、価値
 - 大学連携の話をしていただいたのがきっかけだが、その前に「岡さんのいえ TOMO」()を運営してきた経緯もある。最初に関わっていたメンバーはシニア層が多く、小さい子どもを連れた母親と交流する機会となっていた。その当時から大学生も出入りしていた。
 - オーナーの大叔母は地域で英語を教えており、小学生が出入りしていた。「あの賑わいが戻ってきたら」という思いは常に胸の中にある。
 - 参加を促したり、若者と接点を持ったりするための工夫
 - 最初の1年間は大学生スタッフに運営を任せていたが、大学教員に言われて来ているだけではうまくいかなかった。かといって運営者が出ていっても、年齢の違いから距離を感じるがあった。そのうち、使命感を持った学生が関わってくれるようになり、大学生も中高生も変わっていく様子を目の当たりにした。運営者だけでなく、使命感のある大学生に関わってもらうことが一つの工夫である。
 - 男子中学生は、女子大学生のスタッフが来るとうれしいようだ。
 - 地域におけるネットワークの広がり
 - 地域のネットワークづくりは、いま一歩といったところである。ただ、中学校の校長先生や町会長などと少しずつつながりを広げている。
- 岡さんのいえ TOMO：所有している建物の一部あるいは全部を活用し、地域のまちづくりの場として運用している「地域共生のいえ」のひとつ
- オーナーの自宅は別の地域にあり、スタッフも別の地域から通っていることが多い。「よそ者」はよそ者なりのネットワークがあってもよいと考えている。
 - 今後は、地域の住民や町会などとの関わりを深められればと考えている。
- 課題や今後の展望
 - この事業を取り巻く様々な状況が変わったとしても、長く続けていくことが課題でもあり、展望でもある。
 - 積極的な男子大学生が来てくれることを希望している。中高生とのコミュニケーションの取り方に

- おいて、男女バランスがとれる形になるとよい。
- 現在通っている中高生が成長して大学生になり、スタッフとして関わってくれることを期待する。
 - ◇ そうすれば、「あの子が（運営を）やっているんだ」というように、地域の人のたからばこに対する見方、関わり方に変化が出てくると考えている。
- たからばこは午後6時から午後8時まで活動しているが、中学校の教員に「中学生が午後8時まで外にいるのは好ましくない」という指摘を受けたことがある。繁華街に行くより良いが、難しい点である。
 - ◇ 高齢者の中には、昔ながらの地域のネットワークが機能していると考えている人もいるが、実際はそれほどではないのではないかと。
- 「中高生を集めて何をやっているのか」と怪しまれることがある。
 - ◇ ある中学生は、「安く食事ができるのは宗教が関係しているのではないかと」と母親に言われたという。イベントで母親に会う機会があり十分に説明をしたが、周りの目はそのようなものかと困惑した。
- 今後の展望は、まずは事業を継続すること、もう一つは新設予定の希望丘の青少年交流センターとの交流を行うことである。

4 他の世代と交流する仕組み

● 他の世代と交流する仕組みの有無

- 大学生スタッフと中高生の交流は、多世代の交流にあたる。
- 区内の学童クラブで非常勤職員として勤めている40代の方が、時々来てくれる。子どもの専門家なので場を盛り上げるのがとても上手で、助けられている。
- 以前、高齢男性を連れて行ったことがあったが、子どもに対するアクションを起こさず、うまくいかなかった。イベントではうまくいくケースもあるが、通常の活動ではコーディネーターがいないと難しい。
- 子ども家庭課の職員が訪問した時、中学生と一緒に好み焼きを焼いて食べていた。普段は会うことのない人たちが食卓を囲む場面は何度も見たが、「化学変化」のような形で起こったことであり、工夫を凝らした結果として実現したのではない。
- 「岡さんのいえ」としては、多世代が交流する環境がもともとある。就職活動中の女子大学生が、大企業の副社長であった高齢者からエントリーシートの指導を受け、希望の会社に合格したことがあった。
- 「岡さんのいえ」では、飲み会を開催していた時期がある。屁理屈ばかり言っていた東大生が子どものように笑っていたり、ある学生から「遠い親戚の集まりみたい」という声が出たりした。10年間の活動を通して、若者にとっては「隣にいるおじさんは誰だかわからないけれど、気を許せて、いろいろな話ができる」という場になってきた。
- 「岡さんのいえ」では運営に携わる人から年間3,000円を徴収しているが、「たった3,000円で遊び場を与えられたら安いものだ」という声があったという。
- 「岡さんのいえ」を含めると、運営開始から10年が経っており、メンバーの高齢化が悩ましいところである。大学生は卒業すると、関わるのが難しいケースが多い。昨年からは運営の形を変え、子どもが小さいため現場には来られないが、運営には携われるというスタッフに、プロジェクト単位で関わっていただいている。

5 施設・事業の運営

● 施設・事業の運営に若者の意見を取り入れているか

- 大学生スタッフには「自分たちがやりたいことをやってみたら」と投げかけている。中学生もやりたいことがあるようだ。
 - ◇ 映画を見る会では「映画は何を見たいか」、食事会では「何か作りたいものはあるか」と常に投げかけている。
- 月4回の開催日のうち、1回目と2回目は「何でもできる日」としている。何もしない日、ゲームやおしゃべりで終わる日もあるが、それだけでも意義はあると考えている。
- やりたいことがあったら手伝ってあげたいと思っている。やりたいことが言えるようになるのは、安心感が出てくるからだと思う。中高生がやりたいことを言えるようになったことは前進である。

- 大学生がもっと自分がやりたいことを発言できるようになってほしい。中高生がやりたいことをバックアップしているという、運営側の意識があるのだろうが、一緒に楽しむことがあっても良いと思う。
 - ◇ 大学生自身、自分がやりたいことをやった経験というものが少ない印象を受ける。「岡さんのいえ」は失敗してもよい場所としており、失敗する経験も大学生にとっては大切である。
- 運営者と受益者それぞれのミッションがはっきり分かれていない空間であり、その「ごちゃまぜ」の感じを大切にしている。
- 施設長とスタッフの意識の違い
 - まずは大学生が主体的に関わり、運営者はそれを支援し、一緒に交ざりながら活動をしていく。口の悪い子どももいるが、大学生は受容している態度であり、新しく入った大学生も影響を受けている。ただ、前からいる大学生でもうまくいかないときには声をかけてあげたいと思っている。
 - 中高生に対する直接のロールモデルは大学生であり、親しみを感じて学んでいく姿を応援したい。大学生でも社会性という点ではまだまだ成長の余地があり、アドバイスはするが、学校や職場ではないので対等の関係で一緒にやっていく仲間として接している。大学生にとっては運営者がロールモデルとなれば良いと考えている。

世田谷区若者施策に関する調査
ヒアリング調査 議事要旨(あいらす)

2018年6月28日(木)
場所：三軒茶屋分庁舎3階

出席者

公益財団法人児童育成協会 健全育成事業部
世田谷区子ども・青少年協議会 小委員会委員

ヒアリング内容(事業者)

1 基本属性

- 今年に入ってから利用者は3名(20代、中学生、15歳~16歳、各1名)

2 施設に来る若者の変化

- 3年前は利用者がいなかったが、現在は利用者も増え、利用者一人当たりの訪問回数も増えた。
- 最近は問い合わせが増え、問い合わせ後に実際に来てくれる利用者も増えた。
単に居場所を求めるだけでなく、大学生の学習支援を目的に来る利用者やなど、家では落ち着いて勉強できないので、気分転換のために来る利用者等、利用者の目的が多様化してきている。
- 区やスクールカウンセラーの紹介で知った、という利用者が大半を占めている。

3 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す仕組みやイベントについて

- 学生と利用者が参加するクッキング等のイベントを実施。支援する側・される側の垣根がなく交流できている様子が見られた。
- 小学生以上を対象に、女の子の「居場所づくり」を目的として活動している。
- 利用者の学習支援を行うこともある。

今後の展望

- 近隣の女子高生らもふらっと立ち寄れる場所になれば良い。
- 卒業した学生とはつながりがなくなってしまう状況だが、卒業後も、あいらすを起点に利用者との交流を継続することで、利用者が外部とのつながりを持てる関係性を構築していきたい。
- あいらすはあくまで居場所であり、強制されて来る場所ではないが、利用者の状況に応じて必要なサポートをしたり、利用者同士が自然と交流したり、より居場所として感じてもらえるようになってほしい。

4 他の世代と交流する仕組み

- 今後に向けて、地域の学校、児童館やメルクマールせたがやと連携することで、利用者を増やしていくことを検討しており、それぞれの状況は下記のとおり。
 - **地域の学校**：学校では午後7時には帰るよう指導しているため、広報しづらい。
 - **児童館**：児童館が閉まった後に過ごせる場所として良いのではと考えられる。夏休みを利用して、学生数人で児童館に遊びに行き紹介することを現在提案している。
 - **メルクマールせたがや**：運営スタッフの学生は心理学科で学んでおり、障がいがある子どもも受け入れられると考えている。運営の学生3名と事業者で、メルクマールせたがやの見学に行く予定(7月5日)
- 今後の展望として、地域で育った若い女性がスタッフとして参加することも望ましい。

5 施設・事業の運営

- 学生スタッフは、運営に携わる学生リーダー(3人)とそれ以外のメンバーで構成されている。
- 運営の後継スタッフを育成するため、学生リーダー3名のほか、さらに学生3名が加わり、計6人の学生で運営側を担っている。
- 利用者の保護者対応について、学生が対応することもあるが、学生では難しい場合、事業者スタッフが

代わりに対応している。

● 現在、課題と感じていること：

【事業者視点】

- 学習支援を行うこともあるが、活動の趣旨は「居場所づくり」のため、学習支援が続くと学生は負担を感じやすい。
- 運営リーダーの学生からは、学生の確保が難しくなっている、との話も聞いており、今後、対応できない時間帯が生じてしまうのでは、との危機感を持っている。
- 運営リーダーの学生からは、学業や就職活動等が重なって忙しい時期には両立が難しい、との話も聞いている。

【学生視点】

- 利用者が少ない。もっと利用者が多ければ、より活動も充実させられるのでは、と考えている。
- 利用者を増やすため広報活動をしているが、対象が女の子に限られるため、過去には「差別」と捉えられ拒否されてしまったこともあった。広報をしづらい状況もあり、施設認知が広がっていない。広報活動、認知拡大の部分で、事業者をサポートしてほしいと感じている。
- 昨年度から学生が不足する傾向にある。特に、授業時間との兼ね合いから、午後3時からの時間帯に対応できる学生が少ない。もともと小学生を対象にしていた、という流れがあって午後3時開室となっているが、現在小学生の利用者はいないため、開室時間を変更することも検討したい。
- 基本的に、学生と利用者とうまく関係をつくれていると感じているが、保護者からの相談を受けた際に、個人的な内面に触れる話題の場合は、どこまで踏み込んで良いか迷うことはある。

世田谷区若者施策に関する調査

ヒアリング調査 議事要旨（せたがや若者サポートステーション）

2018年7月20日（金）

場所：世田谷ものづくり学校

出席者

せたがや若者サポートステーション運営事業者：所長、スタッフ4名
世田谷区子ども・青少年協議会 小委員会委員

ヒアリング内容（事業者、スタッフ）

1 基本属性

- 利用者の年代、性別等特徴
 - 男性6：女性4。やや女性が増加傾向。
 - 2017年下半期から広報媒体の工夫などで女性の方や様々な層の方が来やすい雰囲気づくりを始めた。伝達のツールは、主にウェブサイトの中の写真掲載となる。
- サポートステーションに来る若者の特徴
 - 一度も仕事に就いていない方、勤め先でのトラブルで続けることが困難になってしまった方、プランクが出来てしまった方々が集まっている。
 - 就労経験が少ない方、ハローワークにつながる一歩手前、方向性の見出し方がわからない、自分にどういった仕事合っているかわからないという方。
 - 就労先でパワハラにあう等、ブラック（企業・事業者）の定義は難しいが、労働環境が自分と合わなかったりして、方向性を改めて見出したい方、成育歴の過程で深い傷つき体験をされた方。
 - 長年引きこもりされていた方が、親御さんに紹介されていらっしゃるケースは少し増えてきている。
 - 学生への面談回数は月に3～4人。

2 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- 最初の段階では清掃体験（学校活用）を主に外出頻度を高める目的として活用される方が多い。各人のペース・状況に合わせてプログラムも一緒に考えてご紹介している。
- 実践向けでは、面接力アップセミナー、就職活動に備えたパソコン講座。自己理解促進では、4つの気質セミナー等もあり。
- 来所時の状況。現在の状況（主訴や経歴等）方向性・自分の特性の自己理解状況を把握する。
- 各担当やスタッフ全員が共有しながら、その方に合ったステップ、プログラムをカスタマイズし、結果的に自立と成長につながっていくという形。
- 最近、紹介は増加傾向。ハローワークで対応後、まだ就職活動するには早いという方を紹介いただく場合もある。世田谷区の連携機関の方から紹介いただくこともあり。本人からの問い合わせ後、来所される方もいる。お母さまからご連絡されて来られる方も多い。
- 最近、ウェブサイトのアクセス数が増加。本人が閲覧のケースもあるが、紹介と半々くらいの印象がある。
- キャリアカウンセラーと相談員の役割の違い
 - 積極的な応募活動が出来ない状態にある方に対し、就労まで段階的につながっていくことがキャリアカウンセラーの一番の役割。
 - 基盤的メニューは、生活習慣の改善、自己理解、自信の醸成をメインに実施し、相談員はそこで相談対応する。
 - 実践的メニューは、キャリアカウンセラーが履歴書の書き方等本人の方向性や、今後のキャリアの形成に具体的に携わる。

3 施設に来る若者の変化

- 来所者で、電話口で話ができない等の状態で、まずは頑張って来たという人の例では、個別面談で本人の悩んでいるポイントを共有し、サポートステーションに安心して通えるというところからスタート。清掃体験等のプログラムや、ほかの来所（利用）者との共同作業への参加からスタートしていく。自信

の醸成、自己理解を同じような境遇にいる仲間と共有、共感して、「自分だけではない」という安心感や自信につながっていく。

- そこを経て、実社会に出る準備をしていく中で、自信をつけていく。
- 本来あったが壊されていた自信が、自分自身で気づいていくと、徐々に戻っていき、応募するモチベーションも生まれ、アルバイト就労となったときには、別人のようになっていくという姿を見ることが結構少なからずあった。その方は半年以上、8ヶ月くらいだった。
- まずは外出機会を増やす、慣れ等を目的として、比較的軽負担のプログラムである清掃体験、おたより発送（チラシを関連各機関に配る仕分け作業を内部で、若者やスタッフと一緒に共同作業で行う）からスタートする方が多い。
- ボランティア系の作業は担当のスタッフが1、2名付いて一緒にやる形。職場体験も、基本的には一緒にやる。
- 徐々に若者同士で外の人たちと触れ合う機会を設ける。ボランティアから、今度は就労に近い、就労体験、ジョブトレーニングにステップしていき、最終的にはアルバイト、正社員就労というところにつながっていくイメージ。
- 高校生の変化
 - 学校連携での経験から、5年前は良くも悪くもやんちゃな学生が多いイメージだったのが、徐々に良い子、おとなしく聞きわけがよいタイプの学生が増えてきた印象。発達障害などの可能性がある学生もすごく増えてきている。
- ハローワークとの役割の違い
 - ハローワークとは役割が異なり、これまでの経歴は必要に応じて聞き取る。
 - ありのまま何でも語れる（受けとめる）存在であることが信頼関係を築いていく上で大切。
- 関係構築がないと、その先悩みや本音の部分は話していただけない。最初の面談では難しいが、定期的な面談を重ねるごとにお互いがわかってくる。
- 個人的には表情はすごく気を付けて見ている。最初来たときの表情をなるべくよく覚えておくことで、気持ち、言葉、顔色、表情の変化は感じる。
- こちらがぶれない、一方的に押し付けないこと。
- サポートステーションでは、既成概念を壊していくことを学んだ。いろいろな方の感覚や感性にある程度、周波数を合わせる。最終的には就労、若しくは、その方が幸せに暮らしていくということを設定している以上、合わせた後に自分の経験値に戻ってお伝えしていく形。最終的には自己決定。自分が気づいて決めていくというのが大前提。
- 最初の信頼関係の構築が一番難しい。初対面だと緊張もある。
- ハードルを下げる工夫
 - 社会に対するイメージが、不安度が本人の中でとて高くなっている。その部分をいかに下げていくか、その1つとして、実際に社会で働いている人がどんな失敗をしているかという話の機会を通じて親近感を抱いてもらう。近隣の企業の方には仕事の話だけでなく今までの経験、難しかったこと、挫折体験等、話されている。意外にみんな失敗している、ということでハードルを下げていく。
- 感情的に切羽詰まって、途中で泣いてしまう人が何人もいる。そういう方々の気持ちをできるだけ受けとめ、反対に話せなくなってしまう方には、どういう気持ちでいるのかを話してもらうことが第一。
- 普通に就職している人に比べて、失敗することへの怯え、ハードルがとて高い。言葉で大丈夫、と言っても伝わらず、難しい。そういうときは実例を出したり、例えを出したりすると、「なるほど」となる場合もある。
- 利用者同士の触れあいの中で、当事者同士の経験の共有も大きな助けになっている（面接に対してハードルが高く感じたり、タウンワークを見ること自体が気持ち悪くなったりしてしまう方もいる。そういう経験から始まったということ、等）
- 本人の心の準備ができていない状態で、御両親のほうで本人より先に来所された後に、本人を連れて来る形だと、その後フェードアウトすることがないとは言えない。
- サポートステーションとして必要なこと（スタッフの意見）
 - 社会は怖くない、と伝える場や、社会とのつながり、実際の体験でできるジョブトレーニング、職場体験等はもう少し整備していく必要があると思う。
 - 今年度、サポートステーションの役割が見直されており、徐々に心と体の準備という部分も充実させていく必要があるという点も、1つの実績として見てくれるようになりつつあると思う。ここに

来ている若者に、カスタマイズしたプログラムをもっと充実させていくことができると思う。

ヒアリング内容（事業者、所長）

1 基本属性

● 若者たちの特徴

- 1人1人の違いが大きく、傾向はない。強いて言えば、何かしら過去に重大な失敗体験、傷ついた体験があって、なかなか踏み出しづらくなっている点。理由はさまざま。
- こちら側の対応（打出し方）次第で来る層が変わる。社会経験が乏しい方向けに体験、アセスメント機会を用意すれば、それを必要としている層が来る。転職層向けのものを多く用意すれば、それを必要としている層が多く来る。
- 昨年度は「どんな方でも働くことに悩んでいたら来てください」というニュアンスで出していた。結果として、新規登録者数は減り、また対象層も定まらなくなり、これから利用を検討している方を迷わせてしまったのではないかと反省している。
- 広報の打出し方、イメージより「自分はサポートステーションに行くほど落ちぶれていない」という感じに映った方は多かったと思う。自尊心への配慮が足りなかったと反省。
- 施設の写真だと、汚いというか暗い。イラストで、極端な印象にならないよう気を付けたにしたところ、来所者数は増加した。
- 間口を広げたからといってすべての層が来るわけではなく、どこに重点を置くかを明示しないと、利用する方も迷ってしまう。
- 最近、意外と帰国子女の方が多い。帰国したら「ノリが違う」、自分と周りとの違うということで、かなり消極的になっているような方。
- 海外にいて適切な療育を受けられなかった、例えば発達障害、知的障害で、手帳をもらえる、診断をもらえるタイミングをスルーしてしまったような方がいる。そこが起因としてやりづらくなっている人は、稀なケースかと思っていたが、ここ最近結構いると思う。もう1つは福祉サービスにはまらない方。

- Twitter は未だに活かし方がわからない。非常に迷走している。SNS系はほぼ壊滅的で、全く効果がない感じ。ウェブサイトではすごく来る。
- 幅広い、不特定多数の人にまず認知してもらうことも必要で、認知した後も、抵抗なく「つながってみようかな」という、広報面・入口の配慮はしなければいけない。

2 施設に来る若者の変化

● 窓口での配慮

- 利用者の方のほとんどが成育過程等の影響から「コミュニケーション能力が高くないと自分は駄目」、「これを身につけないといけない」、「世の中で求められているものができていない自分は駄目ではないか」というケース。

- これまでの経歴から周囲より劣っていると感じ、周りと比べてしまう方が多いのが実情。徐々に、「自分として」で考えていけるようになるためのアプローチに工夫していく。本人の気持ちも含めてどのように進めていくかを一緒に考えていく。形から入るのではなく目の前のその人のことをベースに考える。知識よりも知恵をベースにして行う。
- 来所される方は、支援機関につながろうと意を決してくれた方が多いので、関係性の構築はしやすい。むしろ、ここへ来られない、つながれない方へのアプローチのほうが悩む。
- 従来、予約申し込み制の出張相談会形式のものを、月1で見学会を実施、出入り自由に変更した。今世田谷に5支所があり、その地域ごとに出張相談は毎回0名。1人で注目されるのがすごくしんどいという意見が多くあがっていた背景もあった。月1見学会で全体の1人だったら気楽に行ける、その後気が乗ったら相談する、という場所をつくったら、利用者は1.5~1.7倍くらいに増えた。
- 幼少期からの地続きのアプローチが結局重要だと思う。事後対策は、アウトリーチ、企業との関係を作って社会的に受け入れられる仕組みが盤石化すると良いと思う。予防も一緒にやっていくほうが、結果的に良い。
- サポートステーションとメルクマールせたがやの連携
 - 両機関がより連携が深まったきっかけとしては、合同でプログラムをやるようになったこと。スタッフ間でもお互いの支援を知ること大事、紹介もしやすくなる、合同でやっている「サポートステーションの さんのところならば行けそうかも」というふうに安心してスライドできるよう

な効果も何となく出てきた。もっと今後もやっていかなければいけないというところ。

- メルクマールせたがやの利用層は就労だけが出口というわけではなく、医療機関につながることや、デイケアにつながる方も多いので、あくまで就労は出口のひとつであり、大きな割合を占めているわけではない。
- サポートしている期間が半年だとしたら、応募に関する話は、最後の1ヶ月くらい。それまでは応募段階までの準備の話をする。
- 仕事をする前に何が不安で突っ掛かっているのか、という話や、医療機関・その他利用（検討）している機関の調整などの話をしたりすることが多い。

3 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- 施設独自の内容は、全国173ヶ所、173通りである。細かいニュアンスが異なる。
- メルクマールせたがやとの連携は深く、スーパーバイズも入ってくれるので、精神や発達の方が多くなっている中だと、メルクマールからスーパーバイズをもらえるのは有り難い。
- せたがや若者サポートステーションならではのほど、外に言えるような面白い、目立つ取組みは全くしていない。小さいところしかやっていない。(視点は)定まっておらず、軸があまりないスタンスに見えるかもしれないが、変化させていることはある。悪く言えば、落ち着かないのがうちのポイント。1個1個、利用される方の状況から見て、プログラム、内容も遅くとも半期ごとには抜本的に変える。そういうところが、特色。
- 世田谷地域は関係機関が多いので常につながっておくこと、多いからこそいつでもつながれるような状況を作っておくことはすごく大事な地域だと思う。
- これだけ多い機関があるので、みんなで力を合わせれば、狭間と言われている層の方でもうまくキャッチできるというところはあると思う。
- 今後も常に状況に応じてアメーバのように変えていく、という感じ。
- 社会経験が乏しくならざるを得なかったようないじめや何かしらの理由で人との関わりが薄くなった方向けの支援を中心にはしていきたい。
- ここに来る方は、これまでの失敗体験等の影響からいわゆる事務の仕事、倉庫作業といった人と関わらない仕事を希望する傾向になる人が多くなってしまふ。自分ができる仕事が少ないと思い、選択の幅を狭くし、正確な自己理解ができていない可能性がある。
- 社会経験が乏しくならざる負えなかったような自ら選択の幅を狭めている方に向けてアセスメントの機会、自分をもっと知る機会、自信をつける場、として強化していきたい。着目しているのはアセスメントとエンカウンターだと思っている。
- 単純に職場体験を始めるというより、最初にトレーニングの受け入れ先企業に事業所に来ていただく。最近うまくいっているのは、入社1~2年の人で、入社きっかけと失敗体験を雑談会、フリートークで話す。モチベーションの面でも効果があり、視野が広がる。ここのOBの人も来てくれている。
- ずっと契約社員、派遣社員を渡り歩いていた話を聞いたり、親近感やモチベーションがわいたりするので、そういうところからつなげてジョブトレーニングを通じて、経験を重ねられる機会と自信を持てるような機会を強めていきたい。
- 経験者の話から「この人のところだったらやってみようかな」というきっかけも大事にする。
- 昨年度は雑談会のおかげで実績が何とか保てて、最低限のラインまではひっぱり上げられた。雑談会参加者の9割以上の人が、就職に結びついた。
- 理念、目標
 - 本人たちをどれだけ思えるか、覚悟というところに限る。
- 特に効果があったもの
 - 雑談会。特段これを話すという決まりもない。話そうと思えばいくらでも自己表現ができる、型にはまらない中でどんどん言える。自分として話せる、自分を取り戻す、自分を作る場所になる、というもある。不安を共有することで安心感にもつながる。仕事のことを1人で考えるのはすごく孤独で、恐ろしいことだと思う。そこを少し分散させられるというのは、非常に勇気づけられる機会だったと思う。ロールモデルがいるだけでも支えにもなる。

4 施設・事業の運営

- 所長とスタッフの認識、意識の差、関わり方の違い

- 基本的スタンスはケース会議等で共有していく。本人に不利益がないか、というところでしか考えていない。ビジネスではなく福祉の世界の人間なので、自分たちのスタンスの中でどれだけやって、いかに大切にできるか、スタッフのキャラクターも大切にしていきたいので、統一はしたくない。

世田谷区若者施策に関する調査
ヒアリング調査 議事要旨（桜新町親和会）

2018年7月10日（火）

場所：世田谷区立桜新町区民集会所

出席者

桜新町親和会：会長

世田谷区子ども・青少年協議会 小委員会委員

ヒアリング内容（事業者）

1 基本属性

● 若者の様子

- 地元の中学生までが主な対象。高校生は町田市、大田区等からの通学も結構多い。桜町高校、深沢高校の場合は、世田谷区民は半分もないと思う。
- 行事の大半がいわゆる子どもたち向け。中学生でも小学生でも良いが、ここにある何かを経験してもらって、大人になって、またあのまちはよかったよね、というような機会提供が町会としてできればと考えている。

2 地域での交流活動

- 7月22日に「2018 親和会こどもまつり & サザエさんまつり」を開催。町会の最大の行事。桜新町区民集会所全館を借り切りで実施。去年は750～760名が集まり、子どもたちを対象のイベントをやって楽しんでいる。もの作り、クリエイティブなことを中心に実施。
- 桜町高校の生徒が、30名くらい、生徒会のグループでサポートをしてくれている。また、演劇部の生徒20名くらいが小さい子どもたちに紙芝居をしたりしている。
- 準備、企画から参加してもらっている。
- 清掃活動
 - このまちの桜並木の清掃活動（春と秋）に深沢高校の生徒等が10～15名、日本体育大学の生徒が10名参加。
- 中・高校生たちは、「3年だけ」でなく、「3年も」いる、ととらえている。3年の間にこのまちを愛してもらえるようになれば、将来的に非常に良いことになるだろう。
- 古布回収
 - 集会所駐車場を使用して集積。国道246号を渡って他の場所に持っていかなくてもすむよう、桜町高校の生徒に手伝ってもらっている。
 - 高校生が桜町小学校のおやじの会と一緒に活動。高校生が、向こうから走ってきて「ありがとう」と受け取ってくれる。そういう活動力が非常に今評価されている。毎年少しずつ古布の集まりが増えている。
 - 一生懸命重いものを持ってきたときに、「ありがとうございます！」と受け取るムード、雰囲気非常に好まれている。

3 他の世代と交流する仕組み

- 桜新町親和会で、多世代が交流できるまちをつくりたい、というのが基本。ここで、小さいころから育てて大学生、20歳を過ぎていく子どもたちが、イベントを通して一緒になって作業していくことによって、交流していくイメージ。やがて生徒が地元に戻って、その地元がもっと活性化していけば、全体として活性化できるのではないか
- 桜町小学校のおやじの会
 - 50歳代を超えた桜町おやじの会というPTAのOB、PTAの方たちがこどもまつりで30名くらい来て一緒に活動してくれる。PTAの30～40歳代くらいのお母さん、お父さんあたりも、参加する高校生とは今までは無縁だったとしても活動を通じて交流が進むことを期待している。
- 行と行の間にある学校で教えられないようなことを教える（行間教育）のが役割と考えている。
- 桜町高校の天文ドームイベント
 - 高校に働きかけ、1回40人定員の観測を年4回開催。小学4、5年生で天体のことを学ぶ際に実際の望遠鏡（2メートル）で見る機会となっている。

- PRは町会の校外委員を通じて行う。国立天文台の准教授が来られた時は多数来場があった。
- 2月に、桜町高校の天文部が東京都教育委員会から表彰された（地域に開放し、天文部で勉強の成果を8月3日と24日に発表）
- 定時制の授業時間と重複しているが、学校側の協力も得られている。
- 深沢高校の清明亭（大正時代の建物）の活用
 - 地域の資産としての活用を考えたい（高校茶道部と子どもたちでお茶会を想定）。今後学校（敷地内）との連携が必要。
- 震災、有事の時の学校との連携（行間教育ととらえる）
 - 地域の人とつながりあい、いざというときのサポートで地域が結びついていくことができれば、と考えている。
 - 高校生の力を高く評価している。彼らの力を地域の中でどう活かしていくか。一緒に地域を活性化していくことで、大きな力になる。
- 深沢高校に働きかけて、桜新町駅から学校までの間を年3、4回清掃協力してもらっている。散った桜の清掃などで、280人の生徒と町会とで日程を分けて作業協力をいただいております。清掃は地域への愛着の一番の基本になると思う。

4 施設・事業の運営

- 活動をやればやるほど、限界を感じている。将来に向かってのパワーはもう、限界が見えている。次の担い手となる団塊の世代の動向がつかめない。
- 町会の会員の平均年齢は67.8歳と比較的若いですが、仕事を持っていたり、子どもが小さかったり、私たちと同じレベルでの活動はできない。世代間の軋轢が出てくる。どうバランスを取っていくかが課題。
- PTA活動の年齢層に期待している。活動組織もしっかりしている。町会活動でも20人中4人（うち現役1人、OB3人）が参加している。
- いつでも活動に参加できるように、会議の持ち方（参加しやすい日時設定など）など変えていきたい。
- 働き方改革のなかで、仕事だけでなく余裕を見て地元へ帰るような方を、活動に引き付ける、素地をつくっていくことが若者へのメッセージかもしれない。
- 地域での働き場所、居場所を私たちがつくっていくことだと思う。
- 桜新町ではこんな活動をしている、と見せて経験をさせていきたい。将来的にみたら、各人の地元で活動していけるようになればよいと思っている。
- 広報誌（親和だより）の工夫
 - 読む広報から見る広報へと変えた。63号よりカラー化。（50代女性メンバーに負うところが大きい）。町会90周年のイベントはせずにカラー化に取り組んだ。
 - 回覧でなく、ポスティングで全世帯に配付して、誰もが見られるということが大事。それが町会が変わったという一番の証になる。

5 その他

- 加入率6割に向けて、区の職員がどのように町会を作っていくかと問いかける町会がもっと前面に出てこないといけない。
- これからは若い人がここへ来て楽しんでもらわないといけない。町会への関わりあい方や負担度合いが異なるというリスクを負ってでも、PTAの人たちを入れる。PTAの人たちといるいるな形でコンタクトを取って、意見を聞きながら、町会を運営していくことが必要。
- 住民層にサラリーマンが多くなってきた。組織の中で定年を迎えて、地域の中に入りたい人というのは、もう一度努力して、地域の中に入らなければならないと思う。
- いろいろな人が住んでいるので、最大公約数でどうしていけばよいか考えないと、町会は廃れていく。町会運営は、「このあたりで」という見極めの中で行うことなのだろうと思っている。
- 数多く町会と接すると、若者をどう見ているのか、ある程度共通項があるはず。高校ならば、それぞれの高校の立派なところをどうやってみ上げ、連携していくかが大事であり、そうしていきたい。
- 現在届いていないマンションへの町会活動、アプローチは取組みを進めている。

世田谷区若者施策に関する調査
ヒアリング調査 議事要旨（親和会）

2018年7月12日（木）
場所：烏山まちづくりセンター

出席者

親和会：会長

烏山総合支所 烏山まちづくりセンター：所長）

世田谷区子ども・青少年協議会 小委員会委員

ヒアリング内容（事業者）

1 基本属性

● 親子夕涼み会（活動・イベント）

- 今年 10 年目。高齢者、一般の方、子どもと一緒に開かれる行事として夏休みの最後の土曜か日曜の 17:00～18:30 の 1 時間半。
- 当初幼稚園くらいの子どもをもつ会員の方が関わってくれている。幼稚園くらいであった 10 人弱の子どもたちはもう高校生や小学校高学年。今後は部活、学校、受験で来られなくなるのではと危惧している。10 年目だから今後、次世代につなごうという意見が出ている。
- 準備、計画段階では、お父さんたちが今年も内容、アイデア等で関わってくれている。
- 寺町集会所全館を借りて実施（2 階は会議室すべてを使い、1 階はロビーも和室も全部使う）。ゲームコーナーを 7 つほど設ける。

2 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

● お祭り・花見

- お祭り（親子夕涼み会）では、当初町会だけを対象としていたが近隣からの参加希望があり、エリアを広げたことで、500 人くらい参加がある。子ども、両親、祖父母で来る。
- 新興住宅（戸建住宅）の親が中心になって参加。30 代後半から 40 代前半くらい。地元からは 3 代目、30 代後半の参加もある。
- もともと地主の多い地域だが、戸建て住宅が出来ると、そこに新しく住むようになった家族からの参加がみられる。

● 担い手

- 60 代、70 代が主になっている。
- 40 代、50 代の参加が少ない。PTA の役員の任期が終わると働きに出たり、子どものスポーツクラブに同行するようになるので、手伝ってもらえなくなる。世代をつなぐことが難しい。
- 親子夕涼み会は当初、幼稚園以降の小中学生の親世代を対象に想定した。
- 全会員を対象に、集会所を拠点に桜の花見（平日昼間実施で 20 人程度の参加）。秋はバス旅行。イベントごとに年齢層を考慮している。
- イベントに来た高齢者の中から、「何かできることはありますか。」と声をかけてくださる方もいて、世代間のつながりが出来る。

3 他の世代と交流する仕組み

● 他世代交流、取組み

- バス旅行では 3 世代での参加がある。親子夕涼み会が一番の世代間交流機会。

● アンケートの実施

- マンネリ化を防ぐ、希望を聞いて新しいものに切り替える等している。お祭り自体も様変わりしている（今までのたこ焼き、焼きそばだけではなくてきている）。

● 夏休みの遠出の機会が減ってきて、地域のイベントに行く人が増え、お祭りにも若い人たちが親子で結構来ている。そういう人たちを捕まえて、地域に広げていくとよいと思う。

● 40 代から 50 代までの働き盛りでも、地域に目を向けてくれる方が大勢いると思うが生かしていない。

● 最近子どもを私立の学校に入れる方が多くなったので地域性がなくなっている。お祭りは小学校

時代の仲間たちと会える場になる。

- 親御さんで、地域のお仕事等から全く離れてしまうのは寂しいと思うお母さんが、「青少年地区委員会に残らないか」という呼びかけを受け、青少年地区委員会を務めている。
- 烏山中学校でボランティア活動をした子どもたちが、卒業しても、こちらから呼びかけてフォローするとつながる。部では、年に何回出ようと決めてやっている。
- 中学校・高校は子どもと大人の間なので、誰かのひと声がないと自分からは動かない。大人の側の努力が必要。

4 施設に来る若者の変化

- 今の子育て環境は、情報が氾濫していて、子どもがスマートフォンを際限なく使えるのは「損」な環境だと思う。スマートフォンを使う環境に溺れてしまう子どもが出てくるのはとても怖い。
- ご近所のお付き合いがなくなってきており、愚痴を聞いてもらえる人もいなくなって、「うちはこうなんだけど」という話はしなくなった。
- 子どもにとっても、よく話ができる大人がいればよい。だから児童館は拠点として良いところだと思う。
- 児童館は世代を超えて、学校も超えて、つながりが出来ている。民生委員児童委員の活動の中にも入っていて、子どもと年配者との接点も出てくるので、子どもにとっては良い環境だと思う。

5 施設・事業の運営

- 高齢化により、役員もそろそろ代替わりをする準備をしている。中身的にはこの活動を続けていくと思うが、もう少し会員同士のふれあいを大事にしていきたいと思っている。
- 40代や50代の、まずPTAのお母さんを引っ張り込んで、それについてくるお父さんを当てにしようかと思う。古くから伝わっている行事はないので、町会としての活動が見えて、参加できるようにしておかなければならない。

世田谷区若者施策に関する調査
ヒアリング調査 議事録（用賀商店街）

2018年7月10日（火）

場所：用賀商店街

出席者

世田谷区商店街連合会 玉川地区会 会長
世田谷区子ども・青少年協議会 小委員会委員

ヒアリング内容（事業者）

1 基本属性

● 取組みの経緯

- 取組みは2009年より（ビジョンづくりから）
- 商店街のビジョンづくりのため、用賀住民5千人へのアンケートを実施。アンケート結果から、ターゲット層を見直した（従来は高齢者ばかりを想定していたが、実際は30代の子育て世代が一番多かった）

● 若い世代からの反応

- 用賀出身の大学生グループと「この街にもっと活気を持たせよう」とイベントを開始し13年くらい継続している。
- 若者が来る街にするには、若者の意見も取り入れないと、その街は若返らない、と考えた。

● 商店街ビジョン

- 大型店の進出により、商店街＝物品販売業という構図が崩れた。2009年理事長就任時には、商店街の中も高齢化、後継いない。オーナー店がなくなり、商店街組織は危ない。イベントの人手がない、という状況。
- 区からの支援。産業政策部より商店街ビジョン作成の打診を受けた。スキームをつくるなど区からのバックアップあり。アンケートはそのとき実施。2年間で「商店街振興プラン」を作成した。
- 10年後の街についての長期、中期のビジョンを実現させるために何ができるか、夢物語のように「あれも、これもしよう」と1つ1つ挙げて、できる・できないを短期的な戦術にした。
- ビジョンのコンセプトは、「5万人、6万人みんなが知り合いになって、サンダル履きで安心して歩ける街」（比較される「二子玉川」は私たちの庭、遊びに行く街）

2 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

● 取組みの方針

- この街に住んでいる人に向かうことだけをまず考えた。
- ◇ （経済産業省補助金事業に採択された。）施策は3本柱。第1は「我々の意識改革をしよう」。今までやってきたこと（物販＝商店街）の構図を壊そうと考えた。この土地、ベースは大事にして、その上に建てるものについては何も言わないで、と言ってきた。
- ◇ 今の20代、30代がこれから10年後、20年後のこの街をつくっていく。
- ◇ 意識改革の2つめは、新しいキャラクターを作りお店の前に行って集客する。子どもが来て、大人がついて来た。
- ◇ 自立を目指し、収益を上げその収益を基に商店街の運営に充てようということで、会社を作った（株主は商店街。ひとり株主）。その取組みの中で、キャラクターを作った。キャラクターでは、キャラクター選手権に出て、100番に入った。
- 施策の第2の柱は「クーポン雑誌」。お店のPR雑誌。年2回、3万部作り用賀の全世帯1万7千世帯にポスティング。クーポン会員は増加している。
- 施策の第3の柱は「施設活用」。お休み処づくり（高齢者の利用を想定したがあまり使われず中止した）。海産物取り扱う店舗づくり（陸前高田の震災支援）。若者たちも参加。

● 若者のアイデア

- 若者たちとは話をしてきて、彼らにフィールドを使わせて、その中でも特に彼らの発想力を利用したかった。

- ゴミ拾いをやって街をきれいにしようとしたときに、「タキシードを着ましよう」と提案受けた(ディズニーランドから着想)。みんなが注目する、「みんなのために」だけでなく、『俺もやってみたい』になる、と。
 - 子どもたちに自主的に計画させて、大人がサポートしていくことをしないと、子どもたちが大人になったときに、今みたいなマニュアル世代、自分からの発想が何もなくなる。
 - 若者を手伝い程度での参加でなく、彼らの発想を生かしたら街はもっと変わる。
 - 理事長就任以前の活動(P T A等)から、教育委員会の生涯学習課、警察等との関わり等、経てきたが、役所主導だとみな画一化してしまう。
 - 「活動する・行動する民間、参加する住民、それをバックアップする行政」を打ち出しているが、行政が支援してくれない。
 - 「一日商店街」の試み
 - 地域の人に商店街を知ってもらおうと、多摩川の兵庫島で実施。
 - ◇ 11時から15時までの4時間イベント。
 - ◇ 消防、警察、自衛隊、区とも連携。
 - ◇ 子どもの「職業体験」の機会ともなっている(求人募集、地域通貨、等)
 - ◇ 今年5年目。昨年は2万人来場。
 - ◇ 区内の駒澤大学のゼミが支援。インターネットでのPR、新聞作成等フィールド提供あり。
 - 商店街新聞を13万部作成、全戸(11万世帯)ポスティングした。若者の発想取り入れ、商店街、街を知ってもらう内容。
 - 若者の集まる場
 - 組合事務所は、若者のたまり場として使ってもらっている(イベント打合せ等)。
 - 学生から20代後半まで、バル形式の集まれる場がある。
- ### 3 施設・事業の運営
- 若者のための商店街としての課題
 - 受け入れる寛容さ(「商店街はもう買う場所ではない」という声)。「街づくり」を目指す。まず住民を増やして、ビジネスチャンスを増やす。
 - 「脱イベント」。お店をやっているながら、イベントができるような。打ち上げ花火のような1回限りのイベントは、若者に任せる。
 - スーパーにはない、オリジナル性があるものを売らないと、物は売れない。
 - ビジョンでも、10年後にここを支えているような若者たちの声を聞くようにしてほしい。
- ### 4 地域での交流活動
- 行政やP T Aとの連携
 - 区からキャラクターに住民票を発行してもらったり、P T Aとの連携では入学式の日キャラクターの前立たせたりした。
 - 地域包括ケアのために、この(事務所の)上のスペースを使えるようになった。介護でも、若者が携われるといいと思う。
 - インバウンド対応
 - 区内のアメリカンスクールが街の清掃活動に参加。今後飲食店やオリンピック期間のガイド等、連携可能性も。
 - 大学との連携。
 - 駒澤大学、京都産業大学とつながりあり。
- ### 5 他の世代と交流する仕組み
- 若者のネットワークからの参加が断続的にある。何年かに1回出てくるが、サポートする人たちがいないとつぶれてしまう。
 - イベントでのクレーマーには、区に受け止めてもらっている。子どもに帰宅を呼びかける放送へのクレームあったが、自分たちの面倒を見てくれる世代を守るのは大人の責務。

6 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

今後に向けて

- 商店街会員数の減少はなく、街づくりの成果かもしれない。最近の商店街は物ではなく、夢と時間を売る場所という位置づけ。
- 地元の区民が住み続けてくれればよい。この街は、静かに住んでいる人のための街。1つの場所にみんなが集まってコミュニケーションを取るのは災害時の予行演習。イベントで商店街に客寄せする時代ではない。
- 会員間でコミュニケーションを取って、「1日商店街」でも実施までの過程で、商店街の若者が結束した。結果的に子どもたちがたくさん来て、喜びになった。
- 次世代の人間が出てきたら、その人に合わせていけばいい。ここが良かったという基準に合わせるのではなく、そのときそのときでいろいろな人が出てくる。そこに次の基準を合わせればいい。
- 全国を回って、いいところも悪いところも見てきたが、悪いところだらけ。コミュニケーションが全くない。行政と地元とで、やることがかみ合っていない。
- 地元愛と、年齢は関係なく対等なコミュニケーションが大事。若者にはやらせてみるのが大事。若い芽を摘まないこと。年配者はリスク管理をする役割。

世田谷区若者施策に関する調査
ヒアリング調査 議事要旨(下高井戸商店街)

2018年7月10日(火)
場所:下高井戸商店街事務所

出席者

下高井戸商店街振興組合:理事長、専務理事(事務局長)
世田谷区子ども・青少年協議会 小委員会委員:毛利委員

ヒアリング内容(事業者)

1 基本属性

● 学生との関わり

- 商店街の地域に日本大学文理学部があり、大学の文化祭の実行委員会の学生との連携ができています(学生より申し出があった経緯がある)。それをきっかけに、7~8年前から商店街のイベントにボランティアで手伝ってもらっている。商店街からも学園祭の荷物運搬等、車両手配をサポートしたことがある。
- 商店街も高齢化しイベント等も大変で、最近では日本大学の学生ボランティアが頼りになっている。
- 学生ボランティアは、イベント1日30人、2日間60人くらい来る。最終日の打ち上げにも参加して、情報交換、交流を深めている。
- 地域内に都立松原高等学校があり、奉仕活動に力を入れていて、イベント等でも手伝ってもらおう等、交流はしている。

2 地域での交流活動

● 音楽祭を通じた地域との交流

- 土曜日の地域コンサートは、近隣の小・中学校、高校・高等学校の児童・生徒、PTA、地域の人たちに出演していただけるもので企画しようということで、学校側も乗ってくれた。小学校全面を借りて開催。夜は大学関係。
- 日本大学管弦楽団と、日大リズムソサイアティというラテンのビッグバンド等、芸大のOB・OGも参加。
- 大学生の方たちはメインの夜のイベントに団体で参加。小・中・高校生は、土曜日の昼間に地域音楽祭があり、そこで参加・発表。
- 音楽関係は、オーケストラも出たり、下高井戸にシモタカフィルという管弦楽団もできた。楽団のメンバーの年齢層も広く、小学生からお年寄りまで。他の場所でも発表会をしていて、人気がある。

● 学生の参加

- 我々商店街ではできないノウハウ、スキルを持つ学生が参加していて、我々も交流が広がっている。
- 下高井戸は、北海道中川町と交流があり、そこでも日本大学文理学部は地域とのつながりがとても強い。
- 去年と一昨年に、商店街に中川町のアンテナショップができ、販売やチラシ配り等、多面的に学生に協力してもらっている。
- 今年から地域のお祭り(菅原神社の例大祭)、お神輿等のお手伝い、準備から参加し始めている。

● 学生、学校との関係づくり

- 商店街の周辺に日本大学文理学部、松沢中学校、緑が丘中学校、都立松原高校、日本大学櫻丘高等学校、松沢小学校がある。去年130周年を迎えた松沢小学校では、子どもたちに街路灯フラッグを描いてもらった。
- 大学生のサークルと商店街の連絡窓口づくりが非常に難しかったが、7、8年前に、日本大学社会学科のゼミで商店街の地域動向の調査を実施する際に、イベントを組んだことが大学生とのつながりのきっかけとなった。
- 高校の場合、夜までのボランティア活動は条件が厳しく、商店街でも時間帯を考慮する必要がある。
- 中学生の職場体験では、商店街は受け入れ側になっている。計3校。東京都立中央ろう学校の生徒も来ている。
- 小学校のイベントへの協力では、1年生の昔の子ども遊びのお手伝いをしている。

- 青少年委員会が地域ごとにあり、商店街はそこにも参加し情報交換している。児童館と商店街でも懇談会がある。
- 松沢児童館の夏のイベントの際には、商店街をイベントのフィールドにして、毎年買い物のスタンブラリーやクイズを実施。
- こちらが学生を受け入れる準備がうまくできているかどうか重要。
 - ◇ つながりづくりのきっかけとして、先生と一緒に朝の声かけをすることで、その方の参加するラジオ体操等に、野球部の男子学生が手伝いに来てくれる、といった事例もある。
- 生徒がどれだけボランティアの意味を理解しているかが大切。授業の一環として単位取得のために参加し、先生たちも単位を取らせよう、という考え方もあり、意図を間違った生徒が来るととても苦勞することがある。

3 他の世代と交流する仕組み

● 現場での学生の役割

- イベントで学生たちには役割分担をお願いし、極力現場に入らず本部にいてもらう担当も作っている。学生の動きが良くなり、何かがあったときにスムーズに連絡できる。
- 学生たちはサークル活動のなかで組織化できているので、役割分担の仕方はとても上手。そういう学生に担当部署の役割を作ってもらっているのも、黙って任せている。そのくらい責任を持ってもらうと社会でプラスになると思う。
- 中学校での職場体験は、社会貢献に生かされているようで、学校とは違うということが、高校、大学まで影響があるようだ。
- 学生の参加といっても、音楽部の学生、桜麗祭実行委員会の学生、友達に誘われて来たという学生は、日本大学の学生の数%、10%にならないかもしれない。その中に入らない子どもたちにとっても、商店街があることで何か残っていくものがあればよい。
- ボランティアを経験した学生には、就職の面接等で商店街での経験をどんどん出して構わないと伝えている。
- 学生と一緒に作るようなイベントづくり、実行委員会づくりまでには至っていない。
- 商店街からすると、対象とする年齢を絞るより子どもが楽しめるイベントを企画してもらうことで地域との連携があるので、そういったもので学生に企画してもらうと受け入れやすい。
- 防災についても学生に協力いただきたい（駅の周辺での帰宅困難者への対応等）。

4 施設・事業の運営

- 商店街の受け入れる意識、姿勢は、今までの歴史の中でつながっているからだと思う。10年くらい前から、学校側から地域に貢献、地域と交流する方向が出されて非常にオープンになった経緯はある。
- 松沢小学校では、日本大学のゼミの学生が子ども遊びの手伝い、ボランティアをしている。夏休みには学校はいろいろな催し物を運営委員会で作るが、手伝いは全部日本大学の学生のようなのだ。
- 最近は商店街委員がPTAの役員をすることでつながりが深まってきている。
- 4、5年くらい前から、商店街から桜麗祭実行委員について、庶務課や事務局、事務長との挨拶等、何かにつけてボランティアのことを言っておくと大学側も理解・評価してくれるようになってきた。

5 その他

- 下高井戸は、しもたかステーションがあることで、ここに来れば何でも分かるというインフォメーションの場になっている。商店街に関しては世田谷区は恵まれている。
 - 「しもたかステーション」は、地域にとって商店街のインフォメーション発信として有効に活用されている（ベビーベッド、車いす対応の広いトイレ等、設計段階で入れていた）。先々代の理事長が学校運営委員会で貢献度が高くなったと思う。
- 東京農業大学や国土館大学でも、地域に敷居の高くない商店街が必ずある。明治大学も、明大前商店街で餅つき大会のときに学生が結構来てくれている。国土館大学も結構積極的で松陰神社と連携している。昭昭和女子大学も三軒茶屋と連携して、駒澤大学はその近辺と連携している。

世田谷区若者施策に関する調査

ヒアリング調査 議事要旨（経堂青少年地区委員会）

2018年7月19日（木）

場所：経堂まちづくりセンター 活動フロア

出席者

経堂青少年地区委員会副会長

世田谷区青少年委員・経堂青少年地区委員会副会長

世田谷区経堂地区民生委員・児童委員協議会副会長

世田谷区子ども・青少年協議会 小委員会委員

ヒアリング内容（事業者）

1 基本属性

● 対象（年齢、等）

- 小・中学生がメイン。高校卒業者にもオファーはする。東京農業大学の学生にもお手伝いを依頼。鷗友学園女子中学高等学校には、社会福祉協議会実施行事のボランティアで参加いただいた。

2 地域での交流活動

- 小学生対象のイベントとして、飯ごう炊さん会とドッジボール大会を行っている。中学生はボランティアとして飯ごう炊さんでは小学生の指導・見守りを、ドッジボール大会では審判をしてもらっている。中学生ボランティアは、各学校に募集をかける。各学校にチラシ配布を依頼し、学校でまとめていただく。
- 申込用紙を副校長に提出し、後日地区委員会の人が受け取りに行っている。とりまとめは生徒会、学校の職員など学校ごとに異なる。
- 委員会の主な行事は、飯ごう炊さんとドッジボール大会、地域清掃（東京農業大学 農経会と共催）
- 地域清掃は、地域ぐるみの実施なので、経堂・桜丘から千歳船橋の方まで参加。東京農業大学の学生もかなりたくさん参加している。2年ほど前からは大東学園高等学校からも参加希望があり、地域の企業の参加もある。
東京農業大学の学生の活動に、地域のいろいろな組織が参加していった今の活動の形になった。
- 「さくさくみどり」の活動
 - 桜丘、桜木、緑丘の中学生対象に行事をしようという動きがあった。現在は、ドッジボール大会、飯ごう炊さんの後に委員の方たちと交流等をしている。
 - 中学生自身が部活や塾で忙しかったため、交流会をして、その中でやりたいものが出てきたらそのときに考える、というスタンスに変更。ミュージックパレード等実施。ミュージックパレードは6、7年、中学校の体育館、小学校の体育館を借りるなどして実施。企画・運営も中学生中心で行い、当初観客も多くかなり大勢で賑わったが、継続は難しく、個々の忙しさや、熱心が異なり尻すばみになった。
 - スタンスを変え、小学生向けのイベントにお手伝いに来た子たちを、最後に交流会を持ち、意見をもらうなど話をして、ヒントが見つかったら次につなげていこうと考えた。交流会は継続。3、4回くらい続いている。この間、祭りを2回、ダンスを2年。
 - 複数の中学が合同で集まるのが難しく、委員会から各学校に出向いて生徒会との懇談会を開催（年2回）。ミュージックパレード開催の際は準備（3、4回）、別リハーサルを実施していた。地区委員会では別途中学生の希望を聞きつつ会合を持った。
 - 現在は、中学生対象の中学生だけが集まるイベント自体は休止中。
- 中学生対象の企画について
 - 中学生との交流・意見交換会では、大人と一緒にドッジボールをやりたいとの要望があったが、現在イベントは小学生中心で低学年化している。小学生の帰った後に交流・意見交換できるか、時間的にも難しい状況。
 - 学校対抗でやると盛り上がると思うが、学校側も抵抗がある（アンフェアなプレーなど）、やり方を考えなければならない。高校生に比べ中学生は先生たちにきっちり心配しながら守られている。
 - 各学校混合でやる場合は、各校行事の日程の調整が難しい（行事、試験、場所等）。中学3年は

受験なので参加してもらえないと思う。2年までは部活で忙しく地域の活動まで関わる余力がない。

- イベントをするよりも、塾や学校の隙間のほっとするスペースの方が良いのかなと思う。家でも、学校でもなく、監視の目が無いところが必要。
- ボランティアに参加してくれた子たちは、アンケートの回答ではほとんどが、楽しかった、またやりたい、と回答してくる。何名かは高校になっても来てくれるので、そういう子たちをつなげていきたい。しかし、2、3年は忙しくて、あまり来なくなる。大学生になってから戻ってきてくれてもいいし、どこか他の地域で還元してくれればそれで嬉しい。
- 学校に出向いての交流会のなかで、特に生徒会の場合は活動が忙しくなかなかこちらに参加できない状況。
- 各イベントの実行委員会は、担当分のみ参加し、会長・副会長はすべて参加。PTAの方は役割分担が決まったうえで参加いただく。
- イベントには、小学1、2年生は沢山参加する。小学生のドッジボール大会では、低学年と高学年で分けて各学校から参加して実施。朝練、夕練して優勝したなど聞いたことがある。
- 保護者も入れたら、飯ごう炊さんもドッジボール大会も、とてもたくさん参加する。ドッジボール大会ではスポーツ推進委員、児童館の職員も手伝ってくれる。
- 中学生対象の企画について
 - イベントを中学生自身で企画運営するのは難しい。
 - 中学生からはやってみたい、と投げかけられるが、やるためにどうしたら良いかまでは考えない。会場の押さえや消防署への届け出などまではできない。言葉だけに終わっている。
 - 何が良いかと言っているだけでは、前に進まない。中学生のドッジボール大会などやってみればと思う。

3 他の世代と交流する仕組み

- 高校生への期待
 - かつて中学生のときに活動した高校生が参加して、自らが中学生向けにイベントを企画し、投げかける役をやってもらえたらと、思う。
 - 格好良い大人が身近にいと、多分、ああいうふうに通じる、あの話し方や仕草が格好良い、とあこがれて成長していく。
 - 今は、中学生は小学生の憧れの対象になっているが、大学生や高校生のカッコよい姿を見せてあげられたらと思う。
- 子どもの関心あるもの
 - カードゲーム大会は、こもりがちな子も参加してくれるのではないかな。
 - 女の子では、ダンスへの興味関心のある子が、恥ずかしがって家の中でひとりまたは友人たちと踊ったりする。ダンス教室は以前開催したが、まったく人が集まらなかった。
- 親たちは子どもがボーっと過ごす時間をもつことを許してくれていないのかもしれない。そこに行っても怒られない、そういう意味のある場所があると良い。

4 その他

- 小学校支給のPTA証を下げていないと、子どもからあいさつが返ってこない学校もある。
- 経堂の商店街の人にはみんな安心して挨拶しているらしい。
- 子どもは地域の宝だったのが、最近は母親の宝(だけ)になっている。子どももすぐく生きづらいのではないかな。
- 親もなにか一緒にやる機会があっても良いかもしれない。
- PTAの委員でも、みなさん忙しいからと、人に押し付け合いをしている部分もある。自分の子どもは見るが、ほかの子どものことまでは目が行かない。自分の子育てはわかるが、他の中学生や、扱いにくい年代の子どもを子育てしているとき、壁に当たってしまうこともあると思う。
- 親育てが必要と思うが、なかなかそのような機会がない。

世田谷区若者施策に関する調査
ヒアリング調査 議事要旨（成城青少年地区委員会）

2018年07月03日（火）
場所：砧総合支所

出席者

成城青少年地区委員会：会長、副会長 2名、前会長
世田谷区子ども・青少年協議会 小委員会委員

ヒアリング内容（事業者）

1 基本属性

● 経緯

- 以前はボーリング大会、映画会などを個々に実施。現在は、大きなイベントとして、地域文化祭を実施。
- 標榜している「健全育成」の観点で、中学生に参加してもらい盛り立てようということになった。
- 若者対象の事業、地域のお祭りのようなものがこの地域には他にない。区も賛同して、予想以上に周りが参画してきている。成城は新しいまちなので、地域のアイデンティティがあるようでない。
- 建て替え前の砧総合支所に大きなガラスがあり、夜その前でダンスの練習をする若者がいて、ダンス発表の機会を作ろうという意見があった。
- 文化祭の初めのころは、会場が砧中学校であり自然に中学生が関わった一方で、一緒に開催を呼びかけた千歳中学校は遠く、参加が困難なこともあり、学校側もそれほど積極的ではなかった。が、時間の経過とともに中学校側も地域に出ていく姿勢になってきた。

● 文化祭の状況

- 12月はじめに実施。近隣の私立の中学校、高校の試験時期と重なる。
- 今年で19回目。館全体を会場として使用（9回までは砧中学校の体育館を使用）。
- 10月から、20人程度の中学生が集まり、実行委員会として準備に取り組む。
- 地区委員と、2つの中学校から、生徒会からの呼びかけで100人くらいのボランティアが集まり前日準備・お手伝いと当日に活動している。私立学校にも声かけはしている。他にPTA、おやじの会からもスタッフ参加あり。
- 児童館での占いコーナーは、普段会うことのない、違った価値観を持った大人数名にやっていただいている。子どもたち（だいたい3～4年生くらいまで）の相談、カウンセリングコーナーになっている。
- 文化祭では親世代とは別に地域の方に参加いただき実施したら、相談者が中学生など年齢層が異なった。

- 子どもたちは、ステージパフォーマンス、売店などの活動で自分たちの表現できる場ができ、機会を提供するというマッチングができた。会場もこちらに移って広くなり、18年前より良くなったと思う。

- 学校、家庭以外の、自己実現できるもう一つの場として提供できたら、と思っている。

- 野外活動、学校のお祭りの手伝いや、「素まっぶ隊」「広報部」「研修部」「育成部」は部会を中心に活動しているが、地域文化祭は全員で取り組んでいる。

- 地区委員会で「育成部」をつくり、自主的に考え解決する子どもを育てるよう試行錯誤している。「Seijo Let's」は中学生以上を対象に、やっと卒業生が高校生になっても参加してくれるようになっている。中学生はボランティアの模擬店の事業を行っているが、中学生どまり。

- 公立の学校は出張所単位ではくくりやすいが、私立は区外通学なども多いので、つながりがあれば引き受けるつもり。

2 事業者が実施している若者向けの取組みやイベントについて

特に自立や成長、地域交流を促す取組みやイベントについて

- グループで来る子どもたちの中には、学校ではトラブルメーカーだった子どももいたが、小さい子ども向けの映画会で司会を上手に行い、やさしいお兄さんとして、適していた。また、協力し合って取り組んでいた。

- 生徒会主体で参加してくる子どもとは別に、中学校でうまくいっていない子ども、家庭に問題がある子ども、特別クラスの子どもの文化祭のボランティアで参加してくる。

3 若者の変化

- 小学生のころ文化祭を見に来て（模擬店など）中学生になったら自分も参加したい、と思って参加しているケースもあると思う。
- 2校の中学生が別々でなく一緒に取り組むケースが当然のようにになっている。なかなか学校の垣根を越えたイベントはないので、良い機会。
- 地域全体でみると参加者はわずかでしかなく、文化祭に携わることだけを強調して良いのかと思う。この地域は塾が非常に多く、この地域の子どもは、部活、塾、習い事で忙しい。
- 中学生スタッフとして、イベントに参加した方へのアンケートでは、達成感を感じ、地域の人と交わってありがたいと言われることに喜びを感じているようだが、中学3年になると受験も控え、やってみたい気持ちも立ち消えてしまう。
- 学校側もボランティアに関心があり、生徒を外に出そうという意識はある。地域の人との関わりを大事にするようになってきている。

4 地域での交流活動

- 7月に2つの中学校に、文化祭の実行委員会スタッフと前日・当日スタッフ募集のチラシを配布。毎年20人くらいの参加（毎年、人数は変わらない）。砧中学で実施していた時期は生徒会が募集活動に協力してくれたが、今は協力なしでも来てくれる。副校長も協力的。
- 砧、千歳の2つの中学校の学区は役所の複数区域にまたがっており、先生もPTA役員もそれぞれの地域に関わらなくてはならない。
- 学校が地域に開かれた学校になろうとしている。地域の人に参加してもらって子どもたちを育てたいという気持ちもある。子どもたちも想定した以上の力を持っているので、信頼してあげたい。
- 大人になったら（地域に）戻ってくるきっかけになるといい。12月第1週開催で18年続いてきており、地域のお祭りとして定着していくと思う。
- 避難所カフェ
 - 各学校の避難所運営委員会に好評。中学生が訓練の時に非常食（ビスケットなど）を出して、カフェを行う。被災地での例でも中学生が活躍している場面が多く、期待されている。
- 当日だけイベントに来る関わり方から、1年間やる子どもたちまで受け入れており、スモールステップで「今年は受験だから当日だけ行く」、「来年はもう少し関わろう」など、グラデーションができているのがよい。
- 今年は高校生の参加が5人、入ってきた。参加者にも生きづらさを抱えている子どもから始めるのもよい、と思うようになった。一人のためだけにでもできればよい、と思う。地区委員会メンバーは、来た子どもを優しく受け入れる能力が非常に高い。一人ひとりの個性を面白がって受け入れてあげるメンバーがそろっている。

5 施設・事業の運営

- 開始7、8年目ぐらいまではボランティアの中学生をお客さん扱いしていたが最近はなくなった。こちらにも慣れるに従い、自分たちでやり切るよう、手を出さずに見守ることができるようになってきた（最終的な責任はこちらがとる）。
- 舞台については、けがや亡くなる人がいることをきちんと伝えている。中学生でもしっかりやっている。クオリティが高い。

6 その他

- 地区委員会参加のきっかけ・背景
 - PTA役員を経験し、地区委員会に出る決まりで参加し始めたが、ずっと20年近くやっている。地域の子供たちと直接関わることのできる企画運営が楽しくてやっている。
 - 平成16年に青少年委員になり、必然的に青少年地区委員会に入った。
 - （平成10年ごろから）砧でフリーマーケットなどいろいろやっていた。「素まっぴ隊」で道のチェックをする活動から。お祭りのことは全く知らなかった。
- 活動は日中なので、今後は働き方改革で男性の参加率も上がってくるかもしれない（現在参加している

男性は商店、自営業が多い)。お祭りではおやじの会、力仕事の支援で興味持って下さる方がいるのでなるべく男性に参加いただきたい。

● 課題・今後の展望

- 太くも大事だが、長くも大事。子どもたちには「瞬間」のこと。毎回、今年面白いかどうか、常に考えないといけない。
- イベントに参加している数パーセント子どもたちだけでなく 90 数パーセントも見ていかないといけない。その中に、もっと問題を抱えていたり、もっと面白いことをやっていたりする子どもたちがいるはず。
- 多様な育て方でよいと思う。底辺のサーベイ（動向調査）に関心がある。子どもたちも外からどんどん来て、動きが激しい。本質をえぐるレポートがほしい（塾でのヒアリングなど）。
- 「Seijo Let's」はまだ模索中。ボランティアとしてできる限界もある。地域として、子どもたちと委員の中でも仲良く楽しく活動できると良い。
- 地区委員会として青少年の健全育成、地域の浄化という文言はあるが、何を求められ、何をやらよいか、漠然と不安や気がかりなことがある。実際に任されて議論をしながら、少しずつでもそちらの方向に向かってやっていると信じてやってはいる。むしろ私たちが育てられているのかもしれない。
- 子どもたちも変わってきている、世の中も学校も社会も変わってきているが、変わらないものも確かにあるので、そこはお互い大事にしていきたい（信頼する気持ち、子どもたちを信じる気持ち等）。
- 現実には複雑なので多様な動きが大きくなればよいと思う。いろいろな組織があって、子どもに関わるものも多様にあるのではないか。
- 自己満足、独善になっていないか、フィードバックや情報もほしい。外からの意見もあるとよい。
- フィルターをかけなくても生きられるというのが健全ということ。フィルターを突破しようという意欲を持たせる、小さく安定させようというより次の時代の発想でもって自由に、新しい安定性を求める施策がよいと思う。

